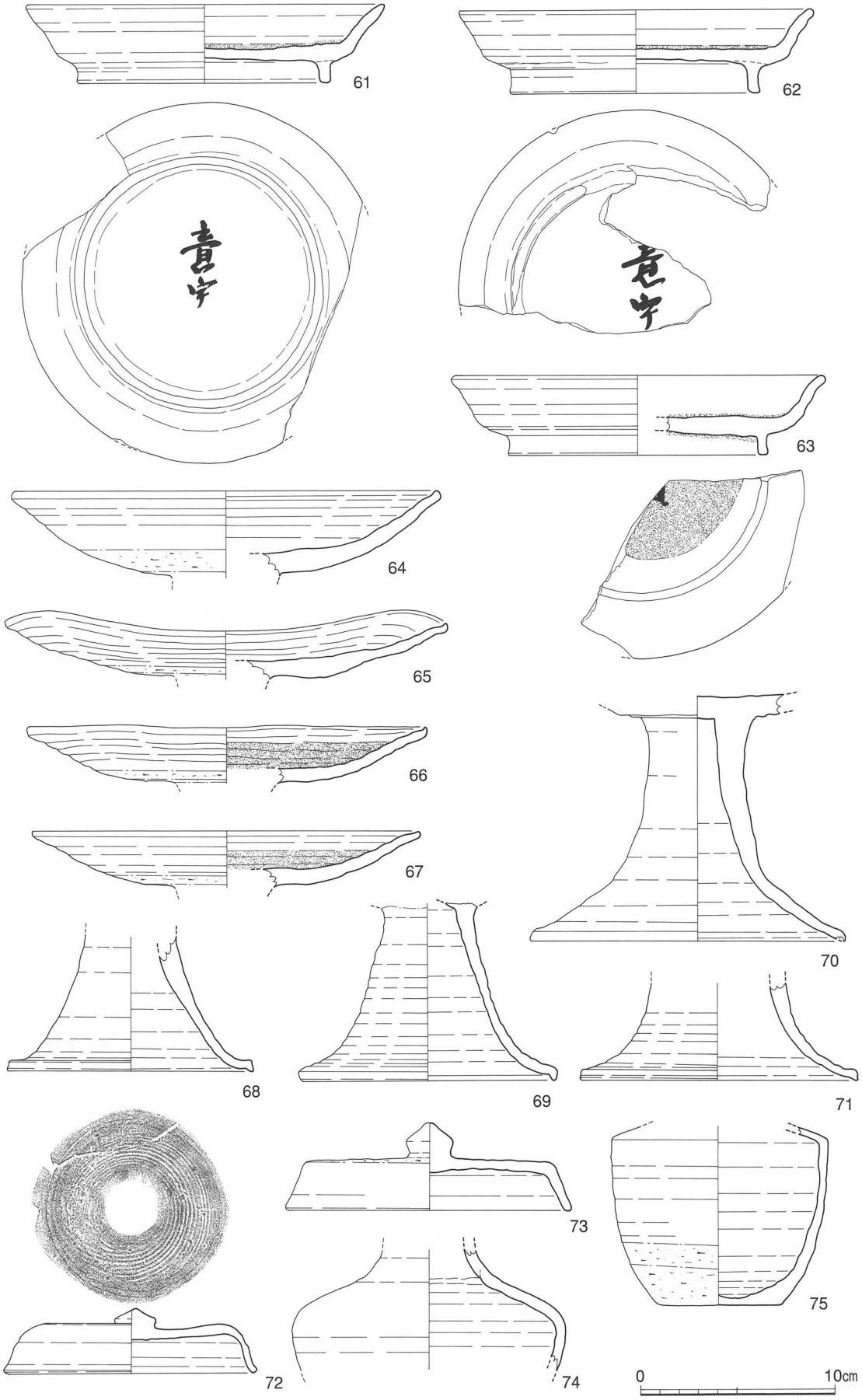
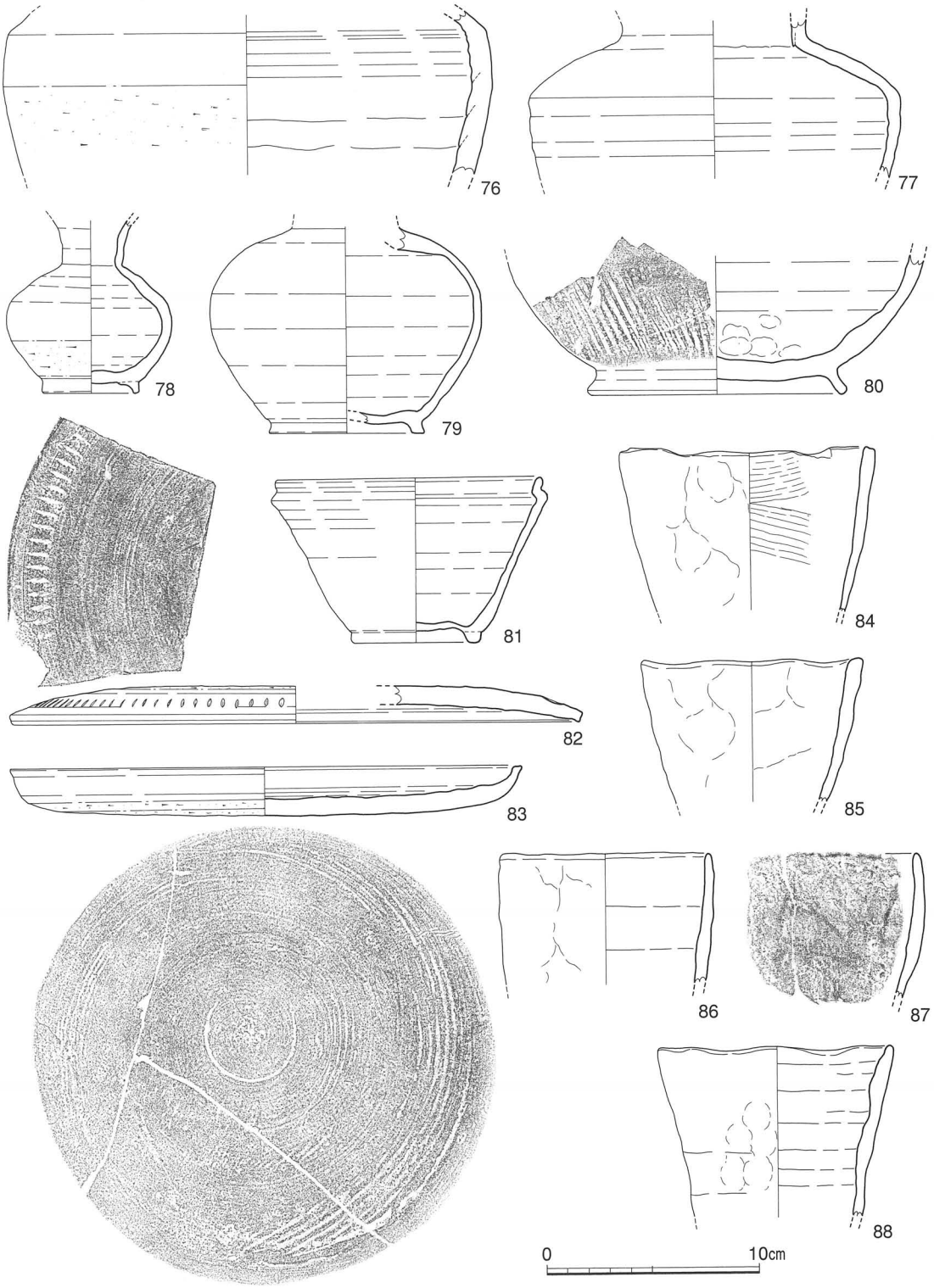


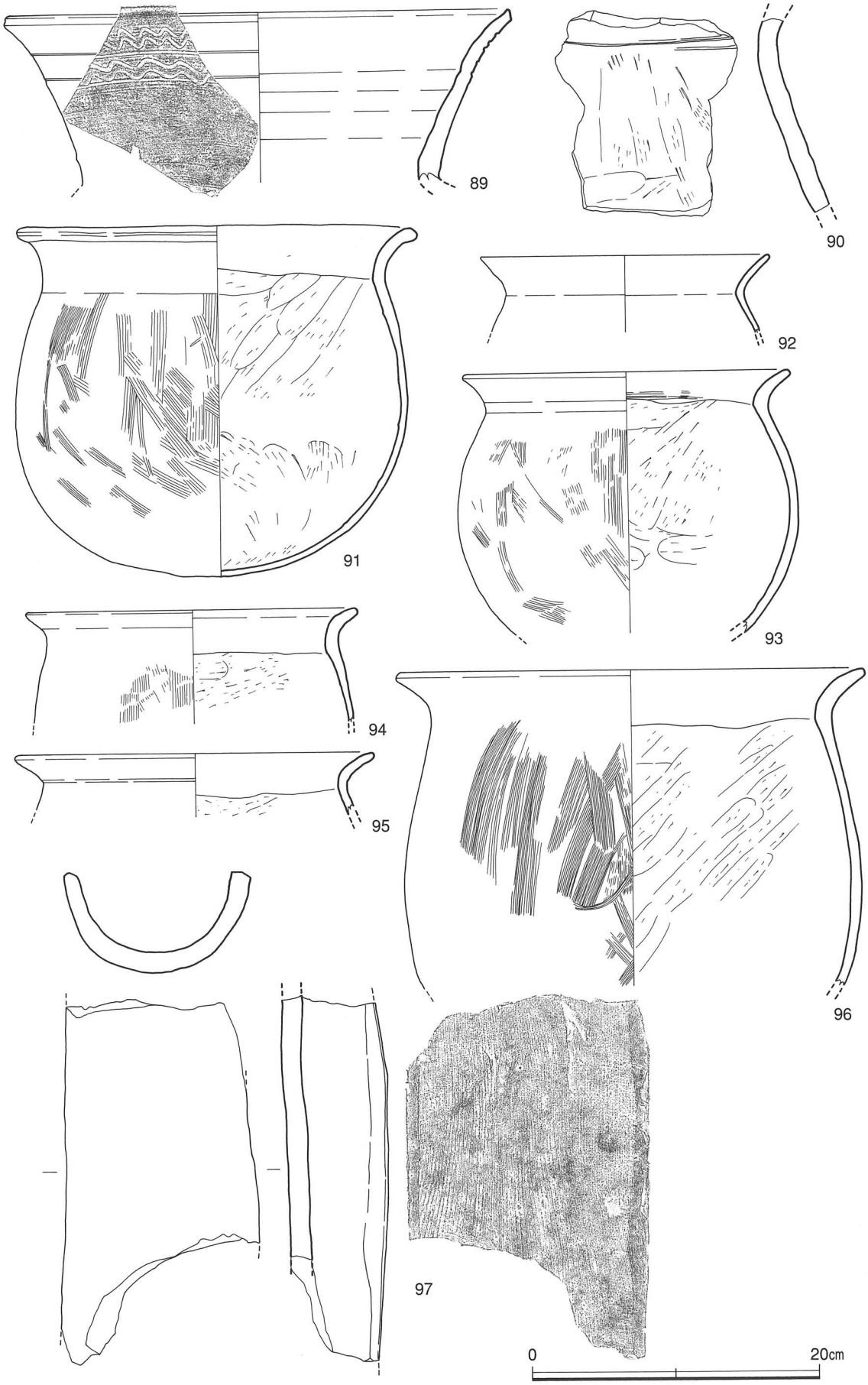
第77図　5号土坑上層出土遺物実測図（3）

が見られ、内面は84が粗いハケメ、85が指押さえ、87・88はナデである。87は口縁が歪んでおり、扁平になっている。

97は丸瓦である。両端部を欠損しているが、幅は13.0cmである。凸面はナデで、凹面は布目の上にハケメが見られる。焼成は須恵質である。



第78図　5号土坑上層出土遺物実測図（4）



第79図　5号土坑上層出土遺物実測図（5）

下層の出土遺物　須恵器蓋坏・皿・高坏、土師器甕、焼塩壺が出土している。

第80図98～103は須恵器坏蓋である。いずれも宝珠つまみが付くもので、口縁端部が下方に僅かに屈曲し断面三角形状をなしている。頂部には回転ヘラケズリ調整が見られるが、98・100～102は頂部に回転糸切り痕を残している。また、101の内面には墨が付着している。

104～106は坏身で、無高台のものである。いずれも口縁部が僅かに屈曲し体部が丸みを帯びるもので、底部は回転糸切りである。106の外面底部には大きく1字が墨書されており、「郡」と釈読できる。また、104は底部から側面の一部にかけて黒色付着物が見られる。

107～109は皿で、高台をもたないものである。いずれもやや外反する短い口縁をもっており、底部の切り離しは回転糸切りである。107の外面底部にはやや小さめに「井」と墨書されている。

110・111は坏身で、高台をもつものである。110はやや外傾、111は外反する口縁をもっており、底部の周縁に高台が付く。高台の内側は回転ヘラケズリ調整されている。

112～114は高坏である。112は坏部の口縁端部が上方にやや肥厚しており、脚部外面には「＋」状のヘラ記号が施されている。脚部は112・114の内面にしぼり目が見られる。

第81図115・116は坏蓋であるが、ともに小片であり、混入品と見られる。115は輪状つまみが付くもので、頂部には回転ヘラケズリが見られる。内面には墨が付着しており、磨滅していることから、転用硯として使われたものと思われる。116は端部が屈曲して直立する口縁をもつもので、頂部は回転ヘラケズリである。

117・118は土師器甕である。いずれも「く」字形に外反する口縁部をもっており、117・118の胴部外面と118の口縁内面にはハケメが入っており、胴部内面はヘラケズリである。ともに外面には煤が付着している。

119・120は焼塩壺である。ともに下方に向かって窄まる砲弾形の器形をとるものと思われるが、120は口縁がいびつに変形している。調整は外面は指押さえ、内面はナデで、120は被熱し内外面の下側が赤褐色になっている。

出土層位不明の遺物　須恵器蓋坏・皿・壺、焼塩壺などが出土している。

第82図121は坏身で、無高台のものである。口縁部が僅かに屈曲し体部が丸みを帯びるもので、底部は回転糸切りである。

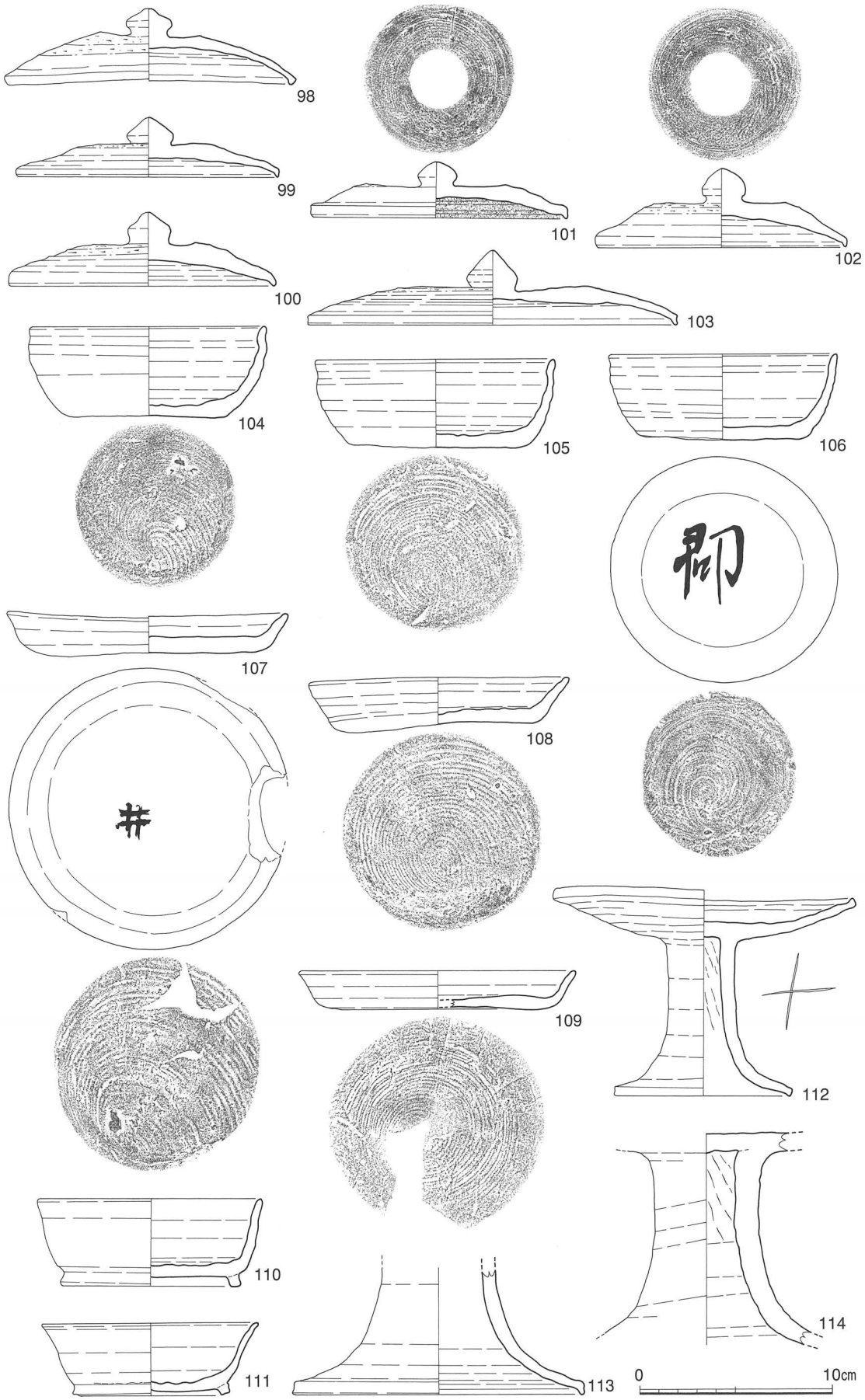
122は皿で、高台をもたないものである。器高が低く、やや外反する短い口縁をもっており、底部の切り離しは回転糸切りである。内面には墨が付着しており、転用硯と見られる。

123は坏身で、高台が付くものである。外傾する口縁をもち、底部の周縁に高台が付く。底部の切り離しは回転糸切りである。

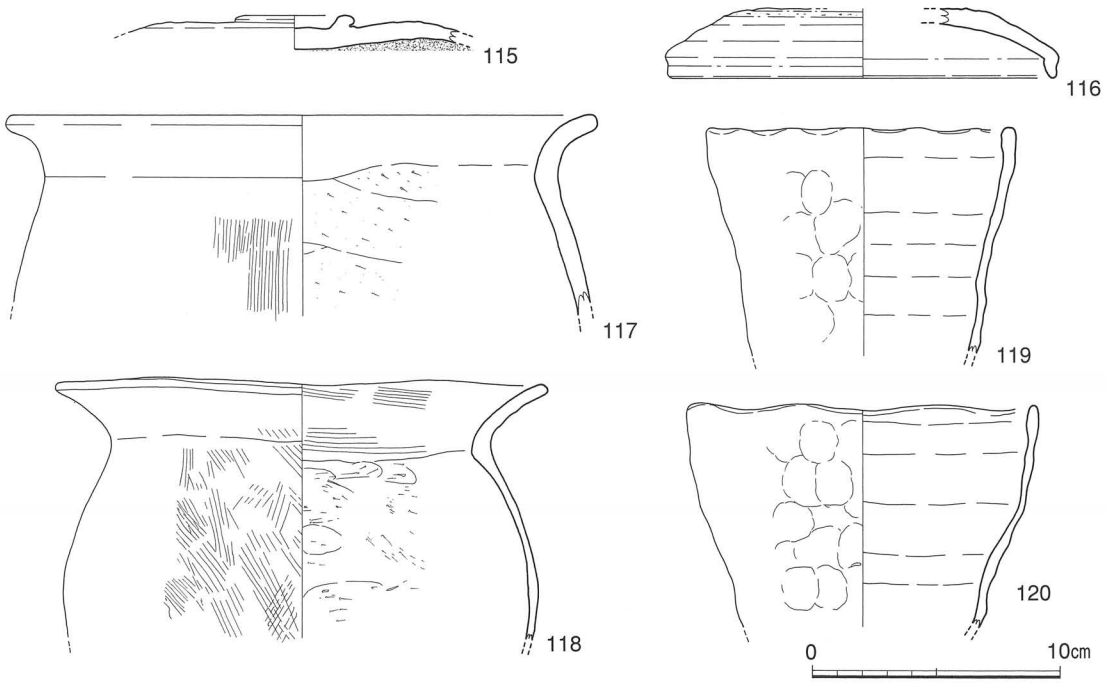
124・125は皿で、高台が付くものである。124は外反する口縁部をもっており、底部の切り離しはともに不明である。124の高台の内側と125の内面には墨が付着しており、転用硯と見られる。

126・127は墨書のある小片である。126は坏蓋で回転ヘラケズリがあり、外面に墨書が僅かに残る。127は高台のある坏身で、底部は回転ヘラケズリである。内面に墨書の一部が残る。

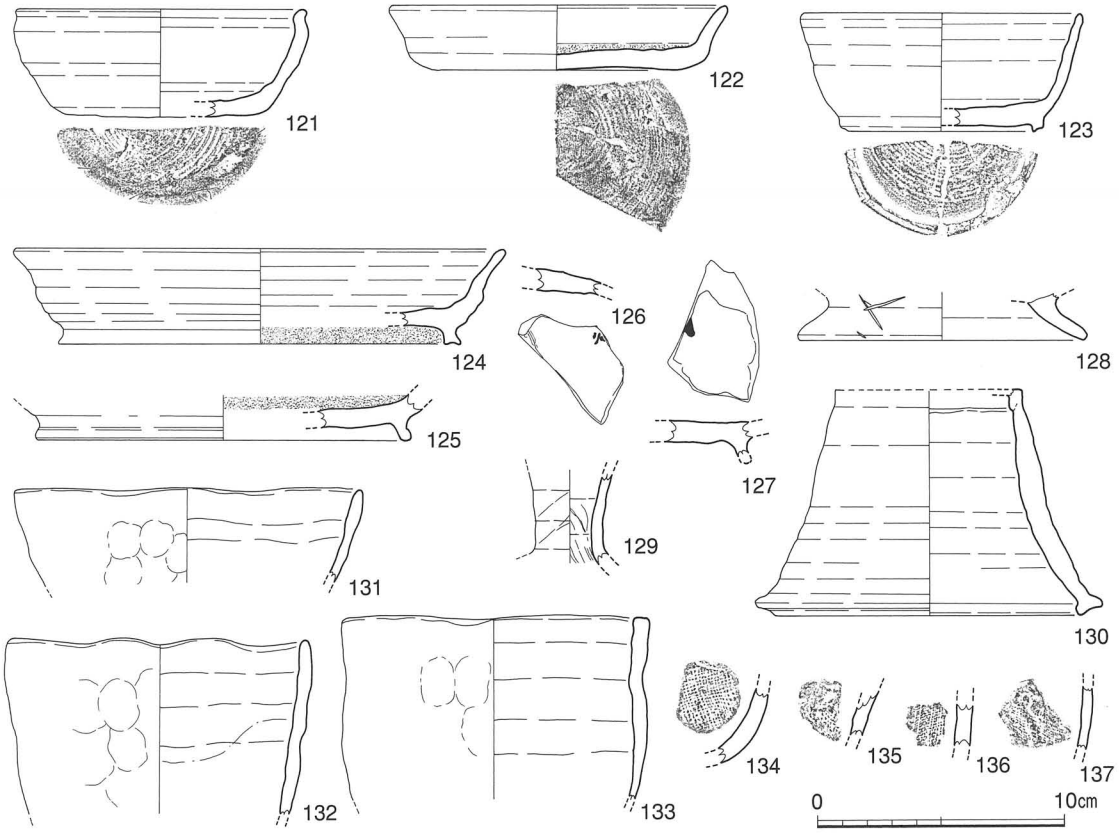
128・129は壺である。128はよく踏ん張る高台で、外面に「×」状のヘラ記号がある。高台の剥離面には平行タタキが転写されている。129は小形壺の頸部で、内外面にしぼり目が残っている。130は台形状を呈する用途不明品である。脚部は「ハ」字形に開き、頂部は器壁が薄くなるが塞がっている。同様な形態のものは、時期は異なるが東出雲町渋山池古墳群1号横穴墓などで出土して



第80図　5号土坑下層出土遺物実測図（1）



第81図　5号土坑下層出土遺物実測図（2）



第82図　5号土坑出土遺物実測図

おり、焼台形土器と称されている[8]。

131～137は焼塩壺である。いずれも下方に向かって窄まる砲弾形の器形をとるものと思われる。131～133は外面には指押さえ、内面はナデが見られ、134～137の内面には１cmに８～９本と粗い布目圧痕がある。また、132は口縁外面に型作りであることを示す縦方向の皺があり、内面下半は表面が剥離している。

木製品　曲物・刀形代・斎串・木簡の他、用途不明品がある。

第83図138・139は一対の曲物で、樹種はヒノキ属である。138は蓋で、破損して側板（138-1）と蓋板（138-2）に分かれている。138-1は円形に曲げるため内面に斜平行にケビキを入れており、側板の両端部を薄くし結合部分が厚くならないようにする。結合孔は２孔ずつ２段に設けられており、樺皮で綴じる。138-2は破損しているが、２孔ずつ４ヶ所に結合孔が設けられていることが復原でき、樺皮で蓋板と側板を綴じる。蓋板の上面には利器による傷が顕著に残っている。

139は身で、一部変形している。側板は両端部を薄くし結合部分が厚くならないようにする。結合孔は２孔づつ２段に設けられており、樺皮で綴じる。底板と側板は５ヶ所で木釘で止められている。底板と側板の一部には漆が付着している。

138-3と139-2は曲物を図上で復原したもので、138は側板径16.6cm・蓋板径17.4cm・高さ5.4cm、139は径18.0cm・高さ3.3cmに復原できる。

147は刀形代で、樹種はヒノキ属である。長さ44.5cm・幅2.4cm・厚さ0.6cmで、基部は利器を入れ意図的に折られている。刃は切先部分にのみ付けられている。

148は斎串で、樹種はスギである。先端を尖らせたもので、基部は焼損している。長さは21.2cm・幅0.9cm・厚さ0.7cmである。

140・145・150は用途不明の部材で、樹種は145がスギである。140は長さ42.9cm・幅3.6cm・厚さ1.0cmほどの板材で、１ヶ所に長さ2.1cm・幅1.6cm・深さ0.4cmの浅い刳り込みを設け、その隅部２ヶ所に小さな孔を空けている。145は３分の１を欠損するが、復原すれば長さ18.0cm・幅6.9cm・厚さ1.3cmである。４ヶ所に長方形孔、中軸上の３ヶ所に円孔が穿たれており、中央には長さ6.6cm・幅5.0cm・深さ0.5cmほどの長方形刳込みもある。13は蒲鉾形に成形された材の端部に長方形突起を加工したものである。長さは14.1cm・幅4.9cm・厚さ3.4～3.9cmで、長方形の突起部は長さ5.1cm・幅2.9cm・厚さ1.3～2.1cmである。

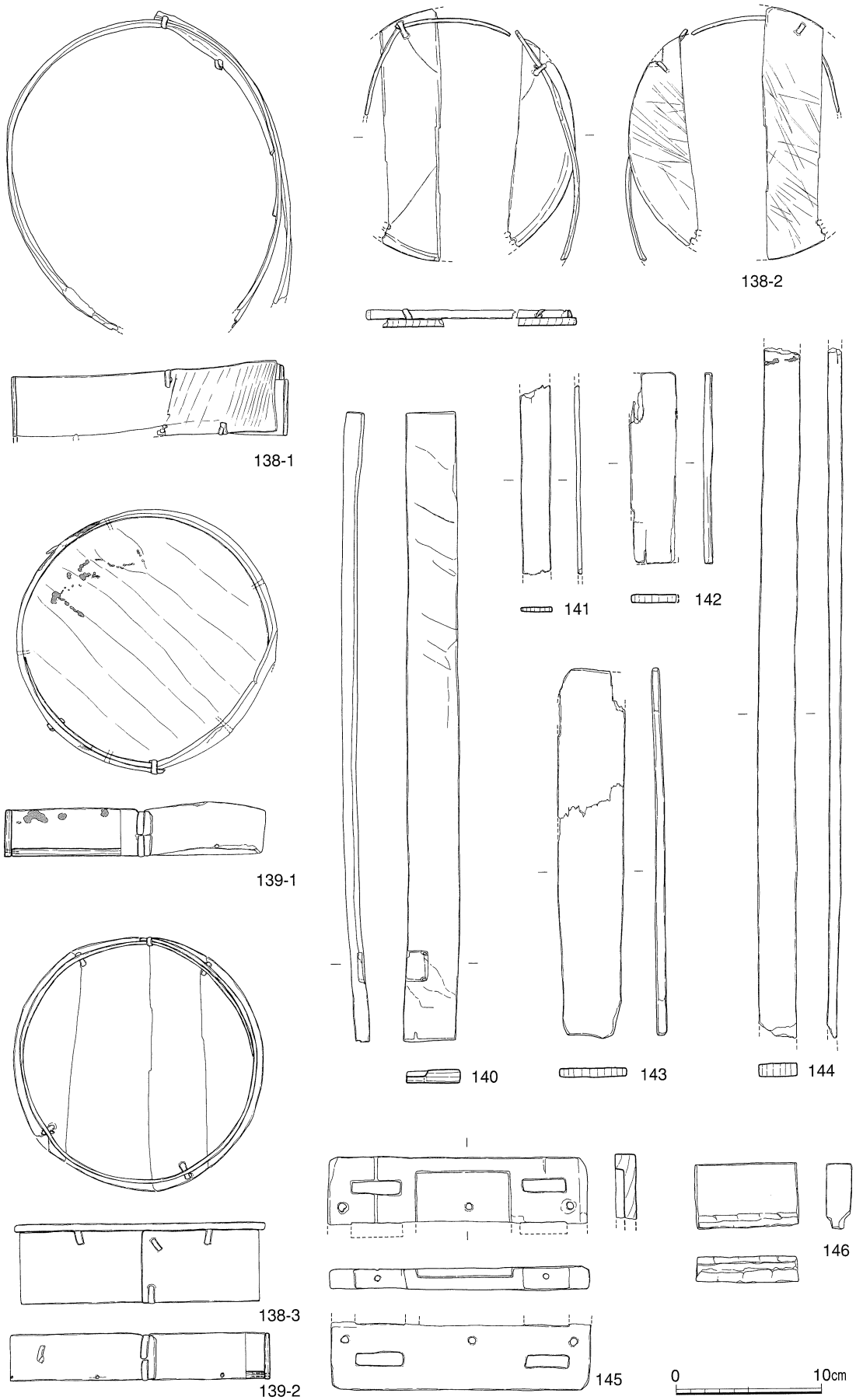
141～144は長方形の薄い板材・146は厚い板材である。144は両端が欠損するものであるが、片側の端部付近に漆が付着している。146は長さは7.0cm・幅4.3cm・厚さ1.8cmほどのもので、長辺の片側が凸状に加工されている。

149・151～157は棒状を呈するものである。149は長さが現状で56.7cmと長いもので、先端が尖っている。151は長さ23.0cm・幅1.9cm・厚さ1.5cmで片側が細くなるように加工されている。152・153は丁寧に面取りされたもので、153は一部が焼けて炭化している。154は径1.2cmほどの円管状のもので、溝が刻まれている。155～157は細い棒状のものである。155は端部を丁寧に加工している。156は一方の端部に利器を入れ折り取っている。157は両端を斜めに加工する。

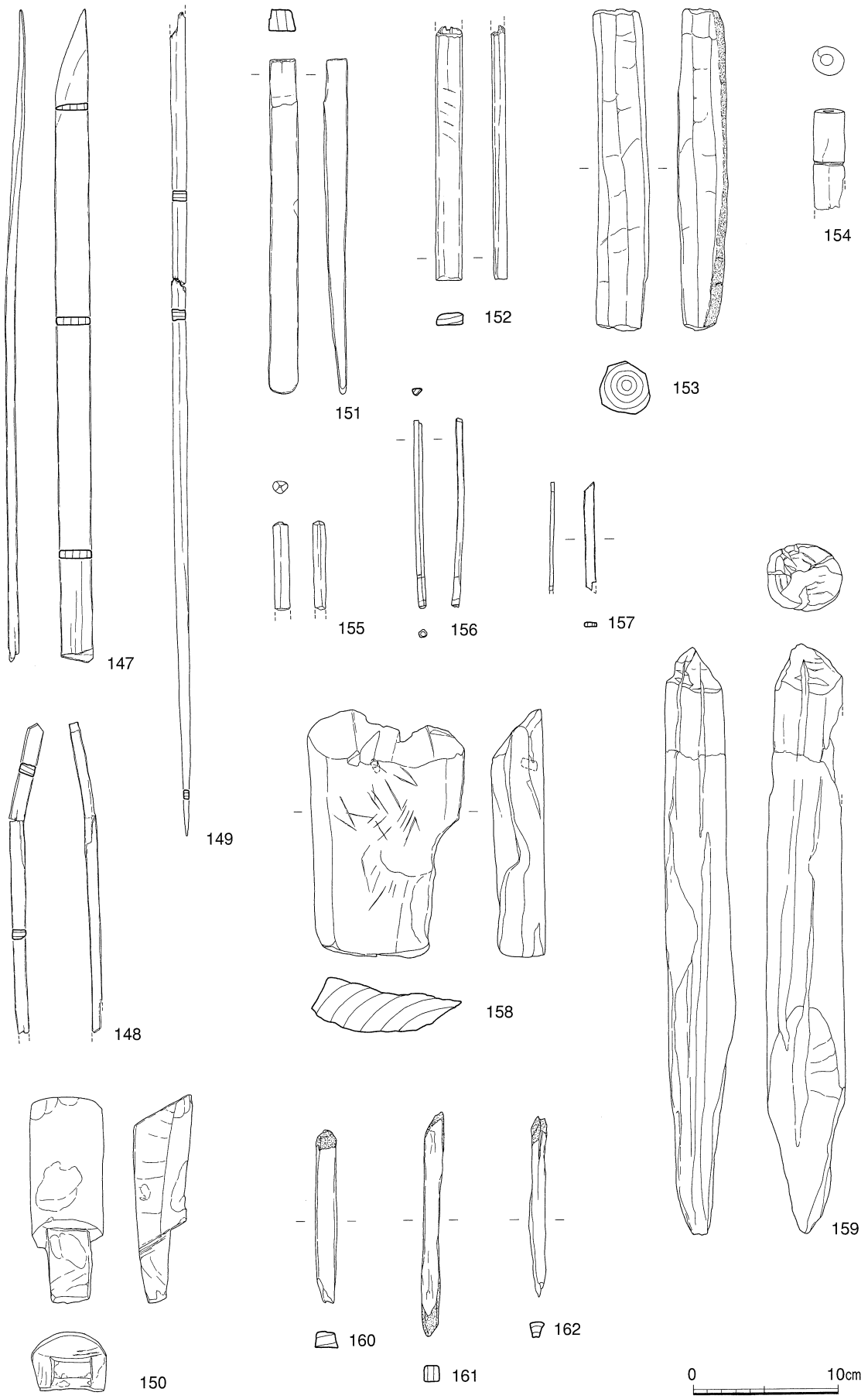
158は不定形な木片であるが、利器の痕跡が顕著で、１ヶ所に三角形状の孔が空けられている。

159は両端を尖らせた杭状のもので、長さは40.0cm・径5.2cmである。

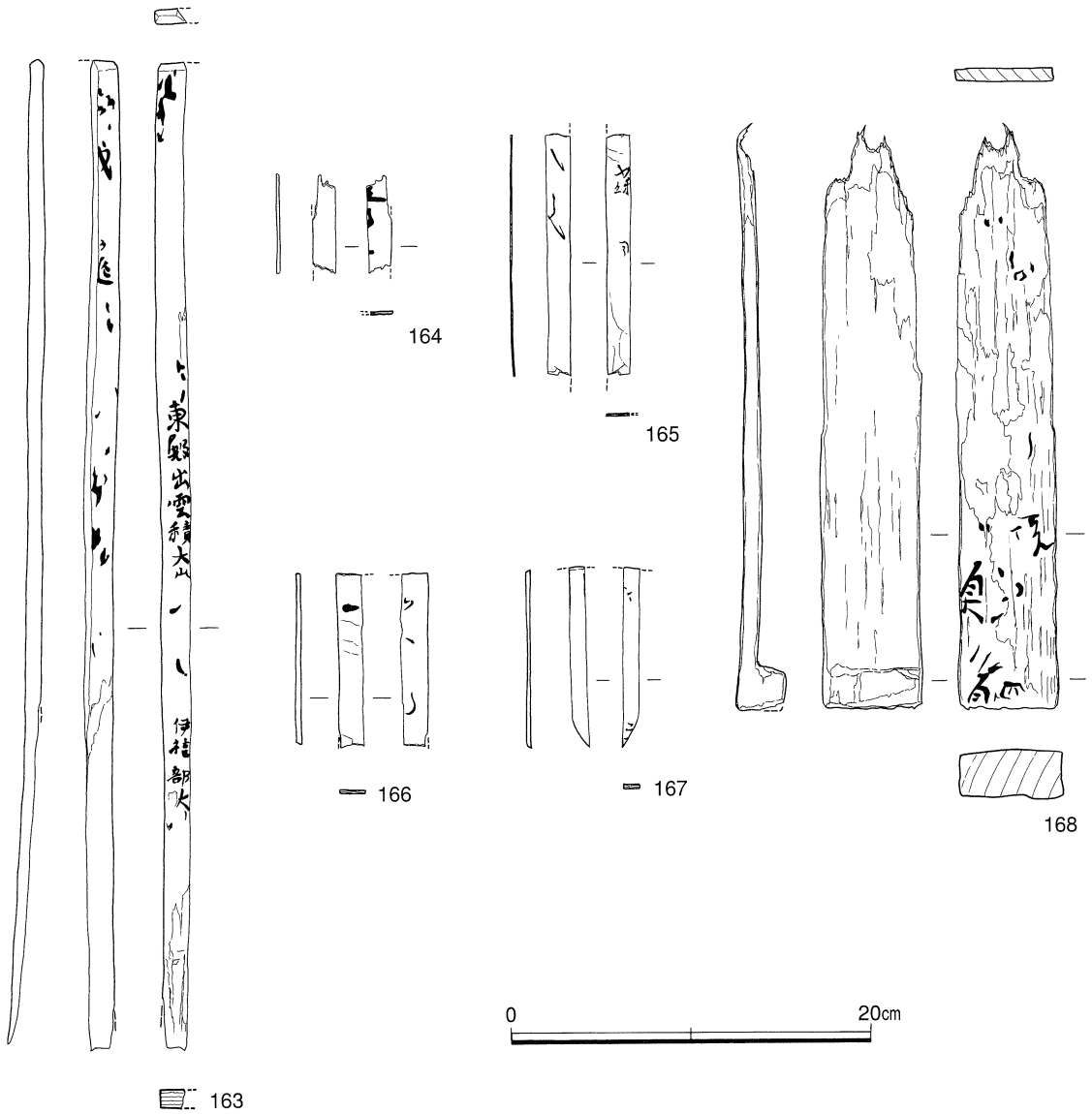
160～162は断面が不整な方形を呈する割木で、両端または片側が炭化した燃えさしである。



第83図　5号土坑出土木製品実測図（1）



第84図　5号土坑出土木製品実測図（2）



第85図　5号土坑出土木製品実測図（3）

第85図163～167は木簡である。163は短冊型をした文書木簡で、樹種はヒノキである。先端は山形に加工されているが、下端と右半分を欠損している。大きさは現状でも長さ54.4cmと長く、幅は1.7cm・厚さ0.9cmである。両面に墨書があるが、釈読できるのは表面のみで「□東殿出雲積大山□□　伊福部大□」、裏面は「□□　□　[　　]」と3文字以上あることが分かる。

164は現状で長さ5.0cm・幅1.3cm・厚さ0.2cmの小片で、樹種はスギである。片面に3文字分の墨書があり、「建部上」と読める可能性がある。165は現状で長さ13.3cm・幅1.3cm・厚さ0.2cmで、樹種はスギである。両面に墨書があるが、下端には利器の痕跡があり折られている。釈読できるのは表面の一部で「蘇□□」。裏面は2文字以上の墨書がある。166は現状で長さ9.4cm・幅1.4cm・厚さ0.3cmで、上端に切断痕があり、下端は欠損している。表面3文字分、裏面1文字分の墨書があるが釈読できず、裏面にはハギトリ状の削りが見られる。167は現状で長さ9.9cm・幅0.8cm・厚さ0.3cmで、両側面が欠損し、下端は二次的に整形されて墨書が削られている。片面に3文字分の墨書があり、下端のものは「二」と読める可能性がある。

168は木製品に墨書されたもので、樹種はヒノキである。大きさは現状で長さ32.5cm・幅5.6cm・

厚さ0.9㎝で、基部は厚さ2.7㎝で段になっている。表面に３行分の墨書があり中列の「四」と左列の「□頁□頁」が判読できる。左列に対し中列の文字が反対方向から書かれていることから習書に使われたものと見られる。

(14) ６号土坑

遺　構　１区の中央南寄りで確認された土坑である。周辺の遺構との関係は、１号建物跡身舎が北４ｍ、２号建物跡が東13ｍ、３号建物跡が東29ｍ、５号土坑が東41ｍである。３号土坑と重複しており、３号土坑→６号土坑の順に営まれている。

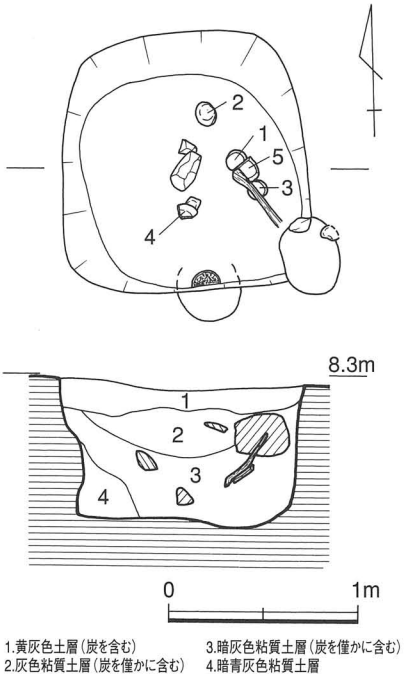
６号土坑は、隅丸方形を呈しており、南北1.4ｍ・東西1.3ｍ・深さは0.74ｍである。埋土は基本的には３層で、上層より順に炭を含む黄灰色土・灰色粘質土・暗灰色粘質土が堆積している。また、土坑の南壁沿いでは径16㎝ほどの細い柱根が確認されている。

出土遺物　須恵器坏、土師器坏、丸瓦がある。

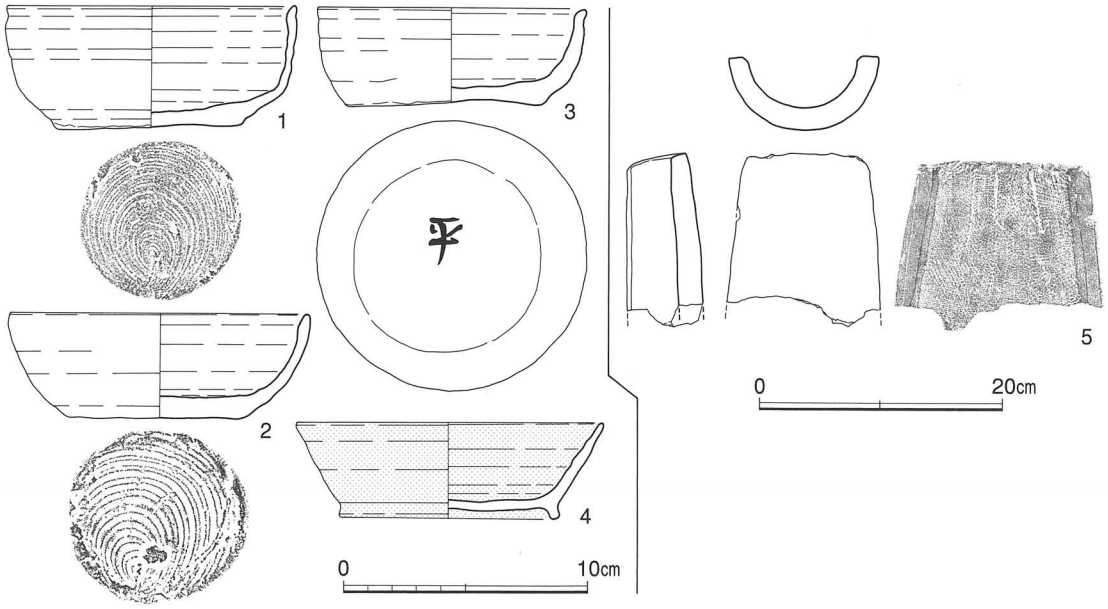
第87図１～３は須恵器坏で、高台が付かないものである。丸みのある体部をもち、１・３は口縁が僅かに屈曲する。外面底部は回転糸切りで、３には「平」と墨書されている。

４は土師器坏で、高台をもつものである。外傾する口縁を有し、高台は底部の周縁に付く。底部はヘラ切りで、内外面に赤色顔料が塗布されている。

５は丸瓦である。行基式で、凸面は縄目タタキの後、横方向にナデ調整が加えられており、凹面には布目が残る。端部は丁寧に面取りされており、焼成は須恵質である。



第86図　６号土坑遺構実測図



第87図　６号土坑出土遺物実測図

（15）７号土坑

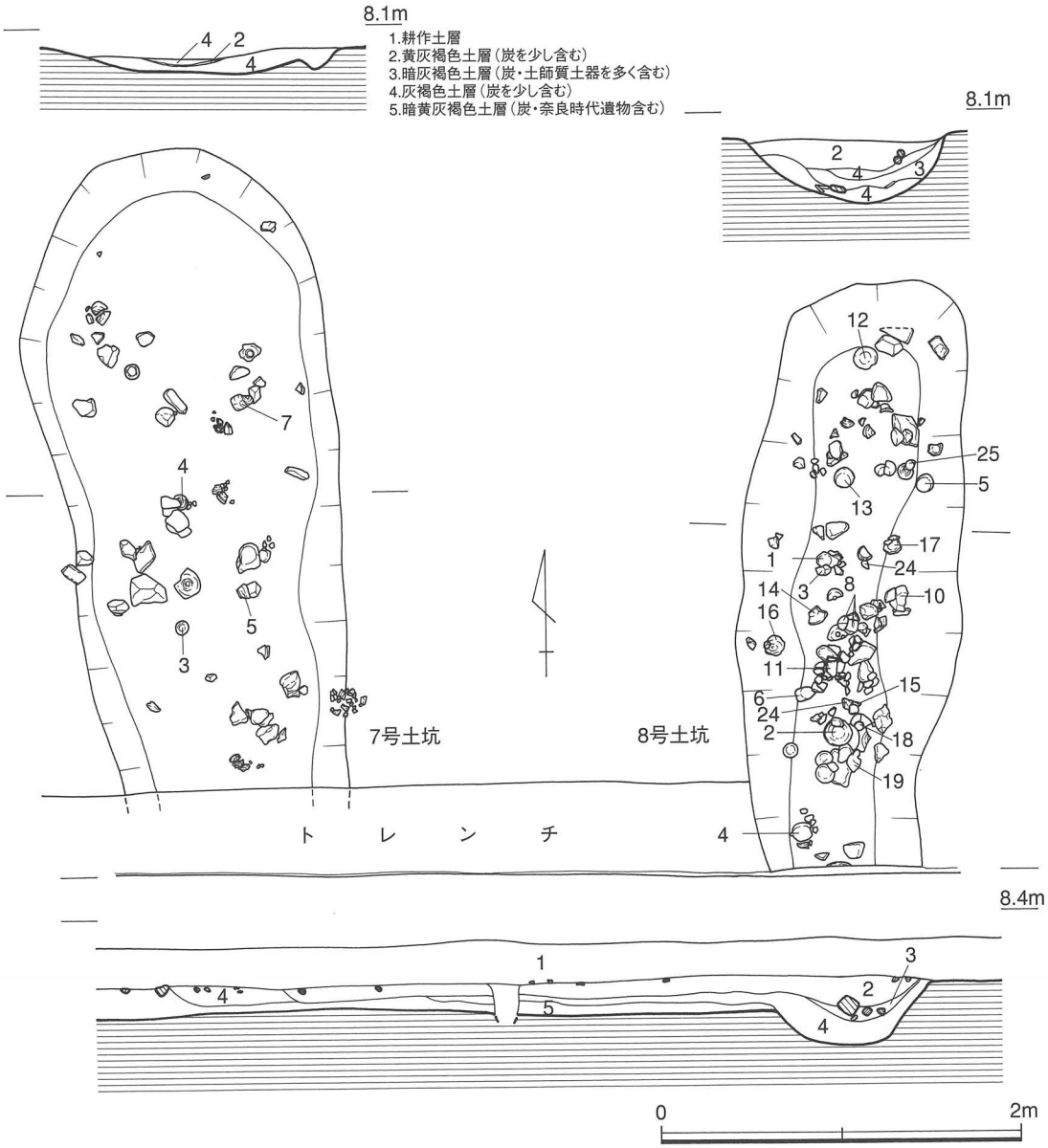
遺　構　３区の南東で確認された土坑である。同時期の周辺遺構との関係は、４号建物跡身舎が北東４ｍ、15号土坑が北東23ｍ、８号土坑は東4.2ｍで平行に並んでいる。

７号土坑は南北方向の延びる浅い土坑で、南側は未調査である。大きさは南北４ｍ以上・東西1.2～1.7ｍ・深さは0.1ｍで、横断面形は浅い皿状を呈している。埋土は基本的には１層で、炭を含む灰褐色土層、北側では部分的に黄灰褐色土層を間層として挟んでいる。

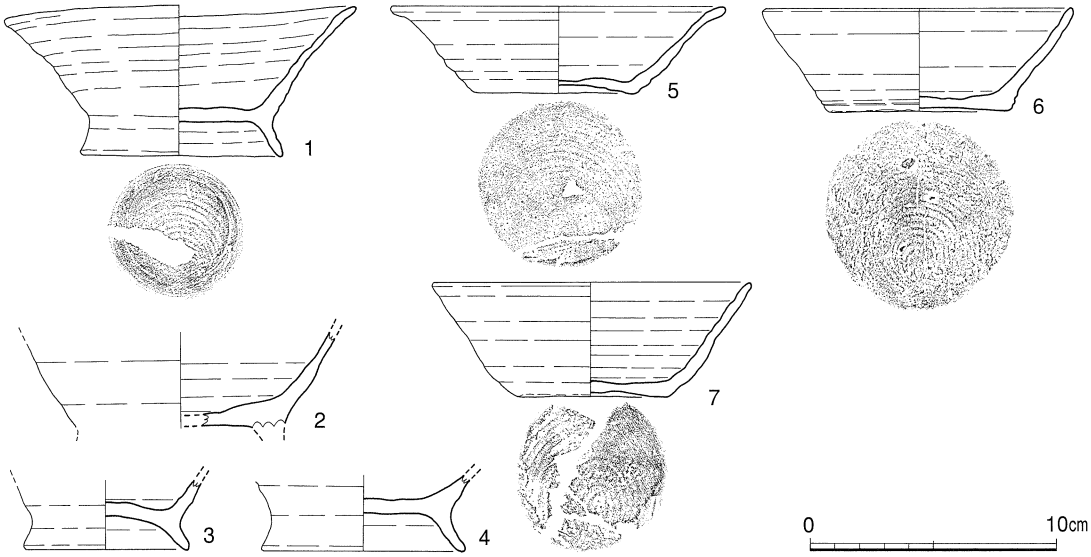
出土遺物　土師質土器坏がある。

第89図１～４は坏で、足高高台が付くものである。１は全形が分かるもので、やや外反する口縁部をもっており、底部切り離しは回転糸切りである。２は口縁と高台部分を欠損するが、底部はヘラ切りの可能性がある。３・４は足高高台をもつ底部の破片で、３は高台がやや低い。

５～７は坏で、高台をもたないものである。５はやや外反する口縁、６・７は外傾する口縁をもっており、底部の切り離しは回転糸切りである。



第88図　７号・８号土坑遺構実測図



第89図　7号土坑出土遺物実測図

（16）8号土坑

遺　構　3区の南東で確認された土坑である。同時期の周辺遺構との関係は、4号建物跡身舎が北4.5m、15号土坑が北東20.5m、8号土坑は西4.2mの位置に平行に並んでいる。

8号土坑は南北方向の延びる土坑で、南側は未調査である。大きさは南北3.2m以上・東西0.8～1.2m・深さは0.4mである。横断面形はU字形を呈しており、隣り合う7号土坑と比較するとしっかり掘り込まれている。

埋土は3層または4層で、基本的には上層から順に炭を含む黄灰褐色土、炭・土師質土器を多く含む暗灰褐色土、炭を少し含む灰褐色土が堆積している。最上層の炭を含む黄灰褐色土（2層）は南側のトレンチ部分では西に大きく広がっており、7号土坑の埋土である灰褐色土（4層）を切っている。したがって7号土坑と8号土坑には前後関係があり、7号土坑→8号土坑の順に営まれたものと考えることができる。

出土遺物　土師質土器坏・皿、須恵器坏・壺、緑釉陶器椀がある。

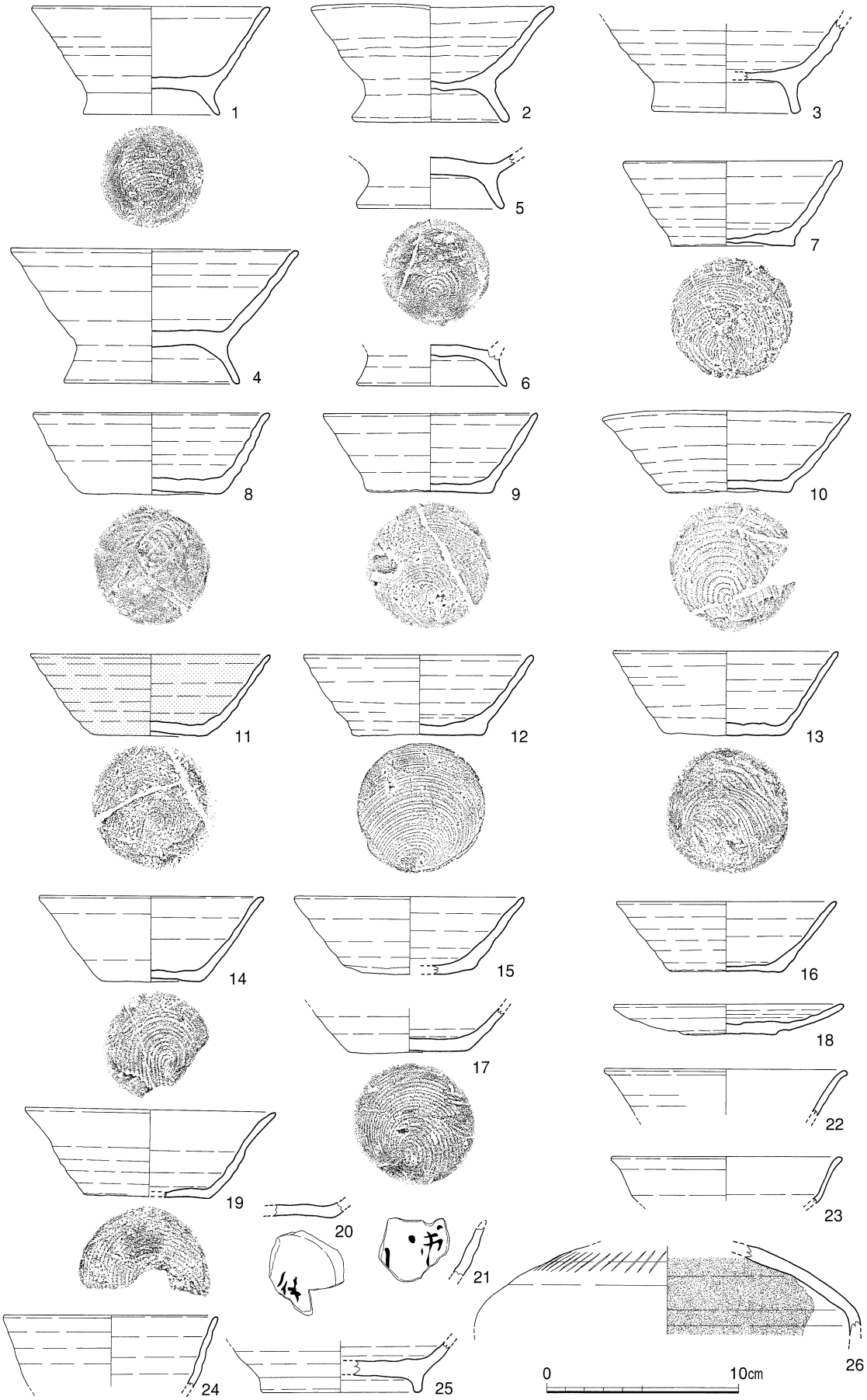
第90図1～6は土師質土器坏で、足高高台が付くものである。1～4は直線的に外傾する口縁部が残っており、口径は1・2がそれぞれ12.2cm・12.4cmであるのに対し、4は15.0cmと大きい。底部切り離しは1・3～5が回転糸切りである。

7～17・19は坏で、高台をもたないものである。口縁は直線的に外傾するものが多いが、19はやや外反している。口径は11～12cm前後のものが多いが、10・19はそれぞれ12.9cm・13.0cmと一回り大きい。底部の切り離しは回転糸切りがほとんどであるが、15はヘラ切りである。また、11の内外面には緑色顔料が塗布されている。

18は皿である。口径は12.0cm・器高は1.6cmと低い。底部の切り離しは不明である。

20・21は坏で墨書がある。20は回転糸切りのある底部で、外面に「御」と墨書がある。21は坏の体部で、外面に2文字分の墨書があるが判読できない。

24・25は須恵器坏で、前者が口縁部、後者は高台付きの回転糸切り底である。焼成は不良で、色調は灰白色を呈している。



第90図　8号土坑出土遺物実測図

26は須恵器壺肩部である。外面には斜行刺突文が施されており、回転ナデ調整されている。内面には墨が付着しており、壺肩部の破片を硯に転用したものと見られる。

22・23は緑釉陶器椀の口縁部小片である。ともに口縁端部が外反しており、23は体部外面に稜が付く稜椀と呼ばれるものである。内外面に淡緑色の釉がかけられており、胎土は緻密で灰白色を呈している。京都産である。

(17) 9号土坑

遺　構　3区の中央部で確認された不整形な浅い落ち込みである。周辺遺構との関係は、3号建物跡の北側にほぼ接し、1号建物跡が西23m、2号建物跡が西17m、4号建物跡が東11m、5号土坑は東3.5mに位置している。

9号土坑は南北方向の延びるもので、南北7.0m・東西2.2～3.2m・深さは0.2mである。埋土は3層または4層で、上層から順に灰色粘質土、炭化物を含む暗灰色粘質土、灰色粘質土または明灰色粘質土が堆積している。

出土遺物　須恵器蓋坏・皿・高坏・短頸壺・鉢・硯がある。

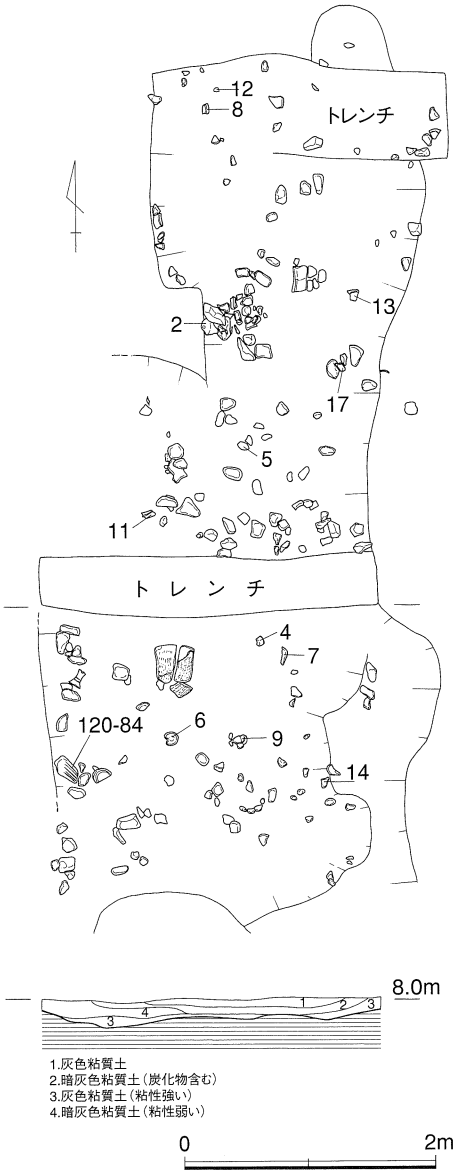
第92図1・2は坏蓋である。1は輪状つまみをもち、口縁が屈曲して直立するもので、頂部には回転ヘラケズリが見られる。2は口縁を欠損するが、大形の蓋と見られ、宝珠つまみが付いている。頂部は回転ヘラケズリである。

3～6は坏で、無高台のものである。3～5はいずれも体部が丸みを帯びるものであるが、3は口縁が短く屈曲して端部が外反するのに対し、4・5は僅かにくびれる程度である。底部の切り離しは回転糸切りである。また、6の内面には墨が付着している。

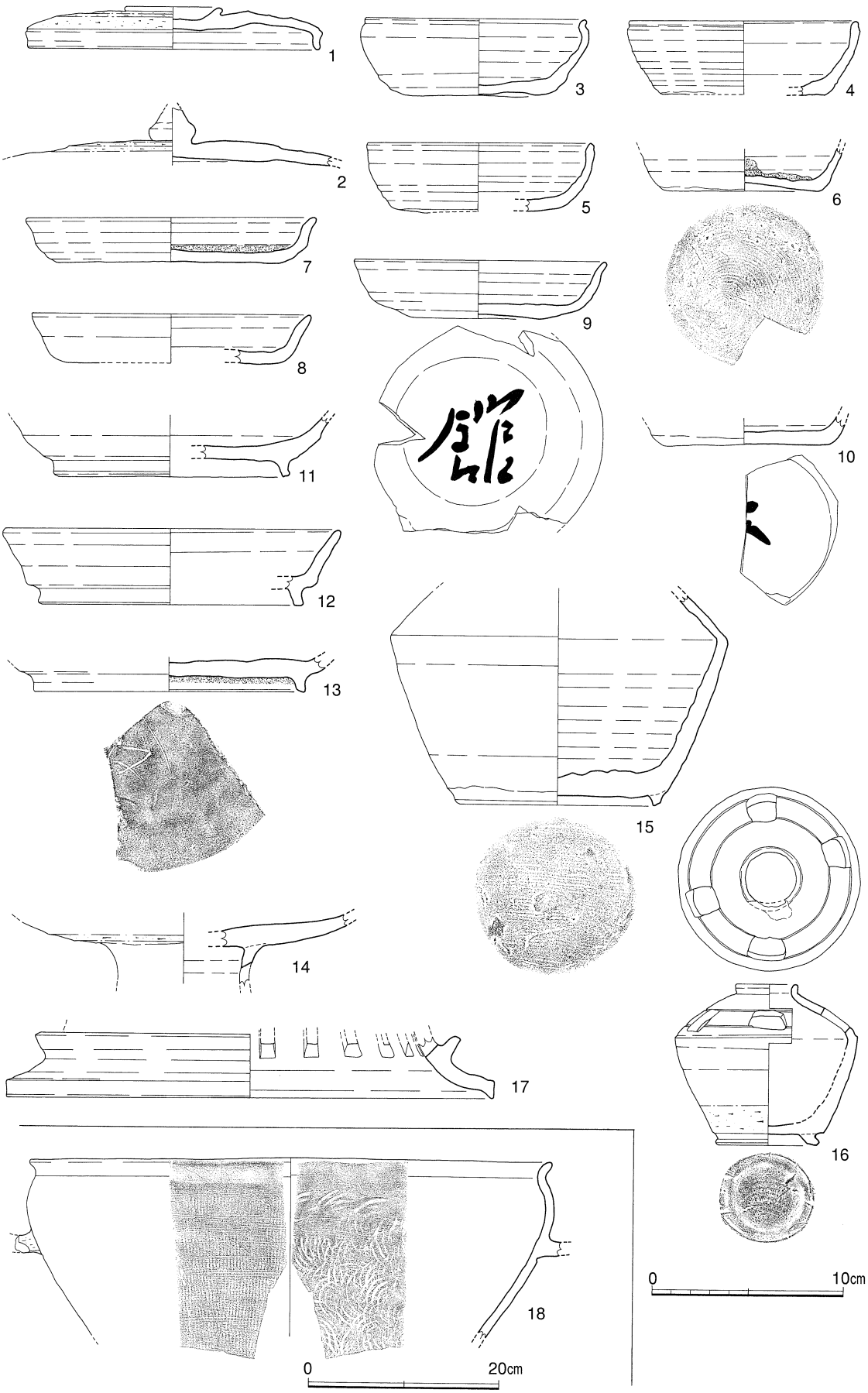
7～10は皿で、無高台のものである。7～9は外反する短い口縁をもっており、底部切り離しは回転糸切りである。9・10の底部外面には墨書があり、9には大きく「館」と書かれているが、10は判読できない。また、7の内面には墨が付着しており、転用硯として使用されたものと見られる。

11～13は皿で、高台が付くものである。12は外傾する口縁を有しており、11・13の底部は回転糸切りである。13は内面に1字分のヘラ書き文字があるが判読できず、外面底部は墨が付着していることから転用硯とされたものと見られる。

14は高坏である。坏部外面には回転ヘラケズリが入り、脚部には透孔の一部が残っている。



第91図　9号土坑遺構実測図



第92図　9号土坑出土遺物実測図

15・16は壺である。15は底部に低い高台が付いており、静止糸切りである。16は小形短頸壺で、短く直立する口縁をもつ。肩部には２本の沈線とその間に４つの方形透孔が設けられている。底部には低い高台が付いており、切り離しは静止糸切りである。胴部下半には回転ヘラケズリが見られる。類品が玉湯町蛇喰遺跡[9]にあり、水滴として使用されたものとも考えられる。

17は硯の脚部である。よく踏ん張る脚部の外面に突帯が１条が付けられている。突帯の上に長方形透孔が並んでおり、その間隔から24孔程度が想定できる。

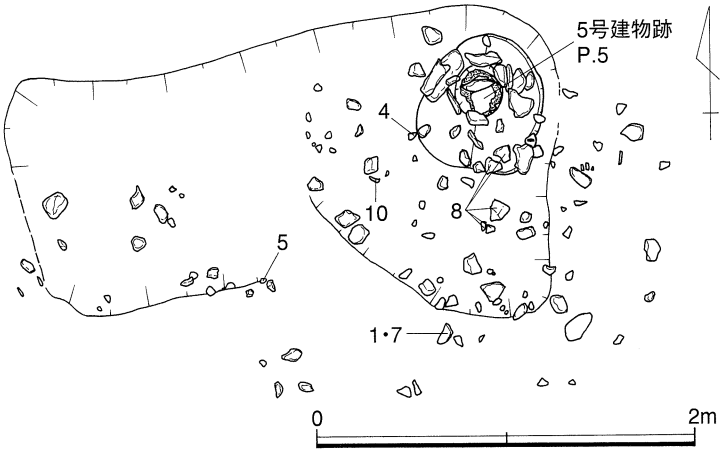
18は把手付き鉢である。口径54.0cmもある大形品で、口縁が緩く外反し、肩部下に面取りされた把手が付く。外面は平行タタキののち粗いカキメ、内面には同心円状の当て具痕が残る。

(18) 10号土坑

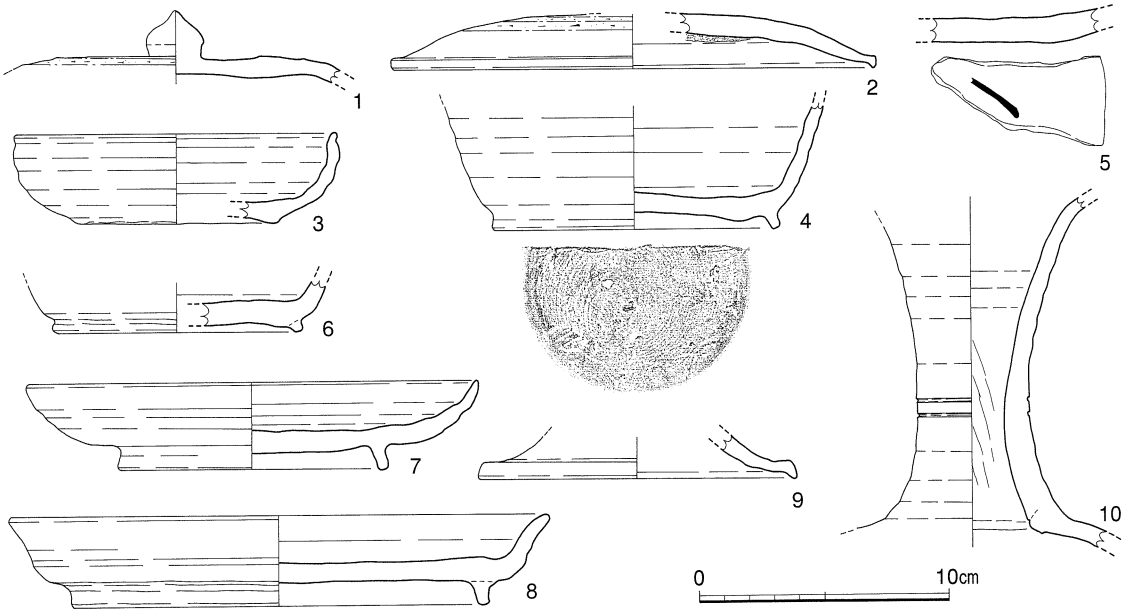
遺　構　３区の中央部やや南寄りで確認された不整形な浅い落ち込みで、５号建物跡P.5と重複している。周辺遺構との関係は、３号建物跡の内側にあり、１号建物跡が西28m、２号建物跡が西18m、４号建物跡が東10m、５号土坑は北東３mに位置している。

10号土坑は東西方向を向いており、南北1.4m・東西2.9mである。平面形のみ確認しており、内部の調査は行っていない。

出土遺物　須恵器蓋坏・皿・高坏・長頸壺がある。



第93図　10号土坑遺構実測図



第94図　10号土坑出土遺物実測図

第94図１・２は坏蓋である。１は宝珠つまみをもつもので、外面頂部にヘラケズリが入っている。２はつまみを欠くが、口縁端部が下方に僅かに肥厚するもので、外面頂部にはヘラケズリが見られる。内面は磨滅し墨が付着していることから、転用硯として使用されていたものと考えられる。

３は坏身で、高台をもたないものである。口縁が僅かにくびれており、体部は丸みを帯びている。底部はの切り離しは回転糸切りである。

４・６は坏身で、高台をもつものである。高台は底部の周縁に付けられており、底部の切り離しは回転糸切りである。

５は無高台の皿底部と見られる。調整・底部切り離しは風化のため不明であるが、外面底部に墨書があり、「一」と読める可能性がある。

７・８は皿で、高台をもっている。７は丸みを帯び内湾する口縁部、８は外反する口縁部を有している。底部は７は回転ヘラケズリの後ナデ調整をしており、８は回転糸切りである。また、８の内面には黒色の付着物がある。

９は高坏の脚部である。脚端部は下方に屈曲している。

10は長頸壺の頸部である。外面に２条の沈線が施されており、内面にはしぼり目が残る。また、頸部と胴部の接合部が観察できる。

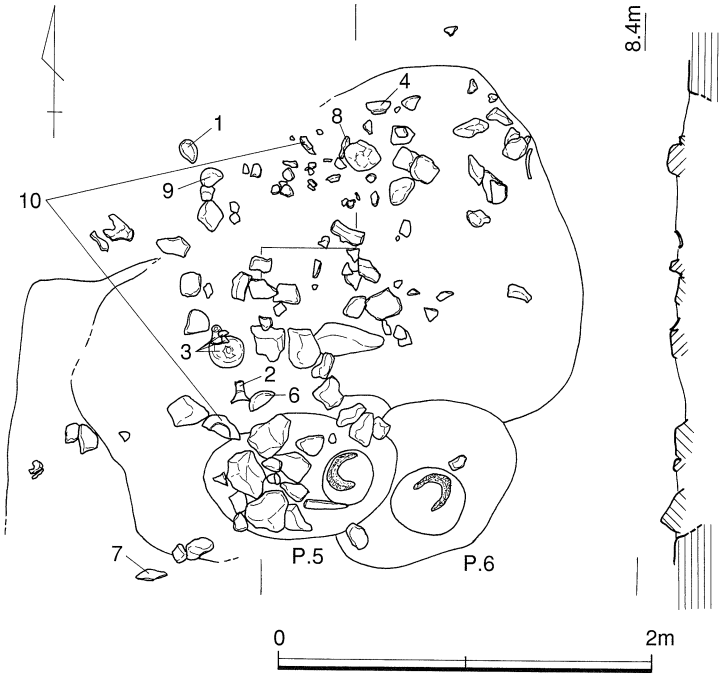
(19) 13号土坑

遺　構　２区の北東側で確認された不整形な落ち込みである。周辺遺構との関係は２号建物跡はその北側に接する位置にあり、１号建物跡が西７ｍ、３号建物跡が北東10ｍ、４号建物跡が東29ｍ、５号土坑は北22ｍにある。柱根の残る２区P.5・P.6と重複しており、13号土坑→P.6→P.5の順に営まれていることが明らかである。

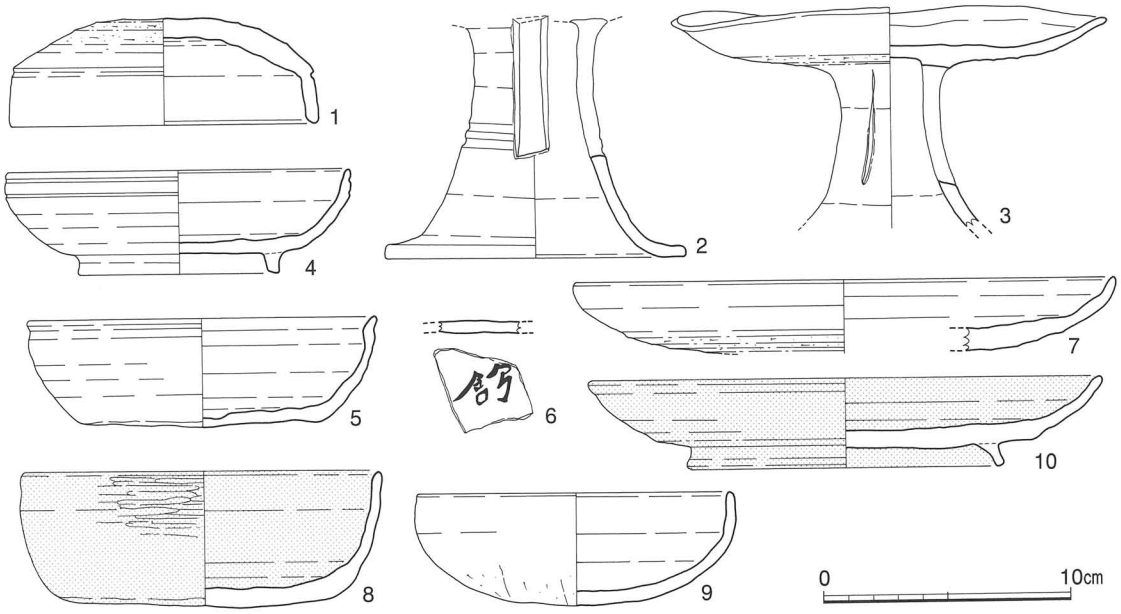
13号土坑は、ここでは１つの遺構として取り上げる。しかし、後述するように遺物は古墳時代後期のものと奈良時代のもので構成されており、いずれも完形品または遺存状態が良好なものであることから、２つの遺構が重複したものである可能性が高い。検出されている大きさは長さ2.8ｍ・幅2.0ｍほどである。

出土遺物　須恵器蓋坏・高坏、土師器坏・皿がある。

第96図１・２は古墳時代後期の遺物である。１は坏蓋で、口縁が直立し、頂部との境に鈍い稜をもつものである。器壁は厚手で、頂部には回転ヘラケズリが施されている。



第95図　13号土坑遺構実測図



第96図　13号土坑出土遺物実測図

2は高坏脚部で、2方向に長方形透孔を1段入れる。外面には沈線が2条施されている。

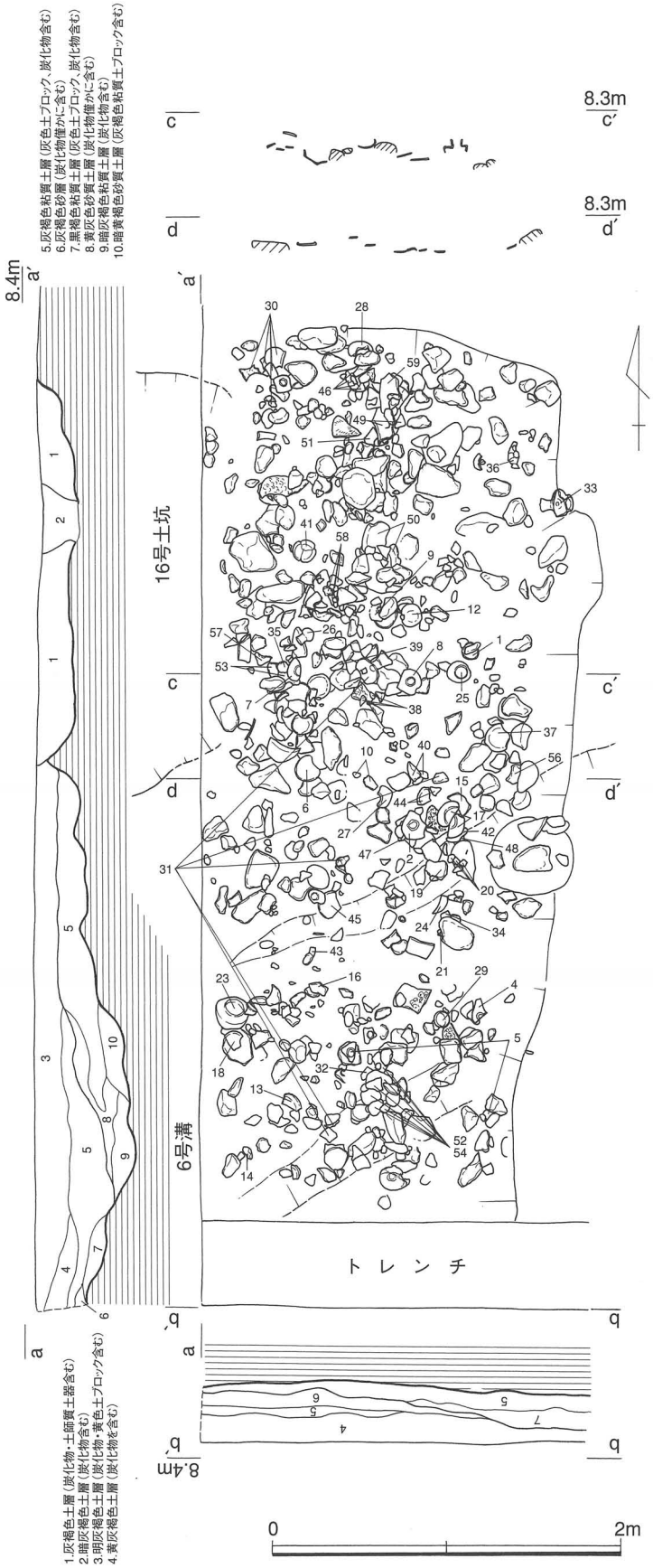
3～10は奈良時代の遺物である。3は須恵器高坏で皿状に広がる坏部を有しており、脚部は3方向に線状の透かしがある。坏部外面下半は回転ヘラケズリ調整である。4～6は須恵器坏身である。4は高台が付くもので、丸みを帯びた体部をもち、底部は回転糸切りである。内面中央には同心円状の当て具痕が残っている。5は高台をもたないもので、丸みを帯びた体部をもち、口縁端部が僅かに屈曲する。6は回転糸切り底の小片であるが、外面底部に「舘」と墨書がある。7は皿で丸みを帯びた体部をもつ。外面底部は回転ヘラケズリで、内面は墨は付いていないが磨滅している。

8・9は土師器坏である。8は器高が高く口縁が外傾して立ち上がるもので、外面にヘラミガキ、内外面に赤色顔料が塗布されている。9は丸みを帯びた体部をもつもので、底面にはケズリがある。10は土師器皿で、高台が付くものである。底部はヘラケズリの後ナデており、内外面に赤色顔料が塗布されている。

(20) 14号土坑

遺　構　1区の南西側で確認された不整形な落ち込みである。同時期の周辺遺構との関係は8号建物跡が東60m、3号溝が東66m、4号土坑が北東17m、第20トレンチで確認されている石敷護岸施設は西12mのところに位置する。

14号土坑は、平成12年度調査区の南西隅に当たっていたこともあって、西及び南側の落ち込みの輪郭が判然としない。西壁の土層は北半分に16号土坑、南半分に6号溝の断面が見られるが、14号土坑が広がるような状況は観察できない。また、南壁では僅かに西側に傾斜する土層が確認できる程度である。したがって、14号土坑は本来、調査した遺物の広がり程度の土器溜まりであったと見られ、南北5m・東西2mと南北に長く浅い土坑と考えられる。土坑の内部には遺物と、多量の石が入っており、これらの出土位置を検討すると中央がやや低い、皿状になるものと思われる。



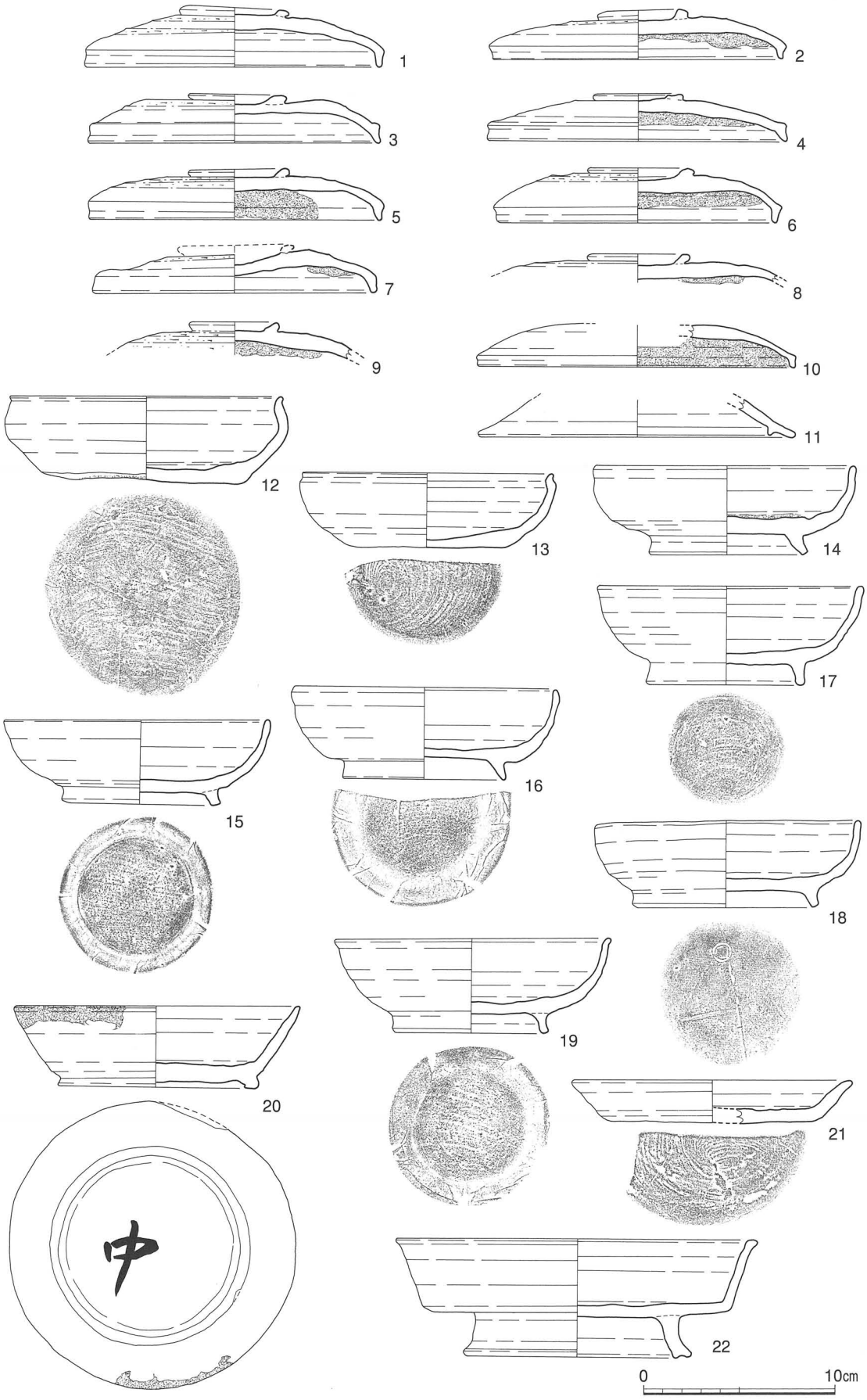
第97図　14号土坑遺構実測図

出土遺物　須恵器蓋坏・皿・短頸壺・直口壺・長頸壺・瑤、土師器坏・皿・甕がある。

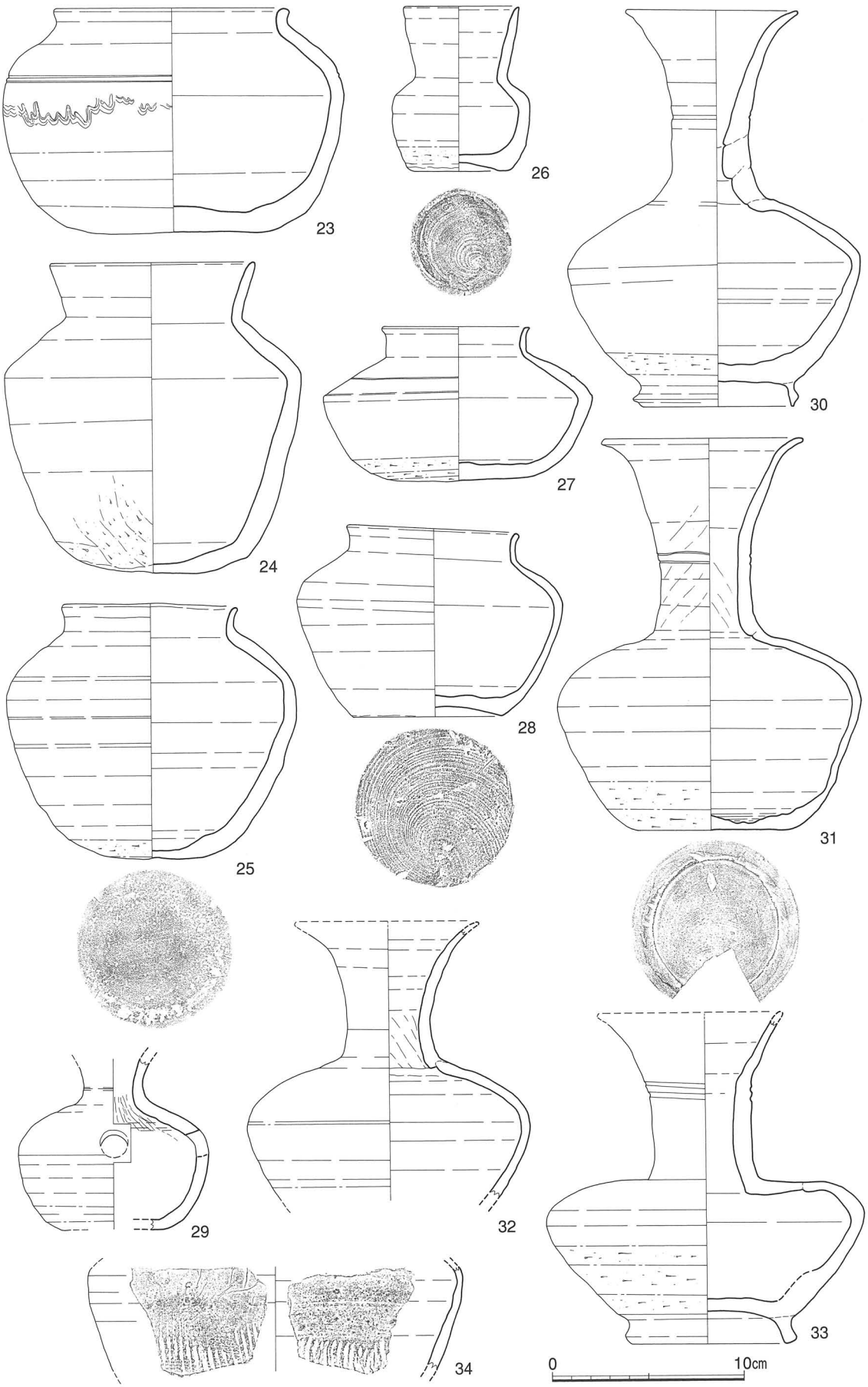
第98・99図は須恵器である。1～11は坏蓋で、1～10は輪状つまみをもち、口縁が屈曲して直立する形態をとるものである。1の頂部には回転糸切り痕、2・5の頂部には静止糸切り痕が僅かに残っており、1～3・5～9は回転ヘラケズリ調整を行っている。また、2・4～10の内面には墨が付着しており、一部に磨滅が見られることから、多くは転用硯として利用されていたものと見られる。11は口縁でかえりが付くものである。小片であり、混入品の可能性がある。

12・13は坏身で、高台をもたないものである。口縁端部は短く屈曲して外反し、体部は丸みを帯びている。底部は12が静止糸切り、13は回転糸切りである。12の底部外面にはやや広い範囲に墨が付着している。

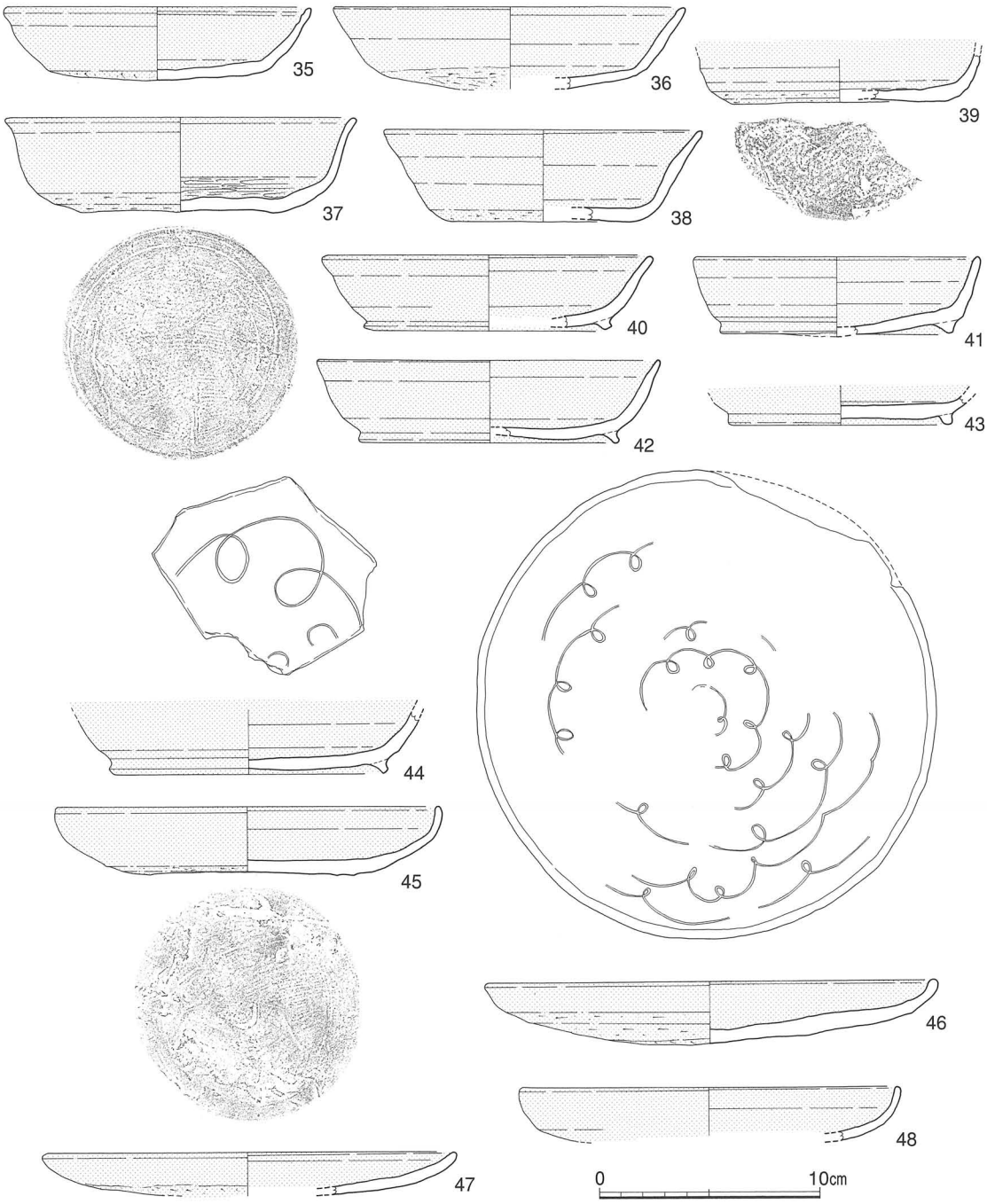
14～20は坏身で高台をもつものである。14～19は丸みを帯びた体部を有しており、19は口唇がやや外反する。底部は15～17・19は静止糸切りで、14・18は回転ナデ調整されている。18の底部外面には焼成前に「○」状の刻印があり、14の内面には墨が付着している。20は直線的に外傾する口縁と底部周縁に低い高台をもつもので、底部は回転ヘラケズリ調整されている。底部外面には大きな墨書があり、「中」と釈読できる。また、口縁内外面には煤状の黒色付着物があり、灯明皿として使われていた可能性がある。



第98図　14号土坑出土遺物実測図（1）



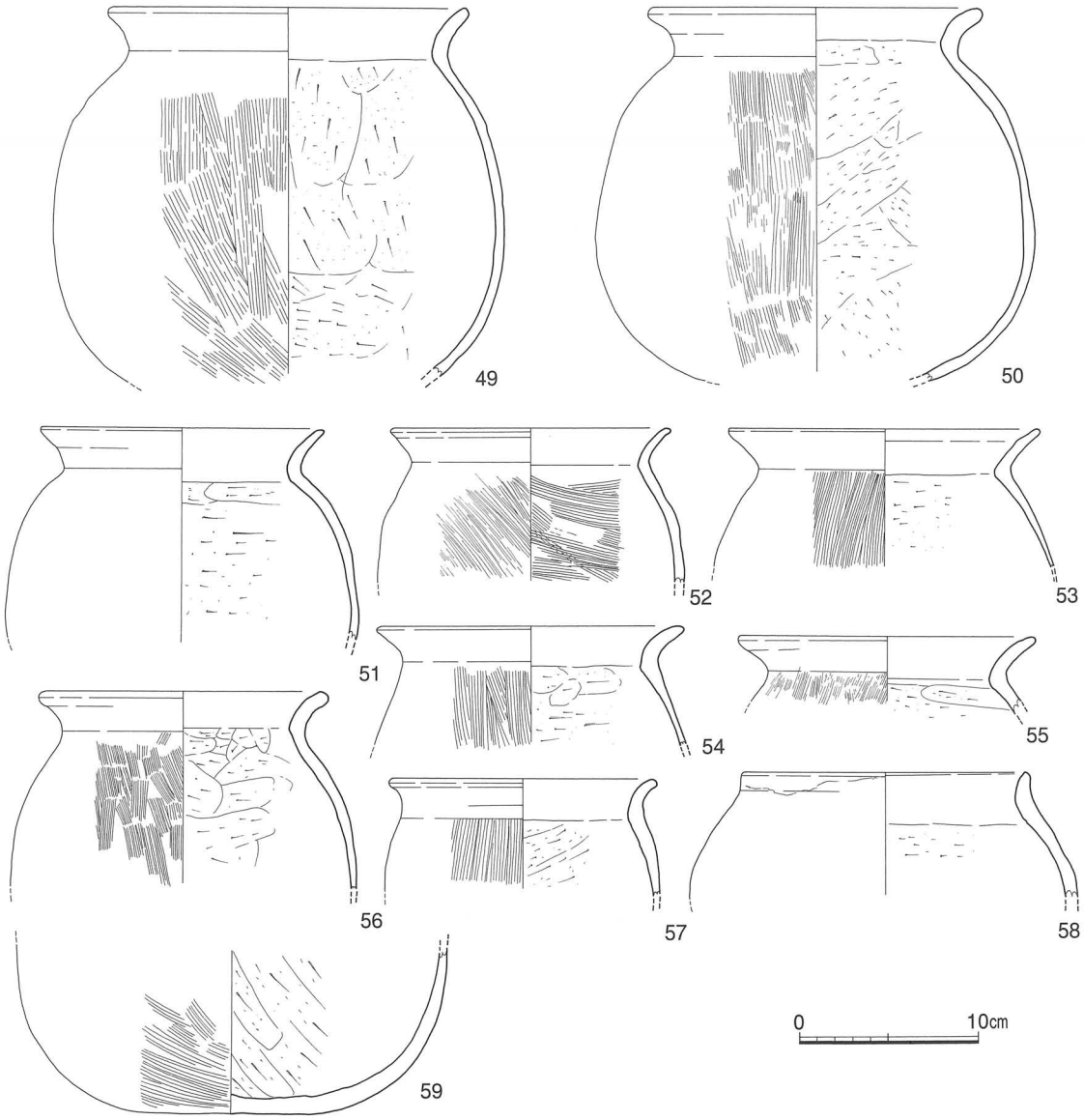
第99図　14号土坑出土遺物実測図（２）



第100図　14号土坑出土遺物実測図（３）

21・22は皿である。21は高台をもたないもので、外傾する短い口縁部を有しており、底部は回転糸切りである。22は高い高台をもち比較的深いものである。口縁は外傾し、端部が肥厚しており、底部は回転ナデ調整されている。

第99図23・25・27・28は短頸壺である。23は胴部径が大きく寸胴で、胴部に２条の沈線と粗い波状文が施されている。胴部下半には一部にタタキ痕があり、回転ヘラケズリが見られる。25はやや器高が高いものある。外面底部には僅かに静止糸切り痕が残っており、周囲が回転ヘラケズリ調整されている。27は器高が低く寸胴で、肩部がよく張っている。口縁端部が僅かに外反し、底部は回転ヘラケズリである。28は底部に回転糸切り痕を残すもので、胴部下半は回転ヘラケズリの後、回



第101図　14号土坑出土遺物実測図（４）

転ナデが加えられている。

24・26は直口壺である。24は短頸壺25に近い器形をもつが、器高が高く口縁がやや長い。底部はナデ、周辺にケズリが見られる。26は小形品で、底部に回転糸切り痕、胴部下半に回転ヘラケズリが入る。また、底部には一部に布圧痕がある。

30～33は長頸壺である。30・31・33は高台が付くもので、頸部外面には１または２条の沈線が施されている。30は頸部内面に螺旋状に粘土積み上げ痕が残っており、31・32は頸部にしぼり目が付く。33は肩部に段があり、円盤閉塞が行われたものと見られる。底部切り離しは、30・31は静止糸切り、33は回転糸切りの後回転ナデで、胴部下半にはいずれも回転ヘラケズリがある。

34は壺胴部の破片である。胴部外面下半には平行タタキ、内面には弧状に当て具痕が残る。

29は瓶である。底部に回転糸切り痕を残し、胴部下半に回転ヘラケズリが入るもので、頸部内面にはしぼり目が見られる。

第100・101図は土師器である。35～39は坏で、高台をもたないものである。35は口縁が外傾

し、器高がやや低く浅いもので、口唇内面に段がある。36・38は口縁が外傾、37は口縁が外反するものでやや深く、36の内面には僅かに段がある。底部は37・39に静止糸切り痕、周囲に回転ヘラケズリがあり、37の内面にはヘラミガキが見られる。35・36の外面底部は手持ちヘラケズリ、38は回転ヘラケズリである。いずれも内外面に赤色顔料が塗布されている。

40～44は坏で、低い高台をもつものである。40・42は外傾、41はやや外傾した口縁をもっており、底部外面は42～44は手持ちヘラケズリである。44の内面には２重の螺旋状暗文がある。いずれも内外面に赤色顔料が塗布されている。

45～48は皿で、高台をもたないものである。45はその他のものと比べ器高がやや深いが、どれも内湾する口縁部をもつ。45の外面底部は静止糸切りの後、周囲に回転ヘラケズリを施しており、「×」状の浅いヘラ記号が入る。46は底面に静止ヘラケズリ、周囲に回転ヘラケズリを施し、47はケズリの後ナデている。いずれも内外面に赤褐色顔料が塗布されている。

49～59は甕である。49～57は「く」字状に口縁が外反するもので、胴部外面にはハケメ、内面は52がハケメ、その他はケズリである。58は無頸のもので、口縁が僅かに反っており、胴部内面はケズリである。59はやや平底気味の底部で、外面はハケメ、内面はケズリである。

(21) 15号土坑

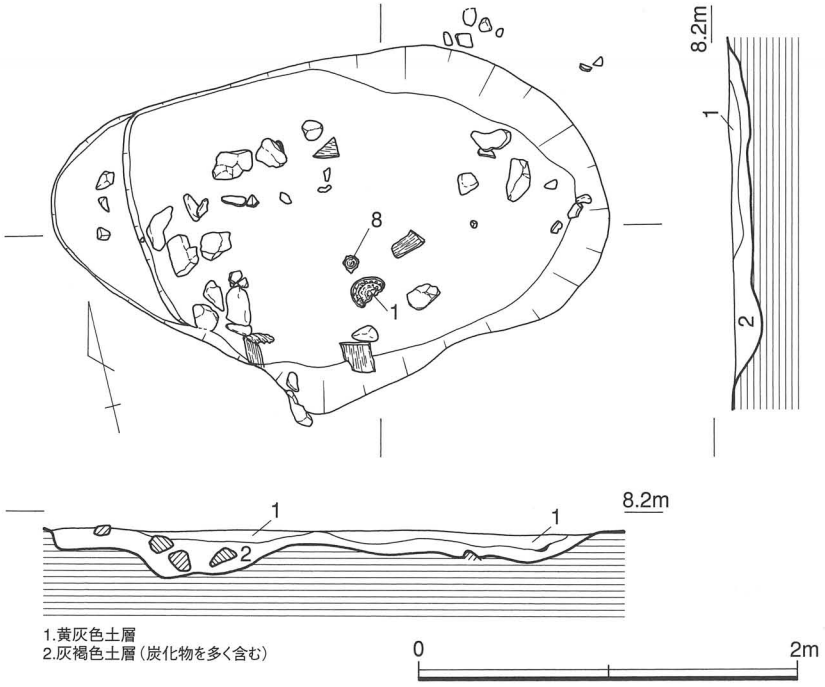
遺　構　４区の北東で確認された土坑で、４号溝と重複している。同時期の周辺遺構との関係は、４号建物跡身舎が南西５ｍ、７号土坑が南西23ｍ、８号土坑は南西20.5ｍの位置にある。４号溝との関係は、４号溝埋土を15号土坑が切っていることから４号溝→15号土坑の順に営まれていることが明らかである。

15号土坑は東西に主軸をもつもので、大きさは南北1.8ｍ・東西2.9ｍ・深さは0.1～0.2ｍで浅い。埋土は２層で、上層から順に黄灰色土、炭化物を多く含む灰褐色土が堆積している。

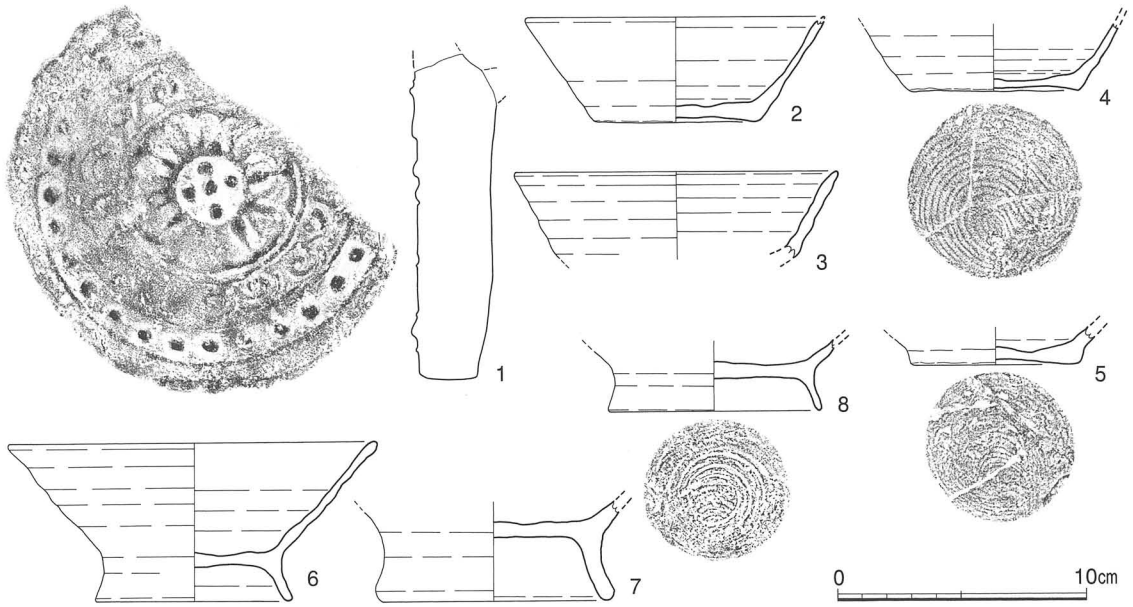
出土遺物　土師質土器坏・軒丸瓦がある。

第103図１は軒丸瓦である。中房は陰刻とし、蓮子は５個、花弁は５葉で、外区に唐草文と珠文帯がめぐる。裏面には瓦頭と丸瓦の接合部が剥離して残っている。出雲国分寺第二類に属するものである。

２～５は土師質土器坏で、高台をもたないものである。２・３は直線的に外傾する口縁部が残っており、２・４・５の底



第102図　15号土坑遺構実測図



第103図　15号土坑出土遺物実測図

部は回転糸切りである。

6～8は土師質土器坏で足高高台をもつものである。6は口縁が直線的に外傾するもので、高台は6・8は7に比べて低い。底部の切り離しは8が回転糸切りの後、回転ナデで、その他のものは不明である。

(22) 16号土坑

遺　構　1区の南西で確認された土坑である。1号建物跡南西側の廂部分と重複する位置にあり、1号建物跡が廃絶する段階で営まれたものと考えられる。

16号土坑は東西に主軸をもつもので、東端は14号土坑の調査で失われており、西側は調査区外に続いている。大きさは南北2.0～2.85m・東西は現状で4.9m・深さは0.1～0.2mで、横断面形は底面が比較的平坦で、皿状を呈している。埋土は、土師質土器・炭を多量に含む黒褐色土層が入っており、その下に炭を含む灰褐色土が堆積している。

出土遺物　土師質土器坏・鍋、緑釉陶器椀、須恵器坏・壺・平瓶・風字硯、瓦がある。

第105図1～27は土師質土器坏で、足高高台をもつものである。口縁が残るものはいずれも直線的で外傾しており、高台は底部の周縁に付く。足高高台は高くよく踏ん張る1・3・4～10・20と、低く直立する2・11～19・21～24・27のようなものがある。底部の切り離しは、1・3～5・7～9・12～15・19～21・24～26では回転糸切り痕が見られ、粗く回転ナデ調整が加えられているものもある。その他は回転ナデ調整、または風化により切り離し手法は不明である。

第106図28～第107図62は土師質土器坏で、高台をもたないものである。口縁は直線的に外傾するもの29～31・33～42・45～53と、口縁が外反する28・32・43・44のようなものがある。底部の切り離しはすべて回転糸切りである。また、38の外面には底部も含め薄く赤色顔料が塗布されており、56の内面には黒斑がある。

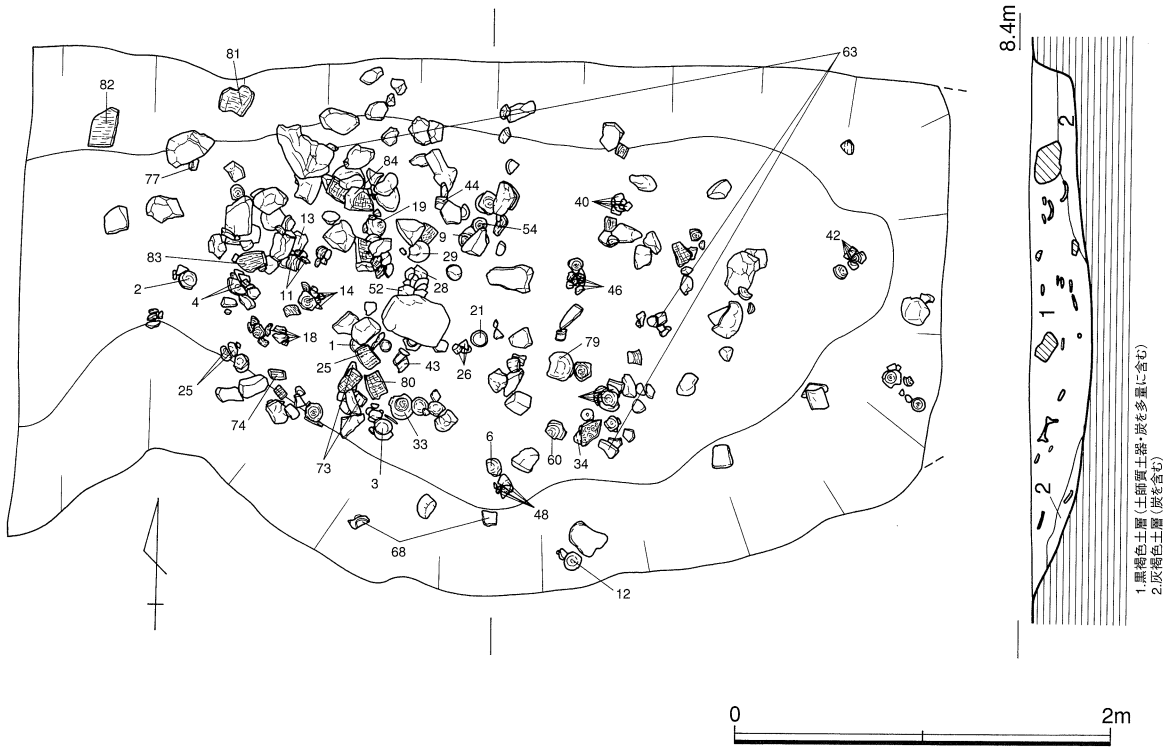
第107図63は土師質土器鍋である。口縁が外反気味に大きく開く破片で、口縁内外面に吹きこぼれ状に黒色の付着物が認められる。

第108図64・65は緑釉陶器椀である。64は口縁が外反するもので、胎土は緻密で灰白色、淡緑色の釉が内外面にかけられている。京都産のものである。65は貼り付け高台をもつ底部で、胎土は緻密で灰白色を呈し、高台内面を含め内外面に淡緑色の釉がかけられている。東海・猿投窯産のものと見られる。

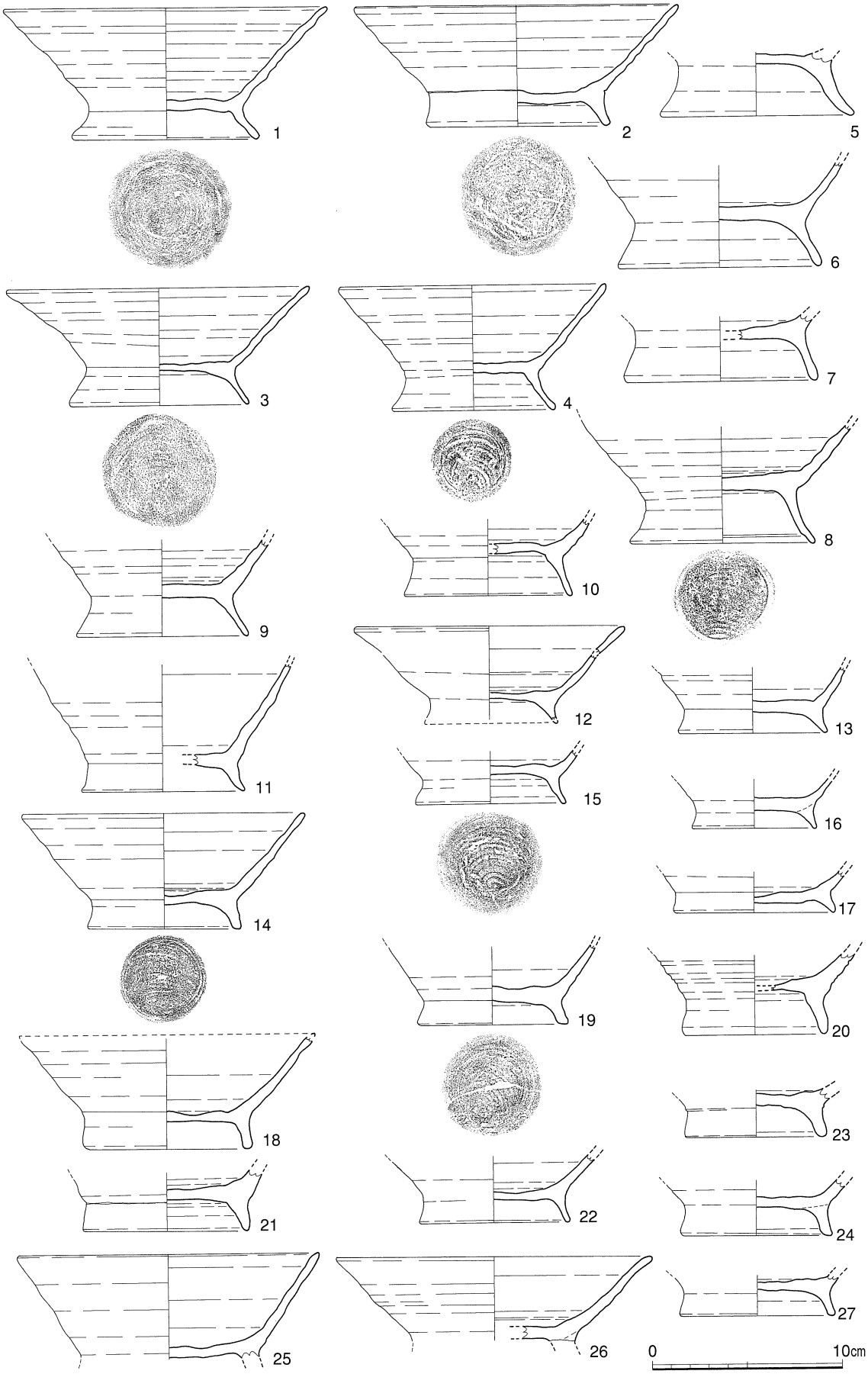
66～68は須恵器坏である。66・68は外傾する口縁と底部周縁に低い高台をもつもので、底部は切り離しは回転糸切りである。ともに器高が高く、68は外面に突帯を１条もっている。焼成は不良で黒灰色～灰白色を呈しており、一部は瓦質になっている。67は高台をもたないもので、器高が低い。口縁は外傾しているが、焼き歪みがあり、底部は回転糸切りである。焼成は良好で、青灰色を呈している。

69・70・72～74は須恵器壺である。69・70は長頸壺頸部と見られ、69は外面に突帯が１条付いている。ともに焼成は良好で、70は一部瓦質になっている。72は壺肩部で、外面に４条１単位の細いカキメが２条施されている。73は胴部下半で、外面は回転ヘラケズリの後、回転ナデが加えられている。74は胴部下半から底部の破片である。底部は平底で、外面下半は回転ヘラケズリの後ナデ、内面には２段に円形圧痕が残っている。焼成は良好で瓦質になっており、内面底部には墨が付着している。

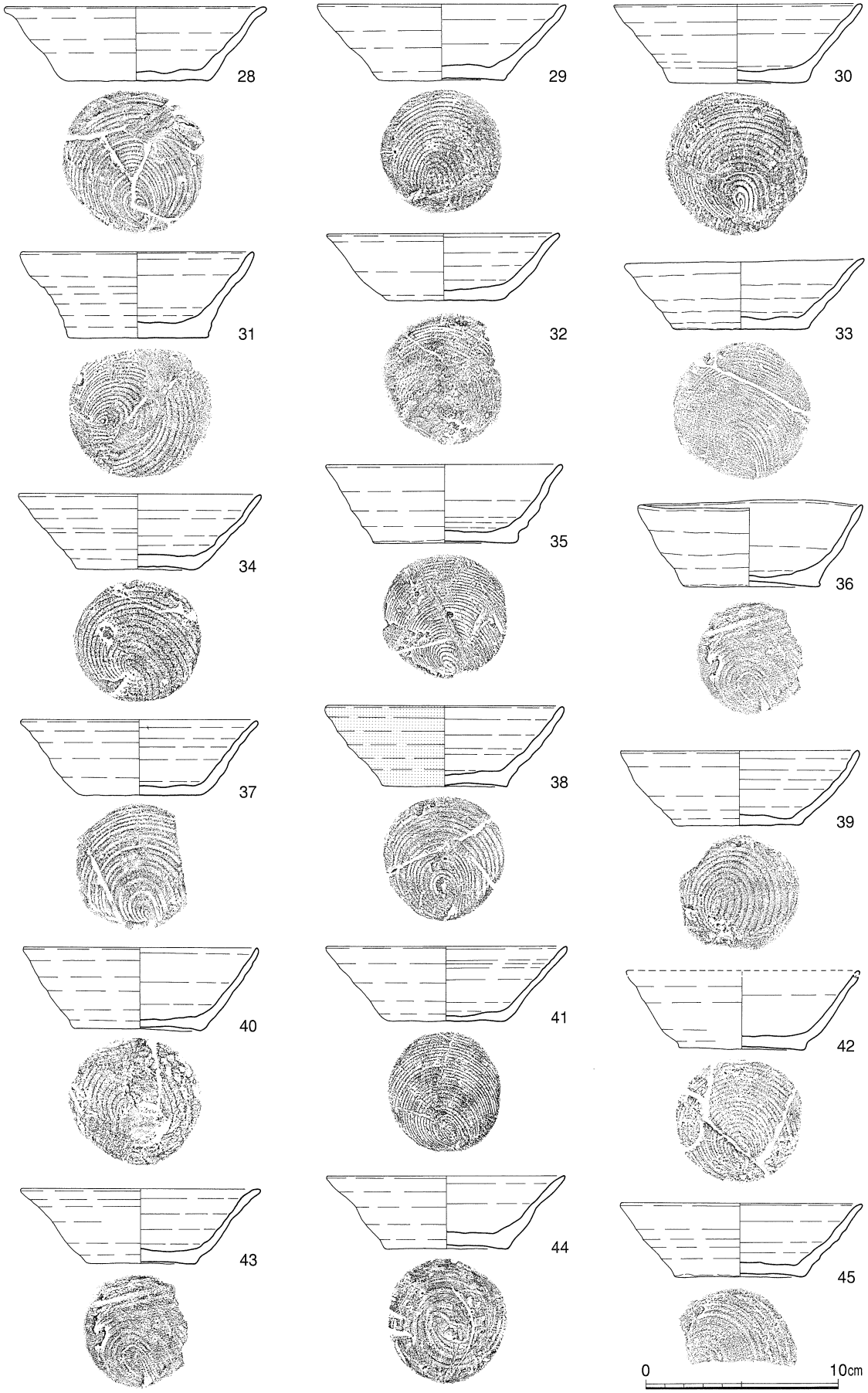
71・76は須恵器平瓶である。71は頸部から肩部の小片で、外面に５条１単位のカキメが、４条残る。片寄った位置に空けられた孔の上面には頸部が接合されている。76は肩部の破片で、外面に１条の突帯と把手基部の一部が残る。突帯の上下には４条１単位の細いカキメが３条残っており、突帯はその上に貼り付けられている。



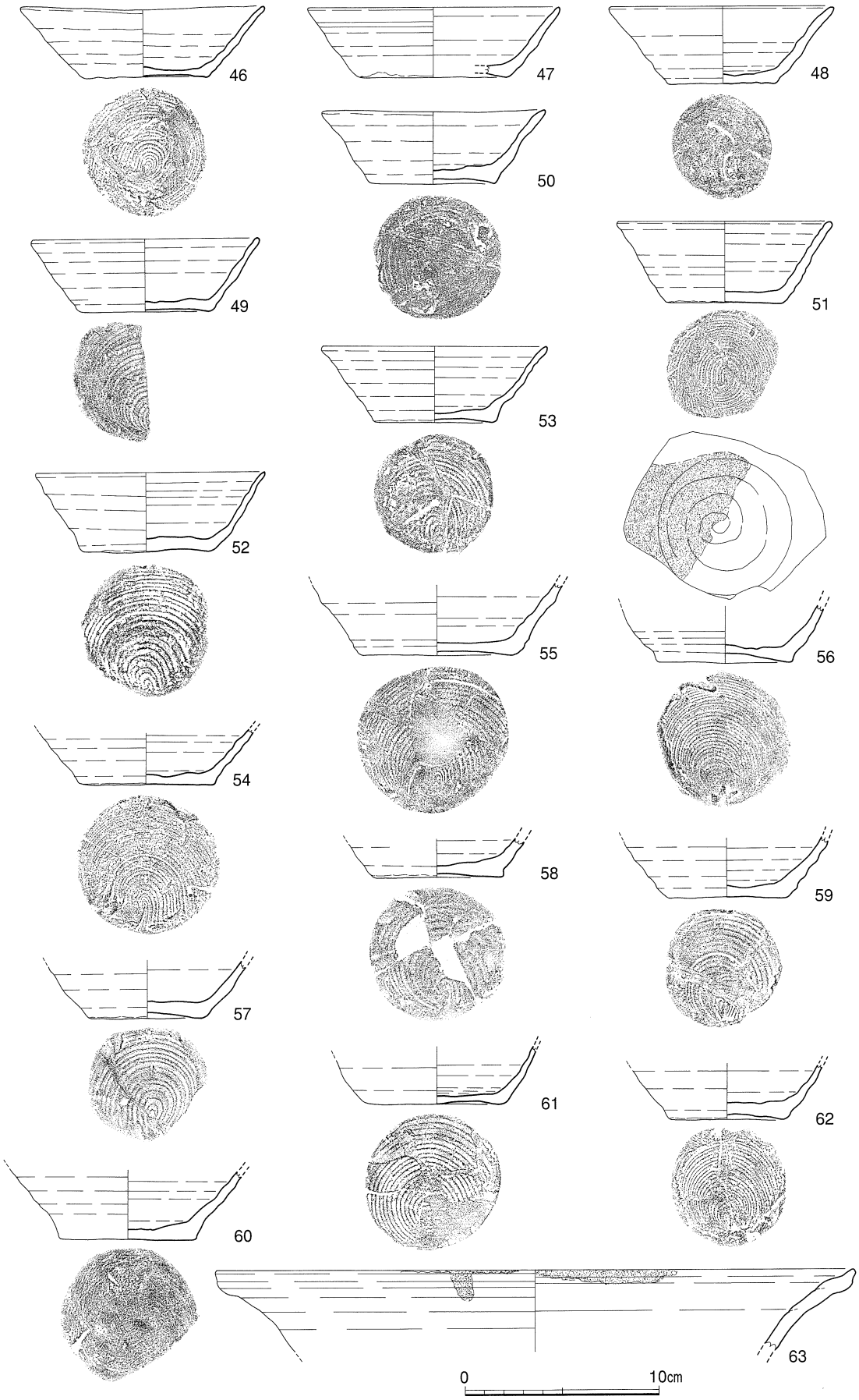
第104図　16号土坑遺構実測図



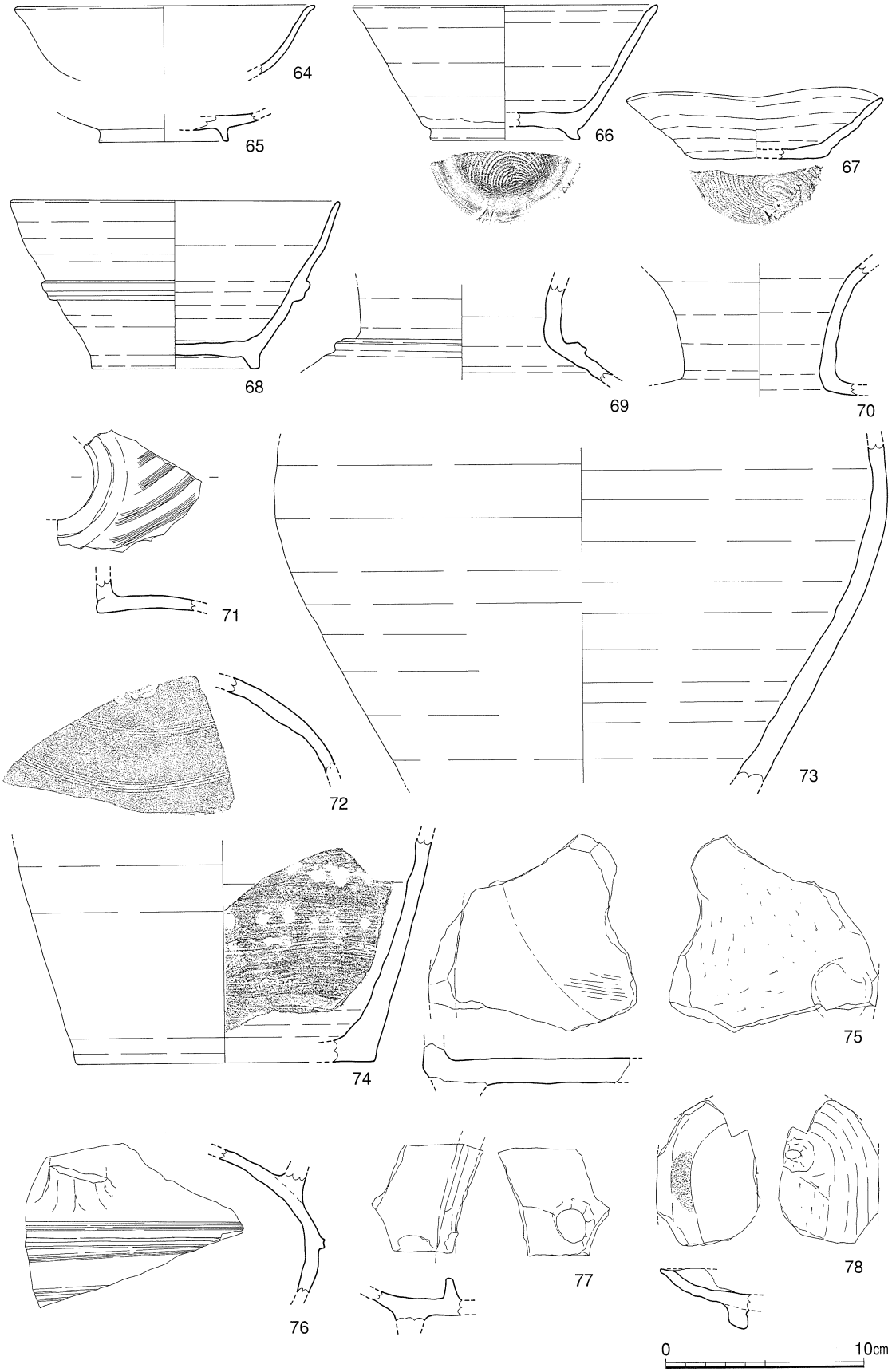
第105図　16号土坑出土遺物実測図（1）



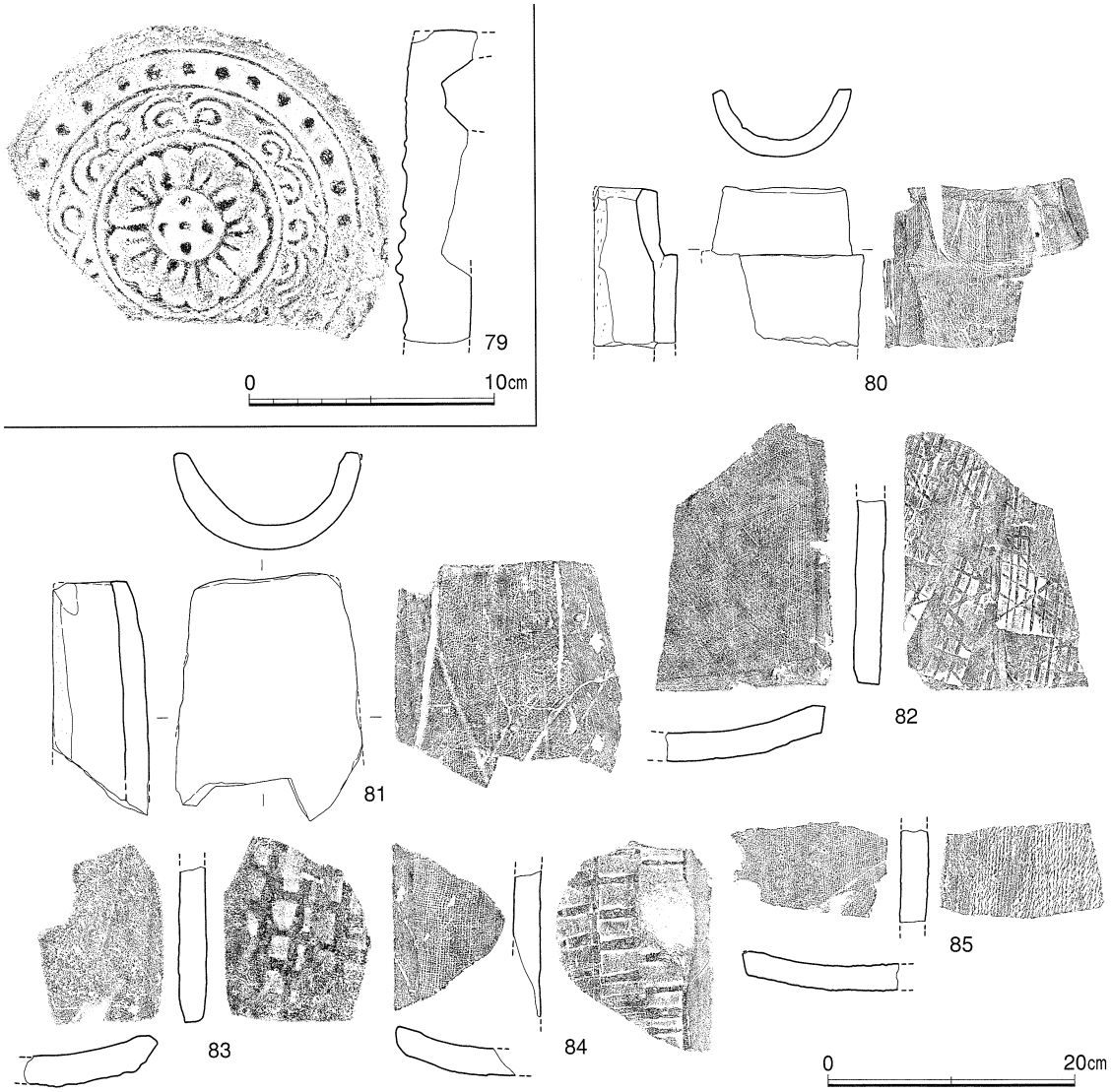
第106図　16号土坑出土遺物実測図（2）



第107図　16号土坑出土遺物実測図（３）



第108図　16号土坑出土遺物実測図（４）



第109図　16号土坑出土瓦実測図

75・77・78は風字硯である。75は器壁が厚い大形品で、底部に円形に脚が剥離した痕跡を留める。上面には縁部が僅かに残っており、磨墨面は平坦で使用により平滑になっている。77・78は小形品で、ともに底部に脚が残っている。77は上面に磨墨面を分割する縁部を突帯状に設けており、底面には回転糸切り痕を留める。78は上面に残る縁部から風字硯の隅部と思われ、内面に墨痕が見られる。

第109図79は軒丸瓦である。中房は陰刻とし、蓮子は５個、花弁は５葉で、外区に唐草文と珠文帯がめぐる。裏面は瓦頭と丸瓦が剥離しており、接合部は周縁に沿って溝が残る。出雲国分寺第二類に属するものである。

80・81は丸瓦である。80は玉縁をもつもの、81は行基式で、焼成は前者が良好で須恵質、後者は不良で土師質である。

82～85は平瓦である。いずれも小片で原形を窺い知ることのできるものはない。下面のタタキは格子タタキ（82～84）と縄目タタキ（85）があり、前者は出雲国分寺平瓦分類によれば82がKG、83がKDで、84は国分寺瓦窯である中竹矢遺跡平瓦分類のKAにあたる。

(23) 1号井戸跡

遺　構　1区の北東部で確認された井戸跡である。1号建物跡北西側の廂部分と重複しており、1号建物跡が廃絶された後に営まれたものと考えられる。同時期の遺構には8号溝があり、北東23mに位置している。

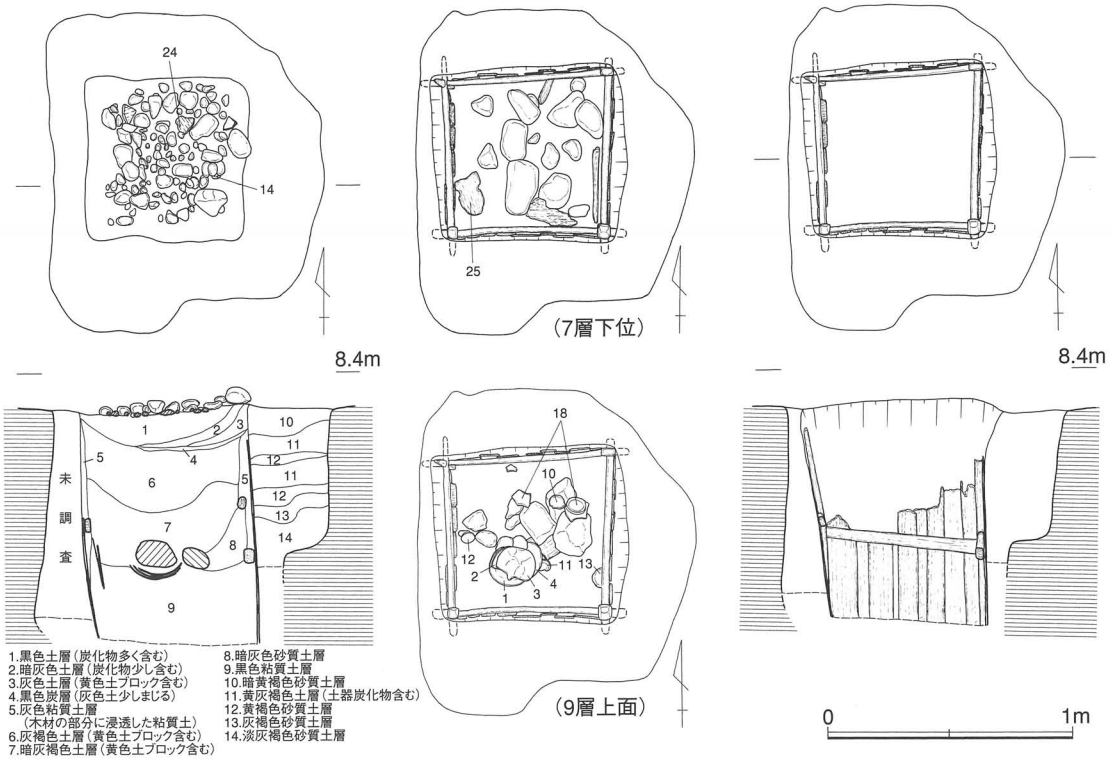
1号井戸跡は方形の井戸枠をもつもので、辺をほぼ南北に揃えている。井戸枠は南北1.2～1.3m・東西1.1mの不整形な掘り方の中に組まれており、縦板組隅柱横桟留めである。大きさは内法で南北58～60㎝・東西59～64㎝、深さは現状で90㎝である。枠は四隅の柱に段違いに枘孔を設け、これに差し込んだ横桟で縦桟を支える構造をとる。縦板は一辺に7～8枚が使われており、それぞれ前後交互になるように組まれている。樹種はスギである。

井戸枠と掘り方の間には黄褐色～灰褐色系の粘質土または砂質土が互層状に詰められている。また、埋土は基本的には4層で、上層より順に炭化物を多く含む黒色土（1層）・黄色土ブロックを含む灰褐色土（6層）・黄色土ブロックを含む暗灰褐色土（7層）・黒色粘質土（9層）が堆積している。6層・7層は地山ブロックを含むことから人為的な埋立土と見られ、最上層である1層の上面には井戸枠のほぼ上に当たる位置に円礫が敷き詰められていた。

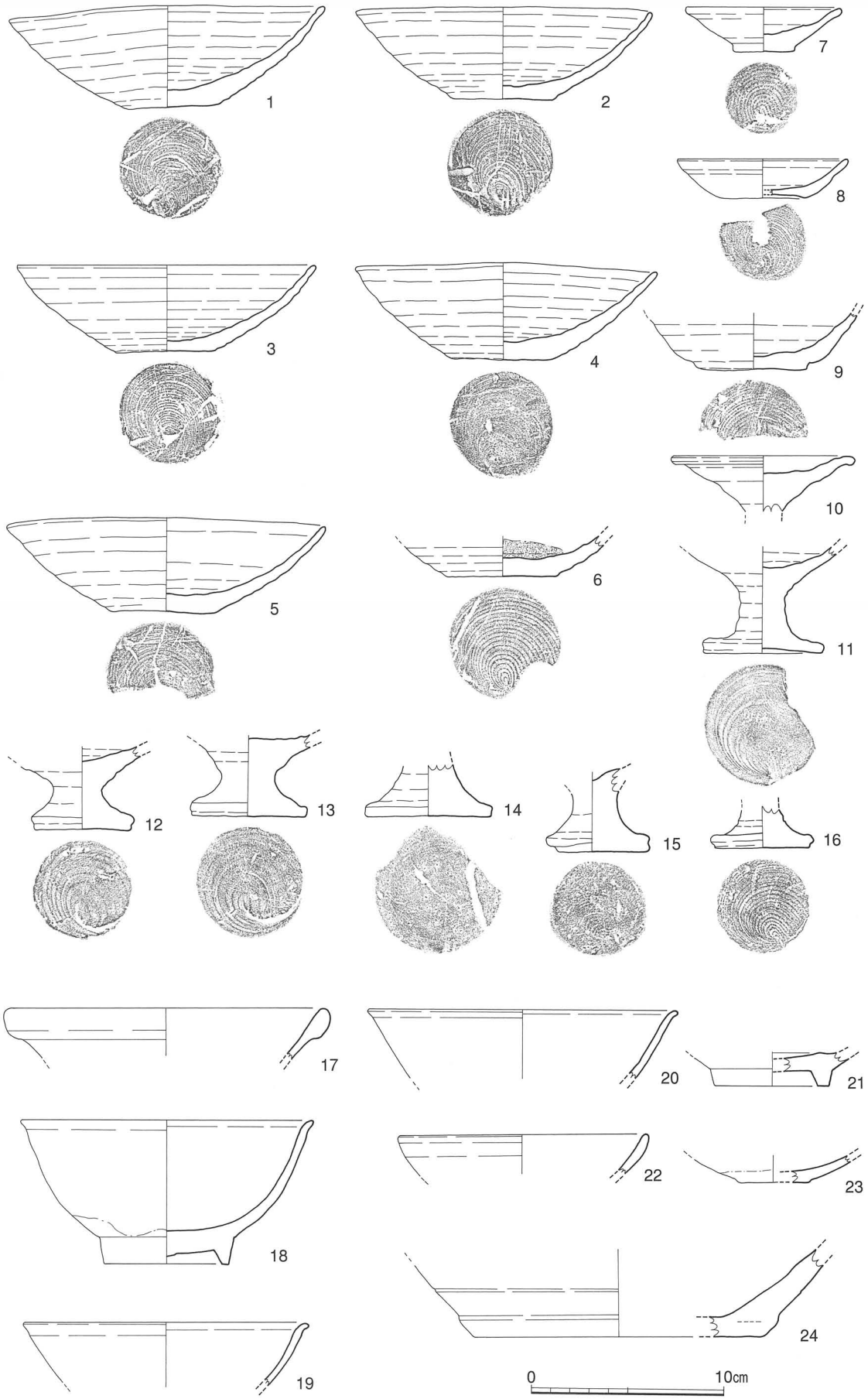
遺物出土状況　最下層の9層とその上の7層の間には石が投げ込まれており、その付近を中心に土師質土器坏・柱状高台付皿、白磁椀、下駄がまとまって出土している。このうち土師質土器坏（第111図1～5）は石の下から5枚が重なった状態で検出された。意図的に埋められたと考えられることから、井戸を廃棄するにあたり何らかの祭祀行為が行われたことを想定することもできる。

出土遺物　土師質土器坏・皿・柱状高台付皿、白磁椀・皿、陶器鉢、下駄がある。

第111図1～6・9は土師質土器坏で、無高台である。1～5は体部が丸みを帯び、口径が底径

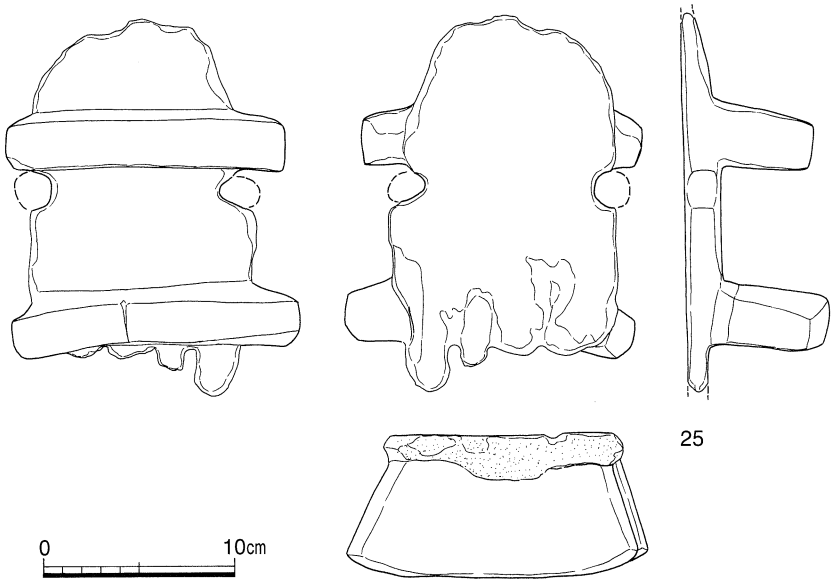


第110図　1号井戸跡遺構実測図



第111図　1号井戸跡出土遺物実測図

に対し大きいもので、底部は回転糸切りである。6は内面に煤が付着している。7・8は皿で、底部は回転糸切りである。10～16は柱状高台付皿である。10・11は脚部が細く、調整痕などから皿と脚が別作りと思われるものである。12～16は皿と脚が一体で作られたものである。これらはいずれも柱状高台底面に回転糸切り痕を残す。



第112図　1号井戸跡出土下駄実測図

17～21は白磁椀である。17は玉縁をもつ口縁で、太宰府分類椀Ⅳ類に属する。18～20は口縁端部が端反りになるもので、18がⅤ－2類、19がⅤ類、20はⅤ－2類またはⅦ類である。21は削り出しの底部で内面に釉剥ぎがあり、Ⅷ類である。

22・23は白磁皿で、22はⅢⅥ類、23はⅤ－1類に属するものである。

第112図25は一木連歯下駄である。一部を欠損しており、大きさは現状で長さ19.5cm・幅11.8cm・高さ6.7～7.4cmを測る。樹種はクリである。

第4節　生産関係遺物

金属器生産または玉生産に関わる遺物は、本調査区と範囲確認調査区から広範囲に出土している。これらはいずれも2次的に動いた状態で検出されており、本来の遺構に伴うものはない。しかし、両者とも多量に出土しており、付近または検出された諸施設に先立って生産工房が存在したことを窺わせる。ここでは、こうした点から生産関係遺物をまとめて取り上げることとしたい。

（1）金属器生産関係遺物

鉄系遺物　第113図1・4は炉壁で、それぞれ分析を行っている。1(IZK-1)は炉壁の内面に薄く滓が付着してたもので、砂鉄系鍛冶滓と判定された。4(IZK-4)は表面が濃緑色のガラス質滓となり、銅成分を含まない炉壁である。

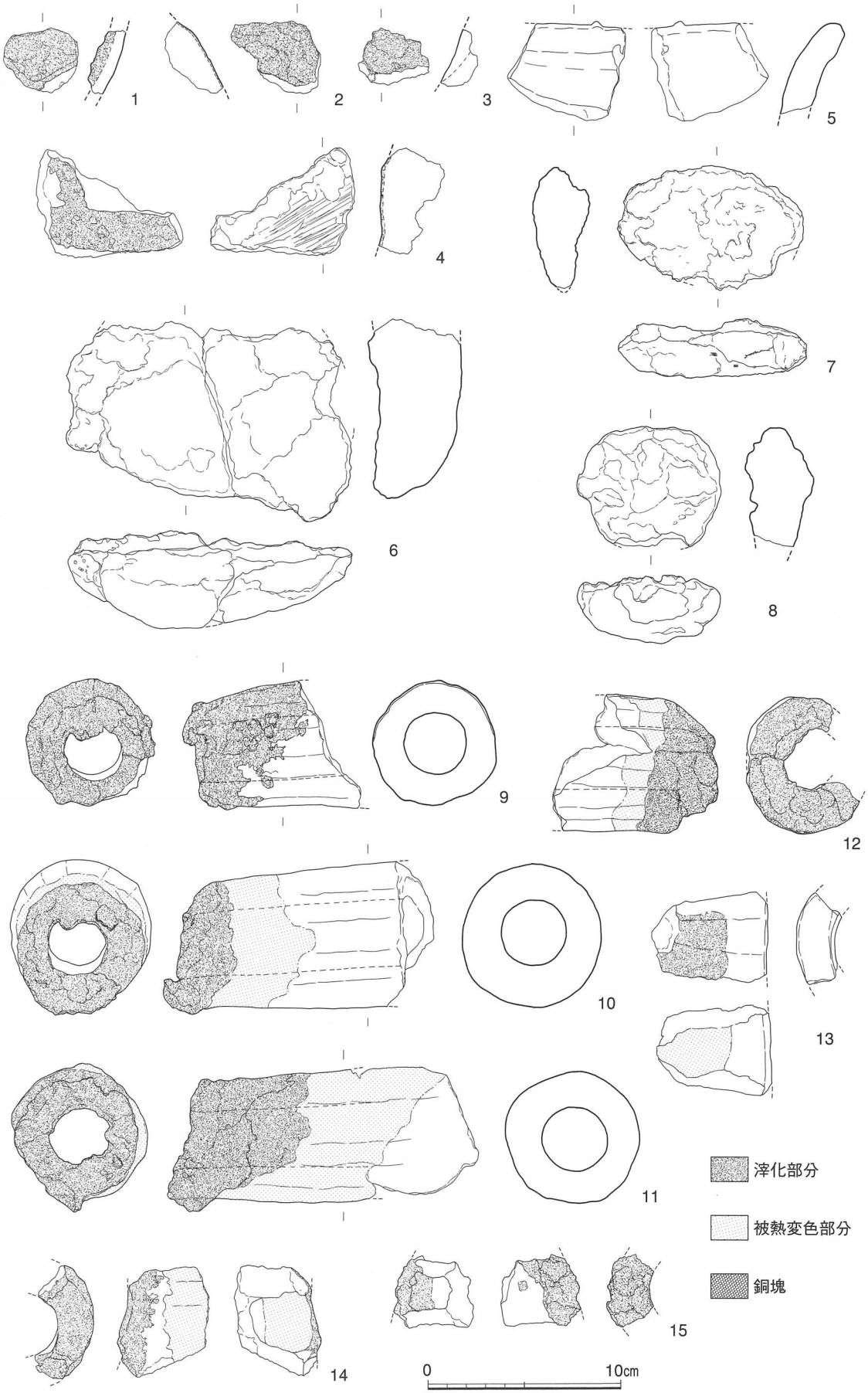
6～8は椀形滓で、6(IZK-2)・8(IZK-3)の分析を行っている。6・8はそれぞれ大きさが異なるが、ともに砂鉄系鍛冶滓の可能性が高いとされている。

14(IZK-9)は羽口である。先端が濃緑色ガラス質滓化したもので、鍛冶系の羽口と判定された。分析試料以外の羽口では、10～13、16・17のガラス質滓が黒色～深緑色で、鍛冶系と見られる。

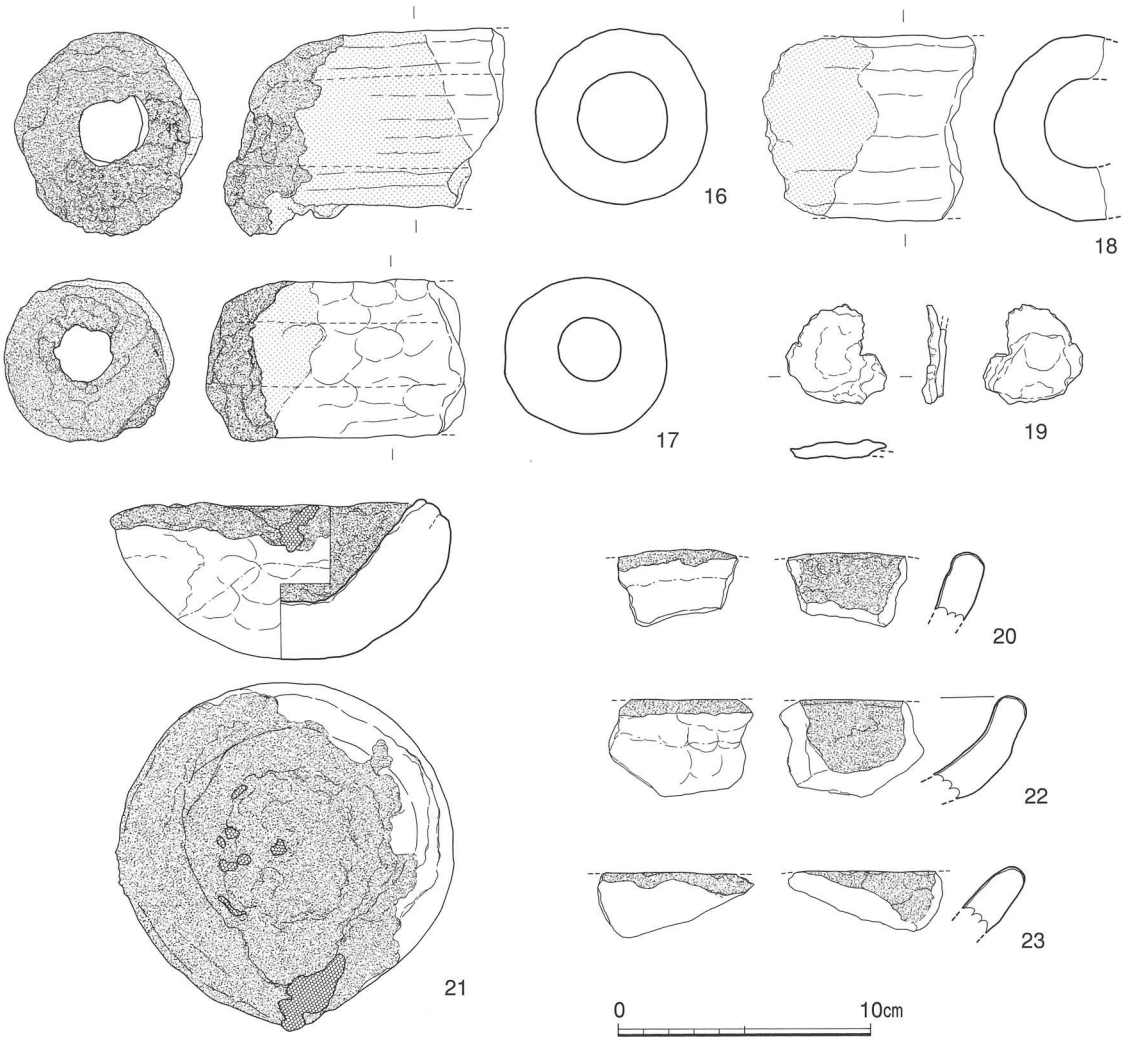
銅系遺物　2・3(IZK-5)は炉壁で、表面が紫紅色にガラス質滓化しており、銅系の炉壁である。

15(IZK-10)は羽口で、先端が黒色～紫紅色ガラス質滓化しており、銅系羽口と推定されている。分析試料以外のものでは9のガラス質滓部分が銅系の紫紅色に発色しており、銅系と推定される。

19(IZK-8)は銅塊である。分析の結果、鉛・砒素・錫を含む銅合金であることが判明した。



第113図　金属器生産関係遺物実測図（1）



第114図　金属器生産関係遺物実測図（２）

20～23は坩堝で、20(IZK-6)・21(IZK-7)の分析を行っている。20は内面に紫紅色にガラス質滓化しており、銅系坩堝と判定された。21は内面が紫紅色にガラス質滓化、一部に銅塊が付着したもので、分析の結果、銅・鉛・錫・ビスマスを含む銅合金の坩堝と判定された。分析試料以外の22・23も内面が紫紅色ガラス質滓化しており、銅系坩堝と見られる。

第２表　金属器生産関係遺物観察表（分析試料以外）

番号	出土地点	種　別	長　さ	幅(外径)	厚さ(内径)	形　態　等　の　特　徴
113-5	T7 4号溝	不　明	6.0cm	5.0cm	1.5cm	外反する端部、表面は破面を含めガラス質化。
113-7	4号溝	椀形滓	9.6cm	6.4cm	3.0cm	楕円形を呈し、底面に木炭痕。
113-9	4号溝	羽　口	8.4cm	6.4cm	3.2cm	先端溶解部が紫紅色。外面に筋状成形痕。
113-10	4号溝	羽　口	13.0cm	7.4cm	3.5cm	先端溶解部が黒色。外面に筋状成形痕。
113-11	T7	羽　口	15.5cm	6.7cm	3.0cm	先端溶解部が黒色。外面に筋状成形痕。
113-12	T7 4号溝	羽　口	8.4cm	7.0cm	3.1cm	先端溶解部が黒色。外面に筋状成形痕。
113-13	T7	羽　口	6.0cm	10.0cm	6.5cm	薄手で復原径大形。溶解部は深緑色。外面に筋状成形痕。
114-16	4号溝	羽　口	10.1cm	7.0cm	3.6cm	先端溶解部が黒色～暗深緑色。外面に筋状成形痕。
114-17	T7 4号溝	羽　口	10.2cm	6.1cm	2.5cm	先端溶解部が黒色～暗緑色。外面に成形時指頭圧痕。
114-18	4号溝	羽　口	7.5cm	7.3cm	3.5cm	一部が灰色化。外面に筋状成形痕。
114-22	T7	坩　堝	5.0cm	3.7cm	1.5cm	内面に紫紅色滓。外面に成形時、指頭圧痕。
114-23	T7 4号溝	坩　堝	6.0cm	2.5cm	1.5cm	内面に紫紅色滓。

（2）玉生産関係遺物

玉素材の構成　本調査区及び範囲確認調査区で出土した玉素材には、碧玉・瑪瑙・水晶・赤カド石・頁岩などがある。第３表はこれらを重量で集計したもので、水晶21,44２g（41％）・碧玉14,348g（28％）・瑪瑙6,228g（12％）・赤カド石2,776g（５％）・頁岩249g（０％）・その他7,205g（14％）の順となる。第４表は点数で集計したもので、水晶2,247点（67％）・碧玉224点（７％）・瑪瑙310点（９％）・赤カド石124点（４％）・頁岩４点（０％）・その他432点（13％）である。

この結果を見ると、重量で４割、点数で７割近くが水晶で、国府における玉生産の中心が水晶にあったことが理解できる。これに次ぐのが重量では碧玉、点数では瑪瑙であるが、写真図版102のように碧玉には１点で９kgまたは17kgもある素材が存在することによるもので、小さい素材が多い水晶が重量では相対的に割合が低いのはそのためである。

生産された玉　出土した玉には、水晶製平玉（第118図61・62）・碧玉製平玉（63）・赤カド石製丸玉（69）、未製品には敲打・研磨段階まで進んだ水晶製丸玉（57～60）がある。水晶製平玉・丸玉、碧玉製平玉の他、赤カド石のように素材としてはあまり良くないものでも丸玉が生産されていたことが分かる。また、一部研磨段階まで進んだ勾玉形水晶製品（64～66）もあることから、水晶製勾玉が生産されていた可能性もある。

平玉・丸玉の製作過程　出土した玉作関係資料の多くは、水晶製平玉・丸玉の製作に関わるものである。水晶原石は形状が六角柱を呈することから、製作過程が原石の形に規定されている。

第115図１～９は原石で、１のように幅5.7cmもあるものから、６のように幅1.6cmと小さいものがある。10～第116図16・18は原石の両端を折り取ったものである。14・15のように細いものは、この段階で敲打・研磨を加えたものも見られる。17・19～26は両端を折り取った素材をさらに側面に沿って分割したものである。27～32はそれにさらに調整剥離を加えたもので、30・32には一部敲打も加えられている。

33～43は扁平な形を呈することから平玉を意識して調整剥離が加えられたものである。41・42・43は一部に敲打痕が残っており、41・42は成形が進み研磨前の平玉未製品となっている。44～第118図56は丸玉を意識して調整剥離が加えられたものである。47～56には敲打痕が見られ、55は一部研磨されている。

67・68は碧玉で、前者は板状に調整剥離されたもの、後者は平玉状に成形が進んだものである。

生産用具　出土した玉の生産用具には敲石と筋砥石などがある。

70・71は敲石で、前者は水晶・後者は碧玉である。ともに稜や周縁部に敲打痕が残っており、素材の荒割りや調整に用いられたものと考えられる。

第119図72・73、75～第121図89は筋砥石で、石材は細粒花崗岩である。大きさは72・73などのように長さ30cmを越える大形のものがある一方で、83・85・87のように幅５cm前後の小形のものもある。研磨に使用された面は、４面（72・83・85）・３面（76・79・82・87）・２面（73・80・84）・１面（78・81・89）と各種あり、75は破損後の破面も使用している。溝は使用面に２～５条あり、その幅は76・83のように幅0.8cm前後と細いもの、78のように幅４cm前後と広いものがあるが、1.5～２cm前後のものが多い。

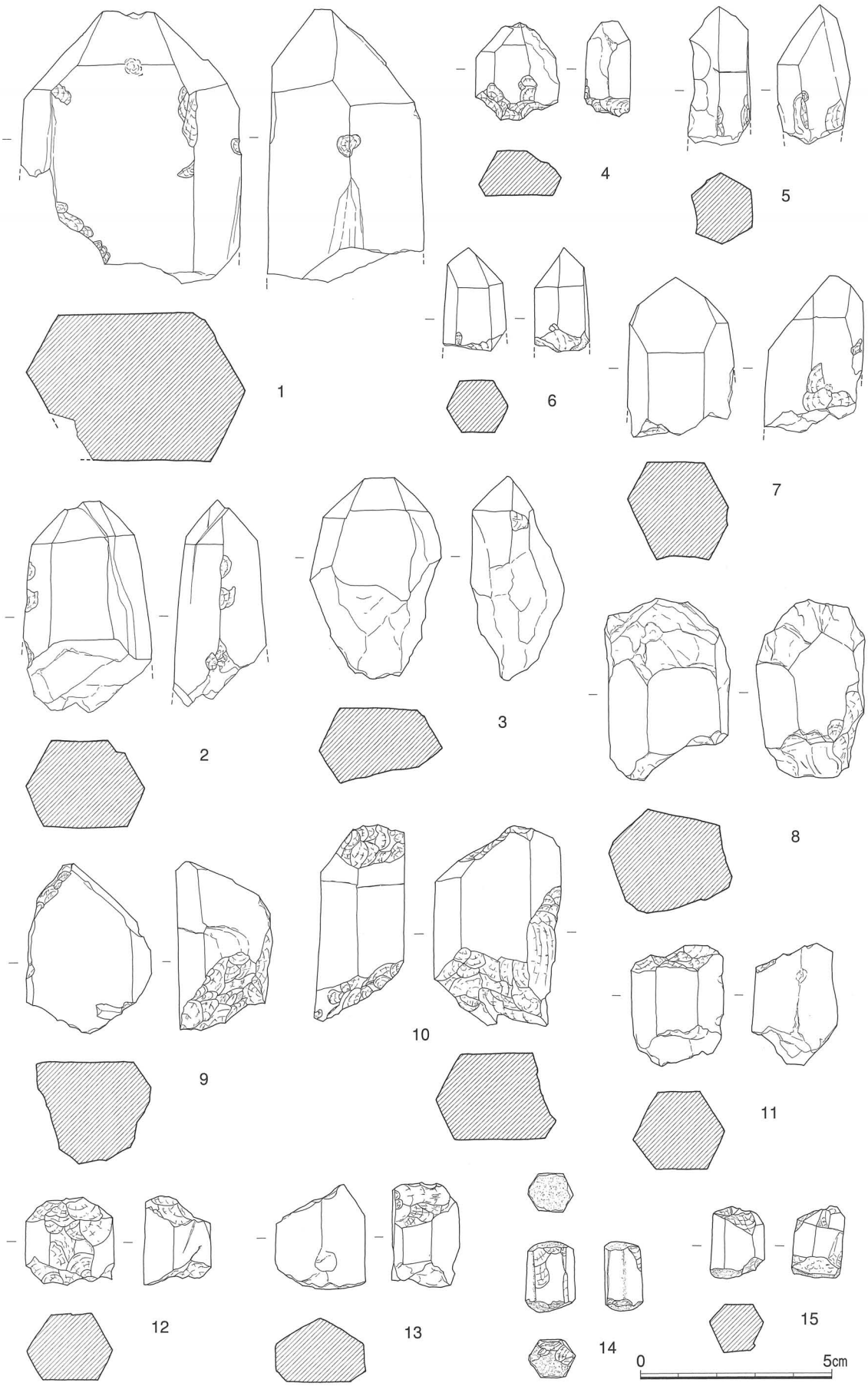
74は円形の窪みが３面に残る砥石で、石材は砂岩である。窪みは径1.5～2.5cm・深さ0.5～0.7cmで、内部に稜がつき２重になったものも見られる。窪みの形状よりすれば、丸玉・平玉専用の砥石と思

第３表　玉素材別重量集計表(単位：g)

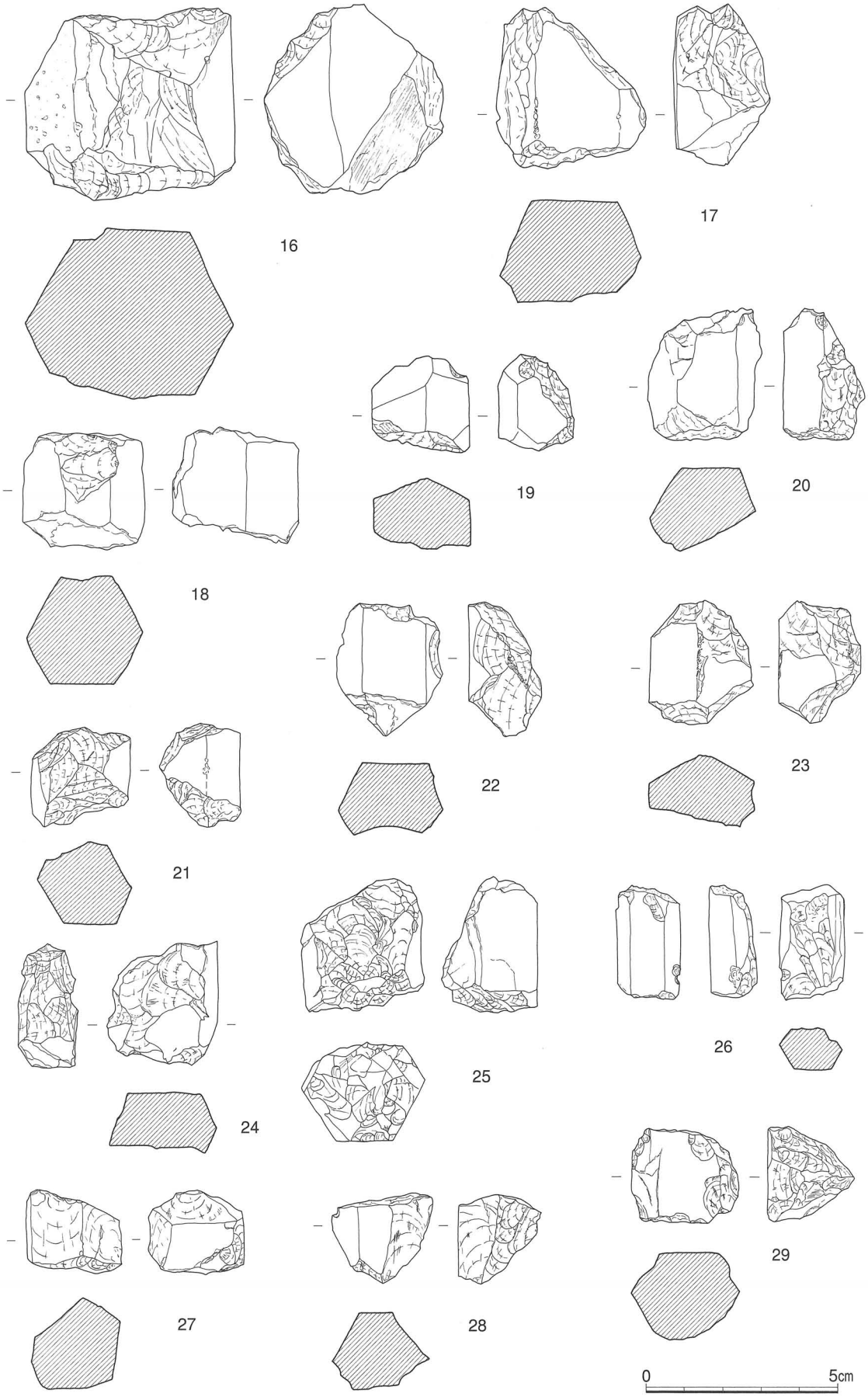
出土地点	碧　玉	瑪　瑙	水　晶	赤カド石	頁　岩	その他	合　計
１区	105	379	5,409	93	0	362	6,348
２区	126	216	3,056	21	0	195	3,614
３区	1,145	1,307	6,211	2,018	82	1,184	11,947
４区	11,279	2,883	2,941	191	0	1,777	19,071
本調査区計	12,655	4,785	17,617	2,323	82	3,518	40,980
Ｔ１	0	56	0	0	0	0	56
Ｔ２	19	169	5	0	0	217	410
Ｔ３	18	151	36	4	24	95	328
Ｔ４	0	24	0	2	0	0	26
Ｔ５	10	104	495	45	0	387	1,041
Ｔ６	122	345	1,492	42	0	952	2,953
Ｔ７	436	314	857	59	0	1,511	3,177
Ｔ12	0	5	8	0	0	0	13
Ｔ13	0	0	0	0	0	46	46
Ｔ14	0	10	16	4	0	103	133
Ｔ15	862	142	256	0	0	211	1,471
Ｔ16	34	63	104	58	0	75	334
Ｔ19	0	1	163	40	143	0	347
Ｔ20	27	0	232	0	0	0	259
Ｔ21	140	59	161	171	0	42	573
Ｔ22	25	0	0	0	0	24	49
Ｔ23	0	0	0	28	0	24	52
トレンチ計	1,693	1,443	3,825	453	167	3,687	11,268
総合計	14,348	6,228	21,442	2,776	249	7,205	52,248

第４表　玉素材別点数集計表(単位：個)

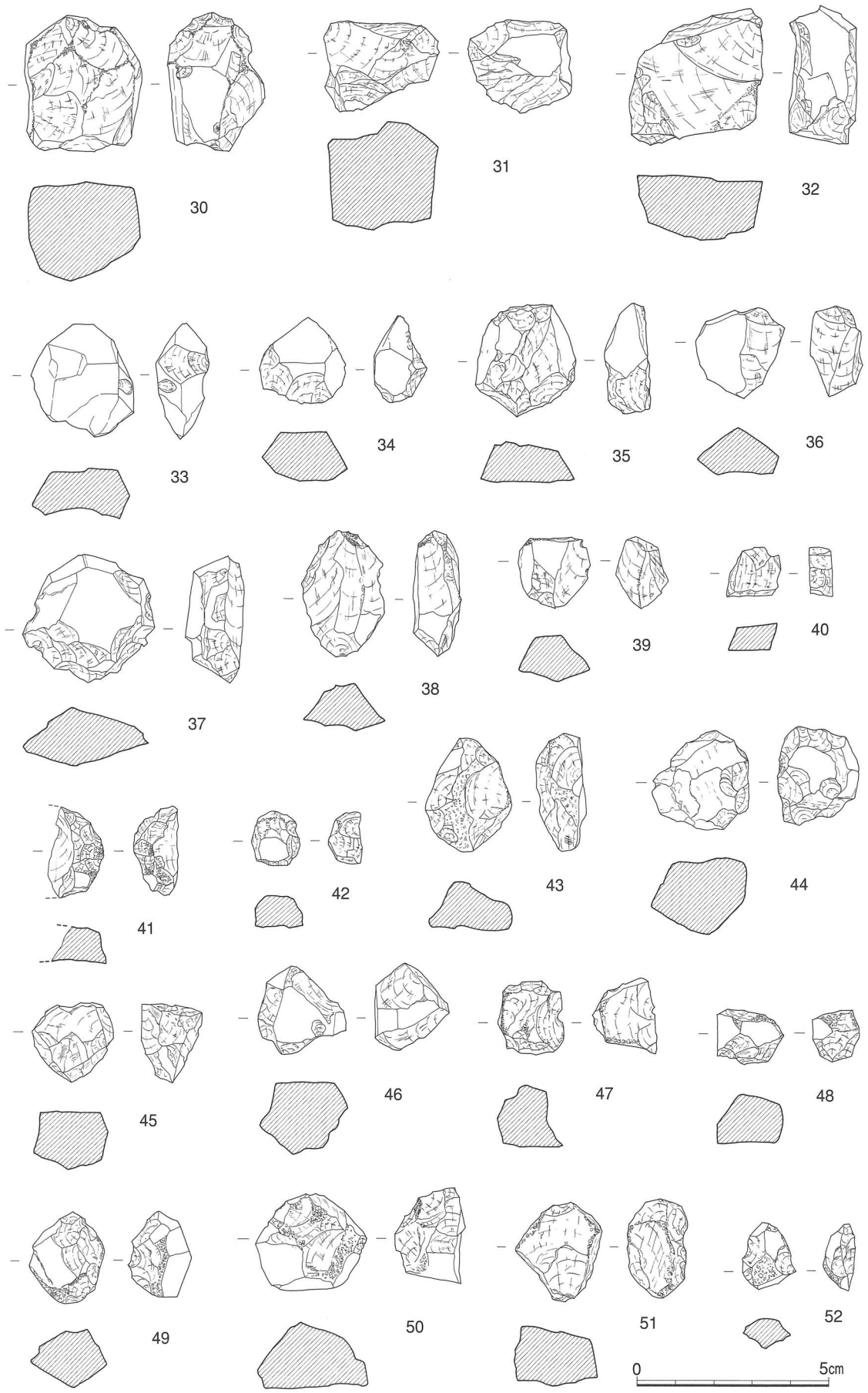
出土地点	碧　玉	瑪　瑙	水　晶	赤カド石	頁　岩	その他	合　計
１区	11	28	587	16	0	33	675
２区	15	37	406	6	0	24	488
３区	75	84	556	37	2	101	855
４区	48	31	189	17	0	50	335
本調査区計	149	180	1,738	76	2	208	2,353
Ｔ１	0	1	0	0	0	0	1
Ｔ２	2	6	3	0	0	6	17
Ｔ３	2	12	9	2	1	7	33
Ｔ４	0	2	0	1	0	0	3
Ｔ５	3	14	79	6	0	25	127
Ｔ６	23	45	209	6	0	82	365
Ｔ７	13	30	133	17	0	74	267
Ｔ12	0	1	1	0	0	0	2
Ｔ13	0	0	0	0	0	1	1
Ｔ14	0	1	3	1	0	4	9
Ｔ15	20	5	29	0	0	15	69
Ｔ16	3	7	7	4	0	6	27
Ｔ19	0	3	5	2	1	0	11
Ｔ20	2	0	17	0	0	0	19
Ｔ21	3	3	14	8	0	1	29
Ｔ22	4	0	0	0	0	2	6
Ｔ23	0	0	0	1	0	1	2
トレンチ計	75	130	509	48	2	224	988
総合計	224	310	2,247	124	4	432	3,341



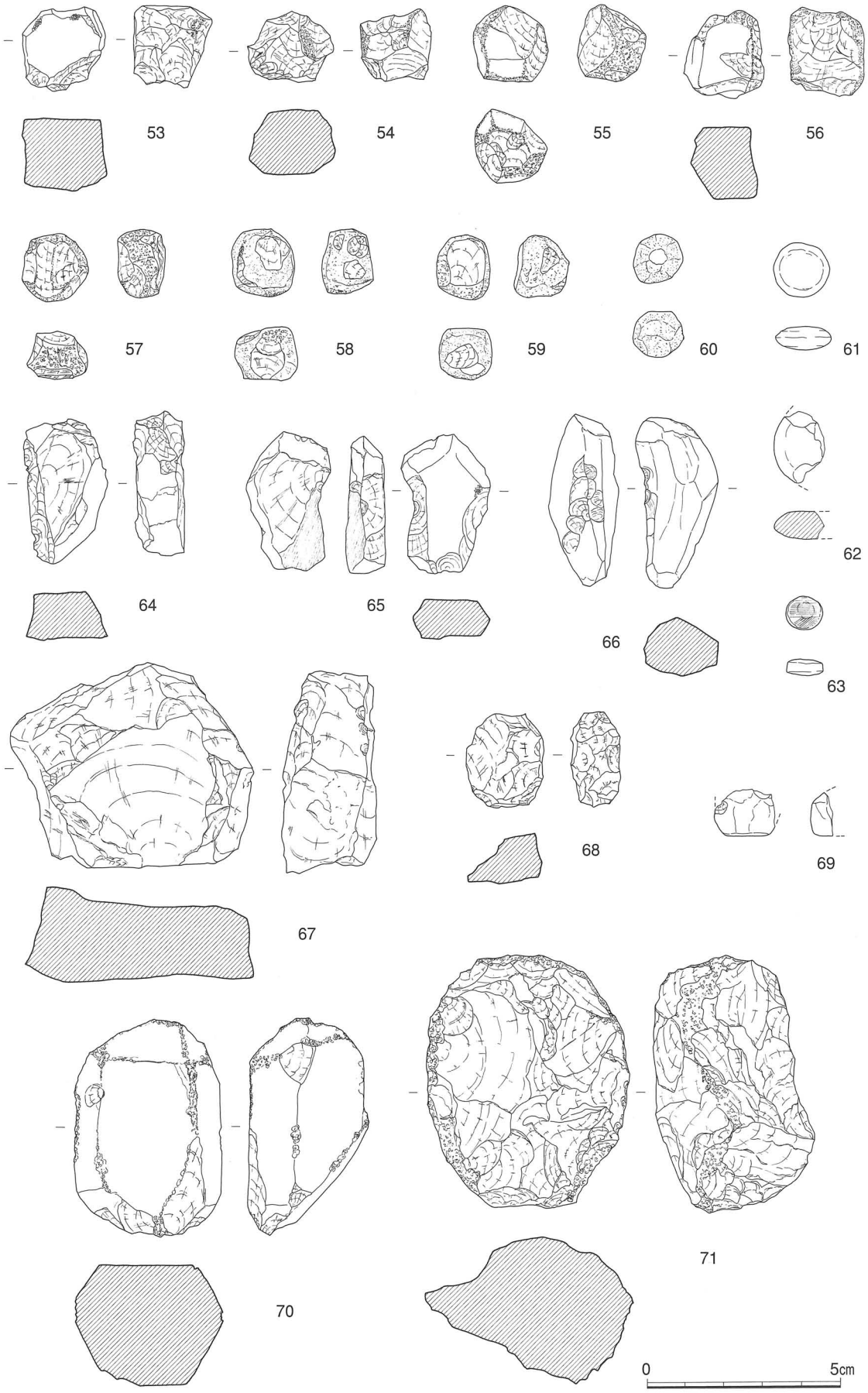
第115図　玉作関係遺物実測図（1）



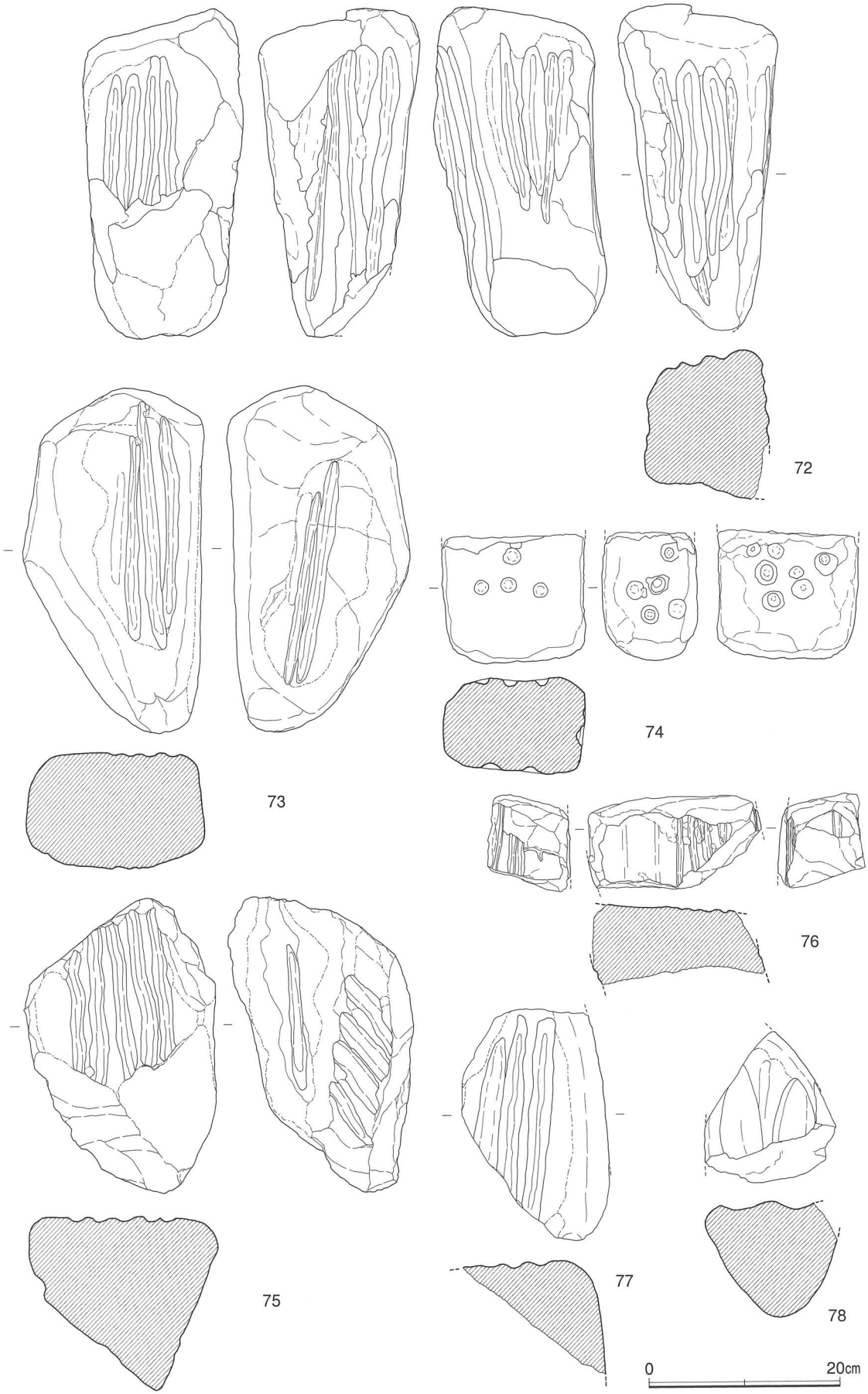
第116図　玉作関係遺物実測図（２）



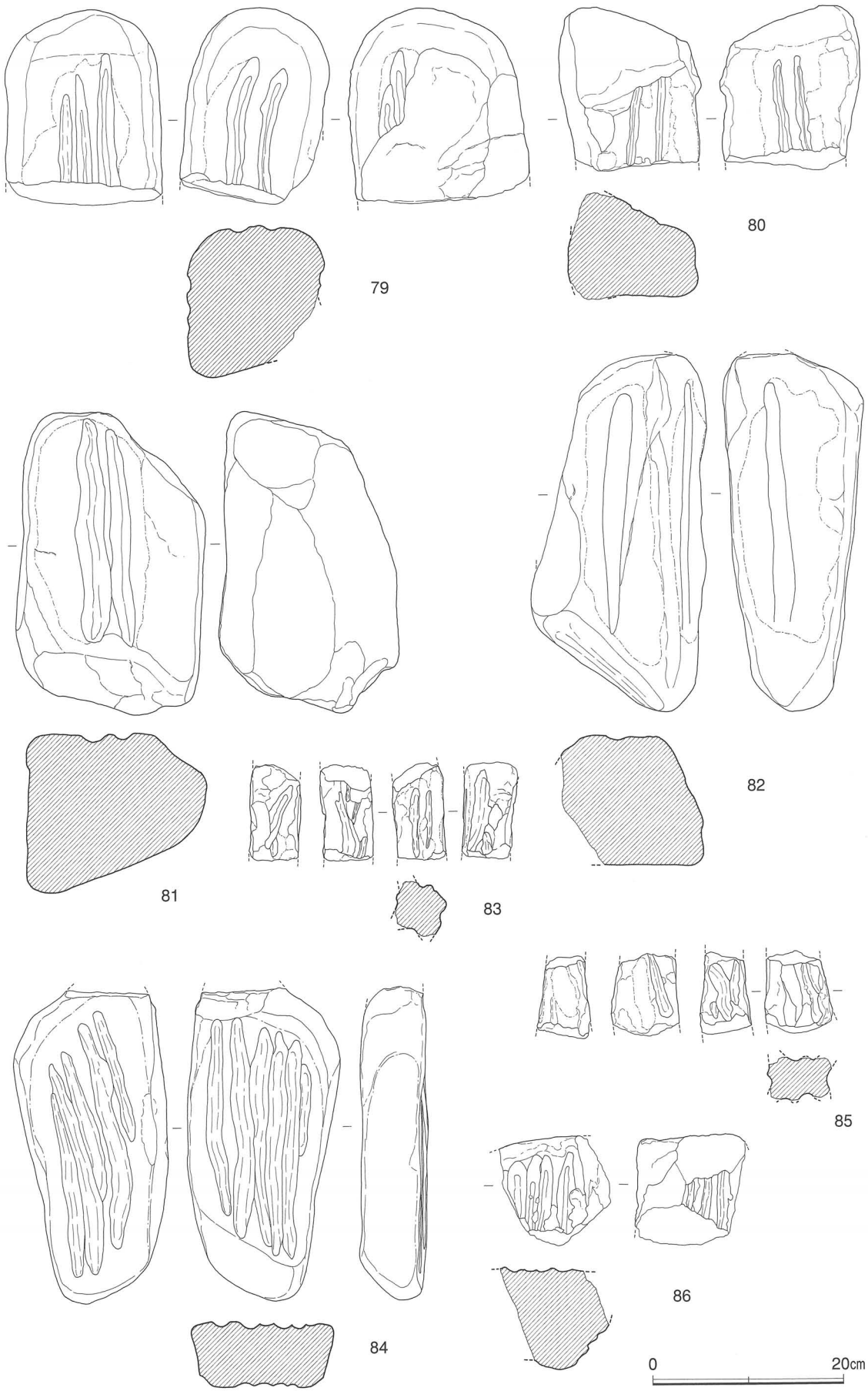
第117図　玉作関係遺物実測図（3）



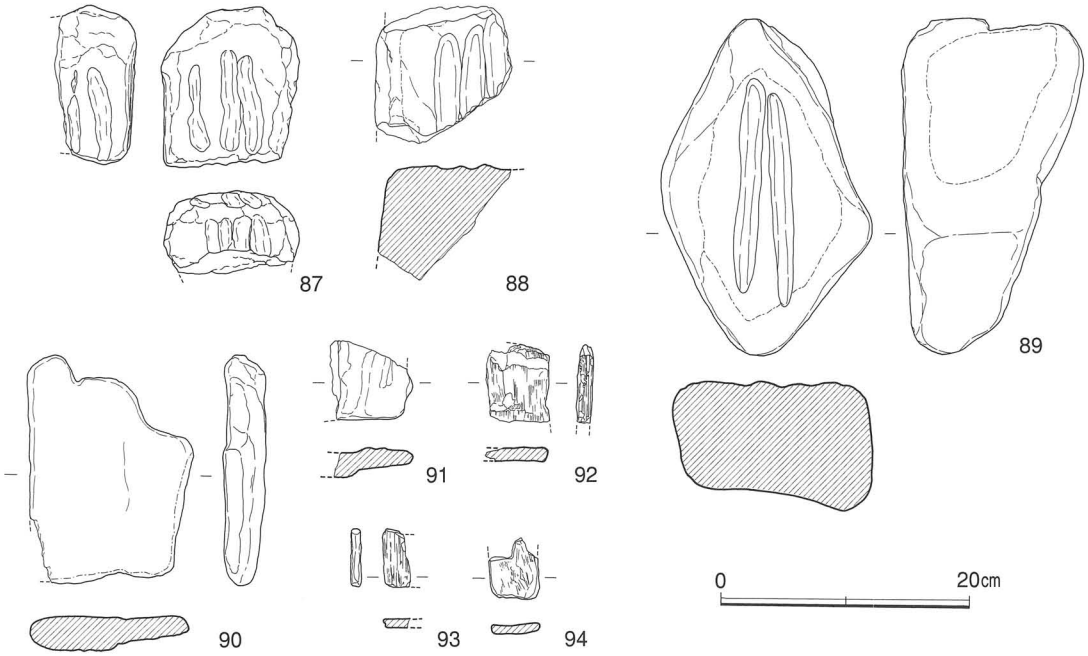
第118図　玉作関係遺物実測図（４）



第119図　玉作関係遺物実測図（５）



第120図　玉作関係遺物実測図（６）



第121図　玉作関係遺物実測図（７）

われる。窪みがあるのは３面であるが、他の１面には利器の痕跡が残る。

90・91は溝をもたない小形の平砥石で、90は上面、91は両面使用されており、流紋岩製である。92・93は珪化木、94は凝灰岩製の小形砥石である。

第５節　遺構に伴わない遺物

（１）縄文から古墳時代の遺物

第122図１～４は石器である。１・２は打製石鏃で、刃部の幅が広く、１は撥形を呈している。ともに刃部には使用痕があり、石材は流紋岩である。３は敲石で、両端部と側面の計３面に敲打痕と側面に磨面が見られる。石材は流紋岩である。４は黒曜石製の無茎凹基鏃である。

５～７は弥生土器である。５は口縁が大きく開く壺の口縁部で、内傾する口縁端部には４条の凹線の後、斜行する刻みが施される。６・７は平底で、外面に縦方向のミガキがある。

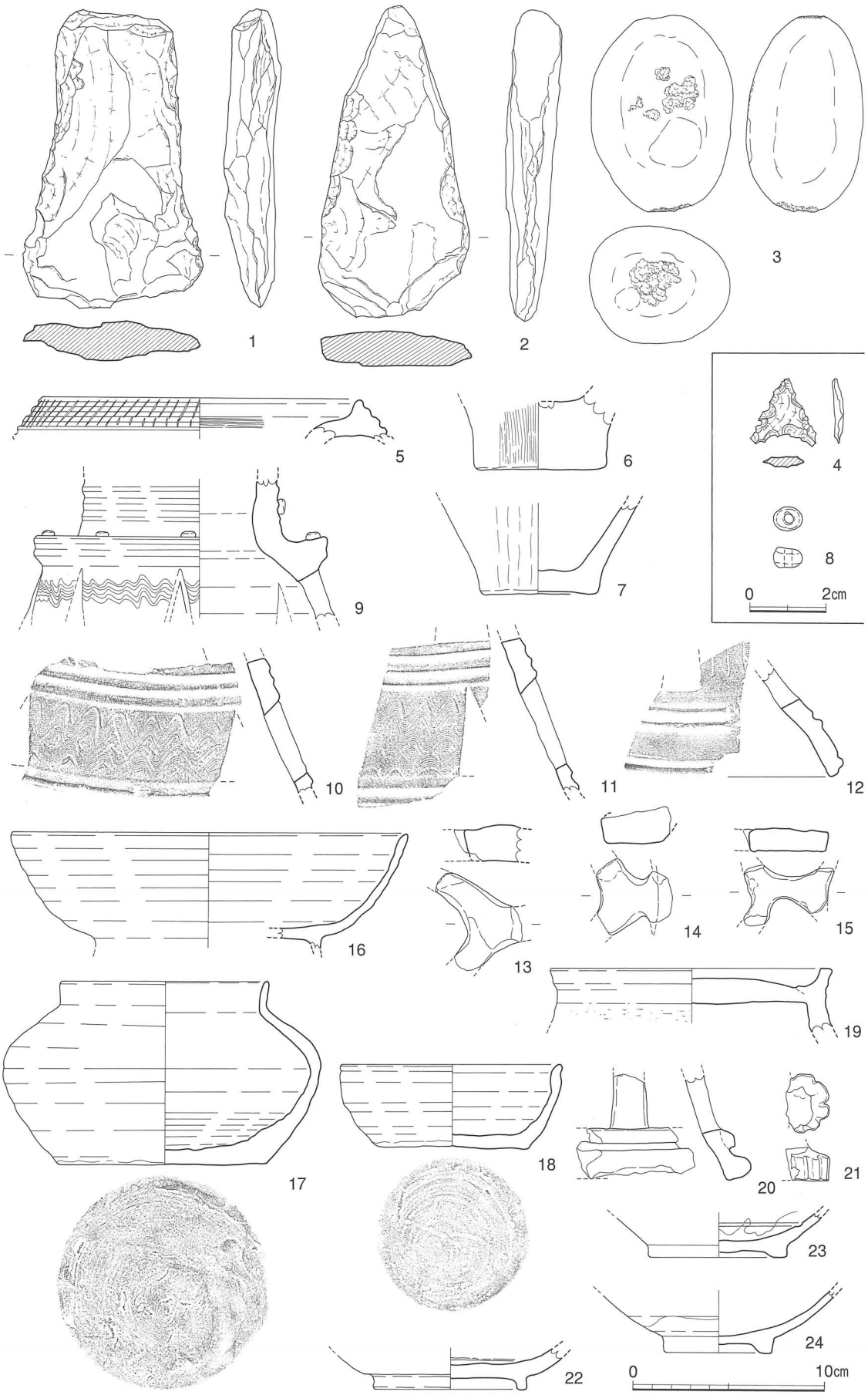
８はガラス小玉で、色調は青色を呈する。外径８㎜・内径２㎜・厚さ６㎜である。

９～12は須恵器器台脚部である。９は下半に三角形透孔と波状文、上半に３条以上の凹線と円形浮文を施したものである。10～12は同一個体と見られるもので、凹線間に三角形透孔と波状文、脚端部には幅が狭い無文帯がある。

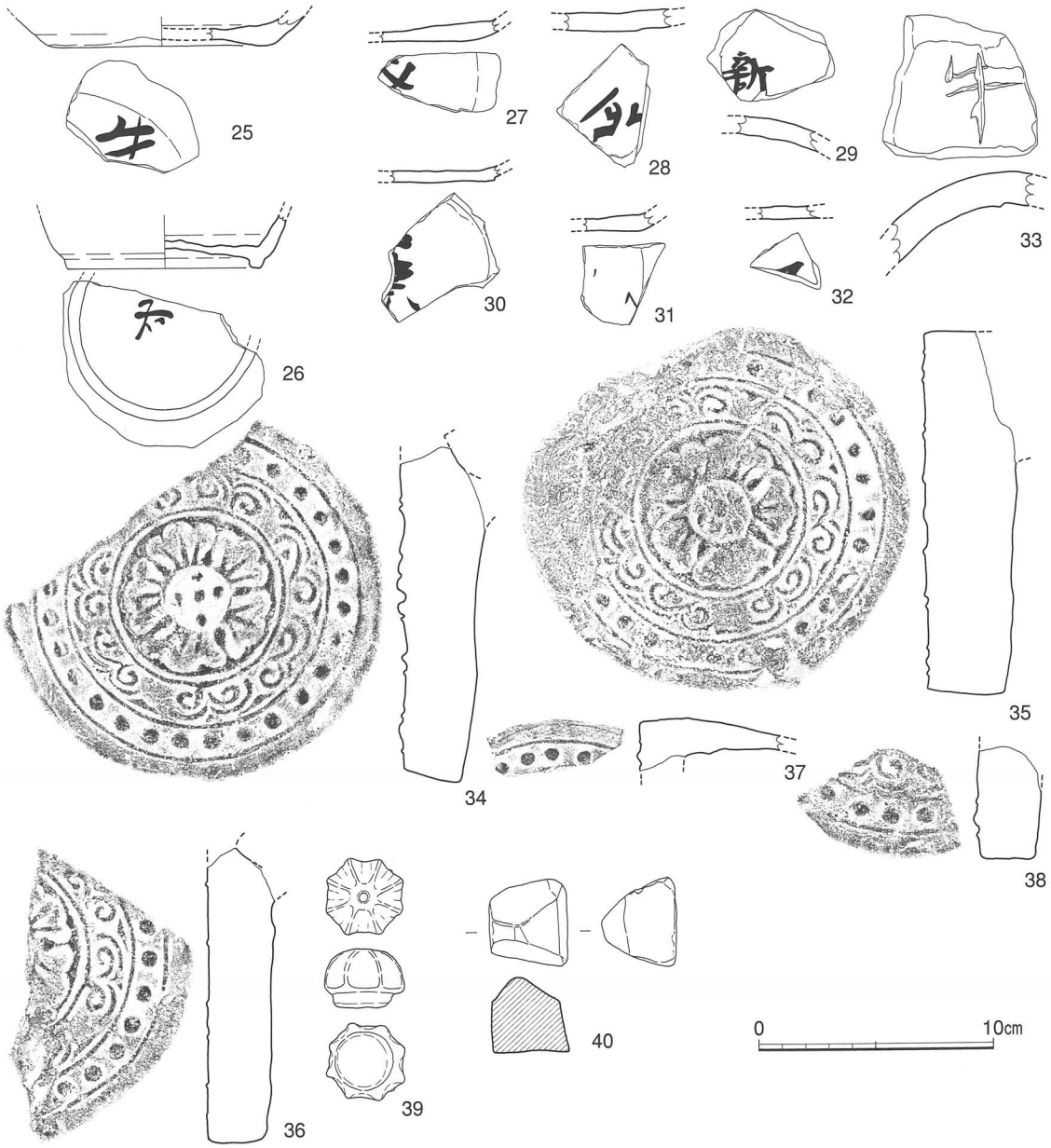
13～15は土師器甑の底部の破片で、３つまたは４つ以上蒸気孔があることが分かる。

（２）奈良から平安時代の遺物

16～21・第123図25～32は須恵器である。16は高台をもつ坏で、口径が大きく体部は丸みをもっている。18は無高台の坏で、口縁が僅かに屈曲し、丸みのある体部を有する。底部切り離しは回転糸切りである。17は短頸壺である。直立する短い口縁をもっており、底部は回転糸切りの後、粗く



第122図　遺構に伴わない遺物実測図（1）



第123図　遺構に伴わない遺物実測図（2）

ナデている。19～21は硯である。19は円面硯で、磨墨面は中央の陸部が高く徐々に周囲の海部に向かって下がる。20・21は脚部で、前者は長方形透孔をもつ。21は獣形脚の破片である。

25～32は墨書土器である。25・27・30・31は無高台の坏で、回転糸切り底をもつものである。外面底部に墨書があり、25は「牛」、27は「寸」、30・31は2文字あるが、30の1字は「津」の可能性がある。26は低い高台が付く坏で、底部はヘラ切りである。高台内側に墨書があり「各」の可能性がある。28は皿の底部で、外面の墨書は「館」の可能性がある。29は坏蓋で外面に「新」と墨書されている。32は小片で、外面に墨書があるが文字は不明である。

33～38は瓦である。33は丸瓦で、外面に「牛」とヘラ書き文字がある。34～38は軒丸瓦で、小片を含めいずれも同じ型式である。このうち、34・35は中房を陰刻とし、蓮子は5個、花弁は5葉で、外区に唐草文と珠文帯をめぐらすもので、出雲国分寺第二類に属するものである。

39は分銅（権）である。8つの稜をもつ笠形の体部に短い円柱形の台をもつもので、頂部に鈕が

付いていたと思われる孔がある。笠部径3.3㎝・底部径2.4㎝・高さ2.6㎝・重さ62.4gである。蛍光X線分析の結果、表面の組成は銅50～70％・鉛20～40％、その他には錫・銀・鉄が含まれている。X線CT分析では内部は中空で、粘土ないしシルトに類する物質が詰まると推定されている。

40は砥石で、石材は凝灰岩である。全面によく使い込まれ小さくなっている。

22～24は陶磁器である。22は越州窯青磁の椀で、全面に灰青色の釉が見られるが、見込みと高台畳付けに目跡がある。23・24は白磁椀で、削りだし高台をもち、23が太宰府分類の椀Ⅳ－１a類、24が椀Ⅱ－１または３類である。

（３）漆紙文書

漆紙文書（写真図版106-3）は１区14号土坑埋土上面で検出されたものである。形態は半円形で、大きさは11～14㎝前後、漆容器の蓋として使用されていたものが３分の１程度欠損したものと考えられる。文書は楷書でなく、公文書に引かれる罫線がないこと、文字間隔が一定でないことから書簡と見られ、その内容は次のとおりである[10]。

「□（土偏）　□（友ヵ）□（女偏）
□　　而　之　□
可　勝　九　寸　□（右ヵ）
□　　□　以　上　御□
□　□　□　□」

文字は５行22字であるが、判読できるのは９文字で、３行目は「九寸に勝うべし（九寸に相当する）」と読める。時候のあいさつや、くくりの常套句がないことから、書簡の内容に関わる部分と見られる。かな文字がないことや書風からすると、平安時代前半のものと考えられる。

註

（１）緑釉陶器の産地は、高橋照彦氏のご教示による。
（２）陶磁器は太宰府分類を用いており、分類は山本信夫氏に直接依頼して行った。
　太宰府市教育委員会『太宰府条坊XV－陶磁器分類編－』　2000
（３）軒丸瓦の分類は次の文献に依拠する。
　山本　清「出雲」『新修国分寺の研究　第４巻　山陰道と山陽道』吉川弘文館　1991
（４）平瓦タタキの分類は次の文献に依拠する。
　松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団『出雲国分寺跡発掘調査報告書』　1995
　島根県教育委員会「中竹矢遺跡」『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ』　1992
（５）奈良国立文化財研究所『昭和63年度　平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』　1989
（６）木製品については次の文献を参考とした。
　奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿古代編』　1985
（７）木簡の樹種については、光谷拓実氏に肉眼観察していただいた。
（８）島根県教育委員会「渋山池古墳群」『一般国道９号（安来道路）建設予定地内発掘調査報告書西地区XI』　1998
（９）玉湯町教育委員会『蛇喰遺跡』　1999
（10）漆紙文書の釈読は、平川南氏にご指導いただいた。

第5章　まとめ

第1節　古景観の復元へむけて

意宇平野の地形は、特に意宇川の河道位置と中海沿岸部について、律令時代の地形は現地形と異なっていた可能性が高い。国府の立地を解明するうえで、当時の景観を明らかにすることは、重要な要素のひとつと思われるが、まだ未解明な部分が多い。そこで、課題となる部分とその調査方法について検討してみたい。

（1）意宇川の旧河道位置

意宇川の河道位置は、国府をとりまく古景観を復元する上で最も重要な課題の一つといえる。

意宇平野に認められる旧河道は、既に述べたように3コースに分けることができるが（第2図）、そのうち国府との関連が予想されるものは、2と3の二つである。それぞれの河道を意宇川が流れていた時期、あるいは放棄された時期を明らかにすることで、律令時代の河道位置が特定できる。

調査方法としては、河川堆積層について発掘調査を行うことが考えられる。旧河道であることが確実な場所で発掘を行い、層序と堆積条件（河道内における場所、堆積メカニズム等）などについて検討した上で、その堆積時期を遺物または年代測定によって決定する。そのためには、河道に直交する地層断面を観察できるトレンチを設定する必要がある。ボーリングや局部的なトレンチでは、層序の把握が困難であることから、正確な調査は望めないと思われる。

（2）入り江の存在

中海岸に発達する砂堆の西側に、ある時期まで入り江状の水域が存在していた。小さな水域であるので、律令時代まで残ってはいなかったかもしれないが、湿地が広がっていたことも考えられ、平野の古景観復元の上では重要な要素の一つといってよい。

入り江が存在した時期を知るためには、最後まで入り江だったと推定される地点でのトレンチ調査またはボーリング調査が考えられる。ただし、どの場合も、複数地点で調査することが望ましい。

入り江堆積層を確認できた場合は、その環境や存在時期を明らかにするために、珪藻などの微化石分析やイオウ濃度の測定、年代測定が考えられる。

（3）古植生の復元

平野部分については、そのほぼ全域に条里跡が認められることから、律令時代には水田が広がっていたことは確実と思われるが、平野を取り巻く丘陵地の植生については資料がない。平野の周辺には古墳が多数存在していることから、早くから開発の手が加わっていた地域ということができる。また、国府とそれに関連する施設があったことで、燃料や木材として森林の伐採が進んだことが推定でき、植生の変化が開発の様子を示す指標になることが期待できる。

古植生の復元に効果的な方法に花粉分析があげられる。堆積物中に残された花粉の出現種と量比から古植生を復元しようとするものである。

花粉分析から古植生の変遷を復元するためには、連続的に長期間堆積を続けた泥質堆積物から試料を採取することが望ましいが、扇状地や三角州ではそのような条件は稀であるので、発掘調査等で異なる時期の泥質堆積物が確認されるた際、花粉分析を実施し、そのデータを統合して判断することになる。また、（2）で述べた入り江の堆積層を分析対象とすることも考えられる。

第２節　古墳時代中期の集落

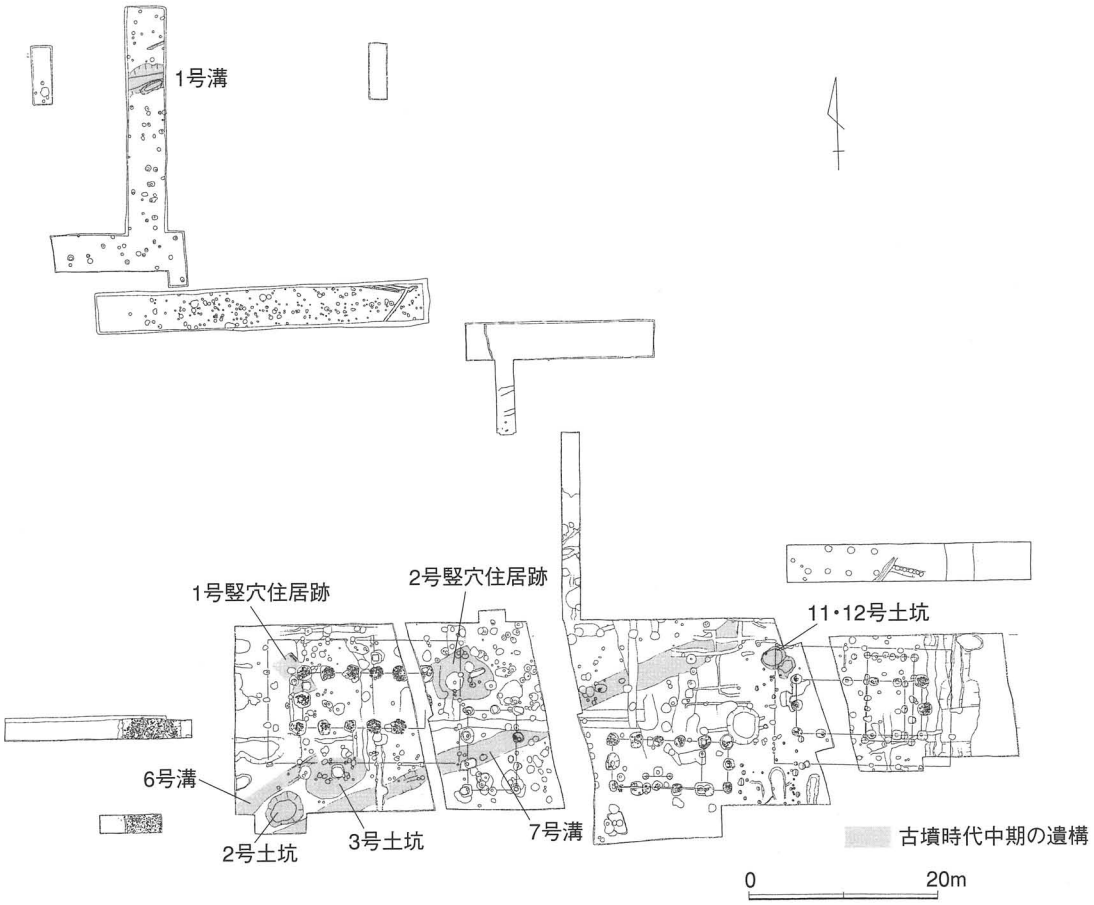
（１）遺構の性格と時期

古墳時代中期の遺構は、竪穴住居跡２棟・溝３条・土坑４基などが確認されている。本調査区から北60mにある第２トレンチの他、北東250mに位置する神田遺跡[1]でも当該期の溝が検出されている点からすると、集落が周辺にかなり広がっていることが予想される。

遺構の配置は、北東から南西方向に延びる溝が一つの基準となっており、６号溝が廃棄された後も、同じ方向に７号溝が設けられている。２棟の竪穴住居跡は時期は判明していないが、辺をこれらの溝に揃えるように営まれており、大形の２・３号土坑もやはり長軸を溝の方向に置いている。第２トレンチで検出されている１号溝は調査範囲に制約があるが、やや北東に軸を振っているようであり、神田遺跡SD01も北東方向から南西方向に延びている。この方向は意宇川の旧河道の方向とも一致していることから、これらが水路となる可能性もある。

一方、神田遺跡SD01では田下駄・鋤など農耕具とともに、梯子などの建築部材や調度品の一部とみられるものが出土している。これらは溝の近くで建物が解体されたことを窺わせるものとされており、集落の周囲に設けられた区画溝としての役割も考えられる。

遺構の時期は、須恵器を含まない６号溝、２・３号土坑と、須恵器を含む１・７号溝、11・12号土坑に大きく分けることができる。前者のうち、２・３号土坑の土師器は甕・高坏・小形丸底壺で構成されており、これに軟質土器甑・甕、円筒形土製品が伴っている。このうち土師器は、①退化した複合口縁をもつ甕（第28図１・３）、②前期の高坏の流れをくむ口縁が外反する高坏（第28図12



第124図　古墳時代中期の遺構分布

～16)、③外面に明瞭な稜をもつ高坏（第28図８～10)、④単純口縁の小形丸底壺（第28図６）などから見て、小谷式に後出する松山編年Ⅱ期[2]、神田遺跡SD01資料に近い時期のものと考えられる。

一方、後者は溝出土の資料を含み一括性に問題も残るが、土師器は①退化した複合口縁をもつ甕（第10図１～４・第31図１)、②口縁が外反する高坏はなく椀状の坏部をもった高坏（第10図13・14、第26図４、第31図４)、③坏が加わる（第10図12）などの点に特徴があり、松山編年Ⅲ～Ⅳ期に含まれるものと思われる。共伴した須恵器は１・7号溝では定型化した蓋坏（第11図20～22・第26図８）や胴部文様をもつ瑳（第26図10）があり、概ねTK208～TK47型式[3]に併行するものと考えられる。また、11・12号土坑のうち器台（第31図12・13）と盌（第31図11）は器形や文様の共通する資料が大阪府堺市ON231号窯[4]にあり、TK73またはそれ以前の初期須恵器と思われる。

（２）渡来系遺物

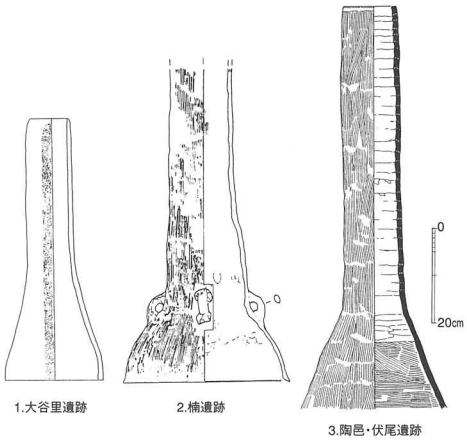
２・３・11・12号土坑では土師器に伴って、渡来系遺物が出土している。このうち、２号土坑出土の甑（第29図29）は、外面にタタキを残す軟質土器で、底部は平底、底部蒸気孔は円形・多孔である。口縁の形態は不明であるが、同様のものは大阪府堺市大庭寺遺跡393－OL[5]から出土している。これはTK73型式に先行する大庭寺Ⅰ期に位置づけられており、初期須恵器の製作工人の故地である伽耶東部から中部との関連が考えられている[6]。軟質土器甕（第29図30・31）は甑とセットになるもので、朝鮮半島の炊飯様式が持ち込まれていたことが確認できる。

また、円筒形土製品（第29図32）は用途不明であるが、内面下半に煤が付着していることから２次的に被熱した遺物であることは明らかである。大阪府堺市陶邑・伏尾遺跡280－OO[7]、大阪府寝屋川市楠遺跡[8]で出土した類似する土製品は、上部の円筒部分がさらに60cmほども延びており、２号土坑のものも復原すれば総高80cmあまりの大形品になると思われる。これらはいづれも軟質土器甕とともに検出されているのが特徴で、韓国全羅南道大谷里遺跡３号住居跡[9]でもやや小形ではあるが出土例があり、朝鮮半島との関わりが考えられる遺物である[10]。

３・11・12号土坑では、陶質土器系の高坏（第29図36、第31図９・10）が出土している。このうち、第31図10は長方形透孔を２段に配しているが、上下が交互になっている点で、新羅系のものと考えられる[11]。また、盌（第31図11）についてはON231号窯にも類品があることは既に述べたが、陶質土器で通有に見られる器種であることも付け加えておきたい[12]。

以上見た軟質土器の甑・甕、陶質土器系の高坏・盌は、朝鮮半島からの搬入品の可能性がある。しかし、一方で陶邑・大庭寺遺跡、兵庫県神戸市出合遺跡[13]、岡山県総社市奥ヶ谷遺跡[14]で定型化以前の初期須恵器や軟質土器を焼いた窯跡が明らかになっていることから、出雲地域でも渡来した技術者がこれらの遺物を生産していた可能性を考えることもできよう。

ただし、土師器の中で少数の渡来系遺物が出土するという状況から見ると、渡来人が集団居住したのではなく、在地集落内に居住していることが想定される点は確認しておかなければならない。



第125図　各地の円筒形土製品

第３節　奈良・平安時代の施設群

（１）奈良時代から平安時代初めにかけての須恵器

出雲国庁跡出土遺物については、1970年の『概報』で公表された編年[15]があり、出雲地域の歴史時代須恵器を考える上で指標となっている。しかし、この編年には溝出土の資料が使われているため一括性に疑問があり、型式的に前後するものが同型式に含まれている可能性がある。今回の調査では５号土坑、14号土坑で一括性の高い遺物群が検出されており、これらはそうした疑問に答え得る良好な資料となった。本来はこのような一括資料を積み重ね土器編年を行うことが必要と考えるが、現時点ではとりあえず既存編年との比較検討を行っておきたい。

14号土坑出土遺物は、出土状況やその内容から見て一度に廃棄された一括遺物と考えられる。その構成は、①坏蓋は輪状つまみをもち、口縁が直立する（第98図１～10)、②坏蓋は頂部に静止糸切りを残すものがある（第98図２・５)、③無高台の坏身は口縁端部が短く屈曲し外反する（第98図12・13)、④高台付坏身は体部が丸みを帯びる（第98図14～19)、⑤坏身底部の切り離しは静止糸切り・回転糸切りの両者があるが、前者の比率が高い、⑥土師器坏・皿が多く伴い、一部は暗文をもつ（第100図35～48）という特徴をもつ。

５号土坑下層出土遺物は、祭祀に用いられた一括遺物である。その構成は、①坏蓋は宝珠つまみをもち、口縁端部が下方に僅かに屈曲する（第80図98～103)、②坏蓋は頂部に回転糸切り痕を残すものが多い（第80図98・100～102)、③無高台の坏身は口縁端部が僅かに屈曲する（第80図104～106)、④高台付坏身は体部は直線的に外傾または外反する（第80図110・111)、⑤坏身底部の切り離しは回転糸切り、⑥土師器坏・皿を伴わないという特徴をもつ。

両者を比較すると、例えば輪状つまみと宝珠つまみが混在するような状況は窺えず、単純な様相として捉えることができる。また、無高台の坏身口縁端部の屈曲が14号土坑では明瞭であるが、５号土坑下層では僅かになること、底部切り離しの比重が静止糸切りから回転糸切りに変わるように漸進的な変化を見ることもできる。

５号土坑下層に後続するものとしては、層位的には確実に区分できる５号土坑上層の遺物がある。その構成は①坏蓋は宝珠つまみをもち、口縁端部が下方に僅かに屈曲する、②無高台の坏身は口縁端部が僅かに屈曲する、③高台付き坏身は体部は直線的に外傾する、④坏身底部の切り離しは回転糸切り、⑤土師器坏・皿を伴わないという下層に共通する特徴をもつものがある。一方、⑥無高台の坏身で口縁が直線的に外傾するもの（第75図35・36)、⑦高台付坏身で器高が高く、口縁は直線的に外傾し、高台が底部の周縁につくもの（第76図51・52)、⑧高台付皿（第76図54～第77図63）など下層に見られなかったものが加わる。５号土坑上層出土資料は４号溝出土資料とも内容的に類似しており、両者は５号土坑下層資料に加え、より新相の遺物を含むものと言えそうである。

これらを敢えて既存編年と対比すれば、14号土坑が第３型式、５号土坑下層が第4型式、５号土坑上層と４号溝が第４～５型式に相当するものと考えられる[16]。本稿では各型式の内容を、これらの遺構から出土した資料の内容に便宜的に置き換えて検討を進めることとしたい。

各型式の年代観については、『概報』によれば国庁第２型式が「大原評」木簡を伴うことや、藤原宮出土須恵器との対比から藤原宮期（690～710年)、第５型式が天長２（825）年直後と見られる平城宮SE311B出土の水挽き成形による長頸壺を含むことから９世紀初めとされている。今回の調査で遺物の年代に関わるものとしては、４号建物跡で第４型式の遺物と共存して出雲国分寺第二類の

軒丸瓦が出土している。第二類は創建瓦の一群とする見方[17]と、その変化型式とする見方[18]があるが、後者の立場でも８世紀後半代には出現するとされるものである。また、４号溝では水挽き引き成形の長頸壺（第61図195）が第４～５型式とともに出土しており、胎土分析の結果、他地域からの搬入品であることも明らかになっている。これは『概報』で年代観の根拠となっている長頸壺と同種のものであるが、長岡京期（784～794年）に出土量が増加するものとされている[19]。

このように見ると、各型式の年代観は第３型式を８世紀前半、第４型式を８世紀後半、第５型式を８世紀末から９世紀初めと概ね考えることができる。

（２）遺構の変遷と時期

奈良・平安時代の遺構は、遺構の様相及び切合関係などにより大きくⅢ期に区分することができる。また、出土遺物などからⅠ期は２つの小期、Ⅱ期は３つの小期に細分することができる。

Ⅰ期　南北に主軸をもつ掘立柱建物跡の時期で、２号建物跡・７号建物跡・８号建物跡がある。これらの出土遺物を見ると、８号建物跡が第３型式であるのに対し、２号建物跡は第４型式であり、それぞれⅠ－１期、Ⅰ－２期として新古に分けることができる。

Ⅰ－１期の遺構は、８号建物跡の他、３号溝、４号土坑、14号土坑があり、第19・20トレンチの石敷護岸施設も既に存在した可能性がある。８号建物跡は２間×４間の掘立柱建物で、３号溝はその東側に平行するように延びている。

Ⅰ－２期の遺構は、２号建物跡と５号土坑があり、出土遺物からすれば４号溝も既に設けられていた可能性が考えられる。２号建物跡は２間×３間の掘立柱建物で、５号土坑はその底面で祭祀遺構が確認されている。４号溝が既に営まれていたとすれば、石敷護岸施設との東西81mの区画内にこれらが配置されていたことになる。

Ⅱ期　東西に主軸をもつ建物跡の時期で、１号建物跡・３号建物跡・４号建物跡がある。これらはいずれも掘立柱建物から礎石建物に同じ場所で建て替えられていることから、前者の段階をⅡ－１期、後者の段階をⅡ－２期とし、廃絶期をⅡ－３期とする。

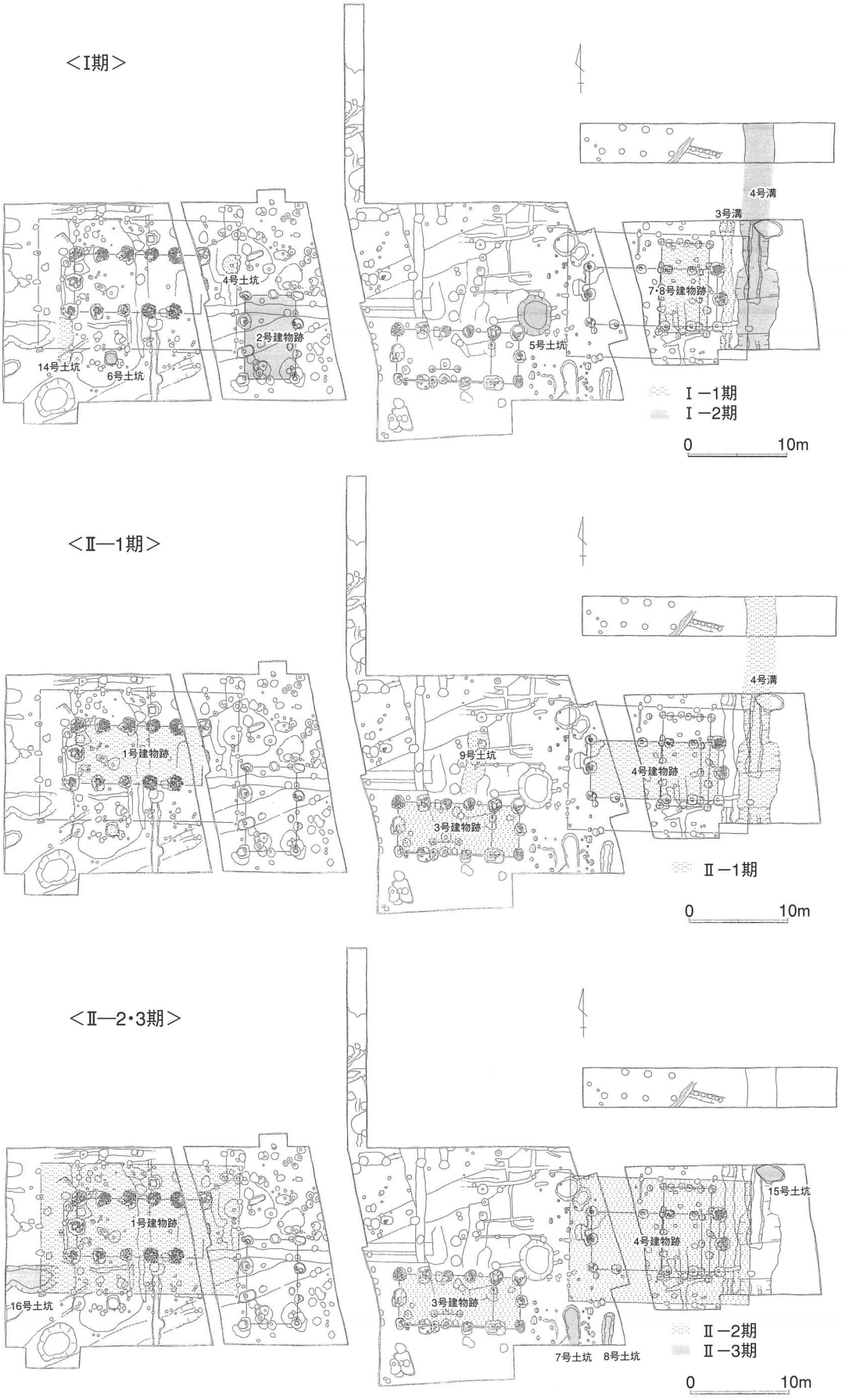
Ⅱ－１期の遺構は、１号建物跡・３号建物跡・４号建物跡と４号溝がある。建物はいずれも２間×５間の掘立柱建物で、出土遺物は第４～５型式である。

遺構の配置は、１号建物跡と４号建物跡は東西の柱筋を揃えて40mの間隔で並んでおり、３号建物跡が北辺を１・４号建物跡の南辺に揃え、両者間の東寄りに位置する計画的なものである。５号土坑で「東殿」と記された木簡、４号溝で「西殿」と墨書された土器が出土していることからすれば、１号建物跡が西殿、４号建物跡が東殿と呼び慣わされていた可能性も考えられる。

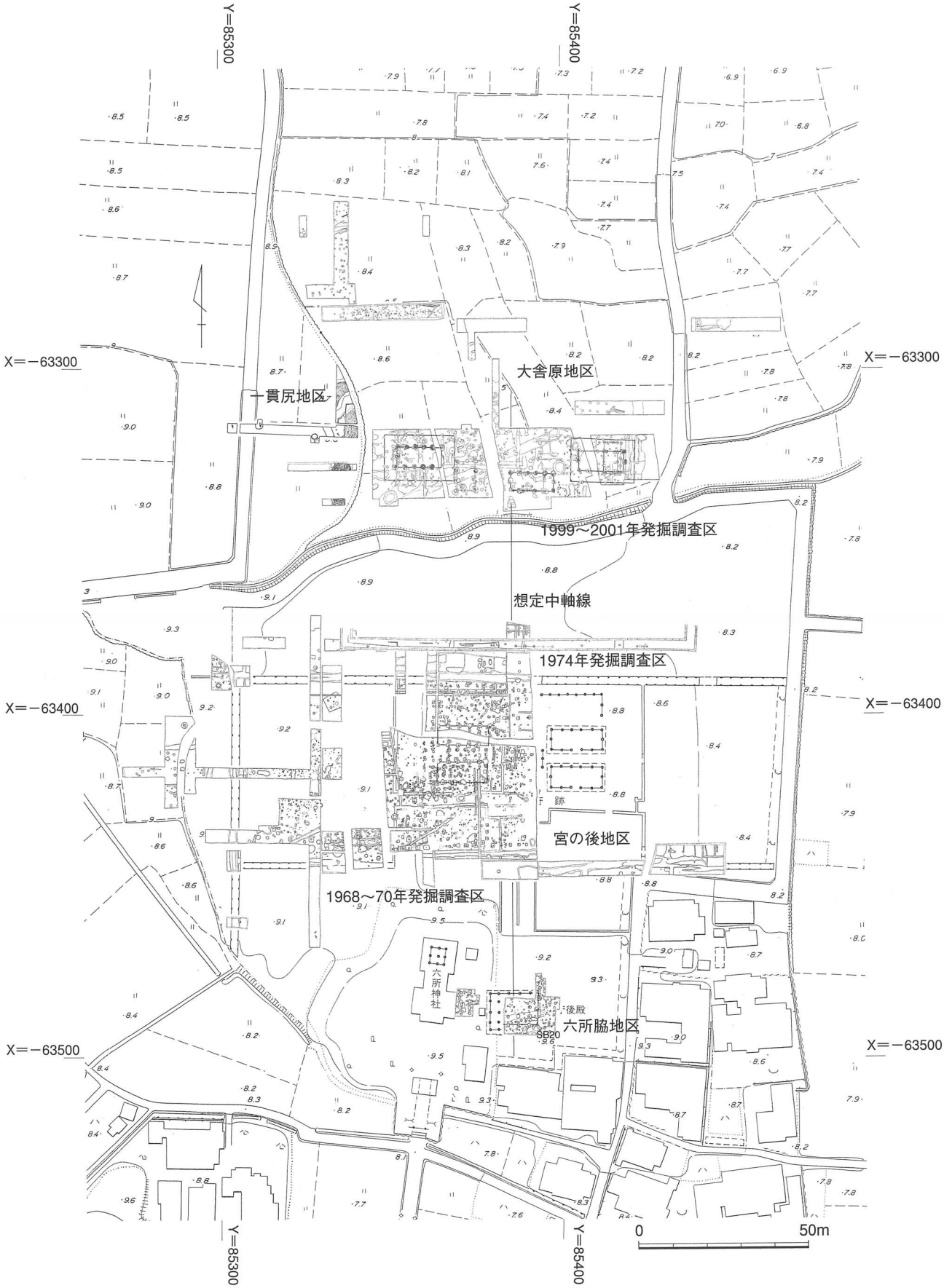
Ⅱ－２期の遺構は、１号建物跡・３号建物跡・４号建物跡がある。建物はいずれも礎石建物に建て替えられ、１号建物跡と４号建物跡は四面廂建物となる。４号溝はこの段階には埋められており、４号建物跡の廂柱はその埋土を掘り込んで立てられている。遺構の配置は、１号建物跡と４号建物跡が廂部分の追加により大きくなったことを除けば、Ⅱ－１期と変わらない。

Ⅱ－３期は１号建物跡・４号建物跡の廃絶期で、建物跡の周辺もしくは一部重複して、７号土坑・８号土坑・15号土坑・16号土坑が営まれている。これらはいわゆる「廃棄土坑」とみられ、内部からほぼ同様な特色をもつ土師質土器・須恵器・緑釉陶器が出土している。

土師質土器は足高高台をもつ坏と、無高台の坏があり、８号土坑では皿、16号土坑では鍋が伴っ



第126図　本調査区内施設群の変遷



第127図　出雲国府跡中心部遺構配置図

ている。須恵器は８号土坑で高台付坏・壺、16号土坑で高台付坏・無高台坏・壺・平瓶・風字硯が見られる。緑釉陶器は８号土坑で京都産椀、16号土坑で京都及び東海産椀が出土している。

このうち、土師質土器は口縁が直線的に外傾する器形をとる点で類例に恵まれないが、松江市長峯遺跡SK01[20]、出雲市藤ヶ森南遺跡SK01[21]で同様なものが知られており、また、底部切り離しの手法は異なるが米子市宮ノ谷山遺跡[22]でも同形態のものが見られる。須恵器は焼成が不良で、坏口縁が直線的に外傾する点や、外面に突帯をもつ坏・平瓶などが、松江市古曽志平廻田１・２号窯跡灰原[23]出土のものに類似しており、東出雲町渋山池窯跡[24]、出雲国府跡に隣接する神田遺跡SK01[25]でも同様な坏が見られる。土師質土器を含めこれらは概ね９世紀末～10世紀初頭頃に位置づけられている。また、緑釉陶器は、８号土坑出土のものが稜椀を含むことから９世紀後半～10世紀前半、16号土坑出土のものが９世紀後半のものと見られる[26]。

以上、出土遺物の様相からすると、１号建物跡・４号建物跡の廃絶時期は10世紀を前後する頃と想定することができる。

Ⅲ期　白磁が伴う遺構が見られる時期で、２号溝・８号溝・１号井戸跡がある。井戸と溝があることから何らかの施設群の存在が想定されるが、現在のところ把握できていない。本調査区内で確認されている径20㎝程度の小さい柱穴が、この段階の建物になることも考えられる。

２号溝は後述するようにトレンチ調査でありながら周辺に比べ陶磁器の出土点数が格段に多く、内容的にも各種の白磁椀・皿類・中国陶器壺・盤などを含んでおり、付近にこの段階の施設群が存在することが想定される。１号井戸跡は縦板組隅柱横桟留め構造をもつもので、土師質土器坏・皿・柱状高台付皿と白磁椀が共伴している。これらの時期は白磁椀Ⅳ類・Ⅴ類・XⅢ類・ⅢⅦ類に加え椀Ⅷ類が見られることから、12世紀中頃から後半代のものと考えられる[27]。

この段階の遺跡としては、本調査区の南東120mにある大屋敷遺跡[28]で、掘立柱建物跡２棟が確認されており、南東250mの丘陵部にある天満谷遺跡[29]では掘立柱建物跡６棟・柵列・溝などが検出されている。出土遺物は、白磁・土師質土器など12世紀代のものを中心とし、越州窯系青磁・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・常滑・瀬戸など10世紀～13世紀代のものも見られる。平安時代後半以降の遺構・遺物は、現在までのところ主として出雲国庁の東側で確認されており、施設群の中心がやや東寄りに移っている可能性も考えられる。

（３）遺構の性格

本調査区は、昭和43～45（1968～70）年に発掘された宮の後・六所脇地区の北側40mに位置し、小字名は「大舎原」である。両者が密接な関係にあったことは、方位に合わせた建物群の規格的な配置からしても当然想定できるが、既に述べたように本調査区内でも時期毎に施設の様相に大きな変化が見られることから、東西方向に主軸をもつ大形建物が現れるⅡ期とそれ以前のⅠ期に分けて、その性格を検討してみたい。

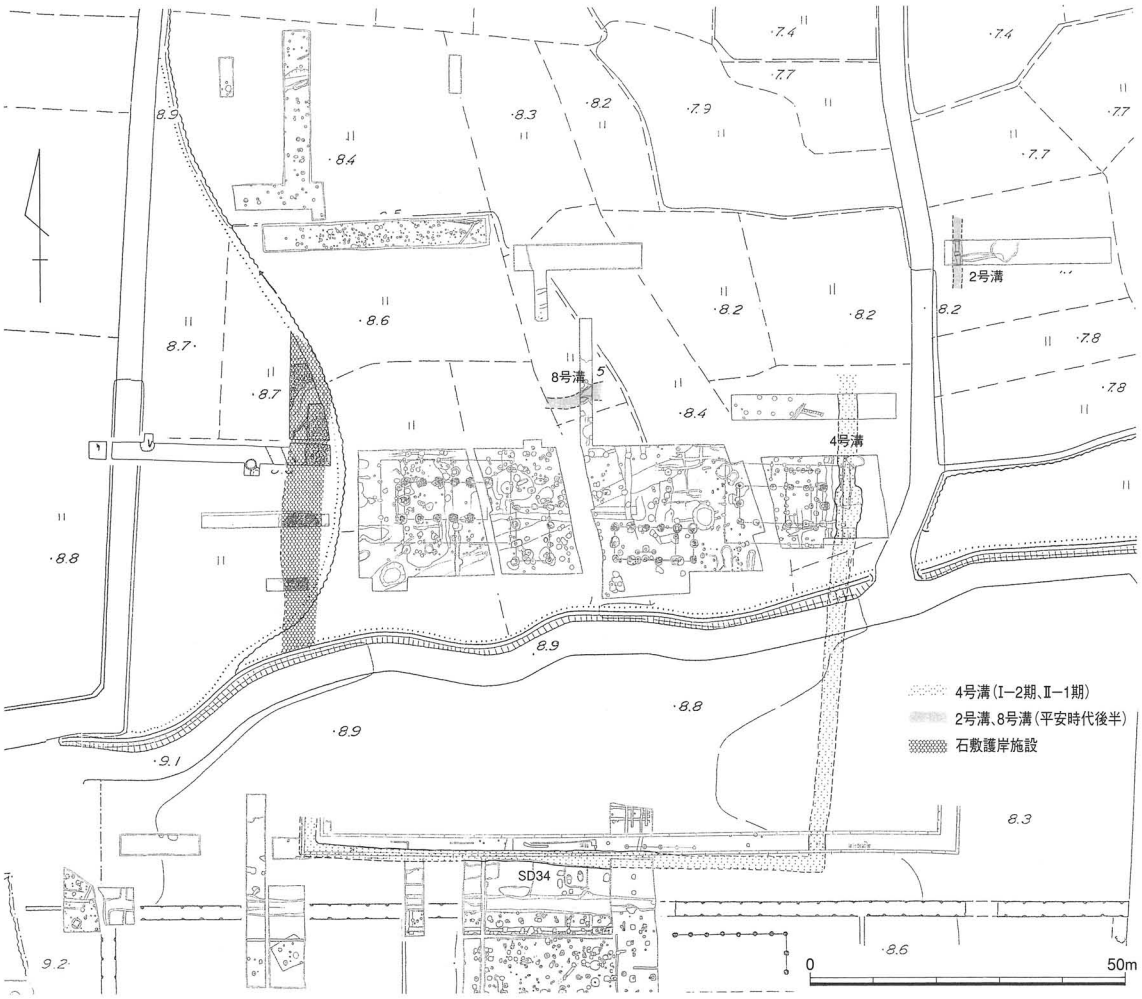
Ⅰ期　南北方向に主軸をもつ建物跡があるが、２つの小期に分けることができ、遺構の分布は散漫である。Ⅰ－１期は、８号建物跡で「官」と書かれた墨書土器と転用硯、14号土坑でも転用硯が多数検出されていることから、文書行政に関わる施設であることは想定できる。

Ⅰ－２期で注目されるのは５号土坑の祭祀遺構である。鹿頭骨とともに刀形代・斎串など祭祀遺物が出土し、松井章氏は律令祭祀である「釈奠」が行われていた可能性を指摘している。この祭祀

遺構から検出された遺物の中には「郡」と墨書された土器があり、郡名を記さず大きく一字が書かれている。国庁のように国内の各郡から物資が集まる施設では、郡名がなければ墨書は意味をもたないが、墨書土器が意宇郡の施設で用いられたものであれば、墨書の意味を理解することができる。すなわち、５号土坑で行われた祭祀の主催者は意宇郡であり、Ⅰ期の施設は意宇郡家の一部であった可能性も考えられる。

Ⅱ期　Ⅰ期とは異なり東西方向に主軸をもつ大形建物跡が整然と並ぶ。Ⅱ－１期の段階には、建物群は西側の石敷護岸施設と４号溝間の東西81mの区画内に配置されている。４号溝は地下レーダーの探査結果によれば、さらに南に延びているものと考えられ、その延長線上には昭和49（1974）年に行われた史跡整備に伴う調査[30]の際に確認されている溝がある。これはやや軸を南東に振る宮の後地区SD34と連結するものと思われる。したがって、全体としてみれば現状で南北約70m・東西81mの方形区画が想定され、その北辺に近い地点の東西に１号建物跡・４号建物跡が配置されていることとなる。

宮の後・六所脇地区の施設群は、政庁後殿と考えられるSB20の中軸線を基に配置されている。SB20は４間×５間の四面廂付掘立柱建物跡で、この中心から真北に中軸線を設定すると、本調査区では３号建物跡西辺を通過する。１号建物跡と４号建物跡は、この中軸線を挟んで東西20mの位置に並んでおり、これらの配置に当たってはSB20が基準となっていると考えられる。したがって、



第128図　施設群を囲む溝と護岸施設

第129図　墨書・ヘラ書き文字実測図

第５表　墨書・ヘラ書き土器一覧表

番号	挿図番号	釈　文	種　別	器　種	部　位	型　式	出土遺構	取り上げ番号
1	35-13	□	須恵器	坏	底外		2号建物跡	SB02 P5 000818
2	42-4	□	須恵器	坏	底外	4	4号建物跡	SB04 P11 010827
3	45-3	□	須恵器	坏蓋	頂外	3	8号建物跡	SB08 P4 010828
4	45-4	官	須恵器	坏	底外	3	8号建物跡	SB08 P8 2 010913
5	45-5	□	須恵器	坏	底外	3	8号建物跡	SB08 P3 010828
6	13-14	□〔奇カ〕	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 991124
7	13-15	浄	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 991124
8	13-16	法	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 第3層 991126
9	13-17	出厨	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 991209
10	13-18	□〔光カ〕	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 2層 991124
11	14-37	□	須恵器	坏・皿	底外		4号溝	SD04 2層 991126
12	14-38	出	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 第3層 991120
13	52-30	西殿	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 41 01827
14	52-31	安	須恵器	坏	体外		4号溝	SD04 69 010827
15	52-32	□	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 8 010823
16	53-56	舘	須恵器	坏	底外	5	4号溝	SD04 133 010828
17	54-78	○〔記号〕本	須恵器	皿	底外	4～5	4号溝	SD04 T1拡張区 010907
18	54-79	有（ヘラ書き）	須恵器	皿	底外	4～5	4号溝	SD04 37 0110827
19	57-117	高	須恵器	坏	底外	4	4号溝	SD04 T3拡張区 上層 010910
20	57-118	少	須恵器	坏	底外	5	4号溝	SD04 451 010910
21	58-129	□	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 443 010919
22	60-146	大	須恵器	蓋	頂内	4	4号溝	SD04 T1拡張区 010911
23	60-154	□	須恵器	蓋	頂内	4	4号溝	SD04 T1下層 010822
24	60-156	高上□	須恵器	坏	底外	4	4号溝	SD04 T3拡張区 090913 他
25	60-165	□	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 T3拡張区 上層 010912
26	60-166	□	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 010823
27	60-167	□	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 T1下層 010828
28	60-169	介	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 T1下層 010823
29	60-170	□	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 T1下層 010823
30	60-171	□	須恵器	坏	底外		4号溝	SD04 T3拡張区 上層 010918
31	61-183	□〔館カ〕	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T1拡張区 010911
32	61-184	舘	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T1下層 010829
33	61-185	高	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T3下層 010904
34	61-186	高	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T1下層 010823
35	60-187	□〔司カ〕	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T1拡張区 010918
36	61-188	□〔館カ〕	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T1下層 010823
37	61-189	得	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T3拡張区 上層 010912
38	61-190	□〔升カ〕	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T1拡張区 010911
39	61-191	□	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T3拡張区 上層 010913
40	61-192	□	須恵器	皿	底外		4号溝	SD04 T3拡張区 上層 010912
41	75-29	○〔記号〕本	須恵器	坏	底外	4	5号土坑	SX05 250 010612
42	75-32	□〔館カ〕	須恵器	坏	底外	4	5号土坑	SX05 284 010622
43	75-37	□〔光カ〕	須恵器	坏	底外		5号土坑	SX05 220 010612
44	77-61	意宇	須恵器	皿	底外	4～5	5号土坑	SX05 130 010611
45	77-62	意宇	須恵器	皿	底外	4～5	5号土坑	SX05 245 010612
46	71-63	□	須恵器	皿	底外	4～5	5号土坑	SX05 287 010627
47	80-106	郡	須恵器	坏	底外	4	5号土坑	SX05 343 010629
48	80-107	井	須恵器	皿	底外	4	5号土坑	SX05 407 010719
49	82-126	□	須恵器	坏蓋	頂外		5号土坑	SX05 010606
50	82-127	□	須恵器	坏	底内		5号土坑	SX05 010606
51	87-3	平	須恵器	坏	底外	4	6号土坑	SK19-3 011019
52	90-20	□〔御カ〕	土師質土器	坏	底外	平安	8号土坑	SK08 010607
53	90-21	□□	土師質土器	坏	体外	平安	8号土坑	SK08 010607
54	92-9	館	須恵器	皿	底外	4～5	9号土坑	3区 SX02-8 001008
55	92-10	□	須恵器	皿	底外		9号土坑	SX02 001108
56	92-13	□（ヘラ書き）	須恵器	皿	底内		9号土坑	SX02-40 001018
57	94-5	□〔一カ〕	須恵器	皿	底外		10号土坑	SX01-18 001018
58	96-6	舘	須恵器	坏・皿	底外		13号土坑	SK02 000807
59	98-20	中	須恵器	坏	底外	3	14号土坑	SX01-173 000926
60	123-25	牛	須恵器	坏	底外			3区 ST4 000105
61	123-26	□〔各カ〕	須恵器	坏	底外			2区 T10 第2層 991201
62	123-27	寸	須恵器	坏	底外			2区 N80-74 W28-32 2層 991202
63	123-28	□〔館カ〕	須恵器	皿	底外			2区 SD01 000818
64	123-29	新	須恵器	坏蓋	頂外			3区 盛土 000608
65	123-30	□□〔津カ〕	須恵器	坏	底外			2区 P30 000705
66	123-31	□□	須恵器	坏	底外			2区 N75-76 W30-31 000823
67	123-32	□	須恵器	坏	底外			1区 ST10 000925
68	123-33	牛（ヘラ書き）	瓦	丸瓦	外面			3区 N82-WO 耕作土中 010529

方形区画の中で、1・4号建物跡が東に片寄った位置にあり、4号建物跡のすぐ東に4号溝がくるのは、中軸線を基準に建物が配置されたためと考えられる。

また、方形区画は中軸線からみると西側に大きく寄った位置にある。出土遺物から4号溝がⅠ期に遡る可能性があることは既に述べたが、中軸線の設定以前に営まれた遺構であるとすれば、そのずれが理解できる。Ⅱ－2期に1・4号建物跡が四面廂礎石建物に建て替えられる段階には、古い方形区画である4号溝は埋められており、こうした事情が示されているものと思われる。

Ⅱ－1期の段階には、4号溝を中心に多数の墨書土器が出土している。その中には「館」・「出厨」・「意宇」・「介」など施設の性格に関わると考えられるものが含まれている。「館」は可能性があるものを含め7点あり、4号溝の他、5号土坑上層・9号土坑・13号土坑で確認されている。六所脇・宮の後地区では「館」は1点も知られておらず、1・3・4号建物跡の周辺でのみ出土しているのは大きな特徴といえる。「出厨」は4号溝で出土したもので、出雲郡の厨の意味である。六所脇・宮の後地区では神門郡の「神門」が出土しており、出雲国内の各郡から持ち込まれているという点で、国関係の施設であることを窺わせる。5号土坑上層で2点が出土している「意宇」は、郡で使われたものとも見られるが、郡名が記されているという点で、同様に国の施設に持ち込まれたものと見ることもできる。「介」は次官級国司の官名である。宮の後地区の史跡整備に伴う調査では「少目」という墨書土器が出土しているが、これは方形区画の南辺にあたる地点である。

この他の注目される遺物としては、4号溝から出土した文書箱がある。これは紙製文書を入れるためのもので、奈良県の長屋王家木簡出土溝、平城京二条大路東西大溝・東二坊坊間路西側溝・東一坊大路西側溝、平城宮内裏東方大溝、平城宮第一次朝堂院東方溝で知られているが、地方では出土例がこれまでなかったものである。平城京二条大路東西大溝のものには「伊勢国少目大倭生羽進上」という墨書があることから、文書の保管だけでなく、運搬にも使われていたことが明らかになっている[31]。出土例が稀少であり、これが出雲国内の郡から国庁への文書の運搬に使われたとは考えにくいので、国庁から中央に文書を送るために用意されていたものと考えられる。

以上、検討してきたがⅡ－1期の施設群の性格に関わる事項をもう一度整理すると、①建物配置の中軸線を国庁の中心施設と共有、②「館」と墨書された土器が多数出土、③出雲国内の郡から持ち込まれた土器が出土、④国司の官名である「介」・「少目」と墨書された土器が出土、⑤国庁と中央との文書のやりとりに使われた文書箱が出土するという特徴をもっている。これらの点から見ると、Ⅱ－1期の施設群は国に関わるものであり、国司館の可能性が高いものと考えられる。国司館は、国司の宿舎であると同時に、饗宴を行い、また政務を執り行う場としても機能していたと考えられている[32]。供膳具である多量の須恵器、炊飯具である土師器甕・甑・土製支脚・竈、焼塩壺、行政文書である「東殿　出雲積大山□□伊福部大□」と記された木簡、文書箱、転用硯などの出土はこうした国司館の実態を反映したものと考えられる。

国司館の調査例としては、下野国府跡、美作国府跡、筑後国府跡、肥前国府久池Ｂ遺跡Ⅱ区などで明らかになっている。このうち、下野国府跡[33]では東西70m・南北100mほどの区画の中に東西に2棟が並ぶ南廂付建物跡があり、その前後に三面廂建物や身舎建物数棟を配置する。「介」・「介□（館カ）」という墨書土器が出土していることから、介の館とされており、時期は8世紀後半から10世紀初めと考えられている。出雲国府跡で明らかになった国司館と比較すると、方形区画の中に中心になる東西棟建物を2棟に並べて建てる点や、存続時期などよく類似している。

（4）国府における手工業生産

今回の発掘調査では、手工業生産が行われた工房については明らかにできなかった。しかし、出土した遺物を見ると、金属器生産（炉壁・椀形鍛冶滓・羽口・銅塊・坩堝）、玉生産（水晶・碧玉・瑪瑙・筋砥石・丸玉未製品・平玉）、木器生産（未使用樺皮・漆壺・漆付着土器）、織物生産（糸巻）に関わるものがあり、本調査区の付近、または諸施設に先立って、こうした多様な手工業生産が行われていたことが想定できる。

金属器生産は、出土遺物の検討から、鉄製品の鍛錬鍛冶と、銅製品の鋳造が行われていたことが明らかになった。鍛冶関連遺物のうち、椀形鍛冶滓は長径13㎝程度の楕円形になるものが最も大きく、炉壁は粗いスサが横方向に混和したものが見られた。遺物のみでは炉の形状を復原することは困難であるが、浅い皿状を呈する火窪の周囲に炉壁が貼付けられたものと見られ、羽口の挿入本数は椀形滓に残る痕跡からすれば一本である。鍛冶素材は砂鉄製錬された鉄塊が用いられていることから、出雲国内で製錬された素材が持込まれている可能性もある[34]。

銅に関わるものは、鋳型こそないが、炉壁・羽口・坩堝・銅塊が揃って出土しており、銅製品の鋳造が行われていたことが明らかである。製品の素材となる銅塊は、分析の結果、鉛・砒素・錫などを含む合金であることも分かっている。

官衙に付属する金属器工房の例は、県内ではあまり知られていないが、神門郡家跡と推定される出雲市古志本郷遺跡では鉄滓・羽口・炉壁などの鍛冶関係遺物が検出されており、精錬鍛冶・鍛錬鍛冶が行われていることが明らかになっている[35]。また、仁多郡家推定地に近い仁多町芝原遺跡では鍛冶炉２基と羽口・精錬鍛冶滓が検出されている。鍛冶工房からは墨書土器・転用硯が出土しており、官衙に付属するとは言えないが関わりの深い遺跡と考えられる[36]。

玉は水晶・碧玉・瑪瑙を主な素材とし、平玉・丸玉の生産が行われている。玉の素材は、出土量から見ると水晶が重量で４割、点数で７割を占めており、重量では碧玉、点数では瑪瑙がこれに続いている。宮の後・六所脇地区で出土している玉素材は、重量では水晶と碧玉が４割・瑪瑙１割、点数では水晶５割・碧玉４割で[37]、点数では水晶の割合がやや低いが、近い傾向が窺える。

水晶製玉の製作工程は、原石の両端・側面を荒割－製品を意識した形割・調整剥離－敲打－研磨の順に進められている。製作用具としては、敲石・筋砥石・平砥石などが出土している。敲石は実験的な検討の結果、鉄製工具よりも敲打作業に向くとされており、敲打成形にも使用されたことが想定されている[38]。また、砥石は筋砥石がほとんどであるが、丸玉・平玉状の円形窪みがある特異なものが１点出土している。

奈良・平安時代の玉作遺跡としては、玉湯町蛇喰遺跡[39]・岩屋遺跡[40]・六反田遺跡・火尻原遺跡などが上げられるが、内容が知られている遺跡は少ない。このうち、蛇喰遺跡は碧玉製管玉・平玉、水晶製平玉・丸玉、頁岩製平玉など様々な玉の製作が行われており、円面硯など官衙で見られる遺物が出土することから、玉の生産・集積・管理を行った公的施設と位置づけられている。また、岩屋遺跡では碧玉・黒色泥岩製の平玉、水晶製丸玉が出土しており、平玉生産が中心となる遺跡と考えられている。

木器生産については、４号溝より使用されていない樺皮が出土していることから、曲物の製作が想定できる。また、漆壺や、漆を塗る際にパレットとして用いたと見られる漆が付着した土器が多数出土しており、漆器などの生産されていた可能性も考えられる。

第４節　平安時代の陶磁器

各地の国府は10～11世紀には衰退変容し、中世府中へ続くことが最近の各地の調査から窺うことができる。出雲国府跡の陶磁器は、貿易陶磁と国産の緑釉陶器、灰釉陶器がある。これらは遺構外から出土したものが大半であるが、陶磁器を検討することは国府の特徴や変化などを考える上で必要である。また、在地の土器の編年が進んでいない出雲地域では、陶磁器は他の地域との平行関係や年代を決定する重要な鍵となっている。以下、出土した陶磁器の概要を報告する。

（１）貿易陶磁

1999年度から2001年度に出土した貿易陶磁は計1,005点であり、第６表にまとめた[41]。

貿易陶磁には中国産の白磁、青磁、青白磁、中国陶器、青花がある。

分布状況は、点数を問題にしなければ、ほぼすべての調査区で発見されている。出土量が多い地点は大舎原地区で、一方、樋ノ口地区や推定枉北道沿いに設定したＴ11、Ｔ22～Ｔ24では出土していない。

出土密度については、出雲国府跡全体では１㎡当たり0.4点（1,005点÷2,414.9㎡）、１点当たり2.4㎡（2,414.9㎡÷1,005点）であるが、Ｔ６は出土量が多く、１㎡当たり6.3点（660点÷104㎡）、１点当たり0.15㎡（104㎡÷660点）である。Ｔ６は全体の16倍の貿易陶磁が出土し、溝跡が検出されていることから、同時期の遺構が周辺に存在する可能性が高い。

貿易陶磁の編年研究が進んでいる太宰府ではＡ～Ｇ期の磁器区分を設定し、古代末から中世前半を整理している。これをもとに出雲国府跡の貿易陶磁を見ると、Ａ期では、越州窯系青磁が４点出土している。器形が分かるものでは越州窯系青磁碗Ⅰ２b類がある。Ｂ期では、貿易陶磁が少なく時期ではあるが、白磁碗XI類が１点存在する。Ｃ期では、白磁碗Ⅱ～Ⅵ類・XⅡ類・XⅢ類、白磁皿Ⅱ～Ⅶ類を中心として多量に出土している。Ｄ期では、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類３点、同安窯系青磁碗Ⅰ類が４点、白磁碗Ⅷ類が18点出土している。Ｅ期では、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類1点と少なくなる。出雲国府跡では出土量の中心はＣ期の遺物で、Ｄ期まではある程度量も出土するが、それ以降は激減する。しかし、龍泉窯系青磁碗Ⅳ類や16世紀代の青花まで連綿と続いている[42]。

特殊品や稀少品、優秀品などといわれる検出量の少ないものとしては、内面にクシ目をもつ白磁鉢、白磁壺、白磁小壺、白磁合子、青白磁、中国製陶器[43]がある。また、発見例の少ないものとして、外面にヘラ線とクシ目をもつ広東系の大碗（鉢）？が２点（同一個体と思われる）出土している。これらの陶磁器は貿易陶磁の全体の5.6％である。出土地点を見ると貿易陶磁自体の出土量が多いＴ６に集中し、この地区の性格を考える上でも示唆的である。

少し詳しく検討すると、出雲国府跡の白磁は広東系白磁が多種多量に見られる[44]。広東系白磁として白磁碗Ⅱ類・XⅡ類・XⅢ類、白磁皿Ⅴ～Ⅶ類の他、少量ではあるが、白磁鉢・壺・水注・合子・小壺が確認でき、数量を別にすれば博多や太宰府と様相が似る。Ｃ～Ｄ期の白磁供膳具における広東系白磁は37％の割合である。

中世前半の中国陶器はＢ群壺類、Ｃ群盤Ⅰ類、Ｃ群耳壺Ⅲ類などが18点出土している。石見国府関連の港湾または市場と考えられる浜田市古市遺跡[45]では、壺、鉢、盤に加え、甕など多種類の陶器が出土しており、出雲国府跡が限られた器種の陶器しか出土しないという様相と異なる。貿易の拠点である博多などとの地理的社会的関係なのか、国府中心部と港湾・市場という性格の差なのかについて今後検討する必要がある。

第６表　陶磁器類分類表

		1区	2区	3区	4区	T1	T2	T4	T5	T6	T7	T12	T13	T14	T15	T16	T17	T18	T20	T21	T25	計
白磁碗	Ⅱ類（広東）	3	2	4					3	23	9				4	3	1	1				53
	Ⅱ－1類	1							3	25	3				5							37
	Ⅱ－3・4類	1							1	4					1	1						8
	Ⅱ－5類									4												4
	Ⅳ～Ⅷ類	5	6	1	1			1	4	121	10			5	4	13	2	1	1			175
	Ⅳ類	6	5	2	1	1			4	51	13			1	5	2	1	1				93
	Ⅳ－1類	1		1	1					25	1				3			1				33
	Ⅴ類	7						1		6	1											15
	Ⅴ類・Ⅷ類			2																		2
	Ⅴ－1類	1									2							1		1		5
	Ⅴ－1・Ⅷ－2			1					1													2
	Ⅴ－2・Ⅵ・Ⅶ類	3	1	1					3	11					1					1		21
	Ⅴ－2類	1		1			1			3	1											7
	Ⅴ－3類									2										1		3
	Ⅴ－4・Ⅷ－1・3類	1								3												4
	Ⅴ－4類									2												2
	Ⅷ類	2	2							8	2					1						15
	Ⅷ－2類	1		2																		3
	Ⅸ類														1							1
	Ⅺ類								1						2							3
	Ⅻ－1類（広東）									38												38
	Ⅻ類（広東）									5												5
	外面有文（広東）									2												2
白磁皿	Ⅱ～Ⅲ類									6												6
	Ⅱ類		1							3												4
	Ⅱ－1類	1								3												4
	Ⅲ－1類									1	1										1	3
	Ⅳ類	1	1							1												3
	Ⅳ－1類																		1			1
	Ⅳ－2類									1												1
	Ⅴ～Ⅶ類（広東）									21												21
	Ⅴ－１類（広東）	1																				1
	Ⅴ－２類（広東）									4				1								5
	Ⅵ類（広東）	9	3							12	4											28
	Ⅵ－1類（広東）									5												5
	Ⅶ類（広東）									10												10
	Ⅷ類			1																		1
	Ⅷ－1類		1																			1
	Ⅸ類																	1				1
	Ⅺ類								2	1					1							4
	森田D群			1																		1
白磁鉢（大碗）	Ⅱ類（広東）				1																	1
白磁碗・皿・鉢	広東以外								1	121	1	2										125
白磁碗・皿・鉢	広東	2		1					3	83	3				2		1	1				96
白磁壺	Ⅱ類（広東）	1					2		1	1												5
白磁壺	Ⅲ類	1	1								1				1		1					5
白磁壺	Ⅱ・Ⅲ類									1												1
白磁小壺	Ⅱ類（広東）		2																			2
白磁水注	Ⅱ類（広東）									1					1							2
白磁袋物	Ⅱ・Ⅲ類			1																		1
白磁合子	Ⅱ類（広東）									2												2
白磁		8	2	8	1				11	21	6				4	1						62
青白磁碗		1		1									1									3
青白磁皿			1							1												2
青白磁碗・皿				1	1					7						1						10
越州窯系青磁碗	Ⅰ類			1						2					1							4
龍泉窯系青磁碗	Ⅰ類								1	1					1							3
	Ⅱ－a類（旧Ⅰ5a）				1																	1
	Ⅰ・Ⅱ類		1																			1
	Ⅲ類															1						1
	Ⅳ類以降			1								1				6		1				9
龍泉窯系青磁盤									1									1				2
龍泉窯系青磁香炉	Ⅳ類以降								1													1
同安窯系青磁碗									1						1	1	1					4
青磁		2	3	1					1								2					9
青花					1													1				2
中国陶器盤	C群									5	1											6
中国陶器壺	B群									4												4
	C群									6					1	1						8
中国黒釉陶器										3												3
緑釉陶器		6	6	2						1	1				1	3	2					22
灰釉陶器・山茶碗					1				1	2	1				2		1					8
灰釉壺		1	2											1								4
瓷器系陶器甕										1												1
計		67	40	34	9	1	3	2	44	664	61	3	1	8	42	34	12	10	2	3	1	1040

※接合前の破片数で集計している。

（2）緑釉陶器

1999年度から2001年度に出土した緑釉陶器は合計で22点である。緑釉陶器は、貿易陶磁と同じで宮の後・六所脇地区に多く分布し、周辺に離れるほど少ない。出雲国府跡の東側にある大屋敷遺跡・才台垣遺跡でも出土しており[46]、この時期の遺跡は周辺にある程度広がっている。

産地別（第８表）に見ると、京都産の９世紀前半から中葉の緑釉陶器は５点あり、１区・Ｔ６・Ｔ15・Ｔ16から出土している。近江産の10世紀後半の緑釉陶器はＴ16から１点のみ検出された。東海産の緑釉陶器も１１点しか出土していない。京都産の９世紀後半から10世紀前半の緑釉陶器は12点と多く、この時期の遺構の性格を考える上で重要である。

今回の調査区（大舎原地区）と宮の後・六所脇地区から出土した緑釉陶器を比較すると、今回の調査区は近江産が少なく、また、10世紀中葉以降のものも少ない。宮の後・六所脇地区では、46点中20点が近江産であり、43％にも及ぶ[47]。時期的には、今回の調査区は９世紀後半から10世紀前半の時期に集中していることが分かる。

今後、出雲国府跡が位置する意宇平野の遺跡から出土している陶磁器や緑釉陶器を比較検討することにより、古代末から中世にかけての国府像を導き出せるものと思われる。

第７表　緑釉陶器・灰釉陶器一覧表

出土地点	種別	産地	時　　期	点数
１区	緑釉陶器	京都	10世紀前半	1
１区	緑釉陶器	京都	９世紀前半～中葉	2
16号土坑	緑釉陶器	京都	９世紀後半	2
16号土坑	緑釉陶器	東海	９世紀後半	1
２区	緑釉陶器	京都	９世紀後半～10世紀前半	6
8号土坑	緑釉陶器	京都	９世紀後半～10世紀前半	1
8号土坑	緑釉陶器	京都	９世紀後半	1
４区	灰釉陶器		９世紀後半	1
５Ｔ	灰釉陶器		10世紀以降	1
Ｔ６	緑釉陶器	京都	９世紀中葉	1
Ｔ６	灰釉陶器		10世紀後半	2
Ｔ７	緑釉陶器	京都	９世紀後半～10世紀前半	1
Ｔ７	灰釉陶器		10世紀以降	1
Ｔ15	緑釉陶器	京都	９世紀中葉	1
Ｔ15	灰釉陶器		10世紀以降	2
Ｔ16	緑釉陶器	京都	９世紀前半～中葉	1
Ｔ16	緑釉陶器	京都	９世紀後半～10世紀前半	1
Ｔ16	緑釉陶器	近江	10世紀後半	1
Ｔ17	緑釉陶器	京都	９世紀後半～10世紀前半	2
Ｔ17	灰釉陶器		10世紀以降	1

※産地については緑釉陶器のみ記載

第８表　緑釉陶器分類表

	京都産	東海産	近江産	合計
9世紀前半～中葉	3			3
9世紀中葉	2			2
9世紀後半	3	1		4
9世紀後半～10世紀前半	12			12
10世紀後半			1	1
合計	20	1	1	22

註

（１）島根県教育委員会『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987
（２）松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第８集　1991
（３）田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
（４）大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会『野々井西遺跡・ON231号窯跡』　1994
（５）a,大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅲ　1993
　　b,大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅳ　1995
（６）酒井清治「日韓の甑の系譜から見た渡来人」『楢崎彰一先生古希記念論文集』　1998
（７）大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・伏尾遺跡－Ａ地区－』　1990
（８）寝屋川市「楠遺跡」『寝屋川市史』第１巻　1998
（９）全南大学校博物館・全羅南道『住岩ダム水没地域文化遺跡発掘調査報告書』Ⅵ　1989
（10）亀田修一氏のご教示による。
（11）定森秀夫「日本列島出土陶質土器の原郷」『陶質土器の受容と初期須恵器の生産』愛媛大学考古学研究室　2002
（12）小池寛「陶質土器・盌に関する基礎研究」『西谷眞治先生古希記念論文集』　1995
（13）亀田修一「陶製無文当て具小考」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ　1989

(14) 岡山県教育委員会「奥ヶ谷遺跡」『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査』4　1997

(15) 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』　1970

(16) 安来市高広遺跡の編年では、14号土坑がⅢB期、5号土坑下層がⅣA期、5号土坑上層と4号溝がⅣ期に比定される。
島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』　1984

(17) 前島己基「山陰における初期造寺活動の一側面」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　1986

(18) 町田　章・近藤　正「古代官衙跡」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会　1975

(19) 木村泰彦「長岡京の土器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東－』古代の土器研究会　1992

(20) 松江市教育委員会『中竹矢1号墳・長峯遺跡』1986

(21) 出雲市教育委員会『藤ヶ森遺跡（Ⅰ地点・Ⅱ地点）発掘調査報告書』　1998

(22) 鳥取県教育文化財団「古市遺跡群3」『一般県道180号線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ　2002

(23) 島根県教育委員会『古曽志遺跡群発掘調査報告書』　1989

(24) 島根県教育委員会「渋山池遺跡・原ノ前遺跡」『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区』Ⅶ　1997

(25) 前掲註（1）に同じ。

(26) 高橋照彦「緑釉陶器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　1995

(27) 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　1995

(28) 前掲註（1）に同じ。

(29) 前掲註（1）に同じ。

(30) 島根県教育委員会『史跡出雲国府跡環境整備報告書』1975

(31) 小池伸彦「木箱と文書」『木簡研究』第11号　木簡学会　1989

(32) 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房　1994

(33) 栃木県教育委員会『下野国府Ⅵ－昭和58年度発掘調査概報－』　1985

(34) 玉湯町玉ノ宮遺跡では7世紀後半から9世紀代の砂鉄製錬炉が確認されており、安来市島田南遺跡では8世紀代の遺物包含層から砂鉄製錬滓、精錬鍛冶滓が出土している。

(35) 松尾充晶「古志本郷遺跡官衙遺構について」『条里制・古代都市研究』16号　2000

(36) 仁多町教育委員会『日ヤケたたら跡・芝原遺跡』　1994

(37) 島根県古代文化センター玉作遺跡検討会の成果による。

(38) 高橋進一「水晶製玉類の製作について」『環瀬戸内海の考古学』下巻　古代吉備研究会　2002

(39) 玉湯町教育委員会『蛇喰遺跡』　1999

(40) 島根県教育委員会「岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』6　2001

(41) 山本信夫氏に直接分類していただいた。
太宰府市教育委員会『太宰府条坊XV－陶磁器分類編－』　2000

(42) 出土量に絶対的な違いがあり、遺跡・遺構の性格が同一かは慎重な検討が必要である。

(43) 中国製黒釉陶器は天目碗2点、茶入れ1点であり、中世後半の可能性がある。

(44) 山本信夫「11・12世紀の平泉の貿易陶磁と京都・太宰府」『日本考古学協会2001年度盛岡大会資料』　2001
山本氏は「遺跡造営者が獲得した陶磁の多種多様性の追求」について、多様性が認められれば貿易基地からの陶磁流通ルートに強いパイプを持つことになるとし、一例として広東産白磁を検討されている。

(45) a,榊原博英「石見の様相」『山陰における中世前期の貿易陶磁器』山陰考古学研究集会　1998
b,榊原博英「島根県古市遺跡、横路遺跡と出土陶磁」『貿易陶磁研究』18　1998

(46) 前掲註（1）に同じ。

(47) a,西尾克己・守岡正司「出雲国庁跡出土の陶磁器について（1）」『八雲立つ風土記の丘』141　1996
b,山陰中世土器検討会『緑釉陶器の様相－山陰地方を中心として－』第2回山陰中世土器検討会資料集　2002

出雲国府跡土器・陶磁器観察表

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10-1	土師器	甕	(16.1)	-	退化した複合口縁	1～2mmの砂粒を多量に含む	やや不良	灰褐色	
10-2	土師器	甕	(15.0)	-	退化した複合口縁	1～2mmの砂粒を多量に含む	やや不良	淡灰褐色	
10-3	土師器	甕	-	-	退化した複合口縁	1～2mmの砂粒を多量に含む	不良	淡灰褐色	
10-4	土師器	甕	(13.4)	-	退化した複合口縁	1～2mmの砂粒を多量に含む	やや不良	灰褐色	胴部外面煤付着
10-5	土師器	甕	(29.0)	-	退化した複合口縁	～2.5mm程度の砂粒を多く含む	良好	淡灰褐色	
10-6	土師器	甕	11.1	12.5	「く」字形単純口縁	～2mm程度の砂粒を多く含む	不良	灰褐色	
10-7	土師器	甕	13.6	-	「く」字形単純口縁	大きめの砂粒を多量に含む	やや不良	灰褐色	
10-8	土師器	甕	(17.0)	-	「く」字形単純口縁	1～2mmの砂粒を多量に含む	不良	淡褐色	
10-9	土師器	甕	17.2	-	「く」字形単純口縁	砂粒を多量に含む	やや不良	黒褐色	
10-10	土師器	甕	17.2	-	「く」字形単純口縁	密、～1.5mmの砂粒を少量含む	やや不良	淡灰褐色	
10-11	土師器	甕	19.1	-	「く」字形単純口縁	1～2mmの砂粒をに含む	良好	淡灰褐色	
10-12	土師器	坏	(12.4)	(4.5)	体部外面底ケズリ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	やや不良	淡灰褐色	
10-13	土師器	高坏	(14.8)	-	丸みのある坏部	～2mm程度の砂粒を含む	やや不良	淡灰褐色	
11-14	土師器	高坏	(13.8)	11.3	丸みのある坏部	2mm程度の砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
11-15	土師器	高坏	13.4	9.4	外面に稜のある坏部	2mm程度の砂粒を含む	やや不良	淡褐色	
11-16	土師器	高坏	16.4	10.4	外面に稜のある坏部	～2mm程度の砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
11-17	土師器	高坏	23.5	-	外面に稜のある坏部	～3mm程度の砂粒を含む	良好	白褐色	
11-18	土師器	高坏	(22.2)	-	外面に稜のある坏部	密	良好	茶褐色	内外面、赤色顔料塗付
11-19	土師器	高坏	15.9	-	外面に稜のある坏部	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡灰褐色	ハケメののち、斜格子暗文
11-20	須恵器	坏蓋	(14.2)	-	外面に稜口唇鑿刃状	～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡灰色	
11-21	須恵器	坏蓋	(12.2)	-	外面に稜口唇鑿刃状	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	
11-22	須恵器	坏	-	-	かえり大きく屈曲	～1.5mm程度の砂粒を多く含む	良好	淡灰色	内面底部に同心円状当て具痕
11-23	須恵器	高坏	-	-	端部丸み透孔あり	密	良好	青灰色	
11-24	須恵器	高坏	-	-	飾りつまみ付き	～2mm程度の砂粒を多く含む	良好	灰白色	
11-25	須恵器	鼎	-	-	底部丸底粘土充填	密、ごく細かな砂粒を僅かに含む	良好	青灰色	外面に斜行刺突文と沈線
11-26	須恵器	甕	-	-	口縁端部頸部外面に稜	～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡灰色	頸部一部にタタキ痕残る
11-27	須恵器	器台	(31.0)	-	坏部外面下半タタキ	細かい砂粒含む	良好	淡青灰色	3条の波状文
11-28	須恵器	器台	-	-	脚部上面坏部剥離痕	2mm程度の砂粒をわずかに含む	やや不良	青灰色	4段5～6方向に三角形・長方形透孔あり
12-29	須恵器	坏	(13.6)	-	口縁に内傾するかえり	密	良好	暗灰色	
12-30	須恵器	坏	(10.8)	-	口縁に内傾するかえり	密、～1mmの砂粒を含む	やや不良	淡黄灰色	
12-31	須恵器	高坏	-	-	脚部2方向に透孔	密	良好	にぶい灰色	
12-32	須恵器	高坏	-	-	脚部に透孔	密、～1mmの砂粒を含む	良好	にぶい灰色	
12-33	須恵器	甕	-	-	口縁外面に稜あり	密、～0.5mmの砂粒僅かに含む	良好	暗黄灰色	口縁部自然釉付着
13-1	須恵器	坏蓋	(15.2)	-	口縁にかえりあり	～1mmの砂粒を含む	良好	紫紅色	自然釉付着、外面灰をかぶる　重ね焼き痕あり
13-2	須恵器	坏蓋	(13.3)	-	頂部回転ヘラケズリ	～1.5mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	
13-3	須恵器	坏蓋	(9.2)	-	頂部回転ヘラケズリ	密、極微細砂粒わずかに含む	良好	暗青灰色	
13-4	須恵器	坏蓋	(15.7)	2.5	頂部に静止糸切り痕	～2mm程度の砂粒を含む	良好	暗灰色	内面、転用硯として使用
13-5	須恵器	坏蓋	(15.5)	2.6	頂部僅かに糸切り痕	～2mm程度の砂粒を含む	良好	灰色	内面、転用硯として使用　重ね焼き痕あり
13-6	須恵器	坏蓋	16.2	3.6	頂部回転ヘラケズリ	密	良好	灰色	内面重ね焼き痕あり粘土充填痕あり
13-7	須恵器	坏蓋	19.0	3.8	頂部回転ヘラケズリ	密、～1mmの砂粒を含む	良好	暗青灰色	内外面重ね焼き痕
13-8	須恵器	坏蓋	(14.2)	-	頂部ヘラケズリの後ナデ	密、～1.5mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	
13-9	須恵器	坏蓋	-	-	頂部回転ヘラケズリ	密、～1mm程度の砂粒を含む	良好	暗青灰色	
13-10	須恵器	坏	11.0	-	回転糸切り	3mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	内面一面に漆付着
13-11	須恵器	坏	(11.4)	4.0	回転糸切りのちナデ	密	良好	にぶい灰色	
13-12	須恵器	坏	(11.4)	-	回転糸切り	密	良好	暗灰色	底部ヘラ記号あり
13-13	須恵器	坏	(15.4)	7.7	回転糸切り	密～1mm程度の砂粒を若干含む	良好	青灰色	口縁内外面に灰をかぶる
13-14	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	密ごく細かな砂粒わずかに含む	良好	灰色	墨書「□〔奇か〕」あり
13-15	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	微細砂粒少し含む	普通	淡灰色	墨書「浄」あり
13-16	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	密ごく細かな砂粒わずかに含む	良好	灰色	墨書「法」あり
13-17	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	～1.5mm程度の砂粒を含む	不良	淡灰色	墨書「出厨」あり　内外面自然釉
13-18	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	～1.5mm程度の砂粒を含む	やや不良	淡黄灰色	墨書「□〔光か〕」あり
13-19	須恵器	皿	(13.6)	(2.0)	底部外面ケズリか	密	良好	黄灰褐色	
13-20	須恵器	皿	(11.4)	(2.4)	回転糸切りのち回転ナデか	密	良好	青灰色	
13-21	須恵器	皿	(12.0)	-	口縁が外反する	～1.5mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	灯明皿か
13-22	須恵器	高台付坏	(6.6)	-	底部外面回転ヘラケズリ	～1.5mm程度の砂粒を含む	良好	淡灰色	
13-23	須恵器	高台付坏	-	-	回転糸切りのち回転ナデか	密、～1.5mm程度の砂粒を含む	良好	暗青灰色	
13-24	須恵器	高台付坏	(12.8)	(4.0)	回転糸切りのちナデ	密	良好	青灰色	
13-25	須恵器	高台付坏	(15.4)	(5.5)	直線的に外傾する口縁	密、～1.5mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	
13-26	須恵器	高台付坏	13.1	3.9	回転糸切り	～2mm程度の砂粒を含む	不良	暗青灰色	底部外面に墨痕転用硯
13-27	須恵器	高台付坏	(12.3)	4.3	回転ヘラケズリ	～1.5mm程度の砂粒を含む	良好	灰白色	
13-28	須恵器	高台付坏	(13.2)	4.5	回転糸切りのち一部ナデ	～2mm程度の砂粒を含む		淡黄灰色	
14-29	須恵器	高台付坏	-	-	回転糸切り	密、～2mm程度の砂粒を含む	良好	にぶい灰色	
14-30	須恵器	高台付坏	15.9	8.0	回転糸切り	密、～1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	
14-31	須恵器	高台付皿	(17.0)	2.5	ヘラ切りか?	～2mm砂粒を多く含む	不良	灰白色	
14-32	須恵器	高台付皿	(17.5)	3.5	回転糸切り	密	良好	暗灰色	
14-33	須恵器	高台付皿	-		回転糸切りのちナデ	密	良好	暗青灰色	内面重ね焼き痕あり
14-34	須恵器	高台付皿	(21)	3.3	回転ヘラケズリ	密、ごく細かな砂粒を含む	良好	青灰色	
14-35	須恵器	高台付皿	(23.9)	3.7	外傾する口縁部	～0.5mm程度の砂粒を含む	良好	暗灰色	
14-36	須恵器	高台付壺	-	-	外面下半回転ヘラケズリ	密、～1mm程度の砂粒若干含む	良好	淡青灰色	
14-37	須恵器	坏・皿	(12.2)	-	回転糸切り	微細な砂粒含む	やや不良	灰色	墨書「口」か「日」?あり
14-38	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	細かな砂粒を含む	やや甘い	灰褐色	墨書「出」あり
14-39	土師器	高台付皿	-	-	底部ヘラケズリ後ナデ	～1mm程度の砂粒を含む	良好	淡橙褐色	内外面に赤色顔料塗布
14-40	土師器	高台付皿	(23.6)	3.4	底部外面ナデ	密、～1.5mm程度の砂粒を含む	やや不良	淡赤褐色	
14-41	須恵器	鉢	-	-	回転糸切り周囲にケズリ	密	良好	暗青灰色	
14-42	須恵器	鉢	(20.8)	-	口縁短く外反	密、～2mm程度の砂粒若干含む	良好	暗青灰色	
14-43	須恵器	高坏	(22.1)	-	口縁端部上方に突出	密、～2mm程度の砂粒を含む	良好	暗黄灰色	
14-44	須恵器	高坏	-	-	外面下半回転ヘラケズリ	密、～1.5mm程度の砂粒を含む	やや不良	暗灰色	
14-45	須恵器	高坏	-	-	坏部下半回転ヘラケズリ	3mm程度の砂粒を含む	良好	暗青灰色	
14-46	須恵器	長頸壺	-	-	頸部外面に2条沈線	3.5mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	頸部内外面にしぼり目
14-47	須恵器	壺	-	-	丸みのある胴部	細かな砂粒を含む	良好	青灰色	内外面に漆付着、漆鏡面に付着するため、破損パレットに転用か
15-48	須恵器	壺	15.7	3.7	宝珠つまみ直立する口縁	密～2.5mm大の砂粒若干含む	良好	暗青灰色	外面上面自然釉付着
15-49	須恵器	高台付壺	-	-	外面底部指頭圧痕	～3mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	外面上面自然釉付着
15-50	須恵器	壺	-	-	外面回転ヘラケズリ	密、～1.5mm程度の砂粒を含む	良好	淡灰色	
15-51	須恵器	甕	(16.6)	-	「く」字形に屈曲する口縁	密、～1mm程度の砂粒若干含む	良好	黒灰色	
15-52	須恵器	甕	(15.6)	-	「く」字形に屈曲する口縁	密、～0.5mm程度の砂粒含む	良好	灰色	
15-53	須恵器	高台付甕	(25.0)	-	外面に低い高台が付く	～1.5mm程度の砂粒若干含む	良好	淡青灰色	
15-54	須恵器	硯	(16.7)	-	海と陸部に段あり	密	良好	暗青灰色	側面に灰をかぶる
15-55	須恵器	托	-	-	底部回転ヘラケズリ	2mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	上面重ね焼き痕か
15-56	須恵器	托	-	-	回転糸切り後ケズリ	2mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	
16-1	緑釉陶器	碗	-	-	蛇の目高台	密	不良	淡褐色	施釉(淡黄緑色)9C中頃　洛北
16-2	灰釉陶器	碗	-	-	高い付け高台	密、細かな砂粒をわずかに含む	良好	淡青灰色	
16-3	白磁	碗	15.0	6.0	玉縁口縁	緻密　気孔あり	良好	黄灰色	施釉(黄灰色)Ⅳ−1類
16-4	白磁	碗	14.7	5.7	玉縁口縁	緻密黒色微粒子含む	良好	灰白色	施釉(灰白色)Ⅳ−1類
16-5	白磁	碗	17.2	6.7	玉縁口縁	黒色微粒子含む	良好	灰白色	施釉(灰白色)Ⅳ−1類
16-6	白磁	碗	16.0	9.0	外面ヘラ描き施文	緻密	良好	灰白色	施釉(灰白色)Ⅶ−1b類
16-7	白磁	合子蓋	(13.8)	-	外面ヘラ描き施文	緻密	良好	白色	施釉(灰白色)外面のみ　広東系
16-8	白磁	水注	-	-	水注注口破片	緻密	良好	灰白色	広東系
16-9	白磁	皿	9.8	3.0	底部外面ケズリ	緻密	良好	淡灰白色	施釉(黄白色)Ⅳ-1b類
16-10	白磁	皿	12.0	3.4	底部高台低く内面に段	緻密	良好	灰白色	施釉(黄緑色)Ⅱ-1a類
16-11	白磁	碗	17.6	-	内面ヘラ描き施文	緻密	良好	灰白色	施釉(灰白色)XⅣ−2b 類
16-12	白磁	皿	12.7	-	内面細かい櫛花文	緻密	良好	灰白色	施釉(灰白色)Ⅶ−2b類
16-13	中国陶器	黒釉碗	(12.6)	-	底部下半ケズリ	密	良好	淡黄褐色	施釉(黒釉)
16-14	中国陶器	黒釉茶入	6.1	-	器壁3mmと薄い	密	良好	淡灰色	施釉(黒釉)
16-15	中国陶器	褐釉壺	(10.0)	-	玉縁口縁	密	良好	灰褐色	施釉(褐釉)耳壺Ⅲか Ⅳ類
16-16	中国陶器	黄釉鑪	(25.0)	-	内面に鉄絵	2mm程度の黒色粒子含み粗い	良好	淡灰色	黄釉鑪Ⅰ類
16-17	土師質土器	皿	(9.7)	1.7	回転糸切り	密、微細砂粒を含む	良好	明褐色	
16-18	土師質土器	皿	8.0	2.1	回転糸切り	1mm程度の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	
16-19	土師質土器	坏	-	-	回転糸切りのちナデ	密、砂粒ほとんど含まない	良好	淡黄褐色	
16-20	土師質土器	皿	9.1	3.8	回転糸切り	密、砂粒ほとんど含まない	良好	淡黄褐色	柱状高台付
16-21	土師質土器	皿	-	-	回転糸切りのちナデ	密～1mm大の砂粒若干含む	良好	明橙褐色	柱状高台付
16-22	白磁	皿	12.6	2.9	口縁に輪花を刻む	緻密	良好	灰白色	施釉(灰白色)XI−5類
16-23	緑釉陶器	皿	-	-	蛇目高台	密	不良	淡灰褐色	施釉(淡黄緑色)9C中頃　洛北
16-24	白磁	碗	-	-	玉縁口縁	緻密	良好	淡灰白色	施釉(灰白色)Ⅱ類かXI−1類
16-25	白磁	碗	16.4	6.6	玉縁口縁	密	良好	灰白色	施釉(灰白色)Ⅳ−1a類
17-1	須恵器	高台付坏	(13.4)	5.5	回転糸切り	密	やや不良	暗灰色	瓦質
17-2	須恵器	坏	12.3	7.3	回転糸切り	～2mm大の砂粒含む	やや不良	淡青灰色	
17-3	土師質土器	高台付坏	-	-	底部に足高高台	密、～1.5mm大の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
20-1	須恵器	坏蓋	-	-	頂部回転ヘラケズリ	細かな砂粒を含む	やや不良	淡青灰色	
20-2	須恵器	坏蓋	-	-	頂部回転ヘラケズリ	細かな砂粒を含む	良好	青灰色	
20-3	須恵器	坏蓋	-	-	頂部にカキメ	細かな砂粒を含む	良好	青灰色	
20-4	須恵器	坏	(12.0)	4.0	外傾する口縁部	密	不良	淡青灰色	内面に黒色漆付着
20-5	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	5mm大の小石を含む	良好	青灰色	

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
20-6	須恵器	高台付坏	-	-	底部切り離し不明	3mm大の砂粒を含む	良好	青灰色	外面底部に灰をかぶる
20-7	須恵器	高台付壺	-	-	回転ヘラケズリ	2mm大の砂粒を含む	良好	青灰色	
20-8	須恵器	高台付壺	-	-	底部外面に指頭圧痕	2mm大の砂粒を含む	良好	淡青灰色	高台内に墨付着、転用硯　底部内面漆付着
20-9	須恵器	壺	-	-	外面下半ヘラケズリ	密、細かな砂粒を含む	良好	暗青灰色	
20-10	須恵器	壺	(11.6)	-	外反する口縁部	密	良好	青灰色	内面に漆付着
20-11	須恵器	鉢	-	-	外面に把手付く	密、細かな砂粒を含む	良好	青灰色	
20-12	須恵器	甕	-	-	周囲を楕円形に成形	密、2mm大の砂粒を含む	良好	暗青灰色	転用硯　外面重ね焼きで溶着した痕あり
22-1	須恵器	坏蓋	-	-	頂部回転糸切りのち回転ナデ	密、~0.5mm程度の砂粒含む	良好	淡青灰色	
22-2	須恵器	蓋	(16.4)	-	直立する口縁部	2mm大の砂粒を含む	良好	青灰色	短頸壺蓋
22-3	須恵器	皿	(15.8)	2.2	回転糸切り	密	良好	青灰色	
22-4	土師器	坏	-	-	周囲に回転ヘラケズリ	密	普通	褐色	内外面に赤褐色顔料塗布
22-5	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	~1mm程度の白色砂粒含む	良好	淡青灰色	
22-6	須恵器	高台付皿	-	-	調整風化により不明	2mm大の砂粒を含む	不良	淡青灰色	
22-7	須恵器	高台付皿	-	-	回転糸切りのちナデ	3mm大の砂粒を含む	良好	紫紅色	
22-8	須恵器	円面硯	-	-	脚部片 透孔あり	~1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰褐色	
22-9	土師質土器	皿	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒を含む	不良	灰白色	柱状高台付
22-10	土師質土器	皿	-	-	調整風化により不明	2mm大の砂粒を含む	普通	淡褐色	柱状高台付
22-11	須恵器	坏	11.2	2.4	回転糸切り	3mm大の砂粒を含む	良好	暗青灰色	
22-12	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	9mm大の小石を含む	やや不良	暗青灰色	
22-13	須恵器	高台付坏	-	-	回転糸切り	細かな砂粒を含む	不良	暗灰色	
22-14	須恵器	短頸壺	(9.4)	-	口縁部短く直立	3mm大の砂粒を含む	良好	暗青灰色	肩、口縁に灰をかぶる
22-15	須恵器	平瓶	-	-	把手　面取りされる	細かな砂粒を含む	不良	淡青灰色	
22-16	須恵器	硯	-	-	脚部片	密	良好	青灰色	
22-17	須恵器	硯	-	-	脚部片か	密	良好	暗青灰色	外面下部に灰をかぶる
22-18	土製品	錘	-	-	管状	細かな砂粒を含む	普通	淡褐色	
22-19	須恵器	高台付坏	-	-	底部回転ナデ	密	良好	青灰色	
22-20	須恵器	高台付壺	-	-	調整風化により不明	細かな砂粒を含む	不良	暗灰色	
22-21	須恵器	高台付坏	-	-	調整風化により不明	~2mm程度の砂粒を含む	不良	青灰色	
22-22	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒を含む	良好	青灰色	
22-23	土師質土器	皿	-	-	回転糸切りか	4mm大の砂粒を含む	普通	灰黄褐色	柱状高台付
22-24	須恵器	坏蓋	4.6	-	口縁にかえり	2mm程度の砂粒含む	良好	青灰色	
22-25	須恵器	坏	(11.0)	-	口縁にかえり	2mm大の砂粒を含む	良好	青灰色	外面に灰をかぶる 焼き歪みあり
22-26	白磁	碗	-	-	高台削り出し	緻密	堅緻	灰白色	施釉(灰白色) Ⅱ類　広東系
22-27	土師質土器	皿	-	-	回転糸切り	細かな砂粒を含む	良好	暗褐色	
26-1	土師器	甕	16.6	-	「く」字形単純口縁	2mm大の砂粒を含む	普通	淡灰褐色	
26-2	土師器	甕	18.2	-	「く」字形単純口縁	2mm大の砂粒を含む	やや不良	淡灰褐色	
26-3	土師器	高坏	12.8	10.6	坏部外面に弱い段	2mm大の細かい砂粒を含む	やや不良	赤褐色	ハケメの後、放射状に暗文
26-4	土師器	高坏	14.7	-	坏部丸みをもつ	4~7mm大の砂粒を含む	不良	赤褐色	
26-5	土師器	高坏	-	-	坏部外面に弱い段	2mm大の砂粒を含む	良好	淡灰褐色	
26-6	土師器	高坏	-	-	坏部外面に弱い段	2mm大の砂粒を含む	普通	淡黄褐色	
26-7	土師器	甑	-	-	把手　裏面ハケメ	4mm大の小石を含む	良好	淡灰褐色	
26-8	須恵器	坏蓋	12.4	4.2	外面に稜をもつ	2mm大の石英含む	不良	暗灰色	焼成は瓦質
26-9	須恵器	壺	-	-	頸部波状文と沈線	密、2mm大の砂粒を含む	良好	淡青灰色	
26-10	須恵器	𤭯	-	-	底部丸底カキメ　ナデ	2mm大の石英含む	良好	淡青灰色	口縁・頸部・胴部に波状文
26-11	土師器	甕	16.6	-	退化した複合口縁	3mm大の石英含む	普通	淡褐色	
26-12	土師器	甕	20.0	-	「く」字形単純口縁	3mm大の石英含む	普通	淡褐色	
28-1	土師器	甕	(17.0)	-	退化した複合口縁	2mm大の砂粒を含む	良好	灰褐色	外面に煤付着
28-2	土師器	甕	(18.2)	-	退化した複合口縁	密、~5mm程度の砂粒を含む	良好	灰白色	
28-3	土師器	甕	16.2	-	退化した複合口縁	~2mm程度の砂粒を含む	良好	灰褐色	外面一部に煤付着
28-4	土師器	甕	12.0	-	「く」字形単純口縁	~2mmの金雲母石英少し含む	良好	暗灰褐色	内外面に煤付着
28-5	土師器	甕	(19.0)	-	「く」字形単純口縁	~2mm程度の砂粒を少し含む	良好	黒褐色	
28-6	土師器	小形丸底壺	6.2	7.0	口縁外面に稜	~2mm大の白色砂粒少し含む	良好	淡黒褐色	
28-7	土師器	小形丸底壺	(3.6)	-	底部に脚部	~1mmの石英、砂粒少し含む	良好	淡橙褐色	
28-8	土師器	高坏	(28.8)	-	坏部外面に稜を貼付	~1mm程度の砂粒を含む	良好	淡橙褐色	内外面にハケメの後、放射状の暗文
28-9	土師器	高坏	(18.6)	-	坏部外面に稜を貼付	6mm大の砂粒含む	良好	淡橙褐色	内外面にハケメの後、斜格子の暗文
28-10	土師器	高坏	(16.1)	-	坏部外面に稜	~1mm程度の砂粒を含む	良好	淡褐色	
28-11	土師器	高坏	19.4	14.0	丸みのある坏部	3mm大の石英含む	良好	橙褐色	内面に放射状暗文が2段に入る
28-12	土師器	高坏	(20.0)	-	坏部口縁が外反	5mm大の砂粒含む	良好	淡桃褐色	内面にハケメの後、放射状に2段の暗文外面、内面口縁の一部に黒斑あり
28-13	土師器	高坏	19.8	-	坏部口縁が外反	~2mm程度の白色砂粒を含む	良好	灰褐色	内面にハケメの後、放射状に2段の暗文外面一部に黒斑あり
28-14	土師器	高坏	18.4	-	坏部口縁が外反	~3mm程度の砂粒を含む	良好	灰褐色	内外面にハケメの後、斜格子の暗文
28-15	土師器	高坏	21.2	-	坏部口縁が外反	~1mm程度の砂粒を含む	良好	黒褐色	坏内面粘土板充填を消すためのミガキあり　外面に煤付着

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
28-16	土師器	高坏	(22.0)	-	坏部口縁が外反		良好	黒褐色	内面ハケメの後、放射状暗文2段 外面と内面一部に煤付着
29-17	土師器	高坏	18.6	-	丸みのある坏部	~4mm程度の砂粒を含む	良好	淡褐色	充填された粘土板の一部が残る
29-18	土師器	高坏	18.0	-	丸みのある坏部	~3mm程度の砂粒を含む	良好	淡橙褐色	坏内外面に赤色顔料残る
29-19	土師器	高坏	17.0	-	坏部外面に弱い段	~3mm程度の砂粒を含む	良好	淡灰褐色	
29-20	土師器	高坏	-	-	粘土板充填痕を消すようにヘラミガキ	~2mm程度の白色砂粒を含む	良好	暗赤褐色	外面黒色物付着
29-21	土師器	高坏	-	-	脚部に4方向円形透孔	~1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	坏部底面に径5mmの円孔が穿孔
29-22	土師器	高坏	-	-	外面ハケメ 内面ケズリ	~1mm程度の砂粒を含む	良好	淡褐色	
29-23	土師器	高坏	-	-	外面ミガキ 内面ケズリ	~3mm程度の砂粒を少し含む	やや不良	淡褐色	
29-24	土師器	高坏	-	-	外面ミガキ 内面ケズリ	~1mm程度の白色砂粒を含む	良好	灰褐色	脚端部面取り
29-25	土師器	高坏	-	-	外面ミガキ 内面ケズリ	~2mmの砂粒極僅かに含む	良好	淡褐色	
29-26	土師器	高坏	-	-	外面ミガキ 内面ケズリ	~2mm程度の砂粒を含む	良好	淡灰褐色	裾部放射状にひび、型に当てて作り筒部は別に作られ接合か 脚端部面取り
29-27	土師器	高坏	-	-	外面ミガキ 内面ケズリ	~1mm大の砂粒わずかに含む	良好	橙褐色	
29-28	土製品	錘	-	-	管状　手づくね成形痕	2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	
29-29	軟質土器	甑	-	-	平底多孔	3mm大の石英含む	良好	灰褐色	外面格子タタキ、下半はケズリ　蒸気孔は底部外面から内面へ穿孔
29-30	軟質土器	甕	-	-	格子タタキ	2mm大の長石含む	普通	黒褐色	外面に煤付着
29-31	軟質土器	甕	-	-	格子タタキ	2mm大の石英含む	不良	淡褐色	
29-32	土師器	円筒形土器	-	-	外面ハケメ 内面ナデ	3mm大の石英含む	良好	黒褐色	内面下半に煤が付着
29-33	土師器	甕	(16.3)	-	退化した複合口縁	2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	
29-34	土師器	高坏	-	-	坏部外面に弱い段	3mm大の石英含む	良好	黒褐色	内面横ナデの後、放射状暗文
29-35	土師器	高坏	(17.8)	-	外反する口縁	2mm大の砂粒含む	良好	黒色	内面横ナデの後、2段に放射状暗文
29-36	陶質土器	高坏	(15.5)	-	外面に1条の突帯	3mm大の長石含む	良好	暗青灰色	内面に灰をかぶる
31-1	土師器	甕	15.0	-	退化した複合口縁	2~3mm大の石英含む	普通	淡褐色	外面一部に黒斑あり
31-2	土師器	壺	15.5	-	退化した複合口縁	~4mm大の石英を多く含む	普通	灰褐色	外面一部に黒斑あり
31-3	土師器	甕	11.0	-	「く」字状の単純口縁	3mm大の石英含む	不良	灰白色	
31-4	土師器	高坏	-	-	丸みのある坏部	~3mm程度の砂粒を含む	やや不良	赤褐色	脚部内面から坏部に刺突痕
31-5	土師器	高坏	-	-	稜のある坏部	3mm大の石英含む	普通	淡褐色	
31-6	土師器	高坏	-	-	内面ケズリ	3mm大の石英含む	不良	淡赤褐色	
31-7	土師器	高坏	-	-	粘土充填痕残る	2~3mm大の砂粒含む	不良	淡黄褐色	粘土充填痕あり
31-8	土師器	高坏	-	-	内面に指押さえ	細かい砂粒含む	普通	橙褐色	外面に暗赤褐色顔料塗布
31-9	陶質土器か	高坏	(17.7)	-	口縁外反 カキメ	~5mmの石英含み粗い	良好	淡青灰色	坏部下半は浅いケズリか
31-10	陶質土器か	高坏	-	-	方形3方透孔が千鳥に2段	3mm大の白色砂粒を含む	不良	淡褐色	
31-11	陶質土器か	盌	10.5	-	断面方形の把手付く	2mm大の白色砂粒を含む	良好	淡青灰色	
31-12	陶質土器か	器台	(44.0)	-	口縁外反 組紐文	3mm大の石英他含む	良好	青灰色	
31-13	陶質土器か	器台	-	-	三角形透孔 波状文	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	
31-14	陶質土器か	器台	-	-	三角形透孔	2mm大の砂粒含む	普通	明青灰色	
33-1	須恵器	坏蓋	(15.6)	-	外面1条沈線	密	良好	紫灰色	
33-2	須恵器	坏蓋	(14.4)	-	回転ヘラケズリ	細かい砂粒含む	良好	青灰色	
33-3	須恵器	坏蓋	(13.2)	-	回転ヘラケズリ	~1mmの砂粒含む	良好	青灰色	
33-4	須恵器	坏蓋	(11.8)	-	回転ヘラケズリ	~2mmの砂粒含む	良好	淡青灰色	
33-5	須恵器	坏	13.6	-	口縁緩く屈曲	細かい砂粒含む	良好	青灰色	
33-6	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	密	良好	暗青灰色	
33-7	須恵器	高台付坏	13.0	4.3	体部やや丸み帯びる	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	外面に灰をかぶる
33-8	須恵器	高台付坏	-	-	回転糸切り	~1mmの砂粒含む	良好	青灰色	
33-9	土師質土器	高台付坏	-	-	足高高台付く	~1mmの砂粒含む	良好	淡褐色	
33-10	土師質土器	高台付坏	-	-	足高高台か	~2mmの砂粒多く含む	良好	橙褐色	
33-11	須恵器	坏蓋	17.0	-	回転ヘラケズリ	~3mm大の石英含む	良好	青灰色	
33-12	須恵器	坏	11.8	4.4	回転糸切り	3mm大の砂粒多く含む	普通	淡青灰色	
33-13	須恵器	坏	12.8	4.0	回転糸切り	~3mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
33-14	須恵器	坏	11.9	2.2	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
33-15	須恵器	高台付皿	(11.8)	3.2	回転糸切りのちナデか	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	内面に灰をかぶる
33-16	須恵器	高台付皿	19.1	3.9	回転糸切り	4mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	内面に灰をかぶる　焼き歪み、重ね焼き痕あり
33-17	須恵器	高坏	-	-	内外面にしぼり目	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
35-1	須恵器	坏蓋	(14.4)	-	回転ヘラケズリ	細かい砂粒含む	良好	青灰色	
35-2	須恵器	蓋	(8.4)	-	つまみ剥離痕	密	良好	暗青灰色	口径小さく、坏以外の蓋か
35-3	須恵器	坏	11.9	4.2	回転糸切りか	~2mmの砂粒含む	良好	淡灰色	
35-4	須恵器	坏	11.3	4.1	ヘラ切りのちナデ	~1mmの砂粒多く含む	良好	黒灰色	
35-5	須恵器	坏	(12.8)	4.2	回転糸切りのちナデ	~2mmの砂粒少し含む	やや不良	淡灰色	
35-6	須恵器	高台付坏	10.7	4.4	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	底部厚い
35-7	須恵器	高台付坏	-	-	回転糸切り	3mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
35-8	須恵器	高台付坏	-	-	底部回転ナデ調整	密	良好	暗青灰色	
35-9	須恵器	皿	18.1	2.2	回転糸切りのちナデ	密	良好	青灰色	

掲図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
35-10	須恵器	皿	13.8	2.1	回転糸切り	～1mmの砂粒多く、4mm大の小石少し含む	不良	灰色	
35-11	須恵器	皿	14.0	2.5	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	暗青灰色	口縁内面に灰をかぶる
35-12	須恵器	坏・皿	-	-	回転糸切り	～1mmの砂粒わずかに含む	不良	灰白色	墨書「□〔司カ〕」あり
35-13	須恵器	硯	-	-	脚部　透孔あり	細かい砂粒含む	良好	青灰色	
35-14	土師器	甕	(28.8)	-	「く」字状単純口縁	～3mmの砂粒多く含む	良好	灰褐色	
37-1	須恵器	坏蓋	-	-	頂部回転ナデ	密	良好	青灰色	
37-2	須恵器	坏蓋	(19.4)	-	回転ヘラケズリ後ナデか	4mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
37-3	須恵器	坏	(14.0)	-	丸みのある体部	細かい砂粒含む	普通	淡青灰色	灯芯の痕あり　灯明皿として利用
37-4	須恵器	坏	(14.4)	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
37-5	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	
37-6	須恵器	皿	13.3	2.3	調整風化により不明	3mm大の砂粒含む	不良	淡青灰色	
37-7	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	6mm大の小石含む	良好	青灰色	
37-8	須恵器	坏・皿	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	
37-9	須恵器	高台付坏	-	-	高台内自然釉	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
37-10	須恵器	高台付坏	17.2	5.5	回転糸切りのち粗い回転ナデ	5～7mm大の小石を含む	良好	青灰色	
37-11	須恵器	鉢	18.9	7.7	回転糸切り後ケズリ	～3mmの砂粒多く含む	良好	青灰色	
37-12	土師器	甕	(17.0)	-	「く」字状単純口縁	～1mmの白色砂粒含む	良好	淡黄褐色	内面、外面一部に煤付着
38-13	瓦	軒丸瓦	-	-	花文、変形唐草、珠文帯	2mm大の砂粒含む	良好	黒褐色	出雲国分寺軒丸瓦第三類
38-14	瓦	丸瓦	-	-	玉縁	4mm大の小石を含む	良好	青灰色	
38-15	瓦	丸瓦	-	-	行基式、縄目タタキ	2mm大の砂粒含む	不良	淡褐色	一部外面に黒斑あり
38-16	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	2mm大の砂粒含む	やや不良	灰色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KH
38-17	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	～2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KG 一部須恵質
38-18	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	細かい砂粒含む	やや不良	青灰色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KC 一部須恵質
38-19	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	2mm大の砂粒含む	やや不良	灰褐色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KD
39-20	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	細かい砂粒含む	良好	青灰色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KA 須恵質
39-21	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	細かい砂粒含む	不良	淡褐色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KA 黒斑あり
39-22	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	細かい砂粒多く含む	やや不良	暗灰褐色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KB
39-23	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	細かい砂粒含む	やや不良	灰褐色	中竹矢遺跡平瓦タタキ分類KD
39-24	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	3mm大の砂粒含む	不良	黄灰色	中竹矢遺跡平瓦タタキ分類KA 一部黒斑あり
39-25	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	2mm大の砂粒含む	不良	淡褐色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KB1
40-26	瓦	平瓦	-	-	ハケメのち格子タタキ	2mm大の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
40-27	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	5mm大の小石含み粗い	不良	灰白色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KB2 一部に黒斑あり
40-28	瓦	平瓦	-	-	縄目タタキ	4mm大の小石を含む	不良	淡褐色	隣り合う破片で色調が異る 2次的に火を受けている可能性あり
40-29	瓦	平瓦	-	-	縄目タタキ	3mm大の砂粒含む	不良	灰褐色	一部黒斑あり
40-30	瓦	平瓦	-	-	縄目タタキ	3mm大の砂粒含む	不良	淡褐色	
40-31	瓦	平瓦	-	-	縄目タタキ	2mm大の小石含む	不良	黄灰色	
42-1	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	
42-2	須恵器	坏	(10.0)	-	回転糸切りか	～1mmの砂粒少し含む	良好	青灰色	
42-3	須恵器	坏	(11.6)	4.0	回転糸切り	～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	
42-4	須恵器	坏	11.4	4.3	回転糸切り	1mm～の砂粒を含む	良好	青灰色	墨書「□」あり 外面底部一部内面全面漆付着
42-5	須恵器	坏	12.8	3.6	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	普通	暗青灰色	
42-6	須恵器	高台付坏	-	-	静止糸切りか	～2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
42-7	須恵器	高台付皿	(19.4)	3.7	回転糸切り	細かい砂粒含む	やや甘い	黄灰色	
42-8	須恵器	高台付皿	(16.3)	3.4	回転糸切りか	～2mm大の砂粒含む	やや甘い	暗灰色	
42-9	須恵器	高台付蓋	-	-	胴部下半ケズリ後ナデ	密	良好	青灰色	内面中央に灰をかぶる
42-10	須恵器	高坏	-	-	内面しぼり目	細かい砂粒含む	不良	灰色	
42-11	須恵器	円面硯	-	-	陸部平滑になる	2mm大の石英含む	良好	青灰色	
42-12	須恵器	甕	(40.0)	-	2段に波状文	細かい砂粒わずかに含む	良好	暗青灰色	
42-13	瓦	軒丸瓦	-	-	5弁花弁、唐草、珠文帯	2mm大の石英含む	良好	灰白色	出雲国分寺軒丸瓦第二類
45-1	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	密	良好	淡青灰色	内面に煤付着 転用硯
45-2	須恵器	坏蓋	(17.0)	-	口縁端部屈曲	細かい砂粒含む	良好	青灰色	器高が高い蓋
45-3	須恵器	坏蓋	(15.0)	-	回転ヘラケズリ	4mm大の小石を含む	良好	青灰色	墨書「□」あり 転用硯
45-4	須恵器	坏	12.8	4.3	静止糸切り	2mm大の石英含む	良好	青灰色	墨書「官」あり　外面に重ね焼きの痕跡あり
45-5	須恵器	坏	13.0	4.2	回転糸切りのちナデ	1部に2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	墨書「□」あり
45-6	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	密	良好	青灰色	外面に煤付着
45-7	須恵器	高台付坏	-	-	底部回転ナデ	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
45-8	須恵器	長頸壺	8.6	-	頸部外面に沈線	2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	外面と口縁内面に灰をかぶる
45-9	土師器	皿	-	-	ヘラ切りか	2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	外面一部と内面に赤褐色顔料塗布
45-10	土師器	坏	12.2	3.8	外傾する口縁	細かい砂粒含む	普通	灰褐色	底部を含め内外面に赤褐色顔料塗布
45-11	土師器	坏	11.6	3.4	外傾する口縁	密	良好	灰褐色	底部を含め内外面に赤褐色顔料塗布
45-12	須恵器	坏蓋	14.8	2.8	回転ヘラケズリ	3mm大の小石含む	良好	青灰色	
45-13	須恵器	平瓶	-	-	頸部小片	密	良好	青灰色	口縁内面・肩部に灰をかぶる
51-1	須恵器	坏蓋	12.3	2.8	回転ヘラケズリ	2mm大の砂粒含む	良好	紫灰色	外面に重ね焼きの痕あり
51-2	須恵器	坏蓋	12.5	-	回転ヘラケズリ	密、～3mm程度の砂粒含む	良好	青灰色	
51-3	須恵器	坏蓋	13.0	-	回転ヘラケズリ	密、～1mm程度の白色砂粒含む	良好	淡紫灰色	
51-4	須恵器	坏蓋	17.8	3.9	浅いヘラケズリ	密、3mm大の砂粒含む	良好	青灰色	外面に重ね焼きの痕跡あり
51-5	須恵器	坏蓋	19.8	4.5	回転ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を多く含む	良好	青灰色	天井部外面に重ね焼きのため口縁部付近に自然釉がかかる
51-6	須恵器	坏蓋	17.7	-	回転ヘラケズリ	極小さい白色砂粒を含む	良好	淡灰色	内面に墨痕あり 転用硯か
51-7	須恵器	坏蓋	(23.2)	1.35	回転ヘラケズリ	～3mm程度の砂粒少し含む	良好	青灰色	
51-8	須恵器	坏	13.2	4.6	回転糸切り	4mm大の小石を含む	良好	淡青灰色	
51-9	須恵器	坏	(13.0)	4.4	回転糸切り	～3mm程度の砂粒含み粗い	良好	灰色	外面に重ね焼き痕あり
51-10	須恵器	坏	12.1	4.1	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	内面から口縁外面に灰をかぶる
51-11	須恵器	坏	12.5	3.8	回転糸切り	～1mm程度の砂粒含む	良好	暗青灰色	
51-12	須恵器	坏	11.5	3.9	回転糸切り	3mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
51-13	須恵器	坏	11.2	4.6	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	青灰色	外面一部に煤付着
51-14	須恵器	坏	(11.7)	4.1	回転糸切り	～2mm大の白色砂粒を多く含む	良好	青灰色	
51-15	須恵器	坏	11.5	4.2	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	青灰色	外面に重ね焼きの痕あり
51-16	須恵器	坏	(11.5)	4.0	回転糸切り	～1mm程度の砂粒を含む	良好	暗青灰色	
51-17	須恵器	坏	(11.0)	4.9	回転糸切り	3mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	外面に8条以上の沈線
51-18	須恵器	坏	10.7	3.8	回転糸切り	4mm大の砂粒含み粗い	良好	暗青灰色	
51-19	須恵器	坏	11.2	3.8	回転糸切り	5mm大の小石含み粗い	良好	暗青灰色	
51-20	須恵器	坏	(12.1)	4.3	回転糸切り	～2mm大の白色砂粒少し含む	良好	青灰色	
51-21	須恵器	坏	(11.5)	4.5	回転糸切り	～1mm程度の砂粒少し含む	良好	灰色	
51-22	須恵器	坏	10.4	3.8	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	淡青灰色	
51-23	須恵器	坏	12.2	4.0	回転糸切り	～1mm程度の砂粒多く含む	やや不良	淡黄褐色	
51-24	須恵器	坏	12.3	4.0	回転糸切り	4mm大の石英含む	良好	青灰色	
51-25	須恵器	坏	10.4	3.5	回転糸切り	砂粒ほとんど含まず密	良好	青灰色	
52-26	須恵器	坏	11.6	3.6	回転糸切り	密だが、一部7mm大の小石入る	良好	紫灰色	外面に重ね焼きの痕あり
52-27	須恵器	坏	(12.5)	3.6	ヘラ切り	～1mm程度の砂粒含む	良好	淡灰色	内面に漆がわずかに残る
52-28	須恵器	皿	(14.2)	2.8	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	淡青灰色	
52-29	須恵器	皿	13.0	2.5	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
52-30	須恵器	皿	14.3	2.6	回転糸切り	わずかに細かい砂粒含む	良好	青灰色	墨書「西殿」あり
52-31	須恵器	坏・皿	-	-	回転糸切り	5mm大の小石含む	良好	青灰色	墨書「安」あり
52-32	須恵器	坏・皿	-	-	回転糸切り	微細白色砂粒含む	良好	青灰色	墨書「□」あり
52-33	須恵器	高台付坏	11.8	5.1	静止糸切り	2～3mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	内外面の色調差 本来有蓋か
52-34	須恵器	高台付坏	14.0	4.6	回転糸切り	～1mm程度の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	
52-35	須恵器	高台付坏	11.4	4.2	回転糸切り	細かい砂粒含むが密	良好	暗青灰色	外面に灰をかぶる
52-36	須恵器	高台付坏	12.0	4.3	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
52-37	須恵器	高台付坏	11.7	4.3	回転糸切り	3～4mm大の白色砂粒を含む	不良	褐色	
52-38	須恵器	高台付坏	12.4	4.8	回転糸切り	4mm大の石英含みやや粗い	良好	暗青灰色	
52-39	須恵器	高台付坏	(12.4)	4.7	回転糸切りのちナデ	微細白色砂粒含む	良好	青灰色	
52-40	須恵器	高台付坏	12.2	4.5	回転糸切りのちナデ	3～4mm大の砂粒を含む	良好	青灰色	
52-41	須恵器	高台付坏	(12.2)	4.4	静止糸切りか	細かい砂粒含むが密	良好	灰色	
52-42	須恵器	高台付坏	12.6	5.0	回転糸切り	一部に3mm大の砂粒含む	不良	暗褐色	
52-43	須恵器	高台付坏	12.2	4.3	回転糸切りのちナデ	～2mmの石英白色砂粒少し含む	良好	青灰色	内面に墨痕あり 転用硯
52-44	須恵器	高台付坏	10.1	3.5	不整方向擦痕	細かい砂粒含む	良好	青灰色	
52-45	須恵器	高台付坏	8.9	5.2	静止糸切り	～3mm程度の砂粒少し含む	良好	青灰色	
52-46	須恵器	高台付坏	(17.4)	6.2	回転糸切りのちナデか	～2mm程度の小石少し含む	良好	灰色	
52-47	須恵器	高台付坏	16.1	6.4	回転ヘラケズリ	～4mm大の小石含み粗い	良好	暗青灰色	外面底部円形に連続した刺突痕あり
52-48	須恵器	高台付坏	(17.4)	6.5	ヘラ切り	～1mmの白色砂粒多く含む	良好	灰色	
52-49	須恵器	高台付坏	(16.4)	6.3	回転糸切り	～2mm程度の砂粒含む	良好	青灰色	
53-50	須恵器	高台付坏	14.8	5.8	回転糸切りのちナデか	4mm大の小石を含む	良好	暗青灰色	底部外面にヘラ記号「×」あり
53-51	須恵器	高台付坏	16.2	6.1	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	底部外面にヘラ記号「×」あり
53-52	須恵器	高台付坏	(16.2)	5.9	回転糸切りのちナデか	～6mmの小石含む	良好	暗青灰色	
53-53	須恵器	高台付坏	16.4	6.0	静止糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	内面漆付着
53-54	須恵器	高台付坏	16.0	7.4	回転糸切り	～4mm大の砂粒含む	不良	茶褐色	内面漆付着
53-55	須恵器	高台付坏	(15.9)	6.8	外傾する直線的な口縁	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	内面漆付着
53-56	須恵器	高台付坏	17.3	6.4	回転糸切り	一部に～7mm大の小石含む	やや甘い	暗青褐色	墨書「館」あり
53-57	須恵器	高坏	(23.8)	-	坏部外面下半に回転ヘラケズリ	～2mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
53-58	須恵器	高坏	-	-	脚部内面にしぼり目	～1mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
53-59	須恵器	高坏	-	-	坏部底面焼成前穿孔	～2mmの砂粒含む	良好	青灰色	
53-60	須恵器	高坏	-	-	脚部内面にしぼり目	～2mmの白色砂粒含む	良好	暗青灰色	

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
53-61	須恵器	高坏	-	-	脚端部屈曲する	～3mmの小石少し含む	良好	暗青灰色	
53-62	須恵器	高坏	-	-	脚端部肥厚	～3mm大の砂粒含む	良好	淡青灰色	
53-63	須恵器	高台付皿	19.9	3.8	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	焼き歪み著しい 内面に重ね焼き痕あり
53-64	須恵器	高台付皿	(20.9)	4.5	回転糸切り	6mm大の小石含む	やや甘い	青灰色	
53-65	須恵器	高台付皿	18.1	4.0	回転糸切り	3mm大の砂粒含む	やや不良	暗灰色	内面に重ね焼き痕あり
53-66	須恵器	高台付皿	21.4	3.5	回転糸切り	2mm大の石英含む	やや甘い	淡青灰色	
53-67	須恵器	高台付皿	(20.6)	4.7	回転糸切り	～3mm大の砂粒多く含む	やや甘い	暗青灰色	
54-68	須恵器	高台付皿	17.4	4.0	回転糸切りのち粗いナデ	1～2mm大の細かい砂粒含む	良好	青灰色	
54-69	須恵器	高台付皿	(19.8)	3.4	回転糸切り	微細白色砂粒多く含む	やや不良	暗灰色	
54-70	須恵器	高台付皿	17.6	4.1	回転糸切り	3mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	底部外面にヘラ記号「ノ」あり
54-71	須恵器	高台付皿	18.1	4.1	回転糸切りのちナデ	～1mmの白色砂粒やや多く含む	良好	青灰色	
54-72	須恵器	高台付皿	19.7	4.3	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	やや甘い	淡青灰色	
54-73	須恵器	高台付皿	17.5	3.5	回転糸切り	8mm大の小石含む	良好	暗青灰色	
54-74	須恵器	高台付皿	(18.6)	4.2	回転糸切り	～2mm大の砂粒含む	良好	灰色	内面一部に墨付着 転用硯か
54-75	須恵器	高台付皿	18.0	3.9	回転糸切りのち一部指押	3mm大の砂粒含む	不良	茶褐色	内面に重ね焼き痕あり
54-76	須恵器	高台付皿	(17.0)	3.7	回転糸切り	3mm大の小石含む	良好	暗青灰色	内面に重ね焼き痕あり
54-77	須恵器	高台付皿	-		回転糸切りのちナデ	～1mmの白色砂粒少し含む	良好	淡青灰色	
54-78	須恵器	高台付皿	17.2	4.0	回転糸切り	～4mm大の小石含む	良好	暗青灰色	墨書「○(記号)本」あり 内面に重ね焼き痕あり
54-79	須恵器	高台付皿	20.3	2.7	回転糸切り	3mm大の砂粒含む	普通	灰白色	ヘラ描き文字「有」あり
54-80	須恵器	皿	(22.0)	3.0	ヘラ切りか	2mm大の石英含む	不良	灰白色	
54-81	須恵器	鉢	(25.4)		口縁短く屈曲	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	口径～14.0cmで歪み
54-82	須恵器	蓋	13.0	4.3	宝珠つまみ 口縁直立	白色砂粒多く含む	良好	濃青灰色	あり
55-83	須恵器	壺	(3.8)	9.7	回転糸切り	白色砂粒多く含む	良好	濃青灰色	内面に広く灰をかぶる
55-84	須恵器	壺	-	-	回転糸切り	～1mmの白色砂粒多く含む	良好	青灰色	鉢状のものか広口壺 内面底部に灰をかぶ
55-85	須恵器	高台付壺	-	-	回転糸切り	～3mm大の白色砂粒少し含む	良好	青灰色	る
55-86	須恵器	高台付壺	14.5	22.0	底部外面タタキ 同心円状当具痕	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	透孔は最大で28個
55-87	須恵器	円面硯	(14.4)	-	陸と海を区切る縁もつ	～1mmの白色砂粒を若干含む	良好	濃青灰色	内面には縦方向に線
55-88	製塩土器	焼塩壺	(10.1)	-	指押さえ	2mm大の砂粒含む	普通	褐色	状押圧痕あり
55-89	製塩土器	焼塩壺	(10.1)	-	指押さえ	3～6mm大の小石含む	普通	褐色	2次的に内外面が被
55-90	製塩土器	焼塩壺	(11.6)	-	指押さえ	3mm大の砂粒含む	良好	暗褐色	熱する
55-91	製塩土器	焼塩壺	(12.0)	-	指押さえ	2mm大の小石含む	良好	淡褐色	
55-92	土製品	錘	-	-	管状 指頭圧痕	～1mmの砂粒含む	良好	淡灰褐色	
55-93	土製品	錘	-	-	管状 指頭圧痕	～1mmの砂粒含む	良好	灰褐色	
56-94	須恵器	鉢	(31.5)	-	横方向に把手	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	内面口縁部、底部中
56-95	須恵器	甕	13.3	24.5	平行タタキのち粗いカキメ	2mm大の石英含む	良好	青灰色	央に灰をかぶる
56-96	須恵器	甕	-	-	平行タタキ	一部に3mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	内面に放射状当て具痕、内面
56-97	須恵器	甕	-	-	平行タタキのち回転ナデ	1～2mm大の砂粒含むが密	良好	暗青灰色	底部、外面肩部に灰をかぶる
56-98	須恵器	甕	-	-	平行タタキ	一部に4mm大の小石含む	良好	暗青灰色	
56-99	土師器	甕	(30.5)	-	「く」字状単純口縁	～4mm大の石英含む	普通	灰褐色	
56-100	土師器	甑	-	-	把手	～1mm大の砂粒多く含む	やや不良	灰褐色	
56-101	土師器	甑	-	-	把手	～1mm大の砂粒多く含む	良好	灰褐色	
56-102	土師器	甑	-	-	把手	～1mm大の砂粒多く含む	良好	暗褐色	一部被熱し赤褐色
56-103	土製品	支脚	-	-	三叉 基部内刳り	～1mm大の砂粒多く含む	良好	灰褐色	
56-104	土製品	支脚	-	-	三叉 基部内刳り	～1mm大の砂粒多く含む	良好	淡褐色	
57-105	須恵器	坏蓋	13.7	3.9	回転ヘラケズリ	2mm大の石英含む	良好	淡青灰色	内面に墨付着
57-106	須恵器	坏蓋	13.8	3.1	回転糸切りのち回転ヘラケズリ	～2mmの砂粒含む	良好	青灰色	転用硯 外面に重ね焼き痕あり
57-107	須恵器	坏蓋	12.8	3.0	浅いヘラケズリ	～2mm大の石英含む	良好	紫灰色	
57-108	須恵器	坏蓋	16.6	2.8	回転糸切り	8mm大の小石含む	良好	青灰色	
57-109	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	～2mmの砂粒含む	良好	青灰色	外面に重ね焼き痕あり
57-110	須恵器	坏蓋	18.2	4.1	回転ヘラケズリ	2mm大の砂粒含む	やや甘い	淡青灰色	内面一部に墨付着
57-111	須恵器	坏蓋	12.9	-	回転ヘラケズリ	～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	つまみを取って転用硯に 内面に灰をかぶる 重ね焼き痕つ
57-112	須恵器	坏蓋	13.5	-	沈線1条	～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	まみを取って転用硯に 外面一部、内面全面
57-113	須恵器	坏	13.6	5.5	回転糸切りのちナデ	一部に4mm大の小石含む	良好	青灰色	に漆付着
57-114	須恵器	坏	12.5	4.4	回転糸切り	7mm大の小石含む	良好	暗青灰色	
57-115	須恵器	坏	(16.7)	6.4	回転糸切り	～3mmの砂粒含む	良好	青灰色	
57-116	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	墨書「高」あり 内面に灰をかぶ
57-117	須恵器	坏	11.6	4.1	回転糸切り	2mm大の石英含む	良好	暗青灰色	る内面に墨付着 転用硯か 墨書「少」あり
57-118	須恵器	高台付坏	(16.6)	7.0	回転糸切り後回転ナデ	～2mmの白色砂粒含む	良好	濃青灰色	
57-119	須恵器	高台付坏	16.2	7.6	回転糸切り	砂粒ほとんど含まず密	やや不良	暗褐色	
57-120	須恵器	高坏	18.8	12.3	脚内面にしぼり目	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
57-121	須恵器	高坏	-	-	3方向に線状の透かし孔あり	～3mmの砂粒含む	良好	紫灰色	
57-122	須恵器?	高台付皿	(23.2)	4.5	回転ヘラケズリのちナデか	～2mmの砂粒含む	良好	淡橙黄色	須恵器のような胎土で酸化焼成 顔料塗布
57-123	須恵器	高台付皿	28.0	4.2	回転糸切りのちナデ	4mm大の小石を含むが密	良好	淡青灰色	
57-124	須恵器	高台付皿	18.0	3.2	回転糸切り	一部に4mm大の石英含む	不良	灰褐色	
58-125	須恵器	高台付皿	20.8	4.4	回転糸切り	5～6mmの小石含み粗い	良好	暗青灰色	
58-126	須恵器	高台付皿	18.7	4.0	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	不良	暗褐色	内面に重ね焼き痕あり
58-127	須恵器	高台付皿	20.6	3.7	回転糸切り	3mm大の石英含む	不良	暗褐色	
58-128	須恵器	高台付坏	(20.8)	4.8	回転糸切り	～1mmの砂粒少し含む	良好	淡黄灰色	
58-129	須恵器	高台付皿	-	-	回転糸切りのち粗いケズリか	2mm大の砂粒含む	良好	淡青灰色	墨書「□」あり 「官」「高」がかさなったような墨書
58-130	須恵器	鉢	19.3	8.6	ヘラケズリ	1mm大の細かい砂粒含む	良好	青灰色	内面漆付着 口縁外面に重ね焼き痕あり 胎土中に空気入り膨らむ
58-131	須恵器	円面硯	23.4	3.5	陸やや高く平滑になる	3mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
58-132	須恵器	円面硯	(20.0)	3.9	陸・海段になり区別	～1mmの白色砂粒少し含む	良好	濃青灰色	外面上部重ね焼き痕ー有蓋か 脚数最大6本
58-133	須恵器	高台付甕	26.2	17.2	平行タタキのち粗いナデ	6mm大の石英含む	良好	暗青灰色	口縁、外面肩部に灰をかぶる
58-134	須恵器	平瓶	10.3	-	口縁部片	～1mmの砂粒含む	良好	濃青灰色	口縁部片側のみに灰をかぶる
58-135	須恵器	甕	19.8	(19.0)	平行タタキのち回転ナデ	細かい砂粒含むが密	良好	暗灰色	胎土分析の結果、他地域からの搬入品
58-136	須恵器	高台付長頸壺	-	-	頸部外面に沈線	～1mmの砂粒わずかに含む	良好	青灰色	
59-137	須恵器	甕	18.0	-	平行タタキのちカキメ	4mm大の砂粒含む	やや甘い	淡青灰色	胎土分析の結果、他地域からの搬入品
59-138	須恵器	壺	-	-	外面肩カキメ	一部に4mm大の砂粒含む	良好	淡青灰色	肩部に灰をかぶる
59-139	須恵器	高台付壺	-	-	外面底部回転ナデ	～4mmの小石含む	良好	青灰色	内面が平滑で薄く墨痕のようなものあり 転用硯か
59-140	土師器	甑	-	-	把手欠損部	3mm大の石英含む	普通	暗灰褐色	
59-141	土師器	甑	-	-	把手	～1mmの砂粒含む	良好	灰褐色	一部に煤付着
59-142	土製品	錘	-	-	管状 指頭圧痕	～1mmの砂粒含む	良好	淡灰褐色	
59-143	土製品	錘	-	-	管状 指頭圧痕	～1mmの砂粒含む	良好	淡灰褐色	
60-144	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	～1mmの白色砂粒含む	良好	淡紫灰色	
60-145	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	～4mmの砂粒含む	良好	暗灰色	外面に灰をかぶる 転用硯か
60-146	須恵器	坏蓋	14.2	3.3	糸切りのち回転ナデ	～1mmの砂粒を多く含む	良好	灰色	墨書「大」あり
60-147	須恵器	坏蓋	(13.2)	(3.6)	回転ヘラケズリのち回転ナデ	～1mmの砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	
60-148	須恵器	坏蓋	13.0	3.0	回転ヘラケズリ	2mm大の長石含む	良好	濃青灰色	内外面に重ね焼き痕あり
60-149	須恵器	坏蓋	14.6	2.9	ヘラケズリのち回転ナデ	～3mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
60-150	須恵器	坏蓋	13.5	1.9	頂部窪むつまみ	4mm大の石英含む	良好	淡青灰色	外面に灰をかぶる
60-151	須恵器	坏蓋	19.9	4.3	回転糸切りのち回転ナデ	～1mmの砂粒をわずかに含む	やや不良	淡灰色	
60-152	土師器	坏蓋	-	-	宝珠つまみ	密	普通	淡褐色	赤褐色顔料塗布
60-153	須恵器	坏蓋	11.4	1.7	回転ヘラケズリ	細かい砂粒含む	やや不良	淡青灰色	外面に重ね焼き痕あり
60-154	須恵器	坏蓋	(17.8)	-	回転ヘラケズリ	4mm大の小石含む	良好	暗青灰色	墨書「□」あり
60-155	須恵器	坏	12.0	4.5	回転糸切り	～4mm大の砂粒含む	良好	青灰色	内面側面漆付着 特に底部に厚い部分があり、漆を塗るための工具の痕跡か
60-156	須恵器	坏	12.0	4.4	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	墨書「高上口」あり
60-157	須恵器	坏	(12.9)	4.4	回転糸切り	～1mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
60-158	須恵器	坏	11.4	4.0	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	外面に重ね焼き痕あり
60-159	須恵器	坏	(11.6)	3.8	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	暗青灰色	外面に重ね焼き痕あり
60-160	須恵器	坏	11.8	4.4	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
60-161	須恵器	坏	(11.2)	4.3	回転糸切り	～1mmの白色砂粒含む	良好	暗灰色	
60-162	須恵器	坏	11.0	4.6	回転糸切り	～1mmの砂粒少し含む	良好	青灰色	
60-163	須恵器	坏	12.6	3.6	回転糸切り	4mm大の小石をわずかに含む	良好	暗青灰色	
60-164	須恵器	坏	(11.7)	3.9	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	内面漆付着
60-165	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	青灰色	墨書「□」あり
60-166	須恵器	坏	-	-	回転糸切りのちナデ	～1mmの白色砂粒若干含む	良好	灰黄色	墨書「□」あり
60-167	須恵器	坏	-	-	回転糸切りか	2mm大の砂粒含む	不良	赤褐色	墨書「□」あり
60-168	土師器	坏	-	-	外面底部にケズリ	密	普通	淡褐色	内外面に暗赤褐色顔料塗布
60-169	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	墨書「介」あり
60-170	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	青灰色	墨書「□」あり
60-171	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	墨書「□」あり
60-172	須恵器	皿	(13.6)	1.8	回転糸切り	密	良好	青灰色	
60-173	須恵器	皿	(15.0)	2.6	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	内外面に重ね焼き痕あり
61-174	須恵器	皿	13.6	2.6	回転糸切り	～3mmの砂粒含む	良好	青灰色	内面底部に墨痕あり 転用硯か
61-175	須恵器	皿	(13.6)	2.4	回転糸切り	～2mmの白色砂粒含む	良好	暗灰褐色	
61-176	須恵器	皿	(13.8)	2.4	回転糸切り	2mm大の砂粒多く含む	良好	青灰色	
61-177	須恵器	高台付坏	12.0	4.4	回転糸切り 体部下半に	3mm大の砂粒多く含む	良好	青灰色	口唇端部浅く凹む
61-178	須恵器	高台付坏	(19.0)	-	回転ケズリ	細かい白色砂粒多く含む	良好	明青灰色	
61-179	須恵器	高台付坏	(17.2)	6.3	回転糸切り	4mm大の石英含む	不良	赤褐色	
61-180	土師器	高台付皿	-	-	比較的高い高台	密	普通	淡褐色	高台内面も含め全面に赤褐色顔料塗布
61-181	須恵器	高台付皿	16.8	2.8	回転糸切りのちナデ	～2mm大の細かい砂粒含む	良好	灰白色	
61-182	須恵器	高台付皿	(24.7)	3.1	回転糸切り	密	良好	黒灰色	表面が燻され瓦質に焼成される

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
61-183	須恵器	高台付皿	-	-	回転糸切り	～3mmの石英多く含む	良好	青灰色	墨書「□〔館カ〕」あり
61-184	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	4mm大の砂粒含む	やや甘い	淡青灰色	墨書「館」あり
61-185	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	不良	灰褐色	墨書「高」あり
61-186	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	1mm大の白色砂粒を含む	良好	赤褐色	墨書「高」あり
61-187	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	3mm大の砂粒含む	良好	淡青灰色	墨書「□〔司カ〕」あり
61-188	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	～2mm大の砂粒を含む	やや甘い	淡灰色	墨書「□〔館カ〕」あり
61-189	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	紫灰色	墨書「得」あり
61-190	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	墨書「□〔升カ〕」あり
61-191	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	やや甘い	淡青灰色	墨書「□」あり
61-192	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	やや甘い	青灰色	墨書「□」あり
61-193	須恵器	平瓶	(13.6)	-	口縁端部肥厚	～2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
61-194	須恵器	高坏	27.4	18.2	口縁端部肥厚	～4mm大の石英含み粗い	不良	灰白色	
61-195	須恵器	長頸壺	4.8	-	回転糸切り	～4mm大の小石砂粒多く含む	良好	暗青灰色	胎土分析の結果、他地域からの搬入品
61-196	須恵器	長頸壺	-	-	外面頸部に沈線	～1mm の白色砂粒含む	良好	淡紫灰色	側面に灰をかぶる 内外面に絞り目
61-197	須恵器	長頸壺	-	-	大きく開く頸部	2mm大の砂粒含む	不良	灰白色	内外面に漆付着　漆壺
61-198	須恵器	鉢	22.3	-	外面下半にカキメ	3mm大の砂粒含む	良好	青灰色	外面に重ね焼き痕跡あり　内面に灰をかぶる
62-199	須恵器	壺	(8.0)	-	口縁端部直立	密	良好	淡青灰色	肩部にわずかに灰をかぶる
62-200	須恵器	壺	(9.4)	-	口縁端部直立	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	
62-201	須恵器	高台付壺	-	-	回転糸切りのちナデ	2mm大の小石含むが密	良好	暗灰色	内面中央灰をかぶる
62-202	須恵器	円面硯	-	-	脚部　長方形透孔	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	透孔最大で16個
62-203	須恵器	鉢	-	-	把手付き	密	やや甘い	紫灰色	
62-204	製塩土器	焼塩壺	(11.7)	-	指押さえ	3mm大の赤色砂粒含む	不良	淡黄褐色	外面に付着物あり
62-205	製塩土器	焼塩壺	(11.4)	-	指押さえ	4mm大の砂粒含む	普通	褐色	
62-206	製塩土器	焼塩壺	(12.6)	-	指押さえ	4mm大の小石含み粗い	良好	淡褐色	口縁はかなりいびつに変形している　型作りによる歪あり
62-207	製塩土器	焼塩壺	(9.8)	-	指押さえ	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	
62-208	製塩土器	焼塩壺	(10.6)	-	指押さえ	3mm大の砂粒含む	普通	赤褐色	
62-209	製塩土器	焼塩壺	(8.0)	-	指押さえ	3mm大の小石含む	良好	淡褐色	
62-210	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目　10本/1cm	細かい赤色粒含む	普通	淡褐色	
62-211	製塩土器	焼塩壺	-	-	指押さえ 布目8本/1cm	2mm大の茶色粒含む	良好	赤褐色	
62-212	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目　10本/1cm	3mm大の赤色砂粒含む	普通	赤褐色	
62-213	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目　10本/1cm	2mm大の白色砂粒を含む	普通	赤褐色	
62-214	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目　12本/1cm	1cm大の赤色粒含む	不良	赤褐色	
62-215	製塩土器	焼塩壺	-	-	指押さえ 布目10本/1cm	2mm大の砂粒含む	良好	淡茶褐色	
62-216	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目　7本/1cm	2mm大の白色砂粒を含む	普通	淡褐色	
62-217	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目　7本/1cm	4mm大の赤色粒含む	普通	淡褐色	
62-219	土製品	錘	-	-	管状 指頭圧痕	～2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	
62-220	土師器	甕	(38.5)	-	「く」字状単純口縁	～1mm の砂粒多く含む	良好	灰褐色	外面に淡い黒斑あり
62-221	土師器	甕	(31.6)	-	「く」字状単純口縁	～1mm の砂粒多く含む	良好	灰褐色	
62-222	土師器	甕	(20.0)	-	「く」字状単純口縁	2mm大の砂粒含む	普通	黒褐色	外面に煤付着
62-223	土師器	甕	-	-	「く」字状単純口縁	3mm大の砂粒含む	普通	黒褐色	外面に煤付着
62-224	土師器	甑	-	-	底部端部に穿孔	2mm大の石英含む	普通	灰褐色	
62-225	土製品	竈	-	-	口縁部と廂部	～4mm大の石英含む	普通	灰褐色	
62-226	土製品	竈	-	-	廂部	～4mm大の石英含む	普通	灰褐色	
62-227	土製品	竈	-	-	廂部	～4mm大の石英含む	普通	灰褐色	
62-228	土製品	竈	-	-	廂部	～4mm大の石英含む	普通	灰褐色	
62-229	土製品	竈	-	-	基部	4mm大の石英含む	普通	灰褐色	
65-1	須恵器	坏蓋	(17.0)	-	器高低い	2mm大の砂粒含む	良好	淡青灰色	外面頂部磨滅 赤色顔料塗布
65-2	須恵器	坏	(11.3)	3.7	回転糸切り	密	良好	暗青灰色	
65-3	須恵器	高台付坏	-	-	ヘラ切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
65-4	須恵器	坏	(14.6)	-	器壁薄い	細かい砂粒含む	良好	濃青灰色	瓦質焼成
67-1	土師質土器	坏	14.2	6.0	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	
67-2	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	
67-3	土師質土器	高台付坏	-	-	足高高台	細かい砂粒含む	普通	淡褐色	
67-4	土師質土器	皿	-	-	回転糸切り	密	良好	淡褐色	柱状高台付
69-1	須恵器	坏蓋	15.2	2.4	回転ヘラケズリのちナデ	～4mmの黒色粒ふくむ	良好	暗青灰色	
69-2	須恵器	高台付坏	(14.2)	4.5	底部外面回転ナデ	砂粒を多く含む	良好	青灰色	
69-3	須恵器	坏身	13.2	4.5	回転糸切り	1mm大の砂粒含む	やや不良	淡灰色	
69-4	須恵器	甕	(18.5)	-	外反する口縁	細かい砂粒含む	良好	灰褐色	内外面一部に自然釉付着
72-1	須恵器	坏蓋	(18.6)	-	器高低い 沈線1条	～1mm の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	
72-2	須恵器	坏	(11.3)	3.9	調整風化により不明	砂粒をほとんど含まない	不良	淡赤褐色	
72-3	須恵器	坏	12.2	4.4	回転糸切り	～1mm の白色砂粒含む	良好	青灰色	

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
72-4	須恵器	高台付坏	11.6	4.8	回転糸切りのち回転ナデ	砂粒をほとんど含まない	良好	青灰色	
72-5	須恵器	高台付坏	12.2	5.0	回転糸切り	～3mmの砂粒を少し含む	良好	青灰色	
72-6	須恵器	高台付皿	(20.0)	3.6	回転糸切りのち回転ナデ	4mm大の砂粒含む	やや不良	淡青灰色	
72-7	須恵器	高台付皿	13.6	2.6	回転ヘラケズリ	～1mmの白色、黒色砂粒少し含む	良好	青灰色	
72-8	須恵器	皿	(26.4)	2.7	ヘラ切りか?	密	やや不良	灰白色	
72-9	須恵器	壺	-	-	大きく開く頸部	～1mmの砂粒ごくわずかに含む	良好	暗青灰色	外面肩部と口縁内面に灰をかぶる
72-10	土師器	甕	(15.6)	14.0	外反する口縁　丸底	2mm大の砂粒多く含む	普通	灰褐色	
72-11	土師器	甕	-	-	丸底	3mm大の石英含む	普通	灰白色	
73-12	瓦	丸瓦	-	-	玉縁	～2mm白色、黒色砂粒含む	良好	青灰色	須恵質
73-13	瓦	丸瓦	-	-	玉縁	～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	須恵質
73-14	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	～1mmの砂粒含む	やや不良	乳褐色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KB1
73-15	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	～1mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KB2　須恵質
73-16	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	～1mmの白色砂粒少し含む	良好	淡灰色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KB2　須恵質
73-17	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	～5mmの小石、砂粒含む	良好	淡黄褐色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KD
73-18	瓦	平瓦	-	-	平行タタキ	～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	須恵質
73-19	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	～1mmの白色砂粒多く含む	良好	灰色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KA　須恵質
74-20	瓦	平瓦	-	-	縄目タタキ	～1mmの砂粒少し含む	良好	黒灰色	
74-21	瓦	平瓦	-	-	縄目タタキ	～2mmの砂粒含む	やや不良	灰色	
74-22	瓦	平瓦	-	-	縄目タタキ	1cm大の小石、～2の石英含む	良好	黒灰色	
75-23	須恵器	坏蓋	-	-	輪状つまみ	～1mmの砂粒含む	やや不良	淡青灰色	
75-24	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	～3mmの砂粒を少し含む	良好	青灰色	内面墨わずかに付着 転用硯
75-25	須恵器	坏蓋	16.9	2.9	回転ヘラケズリ	～1mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	内面墨わずかに付着 転用硯
75-26	須恵器	坏蓋	17.4	3.9	回転ヘラケズリ	～2mmの砂粒やや多く含む	良好	青灰色	
75-27	須恵器	坏	11.2	4.2	回転糸切りのち一部ナデ	～2mmの砂粒含む	良好	灰色	内面底部に墨付着
75-28	須恵器	坏	11.2	4.6	回転糸切り	～1mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
75-29	須恵器	坏	12.2	3.9	回転糸切り	白色砂粒多く含む	良好	青灰色	墨書「○〔記号〕本」あり
75-30	須恵器	坏	11.5	4.5	回転糸切り	密、～1mmの砂粒含む	良好	淡青灰色	
75-31	須恵器	坏	11.5	4.8	回転糸切りのち一部ナデ	1～3mmの砂粒含む	良好	紫灰色	外面に重ね焼き痕あり
75-32	須恵器	坏	12.1	4.1	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	やや甘い	淡青灰色	墨書「□〔館カ〕」あり
75-33	須恵器	坏	13.3	4.2	回転糸切り	～2mmの砂粒含む	良好	灰白色	胎土中に気泡あり
75-34	須恵器	坏	(11.6)	4.0	回転糸切り	1mm大の砂粒ごくわずかに含む	やや不良	灰白色	
75-35	須恵器	坏	10.7	4.2	回転糸切り	1mm大の砂粒わずかに含む	良好	淡青灰色	
75-36	須恵器	坏	11.0	4.8	回転糸切り	～1mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
75-37	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	密	良好	淡青灰色	墨書「□〔兆カ〕」あり
75-38	須恵器	坏	12.2	2.8	回転糸切りのちナデ	1mmの砂粒含む	不良	暗灰色	
75-39	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	～1mmの白色砂粒少し含む	良好	青灰色	内面墨付着 転用硯か
75-40	須恵器	皿	14.4	2.7	回転糸切り	密、～5mmの砂粒含む	良好	青灰色	
75-41	須恵器	皿	14.4	2.8	回転糸切り	～2mmの砂粒含む	良好	青灰色	内面に墨付着　内面と底部外面を利用した転用硯
75-42	須恵器	皿	13.5	2.5	回転糸切り	～2mmの白色砂粒含む	良好	淡青灰色	
76-43	須恵器	皿	13.2	2.7	回転糸切り	1～2mmの砂粒含む	良好	青灰色	
76-44	須恵器	皿	13.9	2.6	回転糸切り	～1mmの白色砂粒含む	やや不良	青灰色	外面底部にヘラ記号 転用硯
76-45	須恵器	皿	13.5	2.6	回転糸切り	1mm大の砂粒を少し含む	良好	青灰色	
76-46	須恵器	高台付坏	(13.2)	4.9	回転ナデ	～2mmの砂粒を多く含む	良好	紫灰色	
76-47	須恵器	高台付坏	-	-	静止糸切りのち回転ナデ	微細砂粒わずかに含む	良好	淡青灰色	
76-48	須恵器	高台付坏	11.1	4.4	ヘラ切り	砂粒をほとんど含まない	良好	青灰色	口縁内面に4カ所煤付着　灯明皿として利用
76-49	須恵器	高台付坏	10.5	3.9	回転糸切りのち回転ナデ	～3mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	外面と内面一部に灰をかぶる
76-50	須恵器	高台付坏	14.2	4.1	ヘラ切りのち回転ナデか	4mm大の石英含む	普通	灰褐色	内外面重ね焼き痕
76-51	須恵器	坏	(17.0)	-	直線的に外傾する口縁	～1mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
76-52	須恵器	高台付坏	14.5	6.6	回転糸切りのちナデ	～3mmの白色砂粒少し含む	良好	青灰色	
76-53	須恵器	皿蓋	20.6	2.7	ヘラ切りのち粗いヘラケズリ	～1mmの白色砂粒含む	やや不良	灰白色	胎土分析の結果、他地域からの搬入品
76-54	須恵器	高台付皿	19.3	3.8	回転糸切り	～2mmの砂粒含む	やや不良	淡黄灰色	
76-55	須恵器	皿	(21.0)	3.4	調整風化により不明	～3mmの白色砂粒含む	やや不良	灰白色	
76-56	須恵器	高台付皿	19.6	3.4	回転糸切りのち回転ヘラケズリ	～1mmの白色砂粒含む	良好	暗青灰色	
76-57	須恵器	高台付皿	19.6	3.0	ヘラ切り	～1mmの白色砂粒含む	良好	淡青灰色	内外面底部に墨付着 転用硯か
76-58	須恵器	高台付皿	-	-	回転糸切りのち回転ナデ	～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	
76-59	須恵器	高台付皿	19.0	4.0	回転糸切り	～1mmの白色砂粒含む	やや不良	淡青灰色	内面に墨付着 転用硯
76-60	須恵器	高台付皿	-	-	回転糸切り	～1mmの白色砂粒含む	不良	淡青灰色	
77-61	須恵器	高台付皿	18.4	4.1	回転糸切り	～3mm大の砂粒含む	やや甘い	青灰色	墨書「意字」あり　内面に重ね焼き痕あり　転用硯
77-62	須恵器	高台付皿	18.2	4.3	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	墨書「意字」あり　内面に墨付着　転用硯
77-63	須恵器	高台付皿	19.4	4.1	回転糸切りのちナデ	白色砂粒少し含む	良好	灰色	墨書「□」あり　内外面に墨の痕跡　転用硯
77-64	須恵器	高坏	(21.9)	-	坏部外面下半ケズリ	～3mmの砂粒含む	良好	暗青灰色	

掲図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
77-65	須恵器	高坏	22.9	-	坏部外面下半ケズリ	～2mmの砂粒含む	良好	灰色	
77-66	須恵器	高坏	20.8	-	坏部外面下半ケズリ	密、～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	内面墨付着 転用硯か
77-67	須恵器	高坏	(22.4)	-	坏部外面下半ケズリ	～5mmの砂粒含む	良好	青灰色	内面墨付着 転用硯か
77-68	須恵器	高坏	-	-	脚端部肥厚	1mm大の砂粒少し含む	良好	青灰色	
77-69	須恵器	高坏	-	-	坏接合部刻み	～2mmの白色砂粒含む	良好	暗青灰色	内外面に灰をかぶる
77-70	須恵器	高坏	-	-	脚端部肥厚	～4mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
77-71	須恵器	高坏	-	-	脚端部肥厚	～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	
77-72	須恵器	蓋	12.6	3.4	回転糸切り	密、～2mmの砂粒含む	良好	灰白色	
77-73	須恵器	蓋	(14.6)	-	回転ヘラケズリ	砂粒をほとんど含まない	不良	灰白色	
77-74	須恵器	長頸壺	-	-	肩部破片	密、～4mmの砂粒含む	良好	青灰色	
77-75	須恵器	壺	-	-	回転糸切りのちヘラケズリ	～1mmの砂粒をわずかに含む	良好	青灰色	内面底部に灰をかぶる
78-76	須恵器	壺	-	-	外面下半ケズリ	～1mmの砂粒含む	良好	暗青灰色	肩部に灰をかぶる
78-77	須恵器	壺	-	-	肩部破片	～1mmの砂粒少し含む	良好	青灰色	
78-78	須恵器	高台付壺	-	-	ヘラ切りのちナデ	密、～1mmの砂粒含む	良好	青灰色	内面底部、外面頸～肩部に自然釉付着
78-79	須恵器	高台付壺	-	-	胴部破片	～1mmの砂粒含む	良好	灰色	内面底部、外面肩部に自然釉付着
78-80	須恵器	高台付壺	-	-	底部外面タタキ	～2mmの砂粒わずかに含む	良好	青灰色	
78-81	須恵器	壺	12.3	7.7	ヘラ切り	～1mmの砂粒含む	良好	灰白色	口縁外面暗灰色 重ね焼き痕か
78-82	須恵器	蓋	(26.6)	(1.7)	回転ヘラケズリ	～2mmの白色砂粒少し含む	良好	灰色	外面に刺突文
78-83	須恵器	皿	24.0	2.3	回転糸切りのち回転ヘラケズリ	密、～5mmの砂粒含む	良好	灰白色	内面中央に重ね焼き痕あり
78-84	製塩土器	焼塩壺	(12.0)	-	指押さえハケメ	3mm大の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
78-85	製塩土器	焼塩壺	(10.2)	-	指押さえ	2mm大の砂粒含む	普通	淡褐色	
78-86	製塩土器	焼塩壺	(9.8)	-	調整風化により不明	4mm大の赤色粒含む	不良	淡褐色	
78-87	製塩土器	焼塩壺	-	-	脈状押圧痕	5mm大の赤色粒含む	不良	淡褐色	口縁は歪んでやや扁平
78-88	製塩土器	焼塩壺	(10.9)	-	指押さえ	密、2mm大の砂粒わずかに含む	良好	褐色	
79-89	須恵器	甕	(15.2)	-	2段に波状文	～1mmの白色砂粒含む	良好	暗青灰色	内面に灰をかぶる
79-90	土製品	竈	-	-	頸部	～1mmの石英、白、灰色砂粒多く含む	良好	灰褐色	
79-91	土師器	甕	27.1	24.4	「く」字状単純口縁	～2mmの石英多く含む	良好	灰褐色	内外面煤付着
79-92	土師器	甕	(19.9)	-	「く」字状単純口縁	～2mmの砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
79-93	土師器	甕	(22.3)	-	「く」字状単純口縁	～2mmの石英、白色砂粒多く含む	良好	灰褐色	
79-94	土師器	甕	(22.6)	-	「く」字状単純口縁	2mm大の石英、白色砂粒多く含む	良好	淡褐色	外面、内面一部に煤付着
79-95	土師器	甕	(25.0)	-	「く」字状単純口縁	～1mmの砂粒多く含む	やや不良	灰褐色	
79-96	土師器	甕	(32.7)	-	「く」字状単純口縁	～1mmの砂粒多く含む	良好	淡褐色	外面煤付着
79-97	瓦	丸瓦	-	-	布目のちハケメ	～3mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
80-98	須恵器	坏蓋	14.8	3.9	頂部回転糸切り後、回転ケズリ	密	良好	淡青灰色	
80-99	須恵器	坏蓋	13.6	3.1	回転ヘラケズリ	～5mm の砂粒含む	良好	暗青灰色	
80-100	須恵器	坏蓋	13.8	3.8	頂部糸切り後、回転ヘラケズリ	4mm大の長石含み粗い	良好	暗青灰色	総じて器壁が厚く口縁端部が丸みを帯びる
80-101	須恵器	坏蓋	13.2	2.9	頂部回転糸切り後、回転ケズリ	4mm大の小石含む	良好	暗青灰色	内面黒色物付着 墨か
80-102	須恵器	坏蓋	12.9	4.1	頂部回転糸切り後、回転ケズリ	3mm大の長石含む	良好	青灰色	
80-103	須恵器	坏蓋	19.3	3.9	回転ヘラケズリ	～2mmの砂粒含む	良好	青灰色	
80-104	須恵器	坏	12.2	4.7	回転糸切り	2mm大の長石含む	やや不良	淡褐色	外面底部黒色物付着 墨か
80-105	須恵器	坏	12.2	4.6	回転糸切り	2mm大の長石含むが密	普通	青灰色	
80-106	須恵器	坏	11.8	4.5	回転糸切り	～3mmの砂粒含む	良好	暗青灰色	
80-107	須恵器	皿	14.6	2.0	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	墨書「郡」あり 重ね焼き痕あり
80-108	須恵器	皿	13.5	2.8	回転糸切り	～4mmの長石含み粗い	良好	青灰色	墨書「井」あり
80-109	須恵器	皿	14.2	2.0	回転糸切りのちナデ	密、～5mmの砂粒含む	良好	青灰色	
80-110	須恵器	高台付坏	11.6	4.5	回転ヘラケズリ?	～1mmの砂粒含む	不良	黒灰色	
80-111	須恵器	高台付坏	(11.2)	3.7	ヘラ切りか	～1mmの黒色砂粒少し含む	良好	灰色	
80-112	須恵器	高坏	15.3	10.8	坏部口縁端部肥厚	3mm大の長石含み粗い	良好	紫灰色	
80-113	須恵器	高坏	-	-	脚端部肥厚	密、～2mmの砂粒含む	良好	暗青灰色	脚部に「十」ヘラ記号あり、重ね焼き痕あり
80-114	須恵器	高坏	-	-	脚内面しぼり目	～1mmの白色砂粒含む	良好	淡青灰色	
81-115	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	～1mmの砂粒わずかに含む	良好	青灰色	
81-116	須恵器	坏蓋	(15.3)	-	回転ヘラケズリ	～2mmの砂粒含む	良好	灰白色	内面墨付着　転用硯で使用により磨滅
81-117	土師器	甕	(23.4)	-	「く」字状単純口縁	～1mmの砂粒をやや多く含む	良好	暗灰褐色	
81-118	土師器	甕	(19.3)	-	「く」字状単純口縁	～2mmの白黒褐色砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	外面煤付着
81-119	製塩土器	焼塩壺	(12.3)	-	指押さえ	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	全体的に煤付着
81-120	製塩土器	焼塩壺	(14.0)	-	指押さえ	～2mmの細かい石英含む	良好	淡褐色	口縁がいびつに変形する 下半被熱し赤褐色に
82-121	須恵器	坏	(11.4)	4.3	回転糸切り	～3mmの砂粒含む	良好	灰白色	
82-122	須恵器	皿	13.3	2.6	回転糸切りのち一部ナデ	密、～1mmの砂粒含む	良好	淡青灰色	内面墨付着 転用硯か
82-123	須恵器	高台付坏	(11.1)	4.7	回転糸切り	～3mmの砂粒を少し含む	良好	青灰色	
82-124	須恵器	高台付坏	(19.8)	3.8	外反する口縁部	密	良好	灰色	外面高台内墨付着 転用硯
82-125	須恵器	高台付皿	-	-	ヘラ切りか	～1mmの白色砂粒少し含む	良好	青灰色	内面に墨付着　転用硯か
82-126	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	細かい砂粒含む	普通	灰白色	墨書「□」あり
82-127	須恵器	高台付坏	-	-	回転ヘラケズリ	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	墨書「□」あり
82-128	須恵器	高台付壺	-	-	高台剥離面にタタキ転写	～1mmの砂粒含む	良好	暗青灰色	高台部外面にヘラ記号「×」あり内面に自然釉付着
82-129	須恵器	長頸壺	-	-	内外面に絞り目残る	～1mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
82-130	須恵器	焼台形土器	-	-	頂部器壁薄いが閉塞	～1mmの白色砂粒含む	良好	青灰色	
82-131	製塩土器	焼塩壺	(13.7)	-	指押さえ	細かい砂粒含む	良好	暗灰褐色	
82-132	製塩土器	焼塩壺	(11.8)	-	指押さえ	2mm台の砂粒含む	良好	黒色	型作りで生じる縦皺あり 外面煤付着
82-133	製塩土器	焼塩壺	(12.2)	-	指押さえ	わずかに砂粒含むが密	良好	淡褐色	
82-134	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目8本／1cm	密	普通	赤褐色	
82-135	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目	密	普通	赤褐色	
82-136	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目9本／1cm	密	良好	淡茶褐色	
82-137	製塩土器	焼塩壺	-	-	布目9本／1cm	密	普通	淡赤褐色	
87-1	須恵器	坏	11.8	5.0	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	普通	淡青灰色	
87-2	須恵器	坏	10.0	4.3	回転糸切り	～2mmの白色砂粒少し含む	良好	青灰色	
87-3	須恵器	坏	10.9	4.0	回転糸切り	3mm大の長石含む	良好	青灰色	墨書「平」 外面に重ね焼き痕
87-4	土師器	高台付坏	12.6	3.9	ヘラ切りか	2mm大の石英含む	不良か	淡褐色	内外面一部に淡赤褐色顔料塗布
87-5	瓦	丸瓦	-	-	行基式、縄目タタキのちナデ	2～3mm大の石英含む	良好	暗青灰色	
89-1	土師質土器	高台付坏	14.2	6.1	回転糸切り	密、2mm大の砂粒含む	普通	淡褐色	
89-2	土師質土器	高台付坏	-	-	ヘラ切りか	細かい砂粒含む	不良	灰褐色	
89-3	土師質土器	高台付坏	-	-	切り離し風化で不明	～2mm大の砂粒含む	不良	灰白色	
89-4	土師質土器	高台付坏	-	-	切り離し風化で不明	～3mm大の砂粒多く含む	良好	灰褐色	
89-5	土師質土器	坏	13.4	3.5	回転糸切り	～3mm大の砂粒含む	良好	茶褐色	
89-6	土師質土器	坏	12.4	4.1	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	橙褐色	
89-7	土師質土器	坏	12.8	4.6	回転糸切り	密	良好	灰褐色	
90-1	土師質土器	高台付坏	12.2	5.6	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	灰褐色	
90-2	土師質土器	高台付坏	12.4	6.0	底部回転ナデ調整	～3mm大の砂粒多く含む	普通	淡褐色	
90-3	土師質土器	高台付坏	-	-	糸切り痕	細かい砂粒含む	普通	淡褐色	
90-4	土師質土器	高台付坏	15.0	7.0	切り離し不明	3mm大の砂粒含む	普通	灰褐色	
90-5	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	淡褐色	
90-6	土師質土器	高台付坏	-	-	切り離し風化で不明	3～5mm大の砂粒含む	不良	赤褐色	
90-7	土師質土器	坏	11.2	4.4	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	灰褐色	
90-8	土師質土器	坏	12.2	4.4	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	淡褐色	
90-9	土師質土器	坏	11.1	4.1	回転糸切り	細かい砂粒含む	普通	淡褐色	
90-10	土師質土器	坏	12.9	4.2	回転糸切り	～2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	
90-11	土師質土器	坏	12.4	4.2	回転糸切り	密	やや不良	淡灰褐色	外面底部をのぞく全面に緑色顔料塗布
90-12	土師質土器	坏	11.9	4.2	回転糸切り	密	良好	灰白色	
90-13	土師質土器	坏	11.6	4.4	回転糸切り	～3mm大の砂粒含みやや粗い	不良	赤褐色	
90-14	土師質土器	坏	11.6	4.4	回転糸切り	細かい砂粒わずかに含む	やや不良	淡褐色	
90-15	土師質土器	坏	(11.8)	-	ヘラ切り	密	普通	淡褐色	
90-16	土師質土器	坏	11.4	3.7	回転糸切り	細かい砂粒含む	やや不良	赤褐色	
90-17	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	～3mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	
90-18	土師質土器	皿	12.0	1.6	切り離し不明	細かい砂粒含む	普通	灰褐色	
90-19	土師質土器	坏	13.0	4.5	回転糸切り	密	普通	淡褐色	
90-20	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	密	普通	淡褐色	墨書「□〔御カ〕」あり
90-21	土師質土器	坏	-	-	外傾する体部	密	普通	淡褐色	墨書「□□」あり
90-22	緑釉陶器	碗	(12.4)	-	端反り口縁	緻密	良好	灰白色	施釉(淡緑色) 京都産
90-23	緑釉陶器	碗	(11.7)	-	稜椀	緻密	良好	灰白色	施釉(淡緑色) 京都産
90-24	須恵器	坏	(11.0)	-	外傾する口縁	細かい砂粒含む	不良	灰白色	
90-25	須恵器	高台付坏	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	不良	灰白色	
90-26	須恵器	壺	-	-	肩部斜行刺突文	細かい砂粒含む	良好	暗青灰色	内面に墨付着　破片を転用硯にしたものか
92-1	須恵器	坏蓋	14.4	2.2	回転ヘラケズリ	砂粒をわずかに含む	良好	青灰色	
92-2	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	1～2mmの砂粒を含む	良好	灰色	
92-3	須恵器	坏	11.0	4.0	回転糸切り	砂粒を多く含む	良好	青灰色	
92-4	須恵器	坏	(12.0)	3.9	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	青灰色	外面に重ね焼き痕あり
92-5	須恵器	坏	(10.4)	3.6	回転糸切り	1mm大の砂粒少し含む	良好	青灰色	
92-6	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	砂粒をほとんど含まない	良好	灰色	内面に墨付着 転用硯
92-7	須恵器	皿	(15.0)	2.3	回転糸切り	砂粒少し含む	良好	灰色	内面に墨付着 転用硯
92-8	須恵器	皿	(14.4)	2.5	回転糸切り	密、1mm大の砂粒含む	不良	黄灰色	
92-9	須恵器	皿	13.0	3.0	回転糸切り	2～3mm大の砂粒含む	良好	青灰色	墨書「館」あり
92-10	須恵器	皿	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	普通	紫灰色	墨書「□」あり
92-11	須恵器	高台付皿	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	青灰色	内外面に重ね焼き痕あり

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
92-12	須恵器	高台付皿	(17.3)	3.9	外傾する口縁	細かい砂粒少し含む	良好	青灰色	
92-13	須恵器	高台付皿	-	-	回転糸切り	砂粒を少し含む	良好	青灰色	内面底部ヘラ描き文字「□」転用硯
92-14	須恵器	高坏	-	-	脚部透孔あり	～2.5mm大の砂粒含む	良好	淡黄灰色	内面重ね焼き痕あり
92-15	須恵器	長頸壺	-	-	静止糸切り	1mm大の砂粒少し含む	良好	濃青灰色	
92-16	須恵器	短頸壺	3.1	8.3	静止糸切り	微細砂粒、長石、石英少し含む	良好	淡青灰色	肩部に2本の沈線と2つの方形透孔あり
92-17	須恵器	円面硯	-	-	脚部　透孔あり	密	良好	暗青灰色	方形透孔24孔程度か
92-18	須恵器	鉢	(54.0)	-	把手付き	1mm大の砂粒、長石含む	良好	青灰色	
94-1	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	細かい砂粒含む	良好	暗青灰色	
94-2	須恵器	坏蓋	(19.3)	-	回転ヘラケズリのちナデ	～2.5mm の砂粒含む	良好	青灰色	内面転用硯で使用のため磨滅重ね焼き痕あり
94-3	須恵器	坏	(13.0)	3.6	回転糸切り	細かな砂粒含む	良好	青灰色	
94-4	須恵器	高台付坏	-	-	回転糸切り	0.5mm大の砂粒含む	やや不良	淡青灰色	
94-5	須恵器	皿	-	-	調整風化により不明	3mm大の砂粒含む	やや甘い	黄灰色	墨書「□〔一カ〕」あり
94-6	須恵器	高台付坏	-	-	回転糸切り	～1mm大の砂粒含む	不良	青灰色	
94-7	須恵器	高台付皿	(18.2)	3.5	回転ヘラケズリのちナデか	2mm大の砂粒多く含む	良好	暗青灰色	
94-8	須恵器	高台付皿	(21.6)	3.6	回転糸切り	～1mm の砂粒含む	不良	明橙色	内面に黒色物付着 墨か
94-9	須恵器	高坏	-	-	脚端部肥厚 頸部外面に	～0.5mm の砂粒含む	良好	暗灰色	
94-10	須恵器	長頸壺	-	-	2条沈線	ごく微細な砂粒少し含む	良好	青灰色	内面自然釉付着
96-1	須恵器	坏蓋	12.5	4.3	外面に鈍い稜	細かい砂粒含む	良好	青灰色	
96-2	須恵器	高坏	-	-	長脚1段透かし	～4mm大の砂粒含む	不良	淡褐色	透孔は2方向
96-3	須恵器	高坏	17.6	-	線状の透かし	微細砂粒少し含む	良好	暗青灰色	線状透孔は3方向
96-4	須恵器	高台付坏	14.0	4.2	回転糸切り	1mm大の砂粒含む	良好	青灰色	内面中央に具痕跡あり 外面自然釉付着
96-5	須恵器	坏	14.0	4.2	回転糸切りか	0.5mm大の砂粒含む	不良	淡褐色	外面重ね焼き痕あり
96-6	須恵器	坏・皿	-	-	回転糸切り	密	良好	青灰色	墨書「館」あり
96-7	須恵器	皿	(22.0)	-	回転ヘラケズリ	石英などの砂粒わずかに含む	良好	青灰色	
96-8	土師器	坏	14.4	5.5	器高高い 外面ミガキ	細かい砂粒含む	不良	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
96-9	土師器	坏	12.6	(4.5)	底部ケズリか	密、～2mm の砂粒含む	不良	淡褐色	
96-10	土師器	高台付皿	20.5	3.6	回転ヘラケズリのちナデ	砂粒をほとんど含まない	やや甘い	白褐色	内外面に赤色顔料塗布
98-1	須恵器	坏蓋	15.2	3.2	回転糸切りのち回転ヘラケズリ	細かい砂粒や大粒の長石含む	不良	黄灰色	
98-2	須恵器	坏蓋	15.0	2.5	静止糸切りのち回転ヘラケズリ	～1mm の砂粒含む	やや不良	淡灰色	内面に墨付着 転用硯
98-3	須恵器	坏蓋	15.1	2.5	回転ヘラケズリ	～1mm の砂粒含む	やや不良	淡青灰色	
98-4	須恵器	坏蓋	15.6	2.4	自然釉で調整不明	砂粒をほとんど含まない	良好	青灰色	内面転用硯で使用し磨滅 外面頂部に自然釉付着
98-5	須恵器	坏蓋	15.0	2.7	静止糸切りのち回転ヘラケズリ	～2mm の砂粒少し含む	良好	暗青灰色	内面に墨付着 転用硯
98-6	須恵器	坏蓋	14.4	2.8	回転ヘラケズリ	1ミリ大の砂粒含む	良好	青灰色	内面に墨付着 転用硯
98-7	須恵器	坏蓋	14.5	-	回転ヘラケズリ	密、～3mm の砂粒含む	良好	暗青灰色	内面わずかに墨付着やや滑らか　転用硯か
98-8	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	～3mm の砂粒少し含む	良好	青灰色	内面に墨付着 転用硯
98-9	須恵器	坏蓋	-	-	回転ヘラケズリ	密～3mm の砂粒含む	良好	灰色	内面に墨付着 転用硯
98-10	須恵器	坏蓋	(16.5)	-	自然釉で調整不明	1ミリ大の砂粒含む	良好	淡青灰色	内面に墨付着 転用硯
98-11	須恵器	坏蓋	(16.2)	-	口縁にかえり	～1mm の砂粒含む	良好	青灰色	
98-12	須恵器	坏	14.2	4.7	静止糸切り	微細な砂粒含む	良好	青灰色	外面重ね焼き痕あり 外面底部中央墨痕あり
98-13	須恵器	坏	12.9	3.8	回転糸切り	～2mm の砂粒少し含む	良好	青灰色	外面に重ね焼き痕あり
98-14	須恵器	高台付坏	13.3	4.6	底部外面回転ナデ	～1mm の白色砂粒含む	良好	青灰色	内面に墨付着 転用硯
98-15	須恵器	高台付坏	13.5	4.5	静止糸切り	～1mm の砂粒を含む	良好	淡青灰色	
98-16	須恵器	高台付坏	13.6	4.8	静止糸切り	密、～3mm の砂粒含む	良好	暗青灰色	
98-17	須恵器	高台付坏	13.6	5.1	静止糸切り	～6mm の砂粒少し含む	良好	淡青灰色	
98-18	須恵器	高台付坏	13.7	4.5	底部外面回転ナデ	4mm大の小石含む	良好	青灰色	外面底部「○」印の刻印あり
98-19	須恵器	高台付坏	14.4	5.0	静止糸切り	微細な砂粒含む	良好	暗青灰色	
98-20	須恵器	高台付坏	14.7	4.3	回転ヘラケズリ	微細な砂粒含む	良好	灰色	墨書「中」あり　口縁部に煤状付着物　灯明皿か
98-21	須恵器	皿	(14.6)	3.2	回転糸切り	微細な砂粒含む	良好	淡青灰色	
98-22	須恵器	高台付坏	18.7	6.1	底部外面回転ナデ	0.5～1mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
99-23	須恵器	短頸壺	12.0	11.8	粗く乱れた波状文	～2mm の砂粒少し含む	不良	灰白色	
99-24	須恵器	直口壺	10.6	16.3	底部ナデ周囲にケズリ	1ミリ大の砂粒含む	良好	青灰色	
99-25	須恵器	短頸壺	9.0	13.4	静止糸切り後ケズリ	0.5mm大の砂粒多く含む	良好	青灰色	
99-26	須恵器	直口壺	6.0	8.7	回転糸切り	1mm大の砂粒含む	良好	暗青灰色	肩部に灰をかぶる 一部に布目圧痕あり
99-27	須恵器	短頸壺	7.6	8.1	回転ヘラケズリ	～2mm の砂粒、小石含む	良好	青灰色	
99-28	須恵器	短頸壺	8.8	10.0	回転糸切り	～2mm大の砂粒含む	良好	灰白色	肩部に緑色の自然釉付着
99-29	須恵器	鼎	(5.5)	-	回転糸切り	微細な砂粒含む	良好	青灰色	外面自然釉付着
99-30	須恵器	長頸壺	8.9	20.7	静止糸切り	微細な砂粒含む	良好	暗青灰色	
99-31	須恵器	長頸壺	10.3	-	静止糸切り	～2mm大の砂粒少し含む	良好	暗青灰色	頸部、胴部に灰をかぶる　高台付
99-32	須恵器	長頸壺	-	-	頸部にしぼり目	～1mm の砂粒含む	良好	紫紅色	頸部、胴部に薄く自然釉付着
99-33	須恵器	長頸壺	-	-	回転糸切りか	1ミリ大の砂粒含む	良好	青灰色	内面底部と外部全面に自然釉付着　高台付
99-34	須恵器	壺	-	-	胴部下半タタキ	密、～3mm の砂粒含む	良好	暗青灰色	

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
100-35	土師器	坏	13.8	3.3	静止ケズリか	1ミリ大の砂粒含む	やや不良	暗赤褐色	内外面に赤色顔料塗布
100-36	土師器	坏	15.9	-	静止ケズリか	～1mm の砂粒わずかに含む	良好	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
100-37	土師器	坏	15.8	4.3	静止糸切り後回転ケズリ	1ミリ大の砂粒含む	良好	赤褐色	内外面に赤色顔料塗布
100-38	土師器	坏	14.4	4.1	回転ヘラケズリ	～1mm の砂粒少し含む	やや不良	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
100-39	土師器	坏	-	-	静止糸切り後回転ケズリ	密	良好	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
100-40	土師器	高台付坏	(15.0)	3.4	底部風化により不明	密～0.5mm の砂粒含む	良好	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
100-41	土師器	高台付坏	13.0	3.6	底部風化により不明	砂粒わずかに含む	やや不良	赤褐色	底部を含め内外面に赤色顔料塗布
100-42	土師器	高台付坏	15.7	3.8	静止ケズリ	密、0.5mm の砂粒含む	良好	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
100-43	土師器	高台付坏	-	-	静止ケズリ	～1mm の砂粒わずかに含む	良好	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
100-44	土師器	高台付坏	-	-	静止ケズリ、ナデ	密	良好	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布 内面底部暗文　2重螺旋
100-45	土師器	皿	17.2	3.0	静止糸切り	1mm大の小石少し含む	やや甘い	赤褐色	外面底部中央部ヘラ記号「X」あり　内外面赤色顔料塗布
100-46	土師器	皿	20.2	3.0	静止ケズリ、回転ケズリ	1mm大の砂粒含む	やや甘い	赤褐色	内外面に赤色顔料塗布 内面底部暗文　6重の螺旋
100-47	土師器	皿	(18.8)	-	静止ケズリ	密、～1mm の砂粒含む	良好	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
100-48	土師器	皿	(17.0)	-	底部調整不明	密、～1mm の砂粒含む	やや不良	淡赤褐色	内外面に赤色顔料塗布
101-49	土師器	甕	(19.9)	-	「く」字状単純口縁	～2mm の砂粒多く含む	やや不良	淡灰褐色	
101-50	土師器	甕	(17.9)	-	「く」字状単純口縁	～1mm の砂粒多く含む	良好	淡褐色	外面煤付着
101-51	土師器	甕	(15.5)	-	「く」字状単純口縁	1ミリ大の砂粒多く含む	良好	暗灰褐色	
101-52	土師器	甕	(15.6)	-	「く」字状単純口縁	～1mm の砂粒多く含む	やや不良	淡赤褐色	
101-53	土師器	甕	(17.1)	-	「く」字状単純口縁	1mm大の砂粒多く含む	良好	淡灰褐色	
101-54	土師器	甕	(16.5)	-	「く」字状単純口縁	～2mm の砂粒多く含む	良好	黒褐色	
101-55	土師器	甕	(16.3)	-	「く」字状単純口縁	～1mm の砂粒多く含む	良好	暗褐色	外面煤付着
101-56	土師器	甕	(14.8)	-	「く」字状単純口縁	～2mm の砂粒多く含む	良好	暗茶褐色	
101-57	土師器	甕	(14.5)	-	「く」字状単純口縁	密、～1mm の砂粒含む	やや不良	乳褐色	
101-58	土師器	甕	(13.4)	-	無頸で口縁僅かに反る	～3mm の砂粒、大粒金雲母含む	良好	淡黄褐色	外面赤色顔料塗布か
101-59	土師器	甕	-	-	平底気味底部	1mm大の砂粒多く含む	良好	灰褐色	外面煤付着
103-1	瓦	軒丸瓦	16.0	-	5弁花弁、唐草、珠文帯	3mm大の砂粒含む	不良	灰白色	出雲国分寺軒丸瓦第二類
103-2	土師質土器	坏	(12.0)	4.2	回転糸切り	～1mm の砂粒少し含む	良好	淡黄褐色	
103-3	土師質土器	坏	(13.0)	-	外傾する口縁	3mm大の小石含む	良好	黄褐色	
103-4	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	～1mm の砂粒少し含む	良好	淡褐色	
103-5	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	細かい砂粒わずかに含む	普通	淡褐色	
103-6	土師質土器	高台付坏	14.8	6.3	足高高台付き	細かい砂粒含む	良好	褐色	
103-7	土師質土器	高台付坏	-	-	足高高台付き	～1mm の砂粒含む	不良	淡褐色	
103-8	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切りのち回転ナデ	～1mm の砂粒含む	普通	淡黄灰色	
105-1	土師質土器	高台付坏	17.0	6.9	回転糸切りのち回転ナデか	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	
105-2	土師質土器	高台付坏	16.8	6.4	底部切り離し不明	2mm大の砂粒含む	良好	淡褐色	
105-3	土師質土器	高台付坏	(15.3)	6.1	回転糸切りのちナデか	～1mm の砂粒多く含む	良好	淡褐色	
105-4	土師質土器	高台付坏	(13.9)	6.6	回転糸切り	～2mm の砂粒少し含む	良好	淡褐色	
105-5	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切りのちナデか	～1mm の砂粒少し含む	良好	灰褐色	
105-6	土師質土器	高台付坏	-	-	底部切り離し不明	～1mm の砂粒含む	良好	赤橙色	
105-7	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切り	～1mm の砂粒含む	良好	淡褐色	
105-8	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切り	～2mm の砂粒多く含む	良好	淡褐色	
105-9	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切りのちナデか	～1mm の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
105-10	土師質土器	高台付坏	-	-	回転ナデか	～1mm の砂粒含む	良好	淡灰褐色	
105-11	土師質土器	高台付坏	-	-	底部切り離し不明	2mm大の砂粒含む	不良	淡褐色	
105-12	土師質土器	高台付坏	(13.9)	-	回転糸切りか	～1mm の砂粒含む	良好	橙褐色	
105-13	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切りのちナデか	細かい砂粒含む	普通	淡褐色	
105-14	土師質土器	高台付坏	(14.6)	6.1	回転糸切り	～1mm の砂粒含む	良好	淡橙褐色	
105-15	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切り	～1mm の砂粒少し含む	良好	淡黄褐色	
105-16	土師質土器	高台付坏	-	-	底部切り離し不明	～1mm の砂粒少し含む	不良	淡褐色	
105-17	土師質土器	高台付坏	-	-	底部切り離し不明	～2mm の砂粒少し含む	不良	橙色	
105-18	土師質土器	高台付坏	(15.1)	-	底部切り離し不明	～1mm の砂粒含む	良好	灰褐色	
105-19	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切り	2mm大の石英含む	普通	灰褐色	
105-20	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切りか	～0.5mm の砂粒含む	良好	淡灰褐色	
105-21	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切り底	～1mm の砂粒含む	良好	淡橙色	
105-22	土師質土器	高台付坏	-	-	部切り離し不明	～1mm の砂粒少し含む	良好	淡褐色	
105-23	土師質土器	高台付坏	-	-	底部切り離し不明	～2mm の砂粒少し含む	良好	灰褐色	
105-24	土師質土器	高台付坏	-	-	回転糸切り	～1mm の砂粒少し含む	良好	淡灰褐色	
105-25	土師質土器	高台付坏	(15.6)	-	回転糸切り	～4mm大の小石含む	不良	灰褐色	
105-26	土師質土器	高台付坏	(16.0)	-	回転糸切りのち回転ナデか	密	良好	淡褐色	
105-27	土師質土器	高台付坏	-	-	ナデか	～2mm の砂粒含む	良好	橙色	
106-28	土師質土器	坏	13.4	3.9	回転糸切り	2mm大の小石含む	良好	淡褐色	

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
106-29	土師質土器	坏	12.8	4.0	回転糸切り	2～3mm大の砂粒含む	普通	赤褐色	
106-30	土師質土器	坏	12.8	4.1	回転糸切り	細かい砂粒含む	普通	淡褐色	
106-31	土師質土器	坏	12.0	4.5	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	
106-32	土師質土器	坏	12.0	3.5	回転糸切り	密	良好	淡赤褐色	
106-33	土師質土器	坏	12.0	3.4	回転糸切り	密	普通	淡褐色	
106-34	土師質土器	坏	(12.5)	4.0	回転糸切り	細かい砂粒多く含む	良好	灰褐色	一部に黒斑あり
106-35	土師質土器	坏	12.4	4.1	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	
106-36	土師質土器	坏	(11.6)	4.5	回転糸切り	～5mmの小石少し含む	良好	淡橙褐色	
106-37	土師質土器	坏	12.2	4.0	回転糸切り	密	良好	灰褐色	
106-38	土師質土器	坏	12.2	4.2	回転糸切り	密	良好	淡褐色	
106-39	土師質土器	坏	11.8	3.9	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	
106-40	土師質土器	坏	(11.8)	4.2	回転糸切り	～1mmの砂粒含む	良好	淡褐色	
106-41	土師質土器	坏	12.4	3.9	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	灰褐色	
106-42	土師質土器	坏	12.0	3.9	回転糸切り	細かい砂粒含む	普通	淡褐色	
106-43	土師質土器	坏	12.4	3.9	回転糸切り	～2mm大の砂粒多く含む	やや不良	灰褐色	
106-44	土師質土器	坏	12.4	3.8	回転糸切り	細かい砂粒含む	不良	淡褐色	
106-45	土師質土器	坏	12.4	3.9	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	
107-46	土師質土器	坏	12.4	3.6	回転糸切り	密	良好	淡褐色	
107-47	土師質土器	坏	(12.8)	3.6	回転糸切りか	～2mmの砂粒少し含む	良好	淡灰褐色	
107-48	土師質土器	坏	11.4	4.0	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	普通	赤褐色	
107-49	土師質土器	坏	(11.4)	3.8	回転糸切り	～0.5mmの砂粒含む	良好	淡褐色	
107-50	土師質土器	坏	11.4	3.8	回転糸切り	2mm大の小石含む	不良	淡褐色	口径は～12.4cmでかなり歪
107-51	土師質土器	坏	11.2	4.2	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	淡褐色	
107-52	土師質土器	坏	11.7	4.1	回転糸切り	～1mmの砂粒含む	良好	淡褐色	
107-53	土師質土器	坏	(11.5)	3.9	回転糸切り	～1mmの砂粒少し含む	良好	淡橙色	
107-54	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	～3mm大の小石含む	やや不良	灰白色	
107-55	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	淡褐色	
107-56	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	～1mmの砂粒含む	良好	暗褐色	外面黒色物付着
107-57	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	～3mm大の小石わずかに含む	良好	灰褐色	
107-58	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	密	普通	灰褐色	内面黒褐色物付着
107-59	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	密	良好	淡褐色	
107-60	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	普通	淡褐色	
107-61	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	～1mmの砂粒少し含む	良好	淡褐色	
107-62	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	～1mmの砂粒含む	良好	淡灰褐色	
107-63	土師質	鍋	(32.8)	-	口縁部肥厚	2～3mm大の砂粒含む	普通	淡褐色	口縁部煤付着
108-64	緑釉陶器	碗	(15.0)	-	口縁端反り	密	良好	灰白色	施釉(淡緑色)京都産
108-65	緑釉陶器	碗	-	-	貼り付け高台	密	良好	灰白色	施釉(淡緑色)東海猿投産
108-66	須恵器	高台付坏	15.2	5.8	回転糸切り	密、一部小石含む	不良	灰白色	口縁内外面淡黒灰色の瓦質
108-67	須恵器	坏身	(13.0)	3.5	回転糸切り	3mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
108-68	須恵器	高台付坏	(16.4)	8.5	回転糸切りか	砂粒をほとんど含まない	不良	黒灰色	一部瓦質化
108-69	須恵器	壺	-	-	頸部突帯1条	2mm大の砂粒わずかに含む	良好	暗灰色	
108-70	須恵器	壺	-	-	大きく開く頸部	細かい砂粒わずかに含む	良好	暗灰色	一部瓦質化
108-71	須恵器	平瓶	-	-	縞状にカキメ	細かい石英含む	良好	青灰色	
108-72	須恵器	壺	-	-	縞状にカキメ	細かい石英含む	良好	青灰色	
108-73	須恵器	壺	-	-	壺胴部下半	密、一部7mm大の小石含む	良好	青灰色	
108-74	須恵器	壺	-	-	内面2段に円形圧痕	～1mmの白色砂粒含む	良好	濃灰色	一部瓦質化
108-75	須恵器	風字硯	-	-	脚剥離痕あり	2mm大の石英含む	良好	青灰色	重ね焼き痕あり
108-76	須恵器	平瓶	-	-	肩部に突帯カキメ	密	良好	青灰色	
108-77	須恵器	風字硯	-	-	墨磨面を分割する縁部	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	脚付き底面に回転糸切り痕
108-78	須恵器	風字硯	-	-	脚付き縁部残る	2mm大の石英含む	良好	青灰色	内面に墨痕
109-79	瓦	軒丸瓦	16.0	-	5弁花弁、唐草,珠文帯	3mm大の石英他多く含む	不良	淡黒褐色	出雲国分寺軒丸瓦第二類
109-80	瓦	丸瓦	-	-	玉縁	～5mmの小石含む	良好	青灰色	須恵質
109-81	瓦	丸瓦	-	-	行基式	5mm大の小石含む	不良	灰褐色	
109-82	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	～4mm大の砂粒多く含む	良好	青灰色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KG　須恵質
109-83	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	4mm大の砂粒含む	不良	黄灰褐色	出雲国分寺平瓦タタキ分類KD
109-84	瓦	平瓦	-	-	格子タタキ	3mm大の砂粒含む	不良	黒褐色	中竹矢遺跡平瓦タタキ分類KA
109-85	瓦	平瓦	-	-	縄目タタキ	2mm大の砂粒含む	良好	茶褐色	

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
111-1	土師質土器	坏	16.5	5.3	回転糸切り	密、1mm大の石英含む	良好	淡褐色	底部切り離し後、筋状の圧痕あり
111-2	土師質土器	坏	15.4	4.8	回転糸切り	密、一部に2mm大の長石含む	良好	黒褐色	底部切り離し後、筋状の圧痕あり
111-3	土師質土器	坏	15.4	4.5	回転糸切り	密、2mm大の石英含む	良好	淡褐色	
111-4	土師質土器	坏	15.6	5.1	回転糸切り	密、～2mmの細かい砂粒含む	良好	灰褐色	底部一部切り離し後筋状の圧痕あり
111-5	土師質土器	坏	16.5	5.0	回転糸切り	密、2mm大の石英含む	良好	淡褐色	
111-6	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	内面に煤付着
111-7	土師質土器	坏	8.0	2.3	回転糸切り	細かい雲母、長石含む	良好	灰褐色	
111-8	土師質土器	坏	8.8	2.0	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	灰褐色	
111-9	土師質土器	坏	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	
111-10	土師質土器	皿	9.4	-	皿部　外反する口縁	2mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	柱状高台付
111-11	土師質土器	皿	-	-	回転糸切り	～2mm大の細かい砂粒含む	良好	灰褐色	柱状高台付
111-12	土師質土器	皿	-	-	回転糸切り	～2mm大の石英含む	良好	淡褐色	柱状高台付
111-13	土師質土器	皿	-	-	回転糸切り	2mm大の石英含む	良好	淡褐色	柱状高台付
111-14	土師質土師質	皿	-	-	回転糸切り	2～3mm大の砂粒含む	不良	淡褐色	柱状高台付
111-15	土師質土器	皿	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	普通	淡褐色	柱状高台付
111-16	土師質土器	皿	-	-	回転糸切り	2mm大の砂粒含む	良好	淡褐色	柱状高台付
111-17	白磁	碗	16.8	-	玉縁	精良、断面に微小の気泡あり	良好	黄白色	施釉(灰白色)Ⅳ類　口縁・体部から玉縁に釉たまりあり
111-18	白磁	碗	15.2	7.4	端反り口縁	精良	良好	黄白色	高台を除き施釉(灰白色)　V－2類
111-19	白磁	碗	(14.8)	-	端反り口縁	やや気泡あり	良好	灰白色	施釉(灰白色)V類
111-20	白磁	碗	(16.0)	-	端反り口縁	細かい気泡あり	良好	黄灰色	施釉(灰白色)V－2か Ⅶ類
111-21	白磁	碗	-	-	底部見込釉剥ぎ	黒色粒子多く含む	良好	灰白色	高台を除き施釉(灰白色)　Ⅵ類
111-22	白磁	皿	(12.8)	-	口縁部	精良、断面に微小の気泡あり	良好	淡黄褐色	施釉(暗黄褐色)Ⅵ類
111-23	白磁	皿	-	-	底部	緻密	良好	灰白色	施釉(淡灰緑色)V－1類
111-24	須恵器か	鉢	-	-	厚手の底部	精良～1mmの白粒子少し含む	良好	紫色	自然釉付着
122-5	弥生土器	壺	(16.4)	-	4条の凹線のちキザミ目	細かい砂粒含む	良好	灰褐色	外面に黒斑あり
122-6	弥生土器	壺か甕	-	-	平底　外面ミガキ	3mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	外面に黒斑あり
122-7	弥生土器	壺か甕	-	-	平底　外面ミガキ	6mm大の石英含む	良好	灰褐色	
122-9	須恵器	器台	-	-	波状文、浮文、三角形透孔	密	良好	淡青灰色	
122-10	須恵器	器台	-	-	波状文、三角形透孔	細かい砂粒含む	良好	淡青灰色	
122-11	須恵器	器台	-	-	波状文、三角形透孔	3mm大の白色砂粒含む	良好	青灰色	
122-12	須恵器	器台	-	-	波状文、三角形透孔	密	良好	青灰色	
122-13	土師器	甑	-	-	底部　蒸気孔3つ	3mm大の砂粒含む	良好	灰褐色	
122-14	土師器	甑	-	-	底部　蒸気孔3つ	4mm大の砂粒含む	普通	灰褐色	
122-15	土師器	甑	-	-	底部　蒸気孔4つ	密	良好	灰褐色	一部に黒斑あり
122-16	須恵器	高台付坏	(20.6)	-	回転ヘラケズりか	細かい砂粒含む	不良	黄灰色	
122-17	須恵器	短頸壺	10.8	9.6	回転糸切りのち粗いナデ	～4mm大の砂粒含む	良好	青灰色	外面屑部と内面底部に灰をかぶる　底部付近に大きな気泡あり
122-18	須恵器	坏	11.5	4.4	回転糸切り	～5mmの砂粒、小石含む	良好	暗青灰色	
122-19	須恵器	円面硯	(14.5)	-	墨磨面中央高い	2mm大の砂粒含む	良好	青灰色	
122-20	須恵器	円面硯	-	-	脚部　方形透孔あり	細かい砂粒含む	良好	青灰色	
122-21	須恵器	硯	-	-	獣脚	細かい砂粒含む	良好	暗青灰色	
122-22	青磁	碗	-	-	高台畳付に目跡	緻密	良好	淡灰色	施釉(灰青色)越州窯Ⅰ－2類
122-23	白磁	碗	-	-	削り出し高台	2mm大の砂粒含み粗い	良好	灰白色	施釉(内面一部灰白色)　Ⅳ－1a類
122-24	白磁	碗	-	-	削り出し高台	緻密	良好	灰白色	施釉(灰白色)Ⅱ－1か3類
123-25	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	～2.5mm大の砂粒、5mm大の小石含む	良好	灰色	墨書「牛」あり
123-26	須恵器	高台付坏	-	-	回転ヘラケズりのちナデ	微細な砂粒含む	良好	淡灰色	墨書「□〔各カ〕」あり
123-27	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	3mm大の砂粒含む	やや不良	紫灰色	墨書「寸」あり
123-28	須恵器	皿	-	-	底部切り離し不明	6mm大の小石含む	やや甘い	灰色	墨書「□〔館カ〕」あり
123-29	須恵器	坏蓋	-	-	外面回転ナデか	～2mm大の砂粒含む	良好	灰色	墨書「新」あり
123-30	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	細かい砂粒含む	良好	青灰色	墨書「□□〔館カ〕」あり
123-31	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	密	良好	明青灰色	墨書「□□〔津カ〕」あり
123-32	須恵器	坏	-	-	回転糸切り	～3mm大の砂粒を含む	良好	灰色	墨書「□」あり
123-33	瓦	丸瓦	-	-	縄目タタキか5弁花弁、唐	4mm大の砂粒含む	不良	灰白色	外面ヘラ描き「牛」あり出雲国分寺軒丸瓦第
123-34	瓦	軒丸瓦	15.7	-	草,珠文帯5弁花弁、唐	3mm大の砂粒含む	不良	暗灰色	二類出雲国分寺軒丸瓦第
123-35	瓦	軒丸瓦	15.7	-	草,珠文帯唐草、珠文	2mm大の石英含む	やや不良	灰白色	二類出雲国分寺軒丸瓦第
123-36	瓦	軒丸瓦	-	-	帯珠文帯	2mm大の砂粒含む	不良	灰褐色	二類出雲国分寺軒丸瓦第
123-37	瓦	軒丸瓦	-	-	唐草、珠文	2～3mm大の石英含む	良好	青灰色	二類出雲国分寺軒丸瓦第
123-38	瓦	軒丸瓦	-	-	帯	2mm大の石英含む	不良	灰褐色	二類

出雲国府跡玉作関係遺物観察表

挿図番号	出土地点	石材	製作段階	重量(g)	透明・半透明	特徴
115-1	4号溝	水晶	原石	197.7	半透明	六角柱原石の下端を折り取る
115-2	4号溝	水晶	原石	55.8	半透明	六角柱原石の下端を折り取る
115-3	第16トレンチ	水晶	原石	44	半透明	六角柱原石の下端を折り取る
115-4	1区	水晶	原石	8.47	透明	六角柱原石の下端を折り取る
115-5	7号土坑	水晶	原石	14.17	半透明	六角柱原石の下端を折り取る
115-6	第7トレンチ	水晶	原石	8.28	透明	六角柱原石の下端を折り取る
115-7	16号土坑	水晶	原石	33.53	透明	六角柱原石の下端を折り取る
115-8	3区	水晶	原石	54.3	透明	六角柱原石の両端に古い折れ
115-9	4区	水晶	荒割	42.48	透明	六角柱原石の下端を折り取る
115-10	3区	水晶	荒割	53.5	透明	六角柱原石の両端を折り、1側面を剥離する
115-11	4号溝	水晶	荒割	20.93	透明	六角柱原石の両端を折り取る
115-12	3区	水晶	荒割	11.77	透明	六角柱原石の両端を折り、1側面を剥離する
115-13	1区	水晶	荒割	15.16	透明	六角柱原石の両端を折り取る
115-14	1区	水晶	荒割・研磨	3.72	透明	六角柱原石の両端を折り、両端と稜線を研磨する
115-15	1区	水晶	荒割・敲打	4.95	透明	六角柱原石の先端部を打ち抜き下端を敲打
116-16	4号溝	水晶	荒割	140.01	透明	六角柱原石の両端を打ち抜き、2側面を剥離
116-17	3区	水晶	荒割	45.6	透明	六角柱原石の両端を折り、側面を2分割　一部敲打
116-18	1区	水晶	荒割	40.23	半透明	六角柱原石両端の折れは古い 1面に剥離痕あり
116-19	2区	水晶	荒割	14.74	透明	六角柱原石下端を折り取り、側面に沿って2分割
116-20	2区	水晶	荒割	25	透明	六角柱原石下端は古い折れ、側面に沿って2分割
116-21	3区	水晶	荒割	15.45	透明	六角柱原石の両端を折り取り、1側面を剥離
116-22	3区	水晶	荒割	19.95	透明	六角柱原石下端は古い折れ、側面に沿って2分割
116-23	3区	水晶	荒割	17.5	透明	六角柱原石側面に沿って2分割
116-24	1区	水晶	荒割	19.18	透明	六角柱原石下端は古い折れ、側面に沿って2分割
116-25	第20トレンチ	水晶	荒割	32.7	透明	六角柱原石の両端を折り、側面に沿って2分割
116-26	2区	水晶	荒割	9.02	透明	六角柱原石の両端を折り、1側面に薄い剥離
116-27	1区	水晶	荒割	16.17	透明	側面に自然面を一部残すが、かなり加工する
116-28	2区	水晶	荒割	12.6	透明	側面に自然面を一部残すが、かなり加工する
116-29	3区	水晶	荒割	17.81	透明	側面に自然面を一部残すが、かなり加工する
117-30	1区	水晶	形割	37.99	透明	側面に自然面を残すが、方柱状に調整　稜線に敲打痕あり
117-31	1区	水晶	形割	23.04	透明	側面に自然面を残すが、方柱状に調整
117-32	3区	水晶	形割	29.58	透明	板状の素材に調整されたもの 側面に敲打痕あり
117-33	2区	水晶	形割	10.78	透明	側面を割り、平玉状に成形
117-34	3区	水晶	形割	6.31	透明	水晶先端部の側面を割り、平玉状に成形
117-35	第6トレンチ	水晶	形割・調整剥離	10.3	透明	両側面に自然面を残すが、平玉状に成形　上面を調整剥離
117-36	1区	水晶	形割	6.32	透明	側面に大きな自然面残すが平玉状に成形
117-37	1区	水晶	形割・調整剥離	16.57	透明	上面に大きな自然面残すが、周縁を調整剥離して平玉状に成形
117-38	3区	水晶	調整剥離	8.71	透明	僅かに自然面を残すが、細長く調整剥離　平玉意識するか
117-39	3区	水晶	調整剥離・敲打	4.4	透明	一部自然面を残すが平玉状に成形　一部敲打痕あり
117-40	第19トレンチ	水晶	調整剥離	1.96	透明	薄く剥離を加えて、平玉状に成形
117-41	4区	水晶	調整剥離・敲打	3.6	透明	調整剥離で平玉状に成形 一部に敲打痕あるが1／2が欠損
117-42	第5トレンチ	水晶	調整剥離・敲打	2.21	透明	調整剥離し平玉状に成形 一部敲打痕あり
117-43	13号土坑	水晶	調整剥離・敲打	9.58	透明	平玉状に調整剥離 敲打・研磨痕あり
117-44	1区	水晶	調整剥離	15.43	透明	自然面残すが、調整剥離をして丸玉状に成形
117-45	1区	水晶	調整剥離	7.35	透明	僅かに自然面残すが、調整剥離をして丸玉状に成形
117-46	1区	水晶	調整剥離	8.18	透明	自然面残すが、調整剥離をして丸玉状に成形
117-47	3号建物跡	水晶	敲打	5.86	透明	丸玉状に成形され、敲打調整
117-48	16号土坑	水晶	調整剥離・敲打	3.85	透明	自然面残すが、調整剥離をして丸玉状に成形　一部に敲打痕
117-49	4号溝	水晶	調整剥離・敲打	7.23	透明	自然面を残すが、丸玉状に調整剥離　敲打・研磨を加えたもの
117-50	3区	水晶	調整剥離・敲打	12.75	透明	自然面多く残すが、調整剥離し一部に敲打
117-51	4区	水晶	調整剥離・敲打	9.74	透明	調整剥離の後、一部を敲打
117-52	4号溝	水晶	調整剥離・敲打	1.7	透明	丸玉状に調整剥離 敲打・研磨されるが、欠損
118-53	第7トレンチ	水晶	調整剥離・敲打	13.28	透明	丸玉状に調整剥離 一部に敲打痕あり
118-54	2区	水晶	調整剥離・敲打	11.75	透明	丸玉状に調整剥離 一部に敲打痕あり
118-55	2区	水晶	敲打・研磨	8.75	透明	丸玉状に成形され、敲打・研磨を加えたもの
118-56	3区	水晶	調整剥離・敲打	11.82	透明	丸玉状に調整剥離 一部に敲打痕あり
118-57	3区	水晶	敲打・研磨	4.92	透明	丸玉状に成形され、敲打・研磨を加えたもの
118-58	3区	水晶	敲打・研磨	7.63	透明	丸玉状に成形され、敲打・研磨を加えたもの
118-59	2区	水晶	研磨	6.36	透明	丸玉状に成形され、研磨
118-60	2区	水晶	研磨	4.2	透明	丸玉状に成形され、研磨
118-61	第6トレンチ	水晶	平玉	1.89	半透明	丁寧に研磨される
118-62	第6トレンチ	石英	丸玉	4.03	不透明	丁寧に研磨　2／3欠損
118-63	2区	碧玉	平玉	0.68	－	中央に剥離面僅かに残る 研磨痕が顕著
118-64	第6トレンチ	水晶	形割	13.2	透明	自然面を側面に残しながら勾玉状に成形
118-65	3区	水晶	形割	10.46	透明	側縁を打ち欠き、勾玉状に成形 研磨痕あり
118-66	3区	水晶	調整剥離	17.7	透明	自然面を大きく残す 一部側縁を打ち欠き勾玉状に成形
118-67	4区	碧玉	荒割	104.37	－	板状に荒割りされる
118-68	2区	碧玉	調整剥離	7.55	－	調整剥離により、平玉状に成形
118-69	第7トレンチ	赤カド石	丸玉	1.53	－	研磨が加えられるが、欠損
118-70	1区	水晶	敲石	88.75	半透明	稜を中心に顕著な敲打痕あり
118-71	2区	碧玉	敲石	158.14	－	周縁に顕著な敲打痕あり

挿図番号	出土地点	種別	石材	重量(kg)	特徴
22-28	苗代田	筋砥石	流紋岩	8.2	長さ33cm・幅10～17cm・厚さ11cm 3面を使用、1面は剥離
119-72	3号建物跡	筋砥石	細粒花崗岩	11.8	長さ34.0cm・幅16.0cm・厚さ12.0cm 4面を使用
119-73	3号建物跡	筋砥石	細粒花崗岩	11.5	長さ35.5cm・幅18.5cm・厚さ13.0cm 3面を使用するが、溝は2面　一部被熱
119-74	3号建物跡	砥石	砂岩	2.9	長さ13.0cm・幅14.7cm・厚さ9.2cm 3面に窪み　1面は砥面で利器痕
119-75	3号建物跡	筋砥石	細粒花崗岩	9.1	長さ33.0cm・幅19.7cm・厚さ19.5cm 3面を使用　破損後の1面を使用
119-76	5号土坑	筋砥石	細粒花崗岩	2.1	長さ9.5cm・幅17.5cm・厚さ8.0cm 3面を使用　破損
119-77	4号溝	筋砥石	細粒花崗岩	3.9	長さ23.5cm・幅13.0cm・厚さ12.0cm 1面を使用　破損
119-78	4号溝	筋砥石	細粒花崗岩	2.6	長さ15.5cm・幅13.5cm・厚さ12.0cm 2面を使用するが溝は1面　破損
120-79	4号溝	筋砥石	細粒花崗岩	7.65	長さ20.3cm・幅16.3cm・厚さ14.0cm 3面を使用　破損
120-80	2区	筋砥石	細粒花崗岩	3.6	長さ17.1cm・幅13.0cm・厚さ11.0cm 3面を使用するが、溝は2面　破損
120-81	1区	筋砥石	細粒花崗岩	16.1	長さ31.5cm・幅19.0cm・厚さ16.5cm 2面を使用するが、溝は1面
120-82	4区	筋砥石	細粒花崗岩	11.5	長さ37.0cm・幅17.5cm・厚さ13.0cm 端部を含め4面を使用するが、溝は3面
120-83	3区	筋砥石	細粒花崗岩	0.42	長さ10.0cm・幅5.3cm・厚さ5.3cm 4面を使用 破損
120-84	9号土坑	筋砥石	細粒花崗岩	5.4	長さ32.5cm・幅12.4cm・厚さ6.7cm 3面を使用 溝は2面
120-85	3区	筋砥石	細粒花崗岩	0.42	長さ8.5cm・幅7.0cm・厚さ5.2cm 4面を使用
120-86	第6トレンチ	筋砥石	細粒花崗岩	1.74	長さ11.0cm・幅11.0cm・厚さ10.0cm 端部を含め、4面を使用、溝は3面
121-87	3号溝	筋砥石	細粒花崗岩	1.14	長さ12.0cm・幅11.0cm・厚さ6.30cm 2面を使用、破損後破面を使用
121-88	5号土坑	筋砥石	細粒花崗岩	1.06	長さ10.5cm・幅11.0cm・厚さ9.0cm 1面を使用、破損
121-89	第20トレンチ	筋砥石	細粒花崗岩	6.6	長さ26.5cm・幅16.5cm・厚さ14.5cm 2面を使用、1面に溝
121-90	3区	平砥石	流紋岩	0.85	長さ18.0cm・幅13.0cm・厚さ8.2cm 1面を使用
121-91	3区	平砥石	流紋岩	0.11	長さ6.2cm・幅6.4cm・厚さ1.8cm 2面を使用　破損
121-92	第4トレンチ	平砥石	珪化木	0.05	長さ6.9cm・幅4.9cm・厚さ1.1cm 2面を使用　破損
121-93	第6トレンチ	砥石	珪化木	0.01	長さ4.5cm・幅2.1cm・厚さ0.7cm 1面を使用　破損
121-94	第7トレンチ	砥石	凝灰岩	0.015	長さ4.7cm・幅3.9cm・厚さ0.7cm 1面を使用　破損

出雲国府跡金属器生産関係遺物観察表

1．調査手順

金属器生産関係遺物については、その種類・性格を把握するため、肉眼観察による考古学的な遺物の分類を行った。この中から各遺物を代表し、分析可能な資料を金属学的な分析が必要なものとして抽出し、資料観察表と実測図の作成、写真撮影を行った。

なお、資料観察表の作成及び分析資料の切断個所については、穴沢義功氏の指導・協力を得た。

2．遺物観察表の見方

遺物観察表は、製鉄関連遺物の検討で使用されている様式を用いている。主な項目の見方は以下のとおりである。

（1）遺物種類　金属学的調査を行う前に、考古学的観察によって判定した遺物の種類である。

（2）法　　量　資料の現状における最大長・最大幅・最大厚・重量を計測したものである。

（3）磁 着 度　鉄滓分類用の標準磁石を用いて、資料との反応を1から8までの数字で表現したもので、数値が大きいほど磁性が高い。

（4）遺 存 度　資料が完形品か破片かを記す。

（5）破 面 数　資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。

（6）メタル度　小形金属探知器による金属鉄の残留度数で、基準感度は次のとおりである。

H（○）：Hは最高感度でごく小さな金属が残留することを示す。

M（◎）：Mは標準感度で一般的な大きさの金属が残留ことを示す。

L（●）：Lは低感度でやや大きな金属が残留することを示す。

（7）分　　析　どの項目について分析を行うかを○で示す。

（8）所　　見　外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔、その他付着物の状況について記す。

（9）分析個所　資料をどのような目的で、調査分析するかを記す。また、分析位置は観察表下の図面に矢印で示す。

出雲国府跡金属器生産関係遺物分析一覧表

No	地区名	遺構名	遺物種類	重量(g)	磁着度	メタル度	分析コメント	マクロ	検鏡	硬度	CMA	X線回折	化学分析	耐火度	カロリー	非破壊	断面樹脂	分析位置指定	採取方法	観察	集合写真	モノクロ	カラー	実測図	前含浸	X線透過
1	T2	1号溝	不明滓	25.5	2	なし	滓部を中心として	－	○	－	－	－	○	－	－	－	－	長軸端部1/2	直線状の切断	○		○	○	○	－	－
2	4区	4号溝	椀形鍛冶滓(中)	706.0	5	なし	滓部を中心として	－	○	－	－	○	○	－	－	－	－	長軸端部1/6	L字状の切断	○		○	○	○	－	－
3	T5		椀形鍛冶滓(小)	174.4	2	なし	滓部を中心として	－	○	－	－	○	○	－	－	－	－	長軸端部1/3	直線状の切断	○		○	○	○	－	－
4	T7	4号溝	炉壁(溶解炉?)	53.2	1	なし	炉壁として	－	○	－	－	○	－	○	－	－	－	長軸端部1/3	直線状の切断	○		○	○	○	－	－
5	T7	4号溝	炉壁(青銅系?)	41.3	1	なし	滓部を中心として	－	◎	－	－	○	－	○	－	－	－	短軸端部1/2	直線状の切断	○		○	○	○	－	－
6	T7		坩堝(青銅系)	20.9	1	なし	滓部を中心として	－	○	－	－	○	－	○	－	－	－	長軸端部1/2	直線状の切断	○		○	○	○	－	－
7	4区	4号溝	坩堝(青銅系)	687.6	1	L(●)	滓部を中心として	－	－	－	－	－	－	－	－	○	－	非破壊	非破壊	○		○	○	○	－	－
8	T6	2号溝	銅塊	23.3	1	L(●)	メタル部を中心に	－	－	○	－	－	－	○	－	－	○	短軸端部1/5	直線状の切断	○		○	○	○	－	－
9	T7	4号溝	羽口	51.2	2	なし	滓部を中心として	－	◎	－	－	○	－	○	－	－	－	短軸端部1/2	直線状の切断	○		○	○	○	－	－
10	T7	4号溝	羽口(青銅系)	27.4	1	なし	滓部を中心として	－	○	－	－	○	－	○	－	－	－	短軸端部1/2	直線状の切断	○		○	○	○	－	－

資料番号　1

出土状況	遺跡名	出雲国府跡	遺物No		分析	項目	滓	メタル
	出土位置	1号溝	時期・根拠	古墳時代：出土遺物		マクロ		
試料記号	検鏡：IZK-1	法量 長さ 3.8cm	色調	表:暗青灰色 / 遺存度 破片		検鏡	○	
	化学：IZK-1	幅 3.3cm		地:灰黒色～灰色 / 破面数 4		硬度		
	放射化：－	厚さ 1.2cm				CMA		
						X線回折		
						化学	○	
						耐火度		
遺物種類（名称）	不明滓	重量 25.5g	磁着度	2 / 前含浸 －		カロリー		
			メタル度	なし / 断面樹脂 －		放射化		
						X線透過		

観察所見　灰色を呈する厚さ0.6cmと薄い被熱した粘土の上に、暗青灰色で厚さ0.6cmの滓が面的に固着しており、炉底または炉壁面に付着した滓と考えられる。下面の粘土部分はやや湾曲しており、発泡して僅かに気孔が見られる。滓様のものは一部に4mmほどの流れたような黒っぽい部分を残している。小片のわりに重量感があるが、メタルはなかった。

分析部分　長軸端部1/2を直線状に切断し、不明滓として分析に用いる。残材返却。

備考　上面に出土地点の注記あり、注意のこと。

資料番号　2

出土状況	遺跡名	出雲国府跡	遺物No	SD04-418	分析	項目	滓	メタル
	出土位置	4号溝	時期・根拠	奈良時代：出土遺物		マクロ		
試料記号	検鏡：IZK-2	法量 長さ 14.8cm	色調	表:茶褐色 / 遺存度 一部破損		検鏡	○	
	化学：IZK-2	幅 10.0cm		地:淡黒褐色 / 破面数 2		硬度		
	放射化：－	厚さ 5.0cm				CMA		
						X線回折	○	
						化学	○	
						耐火度		
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（中）	重量 706.0g	磁着度	5 / 前含浸 －		カロリー		
			メタル度	なし / 断面樹脂 －		放射化		
						X線透過		

観察所見　平面は、現状で不整な長方形状を呈する緻密な椀形滓である。中央で2つに割れている他、周縁の欠損が見られる。下面左端部に炉床土と見られる粘土と溶解物が付着している部分がある。本来の椀形滓の形状を復元すると、長径13cmあまりの長楕円形になるものと考えられる。底面は炉底の形状を残し丸みを帯びているが、炉床土が一部残存している側が厚くなり、反対側に向かって徐々に薄くなっている。上面は中央がやや窪み、周縁部が僅かに盛り上がっている。周縁部表面には大小の気孔があるが、木炭の噛み込みは見られない。全体が茶褐色になるほど酸化物が付着している。全体に風化が激しい。

分析部分　長軸端部1/6をL字状に切断し、滓として分析に用いる。残材返却。

備考　椀形鍛冶滓の断面形が、左側が厚く右側が薄くなっている点から、羽口は左側から炉内に挿入されていた可能性がある。

資料番号　3

出土状況	遺跡名	出雲国府跡	遺物No		分析	項目	滓	メタル
	出土位置	T5　第3層	時期・根拠			マクロ		
試料記号	検鏡：IZK-3	法量 長さ 6.4cm	色調	表:茶褐色～灰黒色 / 遺存度 ほぼ完形		検鏡	○	
	化学：IZK-3	幅 6.1cm		地:灰黒色～灰色 / 破面数 1		硬度		
	放射化：－	厚さ 3.4cm				CMA		
						X線回折	○	
						化学	○	
						耐火度		
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（小）	重量 174.4g	磁着度	2 / 前含浸 －		カロリー		
			メタル度	なし / 断面樹脂 －		放射化		
						X線透過		

観察所見　平面、隅丸方形を呈する小さいがしっかりした椀形滓である。側面の一部に欠損があるが、全体によく原状を留めている。底部は丸みを帯び、炉底の形状がよく残っている。上面は木炭痕による凹凸があり、中央がもっとも厚くなっている。上面の一部には黒色ガラス質になった部分があり、その左側に僅かに羽口先粘土の痕跡が残っていることから、左側から炉内に羽口が挿入されていたことが推定される。右側上手隅寄りの滓表皮が欠落した部分の内面には、赤銅色で金属光沢をもった部分が認められ、注目される。

分析部分　長軸端部1/3を直線状に切断し、滓として分析に用いる。残材返却。

備考　分析資料番号2と比較すると、かなり小さいが、隅丸方形の整った形を残している点に特徴がある。前者は全体に酸化物に覆われているのに対し、地色がよく見えることや金属光沢をもった部分が認められる点でも違いがある。

資料番号　4

出土状況	遺跡名	出雲国府跡	遺物No.		分析	項目	滓	胎土
	出土位置	4号溝	時期・根拠	奈良時代：出土遺物		マクロ		
試料記号	検鏡：IZK-4	法量 長さ 7.5cm	色調	表:濃緑色 / 地:灰色	遺存度 小片	検鏡	○	
	化学：IZK-4	幅 5.5cm			破面数 4	硬度		
	放射化：－	厚さ 3.3cm	磁着度	1	前含浸 －	CMA		
遺物種類（名称）	炉壁（溶解炉？）	重量 53.2g	メタル度	なし	断面樹脂 －	X線回折	○	
						化学		○
						耐火度		
						カロリー		
						放射化		
						X線透過		

観察所見　炉壁の小片である。表面が濃緑色のガラス質に薄く滓化している。炉壁粘土は灰色に堅く焼き締まっているが、炉内面のガラス質滓に近い部分は発泡し、細かい気孔が見られる。胎土はやや砂質で、混和された粗いスサが横方向に向かい明瞭に残っている。8mmほどの大きめな小石の他、細かな白色砂粒が多く含まれている。

分析部分　長軸端部1/3を直線状に切断し、炉壁として分析に用いる。残材返却。

備考　分析資料番号9の羽口先に見られる濃緑色ガラス質滓と、本資料内面のガラス質滓は色調や質感がやや似ているが、羽口先と炉壁という性格から見ると、対象金属に関わるものかは不明である。

資料番号　5

出土状況	遺跡名	出雲国府跡	遺物No.		分析	項目	滓	胎土
	出土位置	4号溝　第2層	時期・根拠	奈良時代：出土遺物		マクロ		
試料記号	検鏡：IZK-5	法量 長さ（下記）cm	色調	表:茶褐色～紫紅色 / 地:明灰色	遺存度 破片2	検鏡	◎	
	化学：IZK-5	幅（下記）cm			破面数 5	硬度		
	放射化：－	厚さ（下記）cm	磁着度	1	前含浸 －	CMA		
遺物種類（名称）	炉壁（青銅系？）	重量（下記）g	メタル度	なし（銹化）	断面樹脂 －	X線回折	○	
						化学		○
						耐火度		
						カロリー		
						放射化		
						X線透過		

観察所見　炉壁の小片である。同一個体と思われる2片があり、大きい資料5-(1)が長さ4.6cm・幅3.7cm・厚さ1.8cm・重量29.7g、小さい5-(2)が長さ3.7cm・幅2.9cm・厚さ1.2cm・重量11.6gである。5-(1)の表面には明るい紫紅色の部分と黒色のガラス質滓の部分が併存し、紫紅色部分の一部は赤銅色の金属光沢をもつ。裏面には発泡した滓部が残り、各所に3mm大前後の緑青の吹いた青銅系酸化物粒子が点在する。5-(2)の下部には炉底に接していたことを示す細かい白色砂が付着している。外面はともに紫紅色のガラス質滓化している

分析部分　分析資料番号5-(1)の短軸端部1/2を直線状に切断し、青銅系の金属酸化物を含むガラス質滓を中心に分析に用いる。化学分析は可能なら実施し、不可能であれば他の分析方法や、他の分析資料の可能な分析項目に変更可。残材返却。

備考　分析資料番号10の羽口先端部に付着しているガラス質滓と、炉壁表面に付いているガラス質滓は色調が紫紅色でよく似ており、同系統の炉に用いられたものである可能性がある。非鉄系か。また、分析資料番号3の椀形鍛冶滓?上面の肩部に残る金属光沢をもった赤銅色の滓部とも共通点をもち、両者が何らかの関わりをもつ可能性もあろう。

資料番号　6

出土状況	遺跡名	出雲国府跡	遺物No.		分析	項目	滓	胎土
	出土位置	T7　2・3層	時期・根拠			マクロ		
試料記号	検鏡：IZK-6	法量 長さ 4.7cm	色調	表:紫紅色 / 地:灰白色	遺存度 破片	検鏡	○	
	化学：IZK-6	幅 3.0cm			破面数 3	硬度		
	放射化：－	厚さ 1.4cm	磁着度	1	前含浸 －	CMA		
遺物種類（名称）	坩堝（青銅系）	重量 20.9g	メタル度	なし	断面樹脂 －	X線回折	○	
						化学		○
						耐火度		
						カロリー		
						放射化		
						X線透過		

観察所見　坩堝口縁部の小破片である。復原径は17.4cm程で、体部は太く、椀形の形状になるものと考えられる。内面は薄く滓化し、紫紅色になっている。胎土は2mm大までの細かい砂粒を含んでおり、色調は表面が紫紅色、地は内側から灰色・灰白色の順に変化している。特に明瞭な青銅粒子などは認められないが、銅系の金属を処理した坩堝と推定される。

分析部分　長軸端部1/2を直線状に切断し、坩堝片として分析に用いる。残材返却。

備考　分析資料番号5と胎土はかなり異なるが、内面の発色は紫紅色で、いずれも銅系の金属を対象とした可能性が高そうである。

資料番号　7

出土状況	遺跡名	出雲国府跡	遺物No	SD04-220	分析	項目	滓	メタル
	出土位置	4号溝	時期・根拠	奈良時代：出土遺物		マクロ		
試料記号	検鏡：IZK-7 化学：IZK-7 放射化：－	法量：径 13.2cm 高さ 6.1cm 厚さ 2.6cm	色調：表:灰黒色～紫紅色 地:灰白色～淡褐色	遺存度：完形 破面数：－		検鏡		
						硬度		
						CMA		
						X線回折		
						化学		
						耐火度		
遺物種類（名称）	坩堝（青銅系）	重量 687.6g	磁着度：1 メタル度：L(●)	前含浸：－ 断面樹脂：－		カロリー		
						放射化		
						非破壊		○

観察所見：きれいな椀状を呈する丸底の片口坩堝である。口縁の一部を片口状に成形しており、その上面に長さ4.0cm・幅1.2cmの流動状になった銅塊が付着している。口縁に付着する滓は紫紅色、発泡した内面の滓は灰黒色から黒色を呈しており、内面にも青銅塊とみられる小さな緑青をふく粒子が点在している。坩堝は一度使用された後、内面から口唇部に粘土を上塗して補修されており、厚さ2.6cmと全体的にかなり厚手である。また、片口部に向かって丸みをもった口縁部内側の滓が崖状に途切れており、内部の金属を流し出した際の痕跡と考えられる。口縁では補修前後の滓が2枚観察できる。外面には成形時の指頭圧痕が見られる。胎土は一部に6mm大の小石を含むが、全体的には細かい砂粒が入る程度で密である。

分析部分：完形品であるため、非破壊分析を行う。片口部に流れたように固着している青銅系の金属部を、現状のままで分析対象とする。全量返却。

備考：分析資料番号6の小型坩堝片や10の羽口片と表面滓層の発色が共通する。また、分析資料番号6と7の関係は胎土、滓層の発色などが共通しているが、その大きさや厚みに差がある。用途が多少異なる可能性も残される。

資料番号　8

出土状況	遺跡名	出雲国府跡	遺物No		分析	項目	滓	メタル
	出土位置	2号溝　第1層	時期・根拠	平安時代：出土遺物		マクロ		
試料記号	検鏡：IZK-8 化学：IZK-8 放射化：－	法量：長さ 3.9cm 幅 3.9cm 厚さ 0.8cm	色調：表:灰緑色 地:灰緑色	遺存度：破片 破面数：3		検鏡		○
						硬度		
						CMA		
						X線回折		
						化学		○
						耐火度		
遺物種類（名称）	銅塊	重量 23.3g	磁着度：1 メタル度：L(●)	前含浸：－ 断面樹脂：○		カロリー		
						放射化		
						X線透過		

観察所見：平面、不整形な薄板状の小銅塊片である。各々厚さ0.4cm程の薄い銅塊2枚が重層している。上面は小さな波状で、下面は緩やかな波状となっている。銅塊は両面とも中央がやや窪み気味で、端部が外反しており、重層した部分はやや厚くなっている。表面には、多少気孔が見られる。

分析部分：短軸端部1/5を直線状に切断し、銅塊として分析に用いる。断面樹脂塗布。残材返却。

備考：分析資料番号1とは滓と金属という差をもつが、表面観や色調が共通する灰色を基調としたものである。

資料番号　9

出土状況	遺跡名	出雲国府跡	遺物No		分析	項目	滓	胎土
	出土位置	4号溝　第2層	時期・根拠	奈良時代：出土遺物		マクロ		
試料記号	検鏡：IZK-9 化学：IZK-9 放射化：－	法量：長さ 4.5cm 幅 5.5cm 厚さ 1.9cm	色調：表:濃深緑色～灰色 地:淡赤褐色～灰色	遺存度：破片 破面数：3		検鏡	◎	
						硬度		
						CMA		
						X線回折	○	
						化学		○
						耐火度		
遺物種類（名称）	羽口	重量 51.2g	磁着度：2 メタル度：なし	前含浸：－ 断面樹脂：－		カロリー		
						放射化		
						X線透過		

観察所見：羽口先端部の小破片である。復原すると外形7.0cm・内径は3.4cmほどになるものと想定される。先端は外面が濃緑色のガラス質に溶解しており、基部側に向かって表面が灰色を呈する。通風孔部は先端が黒緑色調であるが、基部に向かって暗赤褐色に変化が見られる。外面には長軸方向に向かって、成形時の削り痕が幅1cmほどの間隔で稜として残っている。胎土は砂質で7mm大の小石の他、石英粒子などが多く含まれる。

分析部分：短軸端部1/2を直線状に切断し、ガラス質滓部を中心に羽口として分析に用いる。化学分析は胎土部分を用いる。残材返却。

備考：対象金属ははっきりしない、羽口片である。先端部の濃緑色のガラス質滓は胎土が砂質のためと考えられる。分析資料番号4の炉壁片も同様の理由による色調の可能性も考えられよう。

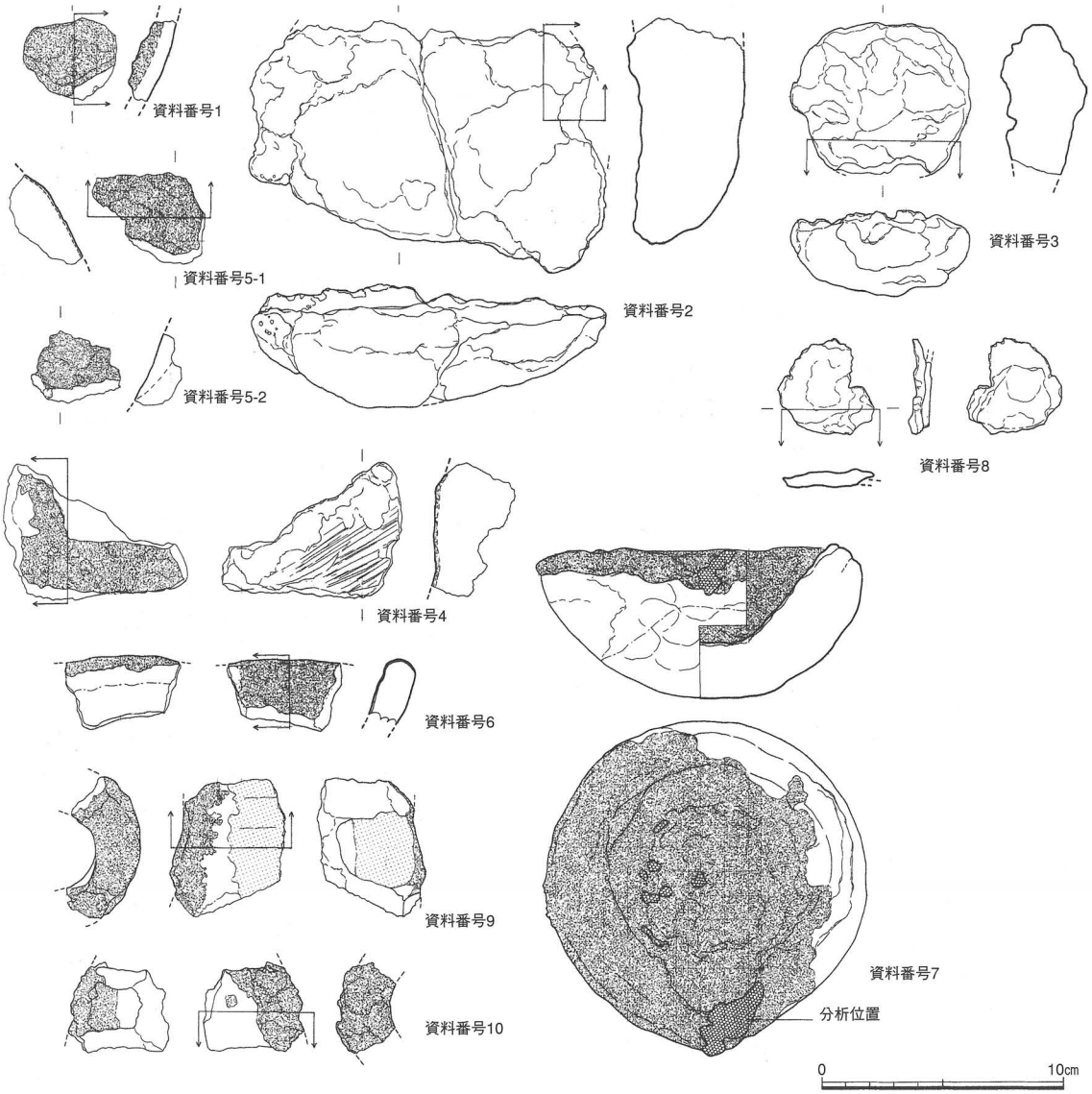
資料番号　10

出土状況	遺跡名	出雲国府跡		遺物No				分析	項目	滓	胎土
	出土位置	4号溝　第2層		時期・根拠	奈良時代：出土遺物				マクロ		
試料記号	検　鏡：IZK-10	法量	長さ　4.0cm	色調	表:紫紅色～黒色	遺存度	破片		検鏡	○	
	化　学：IZK-10		幅　3.5cm						硬度		
	放射化：　－		厚さ　2.0cm		地:灰色	破面数	3		CMA		
									X線回折	○	
									化学		○
									耐火度		
遺物種類（名称）	羽口（青銅系）		重量　27.4g	磁着度	1	前含浸	－		カロリー		
				メタル度	なし	断面樹脂	－		放射化		
									X線透過		

観察所見　羽口先端部の小破片である。復原すると外形7.5cm・内径は3.5cmほどになるものと想定される。先端部は外面が黒色～紫紅色のガラス質に溶解し、端部に僅かに茶褐色の酸化物が固着する。基部側に向かって表面が被熱し灰色を呈する。通風孔部の内面は先端部に黒緑色から黒色のガラス質滓が付着するが、基部に向かってすぐに薄くなる。胎土は砂質で、細かい白色砂粒を多く含んでいる。

分析部分　短軸端部1/2を直線状に切断し、ガラス質滓部を中心に羽口として分析に用いる。化学分析には胎土部を用いる。残材返却。

備　考　先端部が平坦気味に溶解し、そこに黒色から紫紅色のガラス質滓が固着した羽口片である。通風孔内面の黒色ガラス質滓化は溶損角度の弱さとともに、羽口先の空間の狭さ、例えば分析資料番号6～7などの小型坩堝などに対応する可能性が高そうである。ガラス質滓の発色なども、これを補強する。



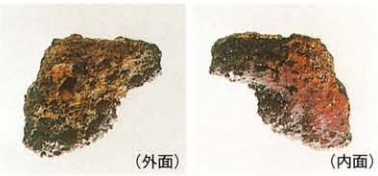
金属器生産関係遺物分析試料採取位置

資料番号1

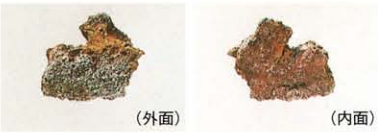
資料番号3

資料番号2

資料番号4

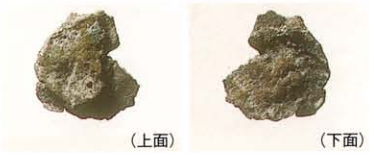


資料番号5-1



資料番号5-2

資料番号6



資料番号8

資料番号9

資料番号10

資料番号7

金属器生産関係遺物分析資料外観写真

付論1

出雲国府跡5号土坑から出土した動物遺存体

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
松井　章

1．出土した動物遺体

5号土坑から祭祀遺物に共伴して出土した動物遺存体は、種名・部位が確認できる範囲ではすべてニホンジカ（*Cervus nippon*）のもので、部位としては側頭骨（左右）、頭頂骨、後頭骨（基底後頭骨・中央）、下顎骨（左）が含まれていることが確認できた。その他にも小破片が多かったが、椎骨・四肢骨の破片は見られなかった。したがって、この土坑には元来、下顎も含めた頭部全体が存在したが、頭部以外はなかったと考えることができよう。（表1）

2．出土状況

5号土坑の大きさは、一辺3.4m、深さ1mの大形で、その底部は砂層に達し、底部は円礫敷きで、湧水が見られる。土坑埋土が湧水によって水漬けであったため、骨が残存したものと見られるが、シカの頭蓋骨は骨のリン分と地下水の鉄イオンが化合した藍鉄鉱（ビビアナイト）を析出しており残りが悪い。

同定できた破片は、すべてニホンジカのもので、頭蓋骨の側頭骨、後頭骨、下顎骨であった。他にも小さな破片が多く出土しているが、すべて頭蓋骨の破片と考えてよい。基底後頭骨の大きさから見て、出土したニホンジカは、オスの成獣でかなり大型の個体であったと推定できる。

この土坑の北半部には、この頭蓋骨の他、刀形代、曲物、かご、斎串、木製品部材などが含まれており、土坑南半部には須恵器坏、高坏などがまとめて置かれていた。土坑埋土を水洗したところ、ブドウ、モモ、イネ、ヒョウタン、ウリなどの種実も出土しており、食料となった残滓も廃棄されていたことがわかる。

3．考　　察

出雲国府または意宇郡衙に比定される本遺跡から出土したニホンジカの頭蓋骨の背景は以下のような可能性が想定できよう。

A）考古学的知見

ニホンジカの頭蓋骨、下顎骨の破片が、5号土坑から出土した。

B）遺構の性格

この土坑は小円礫が敷き詰められ、単なるごみ穴とは性格を異にする。その中からは斎串、形代などの祭祀具が出土し、祭祀に関連すると考えられる。

C）想定可能な解釈

a．この土坑には祭祀で用いられた製品以外のものが認められないとすれば、ニホンジカもまた祭祀で用いられた可能性が高い。

b．ニホンジカ頭蓋骨は他の目的で使われたが、祭祀具と同じ遺構に捨てられたものである。

aの立場を認めるなら、以下のような可能性が考えられる。

a－1．ニホンジカは現在でも信濃諏訪社の御頭祭で見るように、伝統的な神への供物であった。

a－2．国府、または郡衙で執り行われる律令祭祀の一環としてシカの頭部が供され、肉は食用とされた。

a－1の場合を想定すると、国府または郡衙の中で、動物を供える祭祀が執り行われていたことになり、長野県諏訪大社の御頭祭で見られるような動物祭祀が古代において律令政府内にまで存在した可能性がある[1]。しかし、8世紀には仏教による殺生や肉食の禁断がたびたび発せられており、律令政府は漢神信仰やそれに付随する殺牛馬儀礼を禁止するなど禁止にやっきになっており、この可能性は低いと考えられる。

a－2の律令政府の公式祭祀として動物を伴う例として、儒教の聖人を祀る釈奠（せきてん）が考えられる。本稿ではこのニホンジカの頭蓋骨・下顎骨の出土例をもとに、従来、動物考古学で取り上げられたことのない釈奠との関わりで、このシカの頭蓋骨・下顎骨を考えてみたい。

儒教がはじめて日本に入ったのは、5世紀ごろのこととされる。その儒教の祭礼の中心をなすのが釈奠[2]である。釈奠とは、孔子と孔門十哲を祀る儀礼で、その儀式が日本で行われた最初の記録は、『続日本紀』大宝元年に見える。その後、儒教は江戸時代末まで主として権力者の中で重要な位置を占め、日本では旧2月、8月の上丁（かみのひのと）の日に釈奠が行われ続けた。その釈奠の中で重要な要素を占めるのが、動物犠牲である。その犠牲は三牲と呼ばれ、中国では牛、羊、豕（いのこ）（豚のこと）が使われたが、日本では、大鹿、小鹿、豕に変化し、牛が抜け、羊が鹿に代わる。「延喜式」には、釈奠のお供えとして「羊脯（ほじし）　十三斤八両　代用鹿脯」とあることから、鹿肉が羊の代用にされたことが分かる。

実際に、釈奠が実施されたという記録は、大宝元年が初出である。平安時代になって日本では穢れ意識が強化され、為政者の側の祭祀において、動物犠牲を忌避しようとする動機が働くなかで、中国から釈奠を移植するに際して、人々が最も困惑したのは、その中で重要な役割を果たす犠牲のことであったろう。『三代実録』延暦12年5月の記事には次のように見える。

近頃、諸国から貢進される釈奠の「牲」はいずれも犠牲獣の体の一部を割いた鮮度の悪いもの（割穢）で、これを以て供祀するので、多く令制に乖くことになる。今後は「全体」を以て祭庭に進めさせ、礼法によって「割鮮升供」したい旨を大学寮が申し出て許された、という趣旨の格が出されている。

天平8年の薩摩国の正税帳には、「先聖先師并四座」には、酒と米のみを供えて、国司以下学生以上七二人」という参列者の食料、稲、脯、鰒、雑腊（きたい）、雑菓子、酒などが記載されている。これは、神人供飲食という儀式の大前提を逸脱し、日本的解決を図ったとも考えることができる。しかし、これを単に薩摩国正税帳作成上の手違いであったと考える意見もあるが、弘仁・延喜の主税式には、神座に供える神饌の品目と、国司以下の食料の品目が一致していることから、中央では神人供飲食の原則が守られていたとも考えることができるとする[3]。本遺跡でも中央と同じように三牲の一つ、シカを犠牲にして祭祀を執り行ったと考えることできるだろう。

また、『日本紀略』弘仁一一年二月丁丑条に、「停釈奠、定祈念祭可忌三牲也。」とあり、祈念祭を避けて、三牲、つまり動物犠牲を伴う釈奠を停止したことがわかる。その他にも『続日本後紀』承和七年七月十日条に「令五機内七道諸国、諒闇之間、停釈奠祭」とあり、その年五月八日に崩御した淳和天皇に対する諒闇（天子が父母の喪に服する期間）の間、釈奠を停止したという記事も、釈奠の中に三牲が不可欠な要素であったため、日本的な動物ないしその血に対する穢れ意識と、中国から輸入された儒教の儀式の本質をなす動物犠牲とが相克し、その結果、釈奠が停止されたものと考えられよう。

このように考えたとき、この出雲国府または意宇郡衙で、八世紀後半に催された祭祀が釈奠で、その犠牲となった「大鹿」の頭部が、他の祭祀具とともに土坑から出土した可能性が指摘できよう。実際、後頭骨の大きさから見て、出土したニホンジカはオスのかなり大型の個体であったことが推定でき、ここでは三牲のうち、「大鹿」の頭部を儀式に供えて、その他の部位は儀式の際の飲食の品目として供され、消費されたと考えることができるだろう。

以上、仮定に仮定を重ねて、この土坑が国府ないし郡衙で執り行われた公式祭祀の遺構であったとし、ニホンジカの頭部が律令祭祀のなかで利用されるのは、中国から移入せられた儒教の祭典、釈奠の際の三牲として使われた可能性にたどり着いた。釈奠と想定したのは、仮説に仮説を重ねた結果であるが、報告者、松井はこの推論があながち的外れではないと考えている。今後の文献史料のさらなる検討、考古資料の増加を待ち、文献史料、考古資料がそろった段階で、再度考察を加えたいと考えている。

註

（1）武井正弘「諏訪信仰と狩猟」『東北学』３、pp.103-113

（2）釈奠とは孔子を初めとする儒教の先哲を祀る儀式。大宝令に２月、８月の上丁に中央の大学寮と地方の国学で行う。吉備真備が唐令を持ち帰り整備。

（3）彌永貞三1988「古代の釈奠について」『日本古代の政治と史料』高科書店pp.99-206。

表１　判別できた部位

遺物番号	種　類	部　位	左右
380	ニホンジカ	側　頭　骨	右
380	ニホンジカ	側　頭　骨	左
380	ニホンジカ	頭　頂　骨	中央
380	ニホンジカ	基底後頭骨	中央
379	ニホンジカ	下　顎　骨	左

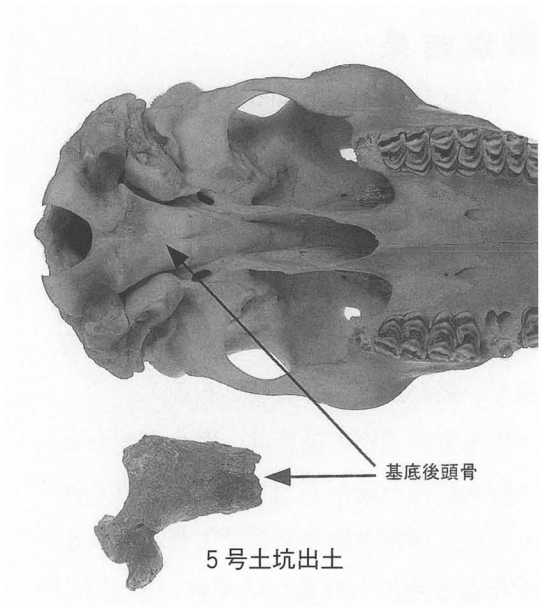


写真１　５号土坑出土鹿頭骨（下）と現生鹿頭骨（上）

付論２

出雲国府跡出土分銅の非破壊調査

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
肥　塚　隆　保

出雲国府跡2000年度の発掘調査により発見された分銅の材質および構造調査をおこなったので、その概要を報告する。なお、比較資料として、1968～1970年の発掘調査で出土した分銅についても併せて調査をおこなった。

調査試料

測定した試料は２個体で、出雲国府跡第２区N72-76/w22（表土）より出土した試料Ａと、1968－1970年の調査（宮ノ後地区）で出土した試料Ｂである。いずれも保存状態は良好であるが、試料Ａは、その表面は茶褐色のさびで覆われており、かなりの量の砂粒がさび表面に付着していた。また、底面の一部に数㎜に及ぶ斑点状の白色物が観察された。試料Ｂは、試料Ａと異なり緑色のさびで覆われていた。いずれも銅の腐食により生成したものである。前者は質量が約63ｇ、後者は157ｇである。いずれも腐食・変質しているので、当初の質量は不明である。

調査の方法

今回は、非破壊手法による材質調査と構造調査を実施した。材質調査にはエネルギー分散型蛍光X線分析法（TOREX 650/テクノス社）、構造調査には高エネルギーＸ線CTスキャナー（HiX-CT/日立社）を使用した。

調査結果

蛍光Ｘ線分析法による非破壊調査の結果、試料Ａからは銅を多量に検出した。次いで鉛、錫、砒素、銀、鉄である。非破壊測定でかつ試料は変質しているので、正確な成分比率はわからないが、変質した表面の組成では、銅が70－50％前後で、鉛が20－40％前後である。

出土青銅遺物の場合は、腐食が進むと一般的に鉛や錫が増加する傾向が見られるので、実際の鉛含有量はこれより少なくなると考えられる。いずれにしても、銅に少量の鉛が加えられて作られた青銅

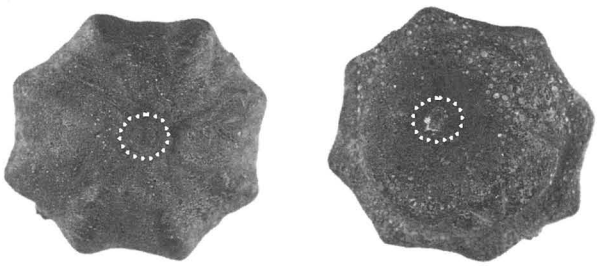


写真１　資料Ａの銅分、白丸部分からは多量の鉛が検出された。

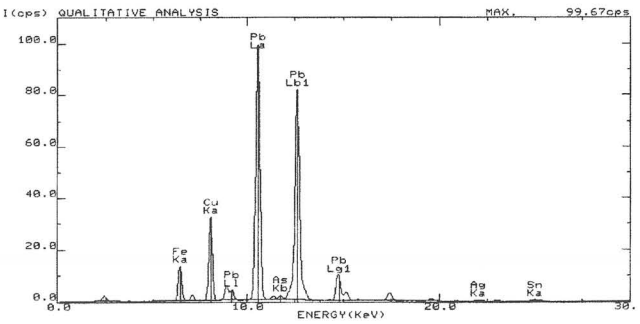


図１　底部白色部分の蛍光Ｘ線スペクトル

と推定される。錫や砒素は意識的に混合されたものか、鉱石に伴う成分なのかはよくわからない。ただ、和銅開珍のある種のものには数%におよぶ多量の砒素が伴うものが存在するが、今回の試料Aには数%も混入しているとは考えられない。一方、底部の白色斑点状部分及び頂部の吊金具の入孔部（白色）からは、多量の鉛が検出された（図1．図2参照）。推定では鉛の含有量が80%を越えている。銅、鉄は周辺のさびが一部覆っているので検出されたもので、ほとんどは鉛であり、鉛-錫系などのハンダ合金とは考えられない。

試料BはAとはやや異なり、銅が多量に検出され、鉛、錫は少量である。鉄はやや多く検出されるが、表面に吸着する鉄分と考えられる。この試料で特徴的なのは、ビスマス（Bi）やごくわずかな金（Au）が検出されたことである（図3）。もちろん銀なども微量成分として検出される。表面の比較的残存状態の良好な表面部分について定量したところ、銅成分が92%以上、鉄が5%前後、銀が0.5%前後で錫、鉛はほぼ0.5%以下で、ビスマスは0.7%前後、金は0.3%と異常に高い含有量を示す。

以上のことから試料Bは銅製品で、微量に含まれる成分は銅鉱石に由来するものと推定される。これに関して、平尾氏による鉛同位体比に関する調査のなかでもビスマスが存在することを指摘されている（八雲立つ風土記の丘　No.99）。一方、鉛に関しては銅鉱石の不純物と考えるよりも、むしろ金属の一部として加えられていたと考えたが、今回の調査では非破壊分析であるにしても1%以下の含有しか示していないことから、意識的に加えられたものとは考えにくい。この問題に関しては、金属部分の正確な定量値を知ることが問題の解決につながる。

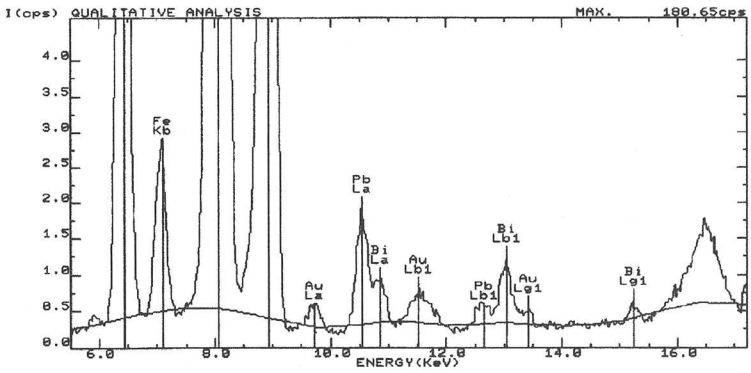


図2　試料Bの蛍光X線スペクトル（ビスマス、金が微量成分として検出された）

なお、試料Bについても底部にやや白っぽく観察できる部分があったので測定したが、特に鉛が異常に検出されることはなく、他の部分と同じ組成であった。また、吊金具や輪っか状の金具も主成分は銅である。

X線CTを用いた構造調査では、垂直断面および各高さについての水平断面を測定した。その結果、試料Aは全面に多量の気泡が残存していることが特徴的であった。また、内部は金属ではない物質が充填しており、さらに内部では金属質とも考えられる物質が存在していた。CT値（CT-number）を測定したところ、外側の金属部分は13114±288、内側では3771±149、中央部では7609±180を示した。つまり、CT値は密度と比例することから、外側はほぼ銅の値を示し、内側では金属以外の物質として粘土ないしシルトおよびそれに類する物質と推定され

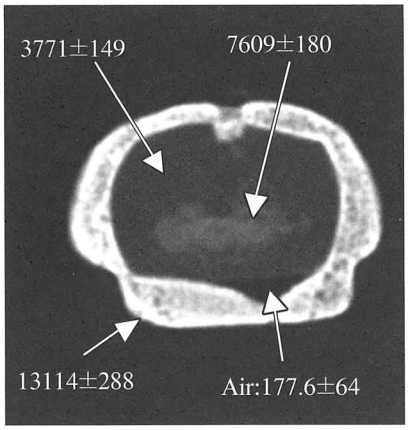


写真2　試料Aの各部分のCT値

た。中央付近は、外側と内側の中間的な値を示しており、さらに画像を観察すると上部の吊り金具を取り付ける部分から金属状物質が内側の粘土ないしシルトに染み込んだようにも見えるが、金属が鋳込まれたときに生じたとも考えにくい。銅さびや鉄さびが内部に沈着したとも考えられるが、結論づけるのは至っていない。また、底部はまったく空洞になっている（図４参照）。

試料Ｂは試料Ａのように複雑な構造ではない。上部の表層付近には多量の気泡が見られるものの、全体としてはほとんど気泡は見られない。また、上部に吊金具を止める溝もシャープに作られていた。試料ＡとＢでは作り方が大きく異なっていた。

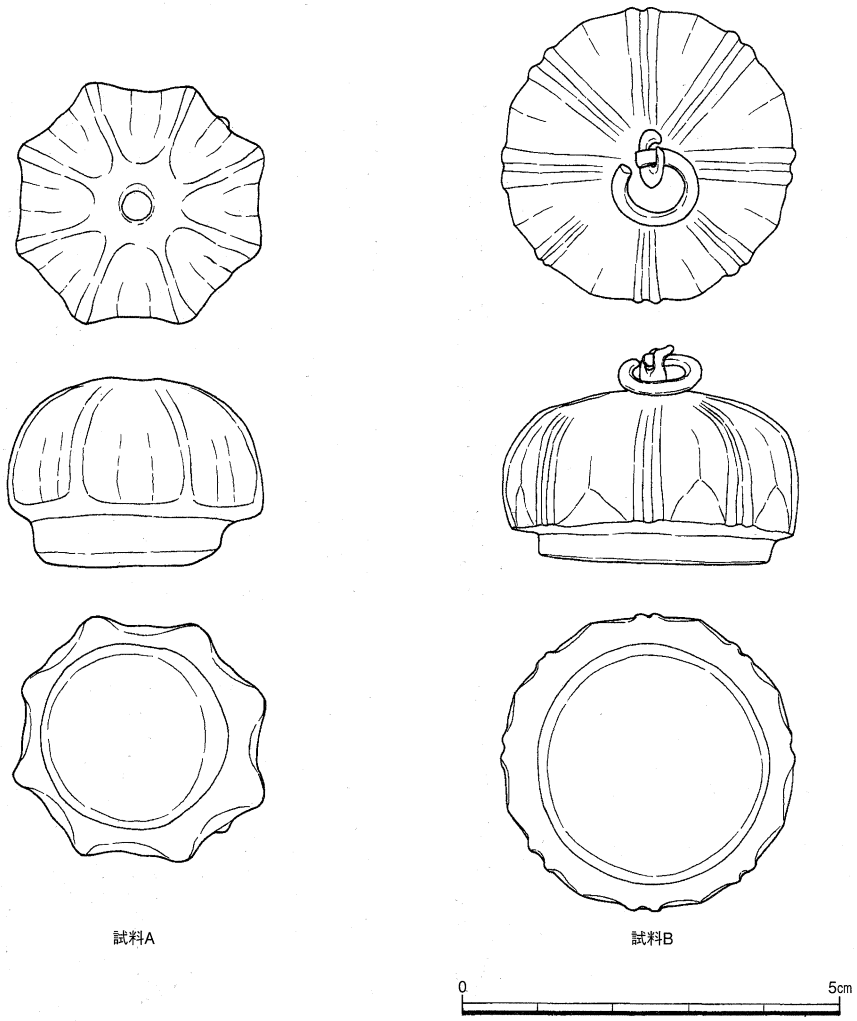
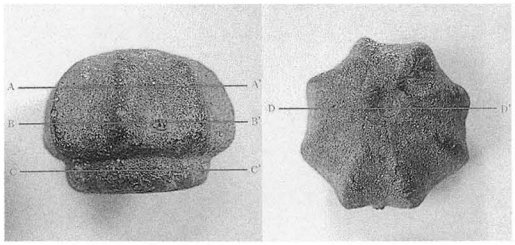
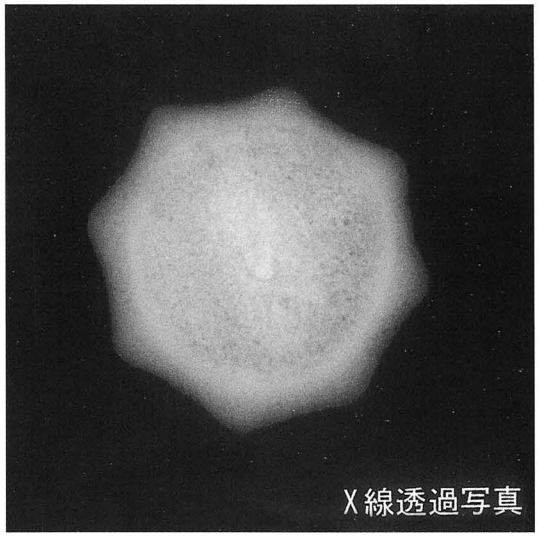
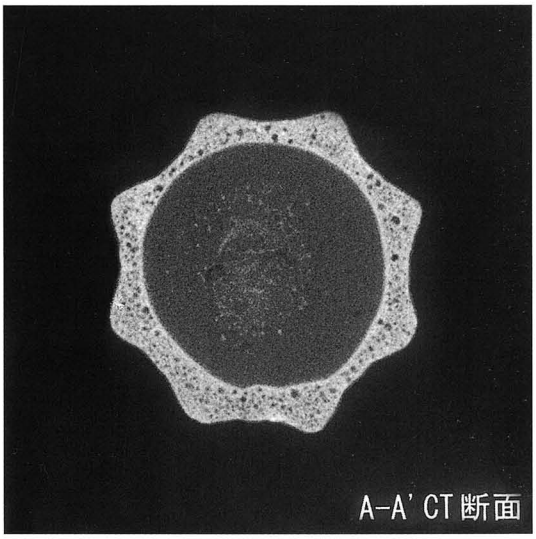
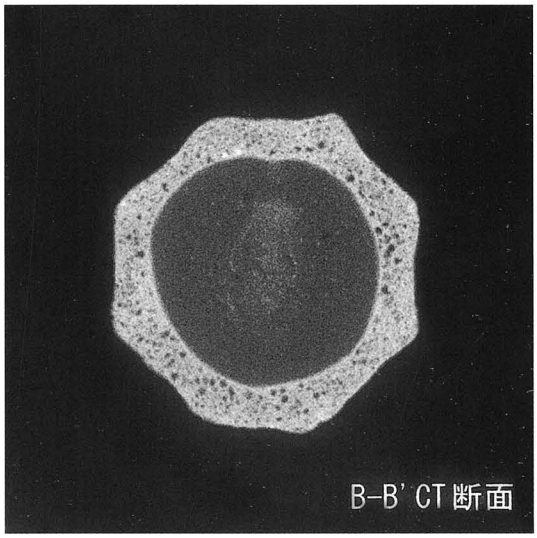


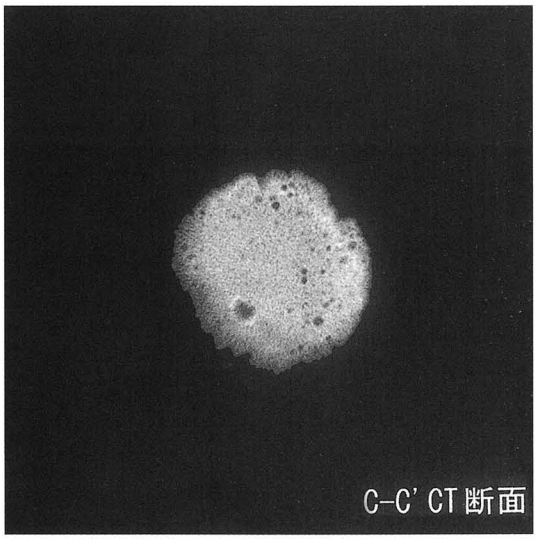
図３　出雲国府跡出土分銅実測図











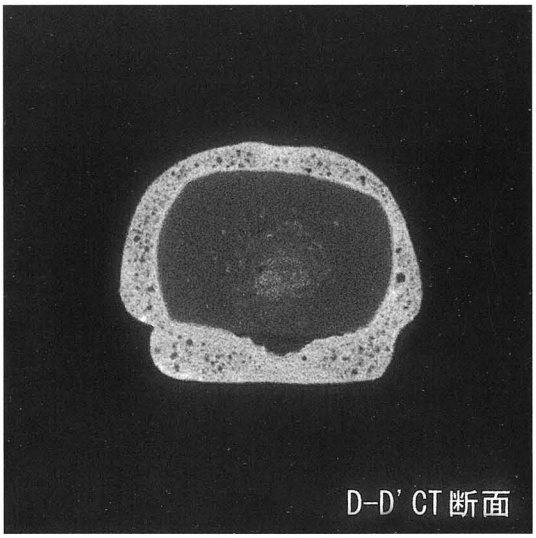
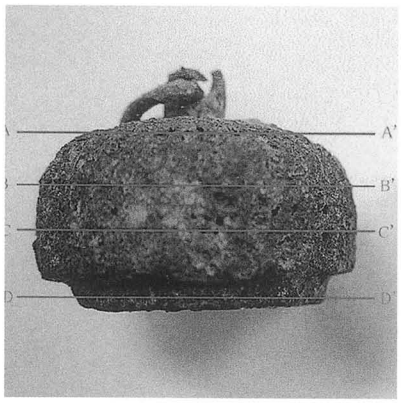
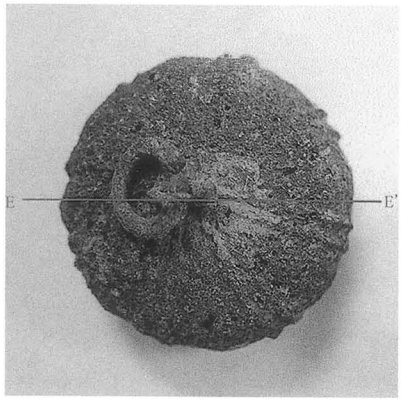
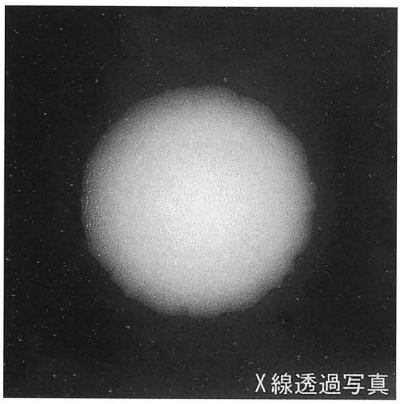
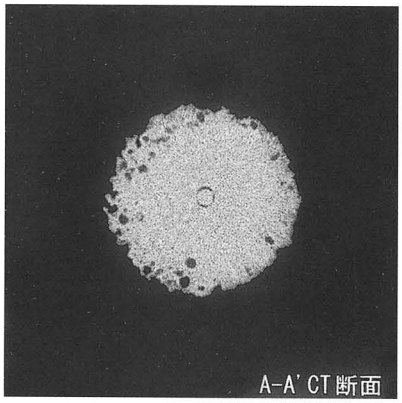


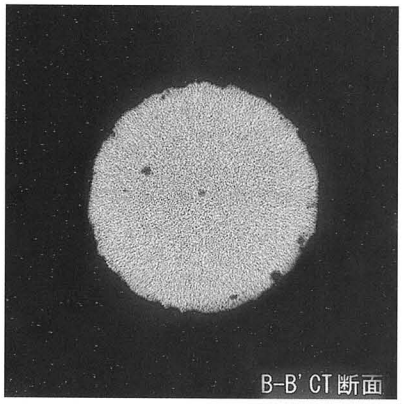
写真３　出雲国府跡出土分銅試料Ａ

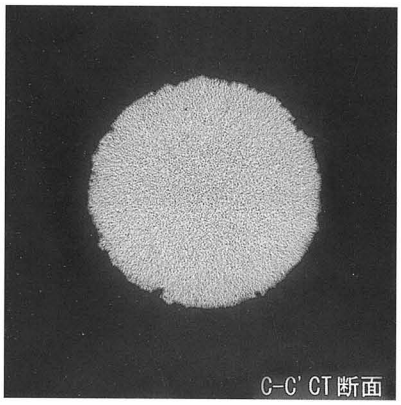


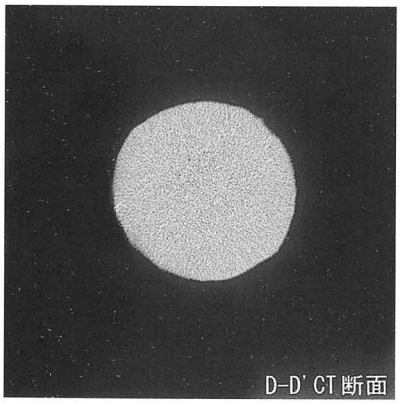












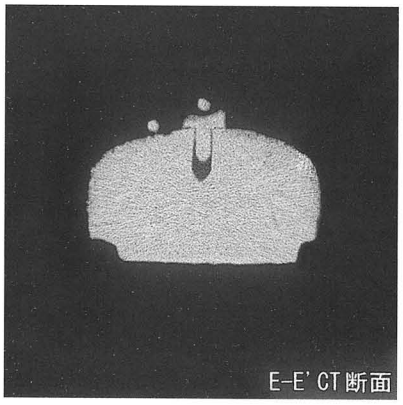


写真４　出雲国府跡出土分銅試料Ｂ

付論３

出雲国府跡出土金属器生産関係遺物の分析・調査

川鉄テクノリサーチ株式会社　分析・評価事業部　埋蔵文化財調査研究室
岡原　正明・天辰　正義・小川　太一・福田文二郎

１．はじめに

出雲国府跡から出土した金属器生産関連遺物の鉄滓、炉壁、坩堝、銅塊、及び羽口について、化学成分分析を含む自然科学的観点での調査依頼があった。調査の観点としては、加工された金属器の種類推定、工程上の位置付けなどを中心に調査した。

２．調査項目および調査方法

（１）調査項目

調査資料の履歴と調査項目を表１に示す。

（２）調査方法

（ｉ）重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点２位以下で四捨五入した。外観観察については島根県埋蔵文化財調査センターから提供された写真を使用し、観察記録を参考とした。

磁着力調査については、直径3.0㎝のリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により５ランクで、個別調査結果を表示した。また、遺物内の残存金属の有無を金属探知機（MC：metal checker）を用いて調査した。

（ii）化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJISの分析法に準じて行っている。

T.Fe：三塩化チタン還元－二クロム酸カリウム滴定法

M.Fe：臭素メタノール分解－ＥＤＴＡ滴定法

FeO：二クロム酸カリウム滴定法、Fe_2O_3：計算

C.W.：カールフィッシャー法、C：燃焼－赤外線吸収法

CaO,MgO,MnO,Cr_2O_3,Na_2O,V,Cu：ICP発光分光分析法

SiO_2,Al_2O_3,CaO,MgO,TiO_2,P_2O_5,K_2O,T.Fe：ガラスビード蛍光X線分析法

但しCaO,MgO,MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光Ｘ線分析法

C,S,Si,Mn,P,Cu,Ni,Cr,Al,V,Ti：ICP発光分光分析法、Ca,Mg,V,Na_2O：原子吸光法

灰分，揮発分：重量法、P：吸光光度法、S：燃焼－中和滴定法

F.C.（固定炭素）：計算（F.C.=100－（灰分+揮発分））

発熱量（kcal/g）：カロリーメーター

・鉄滓成分

鉄滓中成分は、18成分（全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe_2O_3、シリカSiO_2、アルミナAl_2O_3、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa_2O、酸化カリウム

K_2O、酸化チタンTiO_2、酸化マンガンMnO、酸化リンP_2O_5、化合水C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu、コバルトCo）を化学分析している。

（iii）顕微鏡組織写真

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。金属鉄はナイタール（５％硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織（縦断面L方向、横断面Ｃ方向）を拡大して写真撮影し、溶融状況や金属組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡（５倍～20倍）による観察もする。

（iv）蛍光Ｘ線分析（EDX）よる胎土の産地推定

蛍光Ｘ線法（EDX）による胎土の産地推定は、三辻利一らの方法[1]を利用した。標準鉱物試料（国土地理院地質調査所・JG-1a）を基準に胎土中の特定微量元素、すなわちカリウム（K）とカルシウム（Ca）、ルビジウム（Rb）とストロンチウム（Sr）等の含有比を求める。EDX（エネルギー分散型Ｘ線分析：Energy Dispersive X-ray spectroscopy）によって、試料に電子線を照射した際に放出される特性Ｘ線のエネルギーを検出し、試料表面層の元素分析を行うことができる。

蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製、MESA-500）による本資料の分析結果と標準試料JG-1aの分析結果との元素存在比を、硅素（Si）の強度（cps/μA）を基準として、カリウム、カルシウム、ルビジウムとストロンチウムの強度比を算出し、標準鉱物試料（JG-1a）と強度比較し、胎土中の元素存在比を求める。K/CaとRb/Srとの関係図で表す。

三辻らが分類したグループ（大阪陶群、陸前群、美濃須衛群、出雲-伯耆群、筑紫群、中部地方グループ等）のいずれに一致しているか判定する。地元近隣の胎土分析データがないので明確な断定はできないが、他地域から移入された胎土か地元近隣に位置する胎土かを推定する。

（v）Ｘ線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、Ｘ線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回折）された特性Ｘ線が検出されることを利用して、　試料中の未知の化合物を観察・同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

3．調査結果

資料No.１　記号IZK-1　不明滓⇒砂鉄系鍛冶滓

①**外観観察**：写真１①、②に示す。灰色を呈する薄い被熱した粘土の上に、暗青灰色の滓が固着しており、炉底または炉壁面に付着した滓と考えられる。下面の粘土部分はやや湾曲しており、発泡して僅かに気孔が見られる。

②**顕微鏡組織観察**：写真１③、④に示す。写真の前面に繭玉状・樹枝状に連なった形状のウスタイト（Wustite：FeO）およびその背面に大きな短冊状のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）結晶が観察される。

③**蛍光X線分析**：鉄滓に付着した胎土のEDX分析と特定元素の存在比の結果をそれぞれ表３と表４

ならびに図４に示す。本資料は三辻らが分類したグループ（陸前群、出雲－伯耆群、筑紫群、浜松･豊橋グループ）に属している。したがって、地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い。

④**化学組成分析**：化学成分を表２に示す。全鉄（T.Fe）51.8％に対して、酸化第一鉄（ウスタイト：FeO）は49.4％、酸化第二鉄（ヘマタイト：Fe_2O_3）は18.9％で、Fe_2O_3とFeOの比率は、28：72で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近いと推察される。滓中成分の指標となる造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$）は29.1％である。砂鉄原料に含まれていたと考えられる酸化チタン（Titanium dioxide:TiO2）が0.33％と低い。バナジウム（Vanadium:V）を0.006％、鉱石に含有する成分の一つである銅（Copper：Cu）は0.015％と少ない。

製造工程上の位置づけを（１）全鉄（T.Fe）とチタニア（TiO2）の関係と（２）全鉄（T.Fe％）と造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$）（％）の関係、および製鉄の始発原料として砂鉄系と鉱石系の分類を（３）MnO/TiO_2とTiO_2/T.Fe関係からそれぞれ作図し、図１～図３に示した[1]。これらの結果では、資料№１は砂鉄系鍛冶滓の範囲に属している。したがって、結果を総合すると、本資料は砂鉄系鍛冶滓の可能性が高いと推定される。

資料№２　記号IZK-2　椀形鍛冶滓（中）⇒椀形鍛冶滓

①**外観観察**：写真２①、②に示す。平面は不整な長方形状を呈する椀形滓である。下面左端部に炉床土と見られる粘土と溶解物が付着している部分がある。本来の椀形滓の形状を復元すると、長径13㎝あまりの長楕円形になるものと考えられる。上面は中央がやや窪み、周縁部が僅かに盛り上がっている。周縁部表面には大小の気孔があるが、木炭の噛み込みは見られない。

②**顕微鏡組織観察**：写真２③、④に示す。写真の前面に繭玉状に連なった形状のウスタイトおよびその背面に大きな短冊状のファイヤライトが観察される。

③**Ｘ線回折**：ウスタイト、マグネタイト、ファイヤライトが検出（回折）された。顕微鏡組織観察と一致している。

⑤**化学組成分析**：化学成分を表２に示す。全鉄60.9％に対して、Fe_2O_3とFeOの比率は24：76で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。滓中成分の指標となる造滓成分は15.9％である。砂鉄原料に含まれていたと考えられる酸化チタンが1.99％で、鉱石に含有する成分の一つである銅は0.001％と少ない。製造工程上の位置づけと始発原料の分類として化学成分を図１～図３に示した。これらの結果では、資料№２は砂鉄系鍛冶滓の範囲に属している。

したがって、結果を総合すると、本資料は砂鉄系鍛冶滓の可能性が高いと推定される。

資料№３　記号IZK-3　椀形鍛冶滓（小）⇒椀形鍛冶滓

①**外観観察**：写真３①、②に示す。平面は、隅丸方形を呈する小さい椀形滓である。底部は丸みを帯び、炉底の形状がよく残っている。上面は木炭痕による凹凸があり、中央がもっとも厚くなっている。上面の一部には黒色ガラス質になった部分がある。

②**顕微鏡組織観察**：写真３③、④に示す。写真の前面に繭玉状に連なった形状のウスタイトおよびその背面に大きな短冊状のファイヤライトが観察される。

③**Ｘ線回折**：ファイヤライトとウスタイトおよびドロマイト（Dolomite:$CaMg(CO_3)_2$）が検出された。ドロマイトは鉄滓に付着した土壌成分と推定される。

④**化学組成分析**：化学成分を表２に示す。全鉄48.0％に対して、Fe_2O_3とFeOの比率は25：75で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。造滓成分は34.4％で、酸化チタンが0.37％と低く、バナジウム0.010％、銅は0.001％と少ない。製造工程上の位置づけと始発原料の分類として化学成分を図１～図３に示した。これらの結果では、資料№３は砂鉄系鍛冶滓の範囲に属している。したがって、結果を総合すると本資料は砂鉄系鍛冶滓の可能性が高いと推定される。

資料№４　記号IZK-4　炉壁（溶解炉？）⇒炉壁

①**外観観察**：写真４①、②に示す。炉壁の小片である。表面が濃緑色のガラス質に薄く滓化している。炉壁粘土は灰色に堅く焼き締まりっているが、胎土はやや砂質で、混和された粗いスサが横方向に向かい明瞭に残っている。

②**顕微鏡組織観察**：写真４③、④に示す。ガラス質を示している。窪んだ部分は光の偏光により赤色を呈している。気泡が発生したものと見られる。

③**Ｘ線回折**：石英（SiO_2）、クリストバライト（Cristobalite:SiO_2）およびムライト（Mullite：$3Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$）が検出された。本資料の主要成分はムライトから構成されている。

④**蛍光X線分析**：胎土分析結果と特定元素の存在比の結果をそれぞれ表３と表４ならびに図４に示す。本資料は三辻らが分類したグループ（陸前群、出雲-伯耆群、筑紫群、浜松･豊橋グループ）に属している。地元近隣の胎土分析データがないので明確な断定はできないが、出雲・伯耆群に属しているので、地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い。したがって、結果を総合すると、本資料はムライト系耐火材で、地元の粘土を使用した可能性が高いと推定される。なお、胎土分析の結果、銅成分は含まれていない。

資料№５　記号IZK-5　炉壁（青銅系）⇒炉壁（銅系）

①**外観観察**：写真５①、②に示す。炉壁の小片で、同一個体と思われる2片がある。5－(1）の表面には明るい紫紅色の部分と黒色のガラス質滓の部分が併存し、紫紅色部分の一部は赤銅色の金属光沢をもつ。裏面は発泡した滓部が残り、青銅系酸化物粒子が点在する。5－(2）の下部には炉底に接していたことを示す細かい白色砂が付着する。外面は紫紅色のガラス質滓化している。

②**顕微鏡組織観察**：胎土部分を写真５③、④に示す。胎土系のガラス質組織を示している。赤色は視野の凹んだ位置で、偏光色（赤色）を呈する。炉壁内に金属粒が侵入していた金属組織の写真⑤、⑥に示す。結晶面が異なるために結晶粒界が観察され、結晶粒度は20～50μｍとなっている。

③**Ｘ線回折**：石英（SiO_2）と酸化銅（CuO:Cuprite）および銅（Cu:Copper）が検出された。

資料№６　記号IZK-6　坩堝（青銅系）⇒坩堝（銅系）

①**外観観察**：写真６①、②に示す。坩堝口縁部の小破片である。復元径は17.4cm程で、体部は太く、椀形の形状になるものと考えられる。内面は薄く滓化し、紫紅色になっている。

②**顕微鏡組織観察**：胎土部分を写真６③、④に示す。胎土系のガラス質組織を示している。赤色は視野の凹んだ位置で、偏光色（赤色）を呈する。

③**Ｘ線回折**：石英（SiO_2）またはクリストバライト（SiO_2）およびムライト（Mullite：$3Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$）が検出された。本資料の主要成分はムライトから構成されていると推定される。

④**蛍光X線分析**：胎土分析結果と特定元素の存在比の結果をそれぞれ表３と表４ならびに図４に示す。本資料は三辻らが分類したグループ（陸前群、出雲-伯耆群、筑紫群）から外れ、浜松･豊橋グループに属している。地元近隣の胎土分析データがないので明確な断定はできないが、地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い。したがって、結果を総合すると、本資料はムライト系耐火材で、地元の粘土を使用した可能性が高いと推定される。

資料No.７　記号IZK-7　坩堝（青銅系）⇒坩堝（銅系）

①**外観観察**：写真７①、②に示す。丸底の片口坩堝で、口縁の一部を片口状に成形しており、その上面に流動状になった銅塊が付着している。口縁に付着する滓は紫紅色、内面の滓は灰黒色を呈しており、内面にも青銅塊とみられる粒子が点在している。坩堝は一度使用された後、内面から口縁部に粘土を上塗して補修されており、厚さ2.6cmと全体的にかなり厚手である。

るつぼ模式図（内径7.0cm、深さ3.5cm、溶解痕跡深さ2.0cm）から、約80cc（600g）の銅合金を溶解できたものと推定される。

②**蛍光X線分析**：坩堝縁に付着した金属のEDX分析結果を表５に示す。含有成分には、銅（Cu）82.9%、鉛（Cu）2.5%、錫（Sn）2.4%、ビスマス（Bi）など多成分を含んでいる。胎土分析結果と特定元素の存在比の結果をそれぞれ表３と表４ならびに図４に示す。本資料は三辻らが分類したグループ（陸前群、出雲-伯耆群、筑紫群）から外れ、浜松･豊橋グループに属している。地元近隣の胎土分析データがないので明確な断定はできないが、地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い。

資料No.８　記号IZK-8　銅塊⇒銅塊（銅合金）

①**外観観察**：写真８①、②に示す。平面、不整形な薄板状の小銅塊片で、厚さ0.4cm程の薄い銅塊２枚が重層している。銅塊は両面とも中央がやや窪み気味で、端部が外反しており、重層した部分はやや厚くなっている。表面には、多少気孔が見られる。

②**顕微鏡組織観察**：銅合金塊の写真を③、④に示す。結晶粒界がランダム状態に観察され、徐冷組織を示している。

③**蛍光X線分析**：本資料のEDX分析結果を表３に示す。鉛（Pb），砒素（As），錫（Sn）ほかの多成分を含む銅合金である。

資料No.９　記号IZK-9　羽口（鉄系？）⇒羽口（鉄系）

①**外観観察**：写真９①、②に示す。羽口先端部の小破片である。先端は外面が濃緑色のガラス質に溶解しており、基部側に向かって表面が灰色を呈する。通風孔部は先端が黒緑色調であるが、基部に向かって暗赤褐色に変化が見られる。

②**顕微鏡組織観察**：写真③、④に示す。胎土系のガラス質組織を示している。白色は酸化鉄の溶融物が付着混入したものと推察される。

③**X線回折**：石英（SiO_2）またはクリストバライト（SiO_2）およびムライト（Mullite：$3Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$）が検出された。本資料の主要成分はムライトから構成されていると推定される。

④**蛍光X線分析**：胎土分析結果と特定元素の存在比の結果をそれぞれ表３と表４ならびに図４に示

す。本資料は三辻らが分類したグループ（陸前群、出雲-伯耆群、筑紫群）から外れ、浜松･豊橋グループに属している。地元近隣の胎土分析データがないので明確な断定はできないが、地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い。銅元素は検出されなかった。

したがって、結果を総合すると、本資料はムライト系耐火材の羽口で、地元の粘土を使用した可能性が高いと推定される。

資料№10　記号IZK-10　羽口（青銅系）⇒羽口（銅系）

①**外観観察**：写真10①、②に示す。羽口先端部の小破片である。先端部は外面が黒色～紫紅色のガラス質に溶解し、端部に僅かに茶褐色の酸化物が固着する。通風孔部の内面は先端部に黒緑色から黒色のガラス質滓が付着するが、基部に向かってすぐに薄くなる。

②**顕微鏡組織観察**：胎土部分を写真③、④に示す。胎土系のガラス質組織を示している。赤色は視野の凹んだ位置で、偏光色（赤色）を呈する。

③**X線回折**：石英（SiO_2）またはクリストバライト（SiO_2）およびムライト（Mullite：$3Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$）が検出された。本資料の主要成分はムライトから構成されていると推定される。

④**蛍光X線分析**：胎土分析結果と特定元素の存在比の結果をそれぞれ表3と表4ならびに図４に示す。酸化銅（CuO換算で約1.3％）を含有している。銅系の溶解または製錬に使用された可能性が高いと推定される。

本資料は三辻らが分類したグループ（陸前群、出雲-伯耆群、筑紫群）から僅かに外れ、浜松・豊橋グループに属している。地元近隣の胎土分析データがないので明確な断定はできないが、地元近隣に位置する粘土を使用した可能性が高い。したがって、結果を総合すると、本資料はムライト系耐火材で、地元の粘土を使用した可能性が高いと推定される。

4．ま　と　め

1．資料№１、№２と№３は、砂鉄系鍛冶滓と推定される。

2．資料№４、№５、№６は、それぞれ炉壁材で、地元の胎土を使用したと推定される。
№4には銅を含まないが、№５と№６は銅系を含んでいる。銅合金元素には、砒素（As）、亜鉛（Zn）、鉛（Pb）他の多成分を含んでいる。

3．資料№7は、銅合金を溶解する坩堝と推定される。坩堝縁に付着した金属は、銅（Cu）82.9％、鉛（Cu）2.5％、錫（Sn）2.4％、ビスマス（Bi）0.9％など多成分を含んでいる。溶解量は約80cc（約600g）で、坩堝素材には地元の胎土を使用したと推定される。

4．資料№８は、鋳造したままの銅合金と推定される。一部酸化している。

5．資料№９（鉄系）と№10（銅系）の羽口と推定される。地元の胎土を使用したと推定される。

参考文献

（1）三辻利一：胎土分析による土器の産地推定：蛍光X線法
古文化財編集委員会編：考古学・美術史の自然科学的研究［日本学術振興会］（1989）

（2）小川太一：分析側から見た鉄関連遺物発掘調査への期待
「鉄の歴史-その技術と文化フォーラム」論文集、p 31
［日本鉄鋼協会　鉄関連遺物分析評価研究会］（2002年２月）

表1　調査資料と調査項目（出雲国府跡）

資料No.	記号	出土遺構注記	資料種別	原素材	重量g	磁着度	MC反応	外観写真	化学成分	組織写真	EDX分析	X線回折
1	IZK-1	1号溝	不明滓⇒砂鉄系鍛冶滓	滓	25.5	2	無	○	○	○	○	
2	IZK-2	4号溝	椀形鍛冶滓（中）⇒椀形鍛冶滓	滓	706	5	無	○	○	○		○
3	IZK-3	T5 第3層	椀形鍛冶滓（小）⇒椀形鍛冶滓	滓	174.4	2	無	○	○	○		○
4	IZK-4	4号溝	炉壁（溶解炉?）⇒炉壁	胎土	53.2	1	無	○		○	○	
5	IZK-5	4号溝 第2層	炉壁（青銅系）⇒炉壁（銅系）	胎土	41.3	1	無	○		○	○	○
6	IZK-6	T7 2･3層	坩堝（青銅系）⇒坩堝（銅系）	胎土	20.9	1	無	○		○	○	○
7	IZK-7	4号溝	坩堝（青銅系）⇒坩堝（銅系）	胎土	687.6	1	L	○			○	
8	IZK-8	2号溝 第1層	銅塊⇒銅塊（銅合金）	銅	23.3	1	L	○		○	○	
9	IZK-9	4号溝 第2層	羽口⇒羽口（鉄系）	胎土	51.2	2	無	○		○	○	○
10	IZK-10	4号溝 第2層	羽口（青銅系）⇒羽口（銅系）	胎土	27.4	1	無	○		○	○	○

註（1）資料No.と資料種別はセンター資料の記載による。MC反応はメタルチェッカーによる金属探知反応を示す。
（2）資料種別の項で⇒後は検討結果を示す。

表2　出雲国府跡出土鉄滓の化学成分分析結果　（%）

No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	比率（%）	
									Fe_2O_3	FeO
1	51.8	0.17	49.4	18.9	19.4	5.22	2.4	0.61	27.7	72.3
2	60.9	0.17	61.0	19.0	10.3	4.24	0.65	0.31	23.8	76.3
3	48.0	0.17	47.2	15.9	25.8	6.05	0.58	0.41	25.2	74.8

No.	Na_2O	K_2O	TiO_2	MnO	P_2O_5	C.W.	Co	C	V	Cu	造滓成分%
1	0.41	1.06	0.33	0.10	0.951	1.06	0.014	0.096	0.006	0.015	29.1
2	0.19	0.17	1.99	0.15	0.148	1.16	0.009	0.08	0.051	0.001	15.9
3	0.49	1.03	0.37	0.12	0.459	1.28	0.001	0.10	0.010	0.001	34.4

C.W.＝化合水、造滓成分＝ SiO_2＋ Al_2O_3＋ CaO＋ MgO＋ Na_2O＋ K_2O

表 3　蛍光X線（EDX）による胎土の成分分析結果

資料No.	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	CaO	K_2O	ZrO_2	SrO	Rb_2O
1	71.1	18	6.0	1.2	1.3	2.1	0.05	0.05	0.02
4	76.2	14.2	2.8	0.8	1.2	2.7	0.03	0.02	0.01
6	76.2	15.6	3.4	0.8	0.6	2.9	0.03	0.02	0.01
7	66.8	20.6	4.7	2.4	0.6	4.1	0.09	0.03	0.03
9	73.5	13.6	6.0	0.8	1.9	3.9	0.03	0.03	0.02
10	72.6	16.3	4.5	0.8	0.7	3.3	0.03	0.02	0.02
JG1a	78.0	12.9	2.17	0.3	2.3	4.1	0.02	0.02	0.02

定量値は、検出された化合物濃度の合計を100重量%として補正して求めた。

表 4　胎土中の特定元素の存在比

資料No.	標準資料JG-1aに対する元素比				元素存在比	
	Ca	K	Rb	Sr	K/Ca	Rb/Sr
1	0.47	0.41	0.52	1.19	0.88	0.44
4	0.55	0.71	0.63	0.81	1.29	0.78
6	0.32	0.74	0.76	0.66	2.31	1.15
7	2.44	7.19	15.3	12.3	2.95	1.24
9	0.25	0.68	0.59	0.56	2.7	1.06
10	0.37	0.93	0.72	0.56	2.5	1.29

表 5　蛍光X線（EDX）による金属成分の分析結果

資料No.	採取位置	Cu	As	Zn	Pb	Sn	Sb	Bi	others
5	炉壁	88.6	4.4	2.1	0.6	0.04	−	−	4.3
7	坩堝付着	82.9	0.3	−	2.5	2.4	0.1	0.9	10.9
8	銅塊	76.6	1.6	−	10.3	1.7	−	−	9.8

定量値は、検出された化合物濃度の合計を100重量%として補正して求めた。

表 6　X線回折結果（出雲国府跡資料）　　表中数字は検出強度順番

鉱物成分	ウスタイト	マグネタイト	ヘマタイト	ファイヤライト	石英	クリストバライト	ムライト	ドロマイト	酸化銅	銅
No.	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
2	◎1	○2		○3						
3	○2			◎1				○3		
4					◎1	○2	○3			
5					◎1				○2	○3
6					◎1	○3	○2			
9					◎1	○2	○3			
10					◎1	○2	○3			

A:Wustite-FeO, B:Magnetite-Fe_3O_4, C:Hematite-Fe_2O_3, D:Fayalite-Fe_2SiO_4, E:Quartz-SiO_2,
F:Cristobalite-SiO_2, G:Mullite-$Al_6Si_2O_{13}$, H:Dolomite-$CaMg(CO_3)_2$, I:Cuprite-Cu_2O, J:Copper-Cu

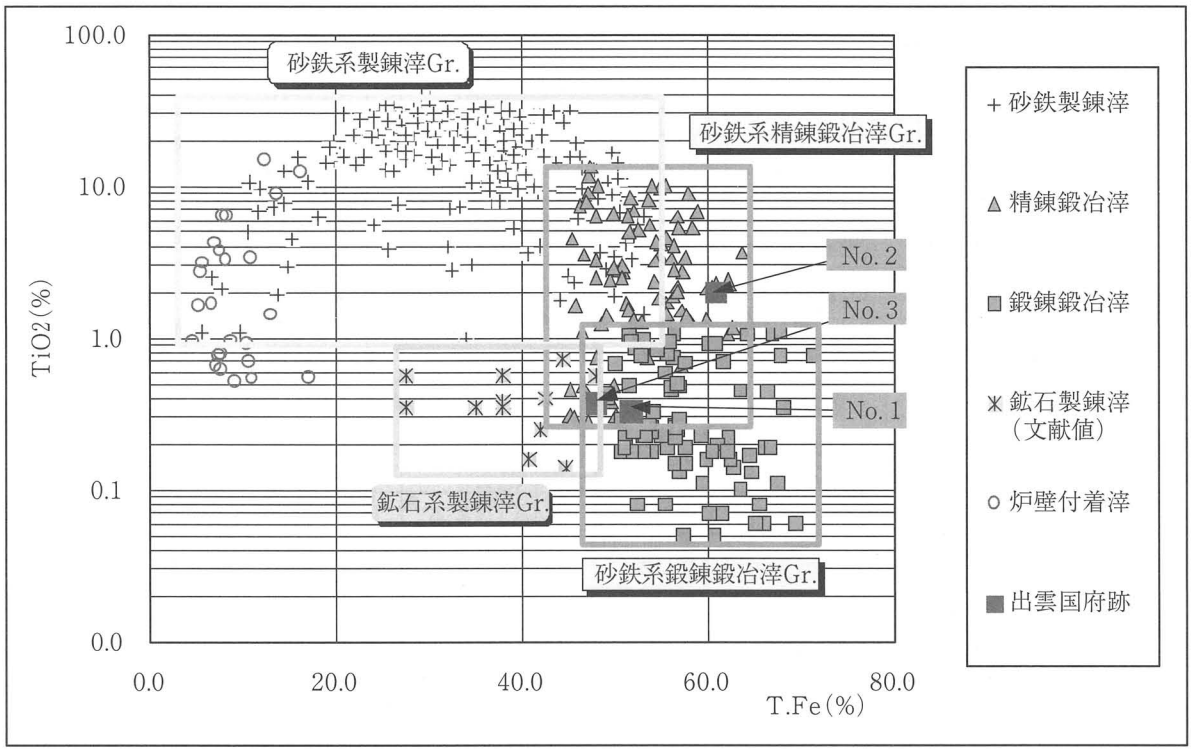


図１　出土鉄滓の全鉄量（T.Fe）と酸化チタン（TiO2）量分布図

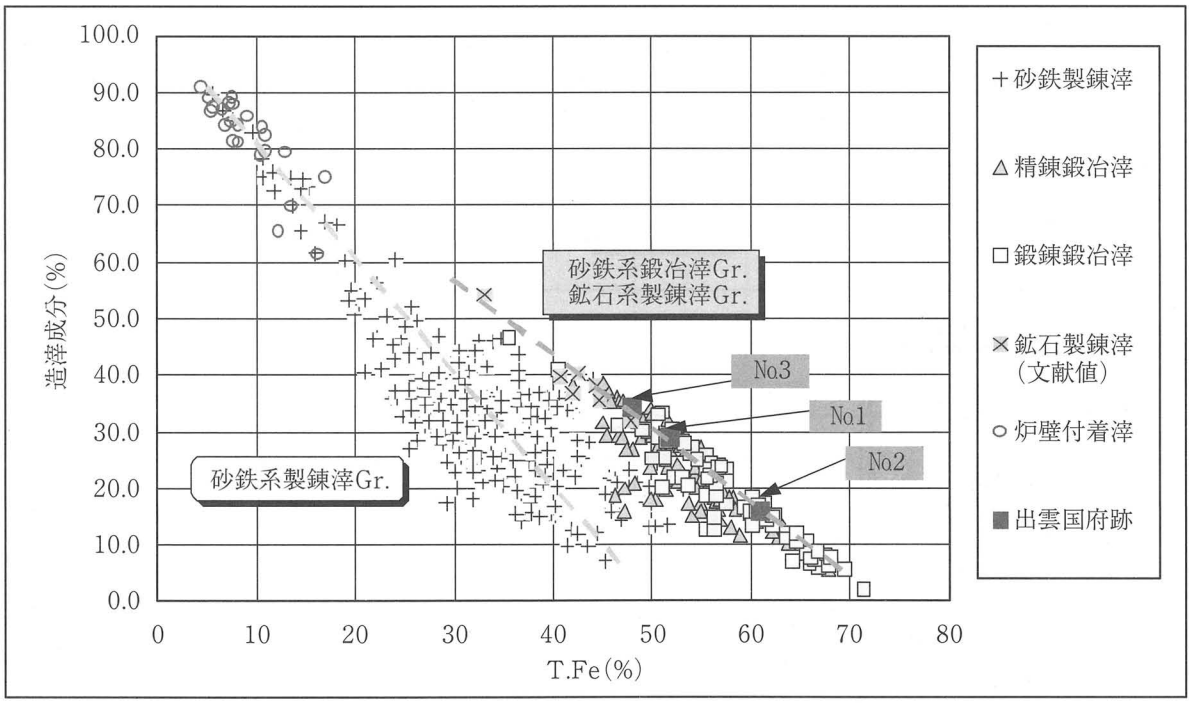


図２　製錬滓と鍛冶滓の分類

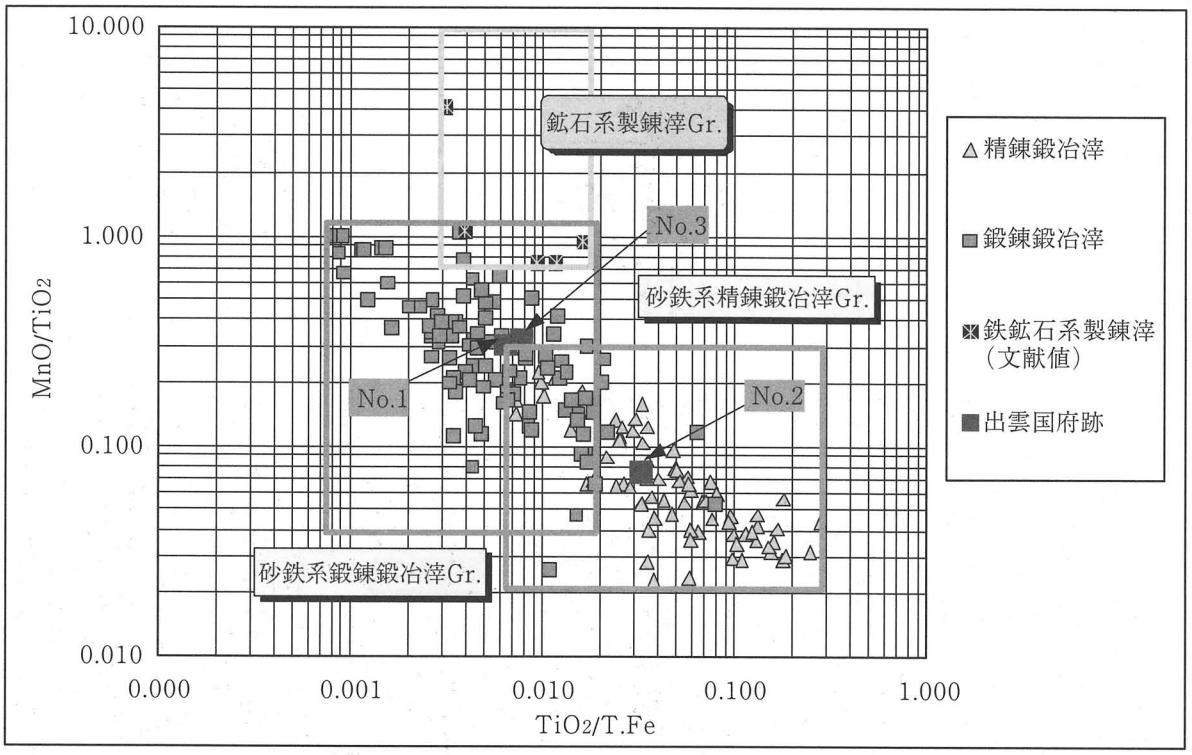


図３　砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類

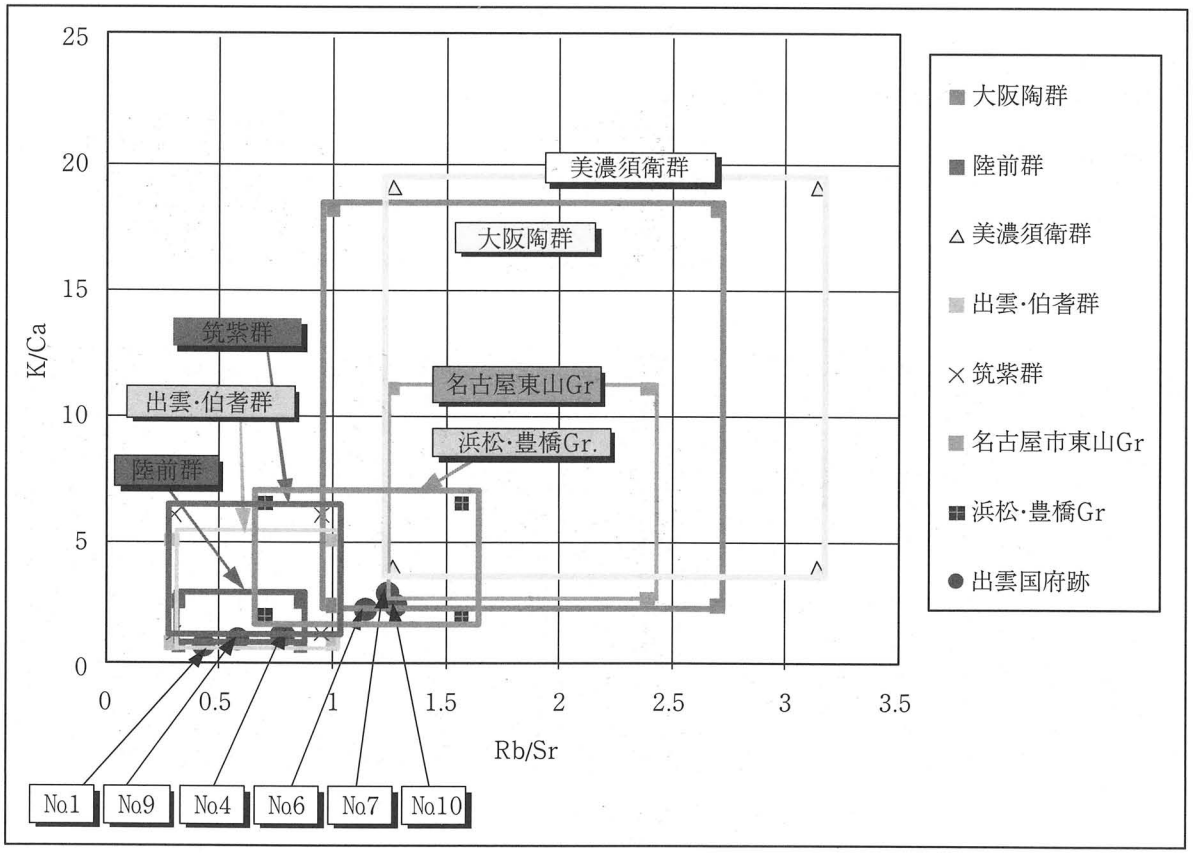


図４　胎土の産地推定

資料No1　砂鉄系鍛冶滓
長軸3.8×長軸3.3×厚さ1.2㎝
重量25.5g
①外観(上)②外観(下)
③④顕微鏡組織(ファイヤライト、ウスタイト)、銅を含まない

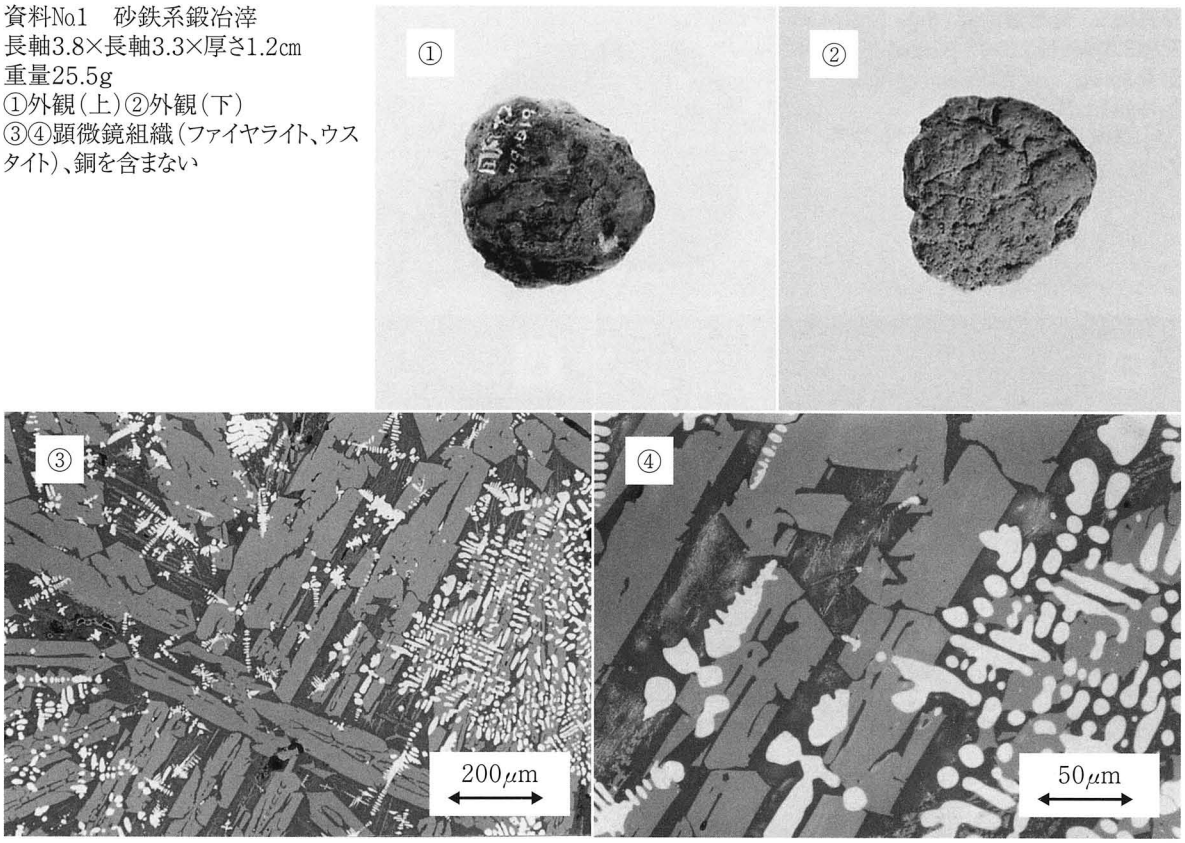


写真1　資料No.1(鍛冶滓)の外観および顕微鏡組織写真

資料No2　椀形鍛冶滓(中)
長軸14.8×長軸10.0×厚さ5.0㎝、
重量706.0g
①外観(上)②外観(下)
③④顕微鏡組織(ウスタイト、ファイヤライト)銅を含まない

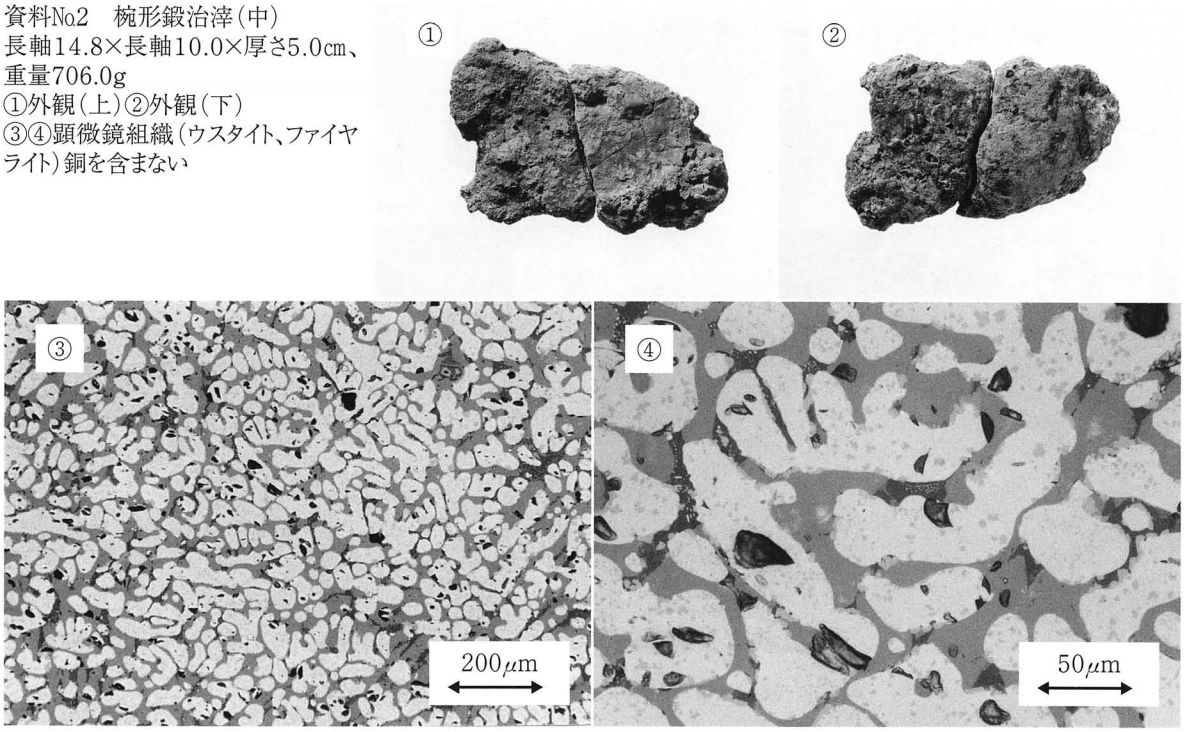


写真2　資料No.2(鍛冶滓)の外観および顕微鏡組織写真

資料No.3　椀形鍛冶滓(小)
長軸3.8×長軸3.3×厚さ1.2cm
重量25.5g
①外観(上)②外観(下)
③④顕微鏡組織(ファイヤライト、ウスタイト)

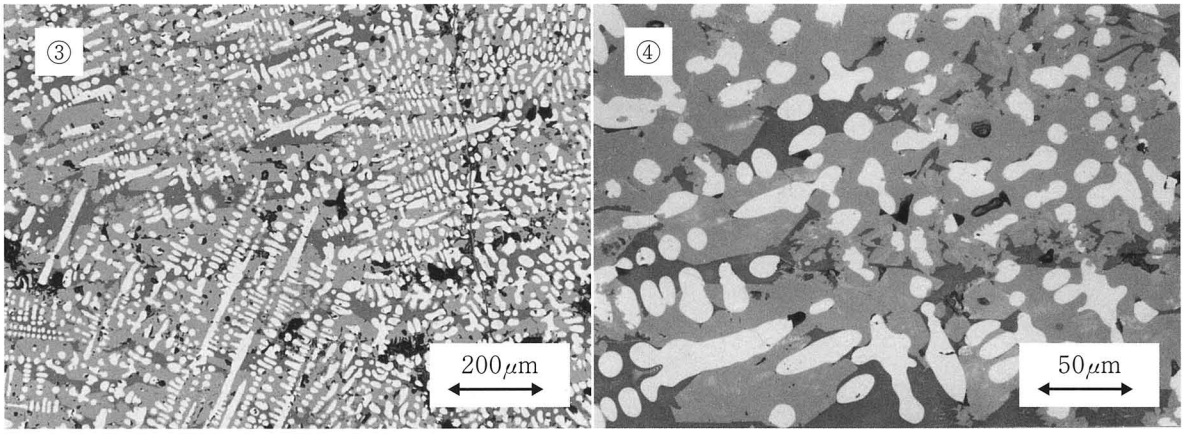


写真3　資料No.3(鍛冶滓)の外観および顕微鏡組織写真

資料No.4　炉壁
長軸3.8×長軸3.3×厚さ1.2cm
重量25.5g
①外観(上)②外観(下)
③④顕微鏡組織(胎土:ガラス質)
銅を含まない。

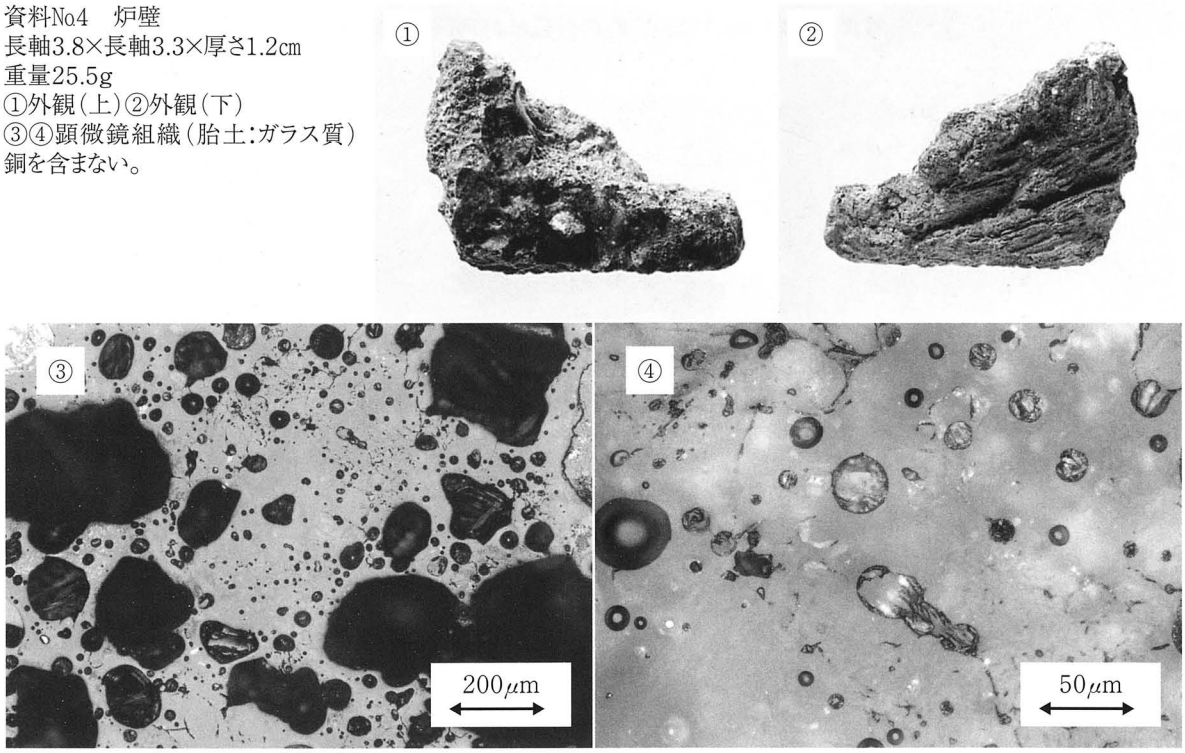


写真4　資料No.4(炉壁)の外観および顕微鏡組織写真

資料No.5　炉壁(銅系)
大きい資料5－(1):長さ46㎜×幅37㎜×厚さ18㎜;小さい資料5－(2):長さ37㎜×幅32㎜×厚さ14㎜、総重量41.3g
①外観(右・下)②外観(左・下)
③④顕微鏡組織(胎土:ガラス質)
⑤⑥顕微鏡組織(侵入金属:銅系徐冷組織)

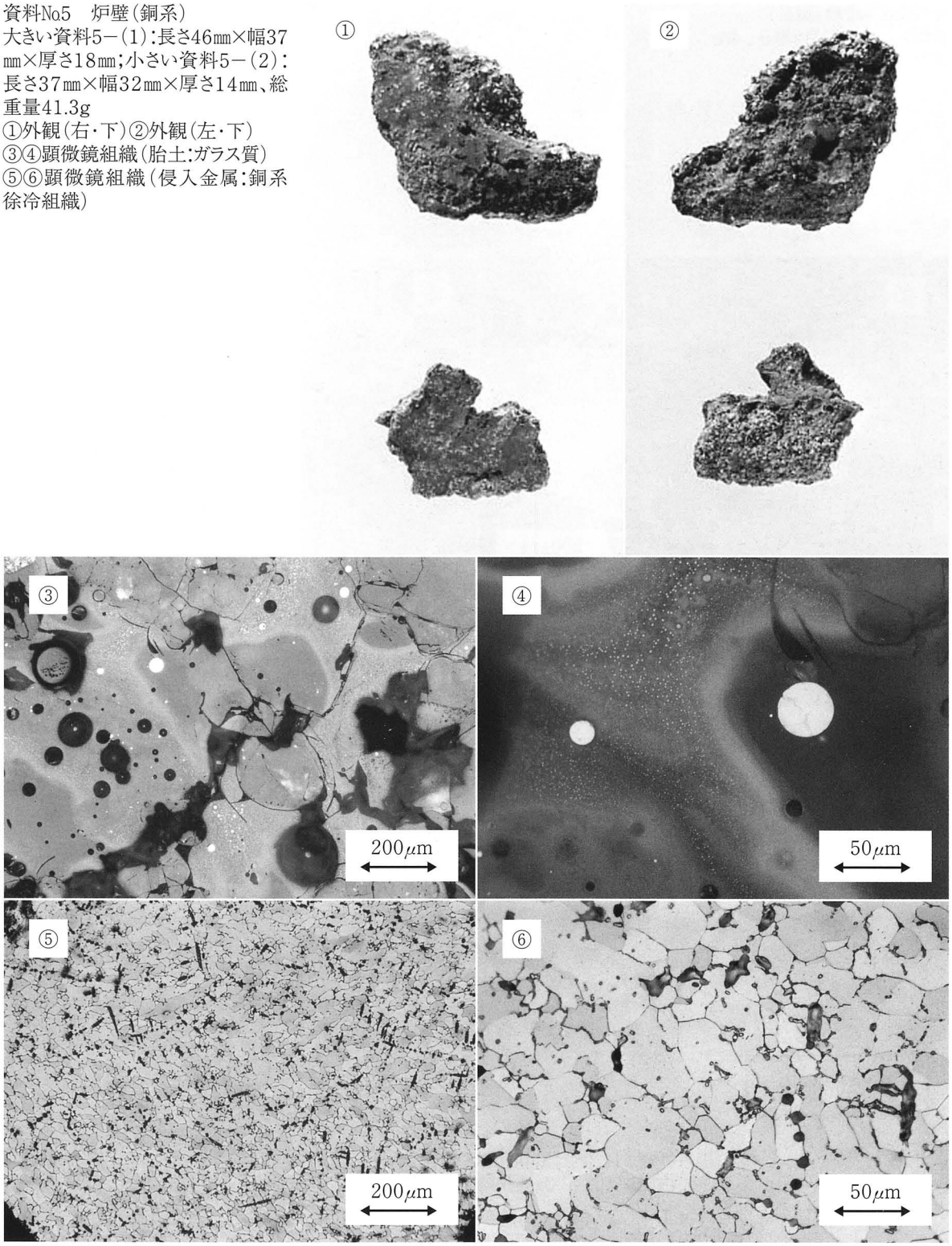


写真5　資料No.5(炉壁)の外観および顕微鏡組織写真

資料No.6　坩堝(銅系)
長軸4.7×長軸3.0×厚さ1.4cm
重量20.9g
①外観(外)②外観(内)
③④顕微鏡組織(胎土:ガラス質、銅系合金混在)

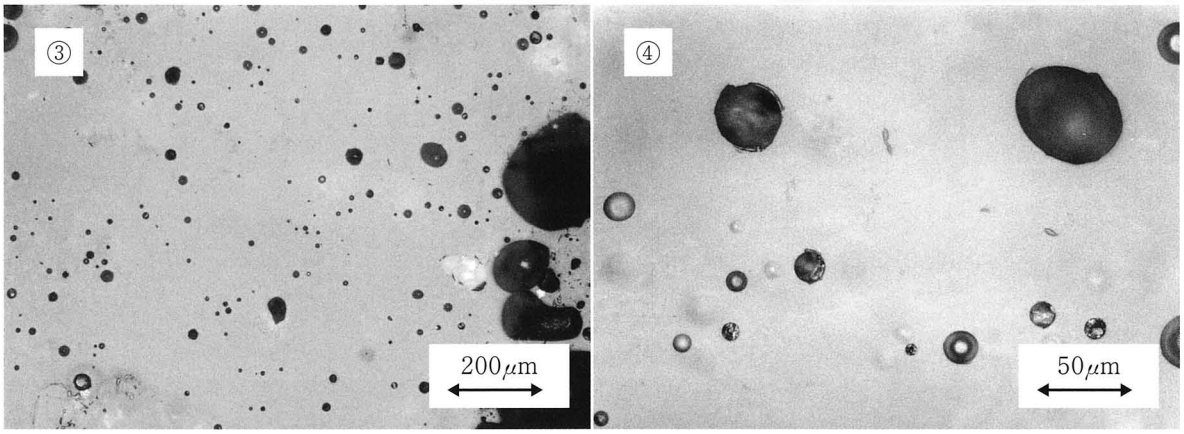


写真6　資料No.6(坩堝)の外観および顕微鏡組織写真

資料No.7　坩堝(銅系)
長軸13.2×長軸6.1×厚さ2.6cm
重量687.6g
①外観(横)②外観(上)
付着金属:銅系合金

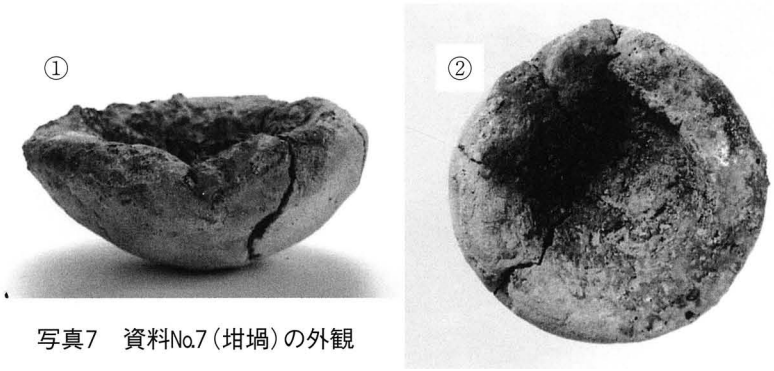
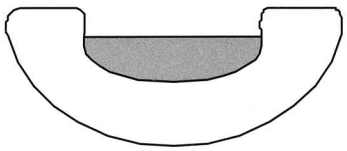
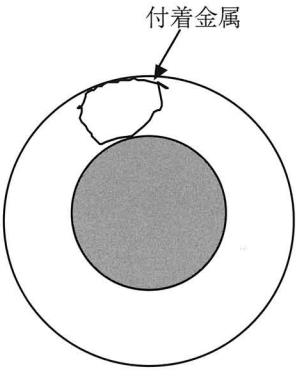


写真7　資料No.7(坩堝)の外観

るつぼ模式図

坩　堝：外径Φ132内径φ70mm深さ35mm
溶融浴：内径Φ70深さ20mm溶解量80cc（痕跡）





資料No.8　銅塊(合金系)
長軸3.9×長軸3.9×厚さ0.8cm
重量23.3g
①外観(上)②外観(下)
③④顕微鏡組織(銅合金系徐冷組織、銅と酸化銅を含有)

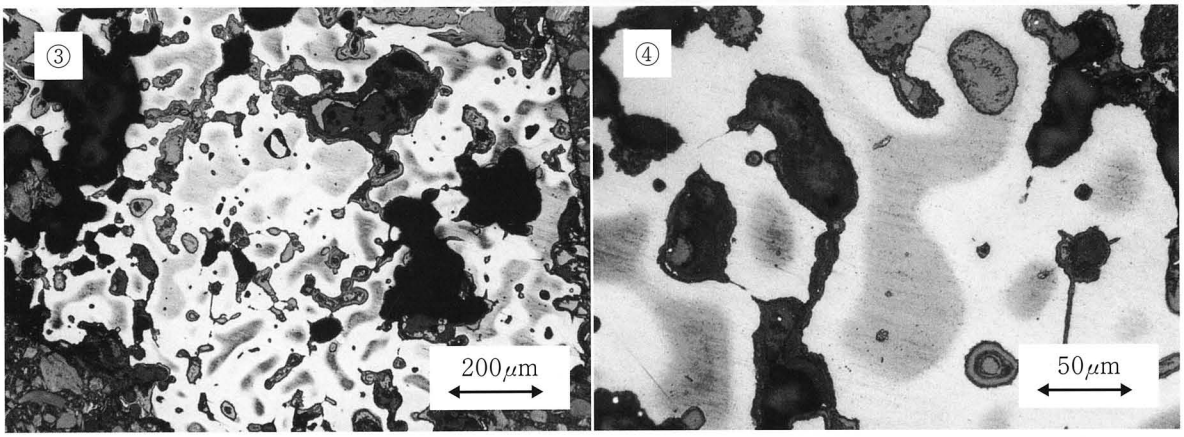


写真8　資料No.8(銅塊)の外観および顕微鏡組織写真

資料No.9　羽口(鉄系)
長軸4.5×長軸5.5×厚さ1.9cm
重量51.2g
①外観(内)②外観(外)
③④顕微鏡組織(胎土:ガラス質)

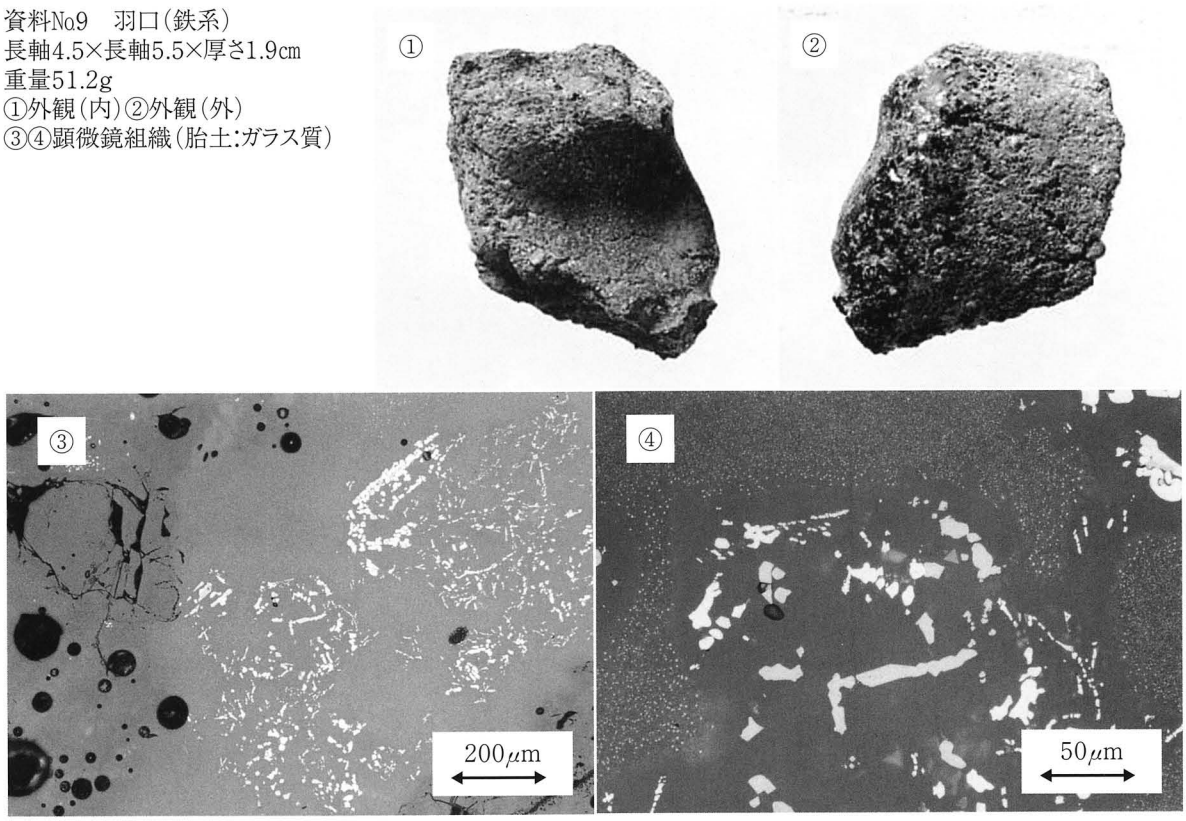
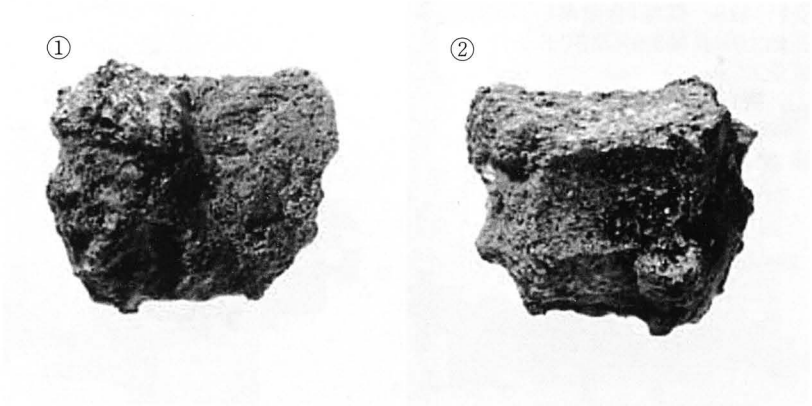


写真9　資料No.9(羽口)の外観および顕微鏡組織写真

資料No.10　羽口(銅系)
長軸4.0×長軸3.5×厚さ12.0cm
重量27.4g
①外観(外)②外観(内)
③④顕微鏡組織(胎土:ガラス質)



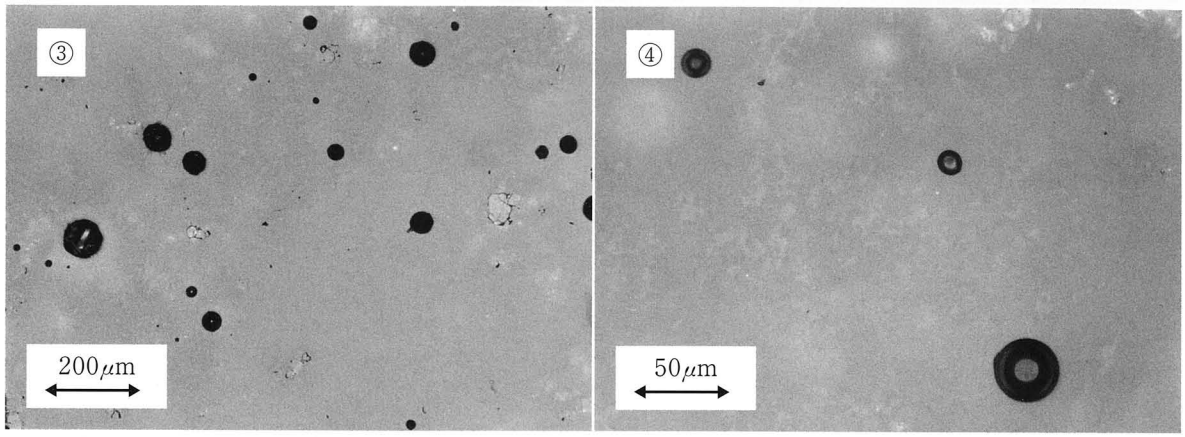


写真10　資料No.10(羽口)の外観および顕微鏡組織写真

付論4

出雲国府跡出土柱根・木製品の樹種（1）

文化財調査コンサルタント株式会社　　島根大学総合理工学部
渡　辺　正　巳　　古　野　　毅

はじめに

本報告では、奈良時代の用材についての基礎資料とする目的で、検出された建物群の柱根およびいくつかの木製品を対象に樹種鑑定を行った。なお、本報告は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した委託業務報告書を簡略化し、数種類の樹種記載を加筆したものである。

1．試料について

樹種鑑定を行った試料の一覧を表1に示す。表1には、同時に鑑定結果も示してある。

永久プレパラートは渡辺（2000）に従い作成した。また作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント㈱にて保管管理をしている。

作製した永久プレパラートを、光学顕微鏡下で40倍～600倍の倍率で観察し記載を行った。記載にあたって同一分類群は一括して記載し、代表的な試料の3断面の顕微鏡写真を付けた。また用語などは基本的に島地ほか（1985）に従った。

2．樹種の鑑定結果と記載

表1に鑑定結果を示し、各分類群毎に記載を行った。

①マツ属（複維管束亜属）*Pinus* (sub. *Diploxlon*) sp.

試料№：2,4,6,7

記載：構成細胞は仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道および水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は広い。放射仮道管には鋸歯状肥厚が認められる。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を示す。エピセリウム細胞は薄壁である。垂直樹脂道は早、晩材部ともに分布し、チロソイドが見られる。分野壁孔は窓状であることなどから、マツ属（複維管束亜属）と同定した。

②スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don

試料№：1,8,26,30,31,40

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅はほとんどの試料が広い。樹脂細胞は主に晩材部に分布している。また、分野壁孔はスギ型で2～3個存在することなどから、スギと同定した。

③ヒノキ属　*Chamaecyparis* sp.

試料№：3,9,22,27,29-1,34,35,36,37,38,39,41

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやか

で、晩材の幅はほとんどの試料で狭い。樹脂細胞は晩材部に認められる。分野壁孔は明瞭なヒノキ型で２～４個存在することなどから、ヒノキ属と同定した。

また、試料№28-1,33,42,29-2は、分野壁孔が不明瞭なものの晩材の幅が狭い傾向にあること、樹脂細胞が晩材部に認められることから、断定にいたらないもののヒノキ属の可能性が高いと考えた。

試料№28-2は横断面しか得られなかったが、晩材の幅が狭い傾向にあること、樹脂細胞が晩材部に認められることから、断定にいたらないもののヒノキ属の可能性が高いと考えた。

④カヤ属　*Torrea* sp.

試料№10,11

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。仮道管にはらせん肥厚があり、２本のらせんが対になる傾向がある。有縁壁孔の孔口は凸レンズ状を示すものがある。分野壁孔は明瞭なヒノキ型で４個存在することなどから、カヤ属と同定した。

⑤クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料№：13,14,15,16,18,19,20,21,23-1,23-2,43

記載：環孔材で大きい円形ないし楕円形の道管が単独で多列に配列し、孔圏部の幅はかなり広い。孔圏外の道管は小さく、やや火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔でる。また、道管にはチロースが顕著に認められる。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するのが認められる。放射組織は平伏細胞からなる単列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

⑥コナラ属（アカガシ亜属）*Quercus* (sub. *Cyclobalanopsis*) sp.

試料№25

記載：中庸で円形ないし楕円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが非常によく発達し、周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は接線方向に１ないし２細胞幅の独立帯状柔組織を形成している。放射組織は同性で、低い単列放射組織ときわめて幅の広い広放射組織がある。さらに道管放射組織壁孔は典型的な柵状を示す。以上の組織上の特徴から、コナラ属（アカガシ亜属）と同定した。

⑦ニレ属　*Ulmus* sp.

試料№５

記載：大型の道管が孔圏で2列に配列する環孔材である。孔圏外では徐々に大きさを減じた小道管が２～６個放射方向に複合し集団環孔を形成し、斜線状に配列している。軸方向柔細胞は周囲状で、孔圏部では接線方向に幅の広いイニシアル状となり、孔圏外では集団管孔を取り囲んでいる。道管せん孔は単せん孔で、道管相互壁孔は交互状を示す。小道管にらせん肥厚が認められる。放射組織は上下の縁辺に方形細胞をもつ異性型で１～６細胞幅であり、一様な大きさの紡錘型放射組織が目立つ（高さは）１㎜まで)。以上の組織上の特徴からニレ属と同定した。

⑧クスノキ　*Cinnamomum camphora* (L.) Presl

試料№17

記載：道管が単独ないし２～３個放射方向に複合して年輪内に均等に分布する散孔材である。

道管の分布は少ない。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚いさや状に囲む周囲状である。道管せん孔は単せん孔である。道管内に着色物質を含むものがある。放射組織は異性型で１～３細胞幅（50μm未満）であり、高さは低い（１㎜未満）。放射組織に大型の異形細胞（油細胞）が存在し、非常に目立つ。また、軸方向柔組織にも油細胞が見られる。以上の組織上の特徴から、クスノキと同定した。

⑨サクラ属　*Prunus* sp.

試料№12

記載：道管が単独あるいは2～3個放射方向にに複合して年輪内に均等に分布する散孔材である。軸方向柔細胞は散在状で少ない。道管せん孔は単せん孔で、道管相互壁孔は交互状を示す。不顕著であるが、らせん肥厚が認められる。道管内に着色物質が多量に存在し、顕著である。走者組織は同性ないし異性型で１～５細胞幅であり、上下の縁辺に方形細胞が存在する。また部分的にさや細胞が認められる。以上の組織上の特徴からサクラ属と同定した。

⑩トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume

試料№：32

記載：やや小さい道管が単独ないし放射方向に２～６個複合して散在状に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔で、道管壁孔は交互壁孔を示し、内腔に内容物（着色物質）を含むものが多い。放射組織は単列同性型で、きわめて低いものが階層状に配列している。軸方向柔細胞は１～２層のターミナル状である。以上の組織上の特徴からトチノキと同定した。

⑪トネリコ属　*Fraxinus* sp.

試料№：24

記載：径250～300μmの道管ががほとんど単独で１～２列あるいは３列の孔圏部をつくって並ぶ環孔材である。孔圏外では徐々に大きさを減じた小道管が２～６個かそれ以上放射方向に複合、あるいは房状に集団管孔を形成し、散在している。軸方向柔組織は顕著に存在し、孔圏部で周囲状であり、孔圏外で翼状から３～10細胞幅の連合翼状や接線方向に長い帯状（ターミナル状）を示すものがある。道管せん孔は単せん孔で、道管相互壁孔は交互状を示す。孔圏外の小道管は厚壁である。放射組織は同性で１～３（４）細胞幅であり、高さは低い。上の組織上の特徴から、トネリコ属と同定した。

３．柱の用材についての特徴

前述のように25本の柱について樹種鑑定を行った結果、クリが10本あり、特に４号建物跡で11本中８本、７号建物跡で２本中２本と、クリを選択的に用いたと考えられる建物が存在した（図１、２参照）。伊東ほか（1987）、山田（1993）で見る限り、柱へのクリの使用例は必ずしも多くはない（建築部材としては、多い傾向にある）が、近年の島根県下の報告では、玉湯町の蛇喰遺跡（古野・渡辺，1999）、斐川町の富村正法遺跡（文化財調査コンサルタント㈱，2000）などでクリの用例がある。

カヤ属は25本中２本のみの出現であったが、全てが５号建物跡の柱根であった（図３参照）。柱へのカヤ属の使用例も全国的には多くないが、先の蛇喰遺跡では、柱根として記載されている。

4．その他の木製品の用材

①曲　　物

８点（底、側併せて）のうちヒノキ属と断定できたものが3点、断定に至らなかったがヒノキ属の可能性の高いものが４点、針葉樹としたものが１点であった。

曲物にはヒノキなどの針葉樹が用いられることが多く（前述の島地ほか（1987）、山田（1993）の集成による。）、今回の結果もこれを追従するものであった。

②刀形形代

今回の結果の様に、ヒノキが用いられることが多い（前述の島地ほか（1987）の集成による。）。

③斎　　串

ヒノキが用いられることが圧倒的に多い（前述の島地ほか（1987）の集成による。）が、今回の結果（スギ）も数例ある。

④挽　　物

ケヤキなどの環孔材が多い傾向にある（前述の島地ほか（1987）、山田（1993）の集成による。）が、今回鑑定したトチノキもこれらに次いで多い傾向にある。

⑤糸　　車

今回の結果の様に、ヒノキが用いられることが多い（前述の島地ほか（1987）の集成による。）。

⑥井 戸 枠

スギ、ヒノキなどの針葉樹が用いられることが多く（前述の島地ほか（1987）の集成による。）、今回の結果（スギ）もこれを追従するものであった。島根県下では益田市の三宅御土居跡で、木組井戸隅柱の用材としてスギが記載されている（吉野ほか，2002）。

⑦下　　駄

ヒノキ属が用いられることが多い（前述の島地ほか（1987）の集成による。）。今回鑑定したクリも、用材となることがヒノキ属に続き多い。

引用文献

伊東隆夫・山口和穂・林　昭三・布谷知夫・島地　謙（1987）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途．木材研究，23，42-210.

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．276p.　文永堂，東京．

文化財調査コンサルタント㈱（2000）富村正法遺跡出土柱根の樹種．（内部資料）

古野　毅・渡辺正巳（1998）蛇喰遺跡出土柱根の樹種鑑定．蛇喰遺跡，163-164．島根県八東郡玉湯町教育委員会編．

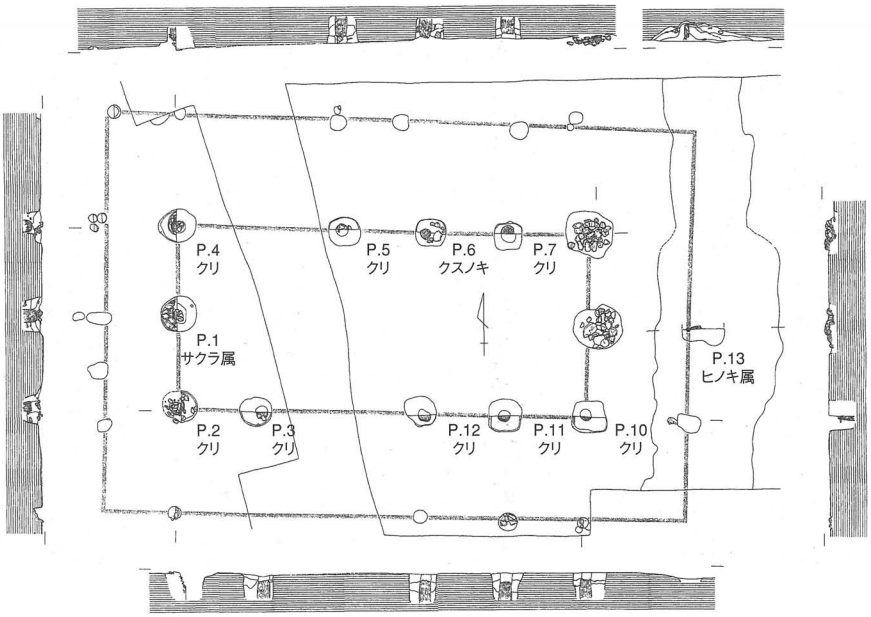
古野　毅・渡辺正巳（2002）三宅御土居跡出土木製品の樹種鑑定．三宅御土居跡－沖田七尾線街路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査－，85-90，益田市教育委員会．

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土文献集成－用材から見た人間・植物関係史．242p.，植生史研究特別第１号，植生史研究会，大阪．

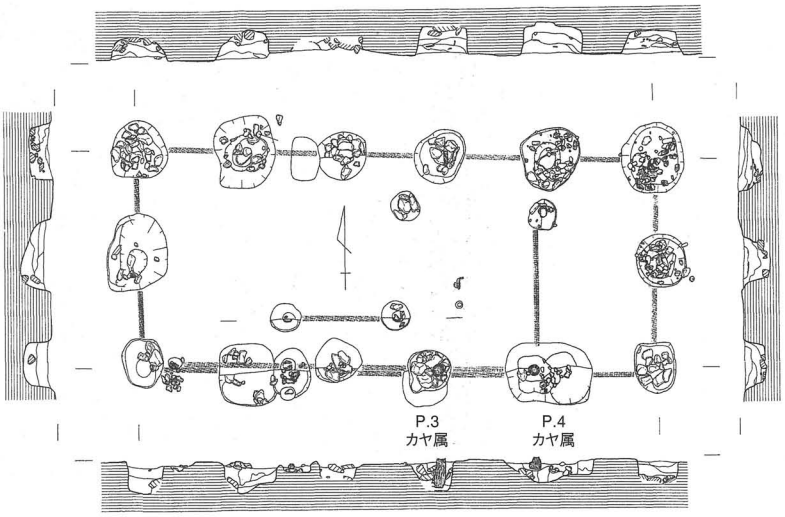
渡辺正巳（2000）長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定．長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ-1997年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書-，247-249，財団法人大阪市文化財協会．

表1　樹種鑑定試料結果一覧

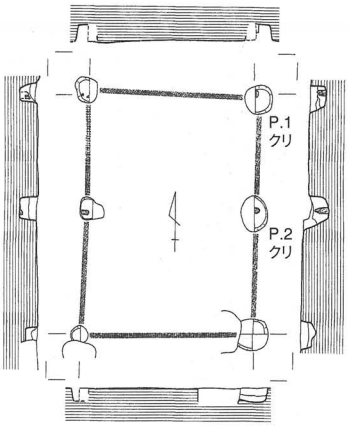
試料番号	整理番号	樹　種　名	遺　　構	種　別	時　期	挿図番号
1	W02060406	スギ	1区P.1	柱根	時期不明	47-2
2	W02060409	マツ属	2区P.2	柱根	時期不明	
3	W02060408	ヒノキ属	2区P.4	柱根	時期不明	48-5
4	W02060407	マツ属	2区P.3	柱根	時期不明	47-3
5	W02060410	ニレ属	2区P.5	柱根	時期不明	
6	W02060411	マツ属	3区P.7	柱根	時期不明	47-1
7	W02060405	マツ属	3区P.8	柱根	時期不明	
8	W02060402	スギ	6号建物跡P.1	柱根	時期不明	
9	W02060403	ヒノキ属	2号建物跡P.10	柱根	時期不明	47-4
10	W02060401	カヤ属	5号建物跡P.3	柱根	時期不明	
11	W02060404	カヤ属	5号建物跡P.4	柱根	時期不明	
12	W01121701	サクラ属	4号建物跡P.3	柱根	奈良時代	
13	W01121702	クリ	4号建物跡P.2	柱根	奈良時代	
14	W01121703	クリ	4号建物跡P.1	柱根	奈良時代	
15	W01121704	クリ	4号建物跡P.4	柱根	奈良時代	
16	W01121705	クリ	4号建物跡P.5	柱根	奈良時代	
17	W01121706	クスノキ	4号建物跡P.6	柱根	奈良時代	
18	W01121707	クリ	4号建物跡P.7	柱根	奈良時代	
19	W01121408	クリ	4号建物跡P.10	柱根	奈良時代	
20	W01121709	クリ	4号建物跡P.11	柱根	奈良時代	
21	W01121710	クリ	4号建物跡P.12	柱根	奈良時代	
22	W02062101	ヒノキ属	4号建物跡P.13	柱根	奈良時代	48-6
23-1	W01122101	クリ	7号建物跡P.1	柱根	奈良時代	
23-2	W01122102	クリ	7号建物跡P.2	柱根	奈良時代	
24	W01122103	トネリコ属	8号建物跡P.5	柱根	奈良時代	
25	W01122104	アカガシ亜属	4号溝下位	自然木	時期不明	
26	W02052405	スギ	1号井戸跡	井戸枠	平安時代	
27	W02052401	ヒノキ属	5号土坑	刀形形代	奈良時代	84-147
28-1	W02052807	ヒノキ属?	5号土坑	曲物(側)	奈良時代	83-139
28-2	W02052808	ヒノキ属?	5号土坑	曲物(底)	奈良時代	83-139
29-1	W02052809	ヒノキ属	5号土坑	曲物(蓋)	奈良時代	83-138
29-2	W02052810	ヒノキ属?	5号土坑	曲物(側)	奈良時代	83-138
30	W02052805	スギ	5号土坑	不明木製品	奈良時代	83-145
31	W02052402	スギ	5号土坑	斎串	奈良時代	84-148
32	W02052811	トチノキ	4号溝跡	挽物	奈良時代	63-231
33	W02052801	ヒノキ属?	4号溝跡	曲物	奈良時代	63-233
34	W02052806	ヒノキ属	4号溝跡	不明板材	奈良時代	64-263
35	W02052403	ヒノキ属	4号溝跡	木箱蓋	奈良時代	63-230
36	W02052407	ヒノキ属	4号溝跡	不明木製品	奈良時代	64-258
37	W02052408	ヒノキ属	4号溝跡	不明木製品	奈良時代	64-259
38	W02052802	ヒノキ属	4号溝跡	曲物	奈良時代	63-234
39	W02052406	ヒノキ属	4号溝跡	糸巻	奈良時代	63-239
40	W02052409	スギ	4号溝跡	不明木製品	奈良時代	63-240
41	W02052804	ヒノキ属	4号溝跡	曲物	奈良時代	63-238
42	W02052803	ヒノキ属?	4号溝跡	曲物	奈良時代	63-236
43	W02052404	クリ	1号井戸跡	下駄	平安時代	112-25



4号建物跡



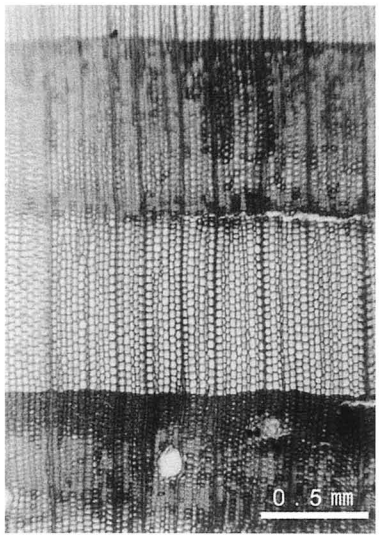
5号建物跡



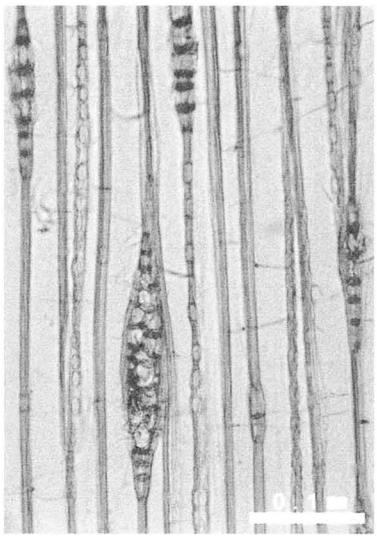
7号建物跡

図1　掘立柱建物跡の柱材

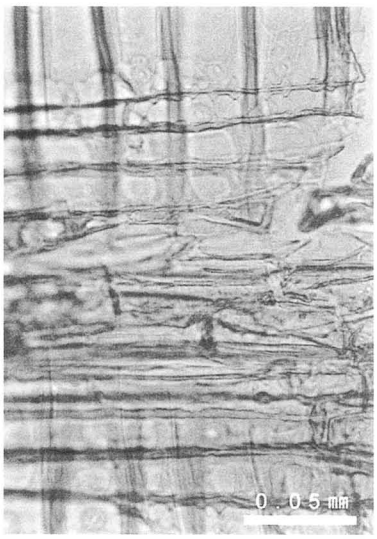
マツ属（復維管束亜属）:No.2



横断面

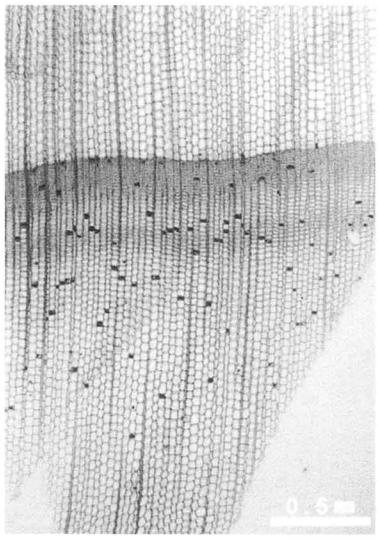


接線断面

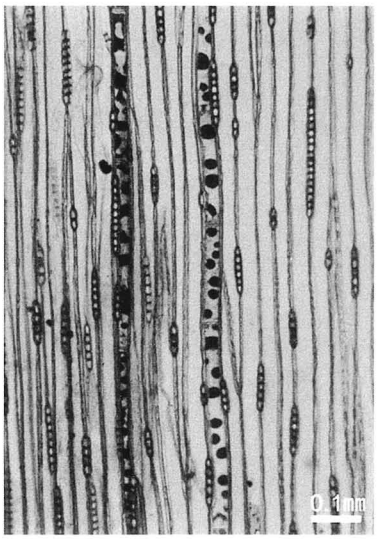


放射断面

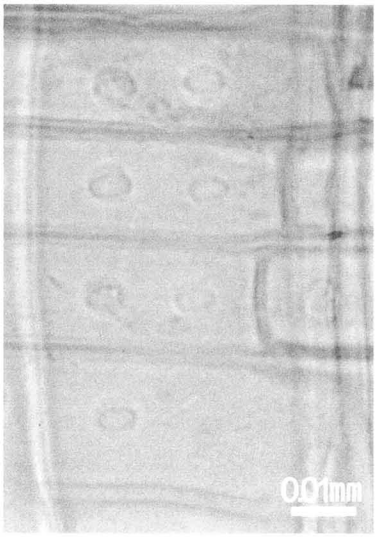
スギ:No.26



横断面

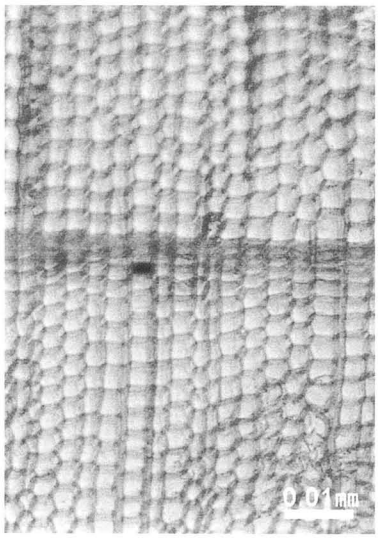


接線断面

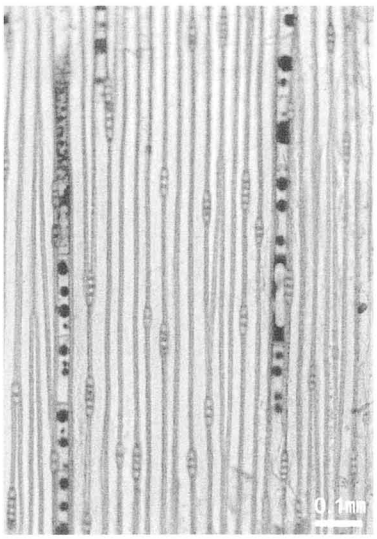


放射断面

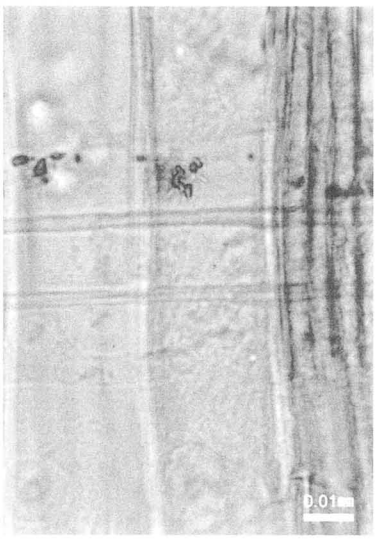
ヒノキ属:No.39



横断面

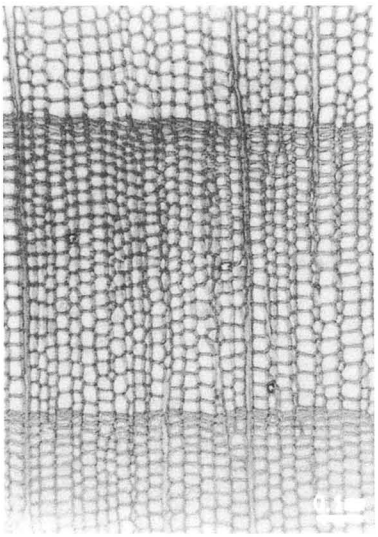


接線断面

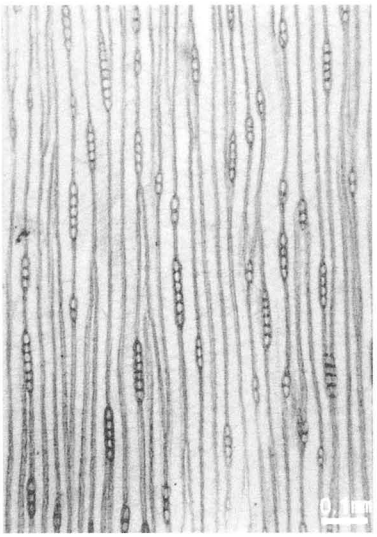


放射断面

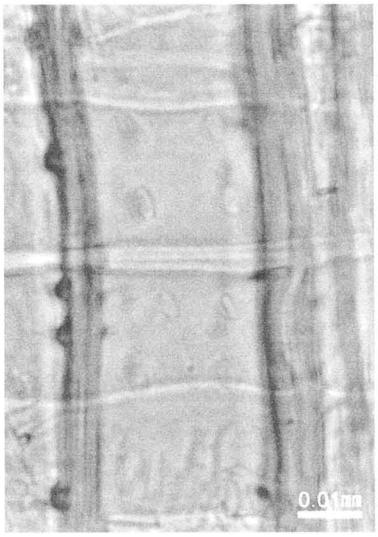
カヤ属:No.10



横断面

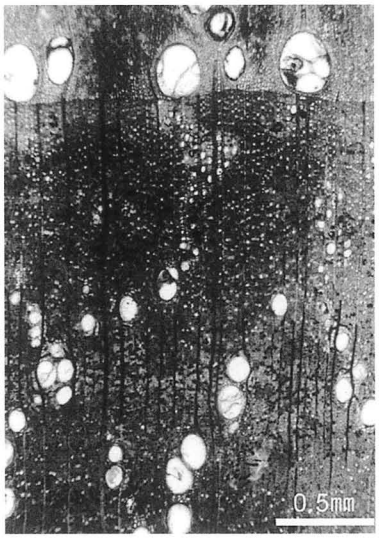


接線断面

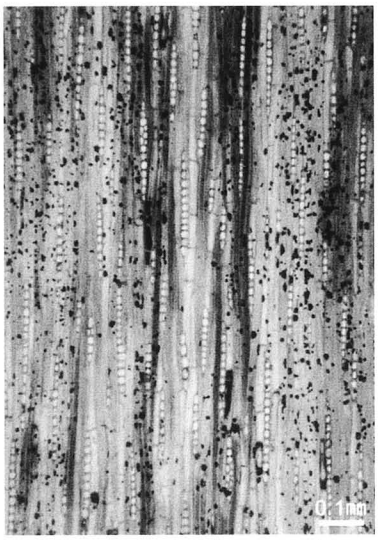


放射断面

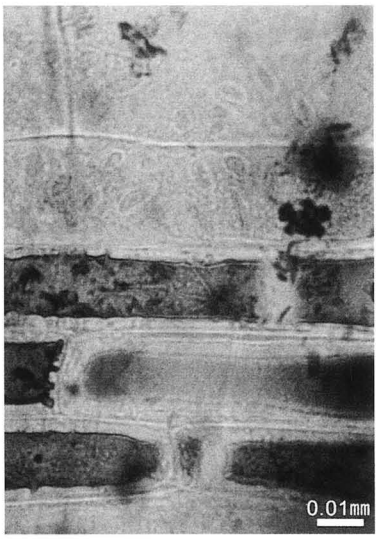
クリ:No.43



横断面

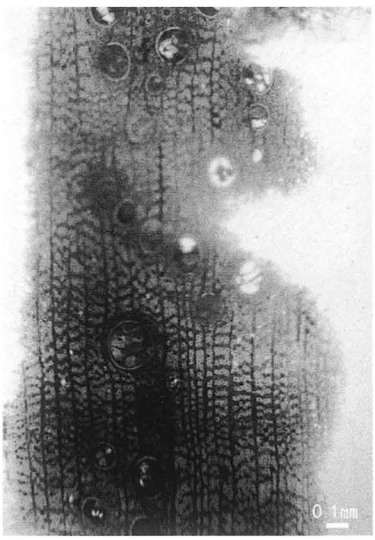


接線断面

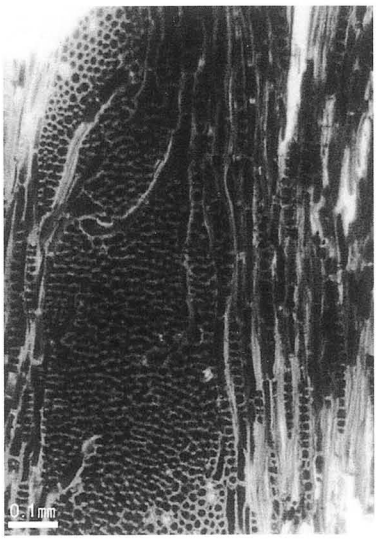


放射断面

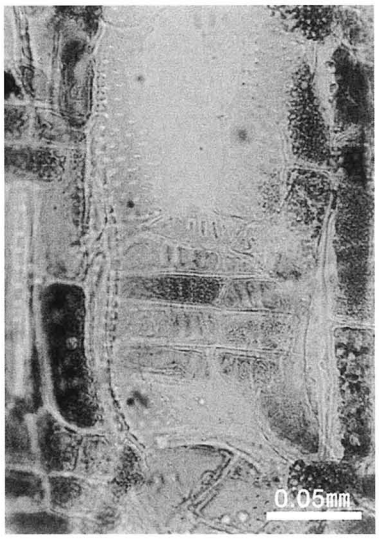
アカガシ亜属:No.25



横断面



接線断面



放射断面